

博士論文

友人関係を通じた大学生の発達と適応
—友人との二者関係におけるやり取りと傷つき
経験からの検討—

平成 30 年 3 月

中央大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程

永井暁行

目次

序 章	はじめに	3
第1節	本研究の概要と目的	3
第2節	博士論文の構成	5
第1章	従来の友人関係研究と本研究の目的	7
第1節	青年期における友人関係とその機能	8
第2節	青年の友人との付き合い方に関する研究の成果	21
第3節	友人関係における傷つきについての知見	32
第4節	友人関係研究の課題と本研究の目的	40
第2章	友人関係の変化と傷つき経験の探索的検討	47
第1節	本研究の問題・目的と調査方法の概要	48
第2節	友人関係の変化とそのきっかけ	52
第3節	友人関係における傷つき経験とその影響	76
第4節	第2章のまとめ	94
第3章	傷つきを避けようとする関係と大学生の適応	98
第1節	友人関係の類型によるサポートおよび援助要請の効果の違い—学校適応感への影響の検討—	99
第2節	傷つきを回避する傾向と友人への援助行動による学校適応感の検討.....	115
第3節	ソーシャルスキルと傷つき回避による友人関係の分類および居場所感の違い	126
第4節	第3章のまとめ	139
第4章	傷つき経験による青年の発達	142
第1節	友人関係で生じた傷つき経験による影響の測定	143
第2節	過去のとらえ方と意味づけによる傷つき経験の影響の違い.....	160
第3節	他者への相談の有無と相手の反応による傷つき経験の影響の違い.....	169
第4節	第4章のまとめ	179

第 5 章 討論および結論	182
第 1 節 本研究で得られた知見	183
第 2 節 本研究の成果と討論	187
第 3 節 結論	198
引用文献	200
謝辞	214
付録 本研究で用いた尺度および項目の一覧	i
付録 1 学校への適応感尺度（大久保，2005）	i
付録 2 援助要請スタイル尺度（永井，2013）	ii
付録 3 友人関係尺度（岡田，2007）	iii
付録 4 ストレス体験と親しい友人からのソーシャル・サポートの受容尺度	iv
付録 5 友人への援助行動尺度	v
付録 6 傷つけ合い回避尺度（岡田，2012）	vi
付録 7 居場所尺度（原田・滝脇，2014）	vii
付録 8 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）	viii
付録 9 友人関係における傷つき経験の影響尺度	ix
付録 10 対人ストレスイベントに対する認知的評価尺度（加藤，2001）	x
付録 11 過去のとらえ方尺度（石川，2013）	x
付録 12 意味づけにおける同化・調節尺度（堀田・杉江，2013）	xii
付録 13 知覚された相談相手の反応尺度（高橋，2013）	xiii

序 章 はじめに

第1節 本研究の概要と目的

これまで青年期の心理的な発達に友人は重要な存在と考えられてきた (Sullivan, 1953 中井・宮崎・高木・鏝幹訳 1990)。青年にとって友人との関わりは親密で打ち解け合う関係が期待されている (和田, 1993) 一方, 傷つきや葛藤を避けて表面的な付き合いを志向するという態度があることも示されてきた (橋本, 2000 ; 岡田, 2007)。本研究では青年の友人との付き合い方に対する意識と, 関係の中で, 生じる実際のやり取りに焦点を当てることで, それぞれの青年の友人関係における発達や適応について検討する。

これまでも青年の友人関係について, および友人関係による発達や適応については様々に検討されてきている。しかし, その多くは青年が友人とどのように付き合いおうとするかという点に偏重している。そのため, それぞれの青年が現実でやり取りをしている友人関係の中で生じている具体的な関わりについての資料が不足している。

特に青年が友人関係で傷つくことを避けようとすることについては検討されているものの, 友人関係で傷つくことそのものについてはこれまであまり検討されていない。青年は身近な他者との間で, 傷つきを経験しているということが指摘されている (Leary, Springer, Negel, Ansell, & Evans, 1998; 小田部・加藤・丸野, 2009a)。そのため, 親しい間柄である友人関係においても, 傷つくことは十分に考えられるが, 傷つくことと傷つきを避ける関係を保とうとするものの関連は議論されていない。

そこで本研究では傷つくという否定的な出来事に焦点を当てて, 青年の友人関係について新たな知見を提供することを目標とする。青年の友人関係について明らかにするため, 本研究では主に大学生を対象に, 面接調査, 質問紙調査を行い, 青年の傷つき経験や傷つきを回避する態度について明らかにする。

本研究で大学生を扱う理由は, 主に3つある。1つ目は青年期の中でも大学生にとって友人関係の重要性がこれまでもたびたび指摘されている点である。大学生にとって, 親しい友人は様々な面でのサポート源であり (嶋, 1991), 日常的なストレス状況に対しても友人からのサポートを受容できることは大学生の感情状態に良好な影響を及ぼすことがすでに明らかにされている (福岡, 2010)。適応的な大学生活を送る上では, 入学後に知り合った友人との交友関係を築くことが重要視されており (Swenson, Nordstrom,

& Hiester, 2008), 大学入学後に、新生活に馴染めずに入学前から付き合いのある友人を求めることは“friendsick”とも言われ、大学入学後の孤独感を高めることにつながる (Paul & Brier, 2001)。他にも大学入学後新たに知り合った友人が対人関係に占める割合の大きいほど、大学生活への適応の度合いが高かった (Hays & Oxley, 1986) という知見からも、大学生活における友人関係を検討する必要性は大きい。

2つ目は大学生の発達に友人関係が重要な役割を果たしていると考えられている点である。青年期の発達課題として主要なものにアイデンティティの確立があるが、その確立に際しては他者との関係性が重要となることが指摘されている (Franz & White, 1985; Josselson, 1973; 杉村, 1998)。特に関係性に基づくアイデンティティの確立においては、自分を取り巻く他者との関係についての満足感と安心感や、相互に独立した他者としての認識などが必要であり、これらの感覚の根拠として友人や親友との関わりがあげられている (山田・岡本, 2008)。アイデンティティの確立は大学3年生や4年生にかけて生じやすく (加藤, 1989)、特に、他者との関係の中で自己を位置づけ、他者の存在が自己の存在を脅かさないという感覚は大学3年生以降に発達すると言われる (山田・岡本, 2008) ように、友人関係は大学生にとってアイデンティティの確立を支える一要因ともなる。

3つ目は方法的な問題である。実際の傷つき経験を検討する一つの方法として、青年自身に傷つき経験を回想させる方法がある。本研究では、青年期後期の大学生を対象とすることで、それまでの傷つき経験についての資料が得られると考えられた。

第2節 博士論文の構成

本研究は全5章で構成される。全5章は文献研究，実証的研究，総合的討論に区分される (Figure0-2-1)。文献研究にあたるのが第1章，実証的研究にあたるのが第2章から第4章，総合的討論にあたるのが第5章である。

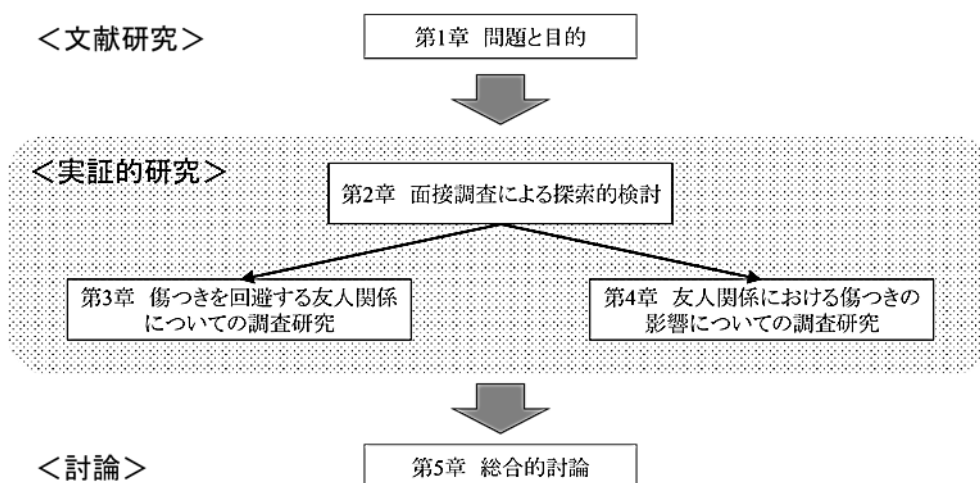


Figure0-2-1 簡略化した博士論文の構成図

まず第1章では本研究の問題と目的を述べる。そのために友人関係に関する先行研究を概観する。これまでの友人関係の研究についてその成果と課題について整理し，本研究の目的について論じる。

次に第2章から第4章までは実証研究によって，友人関係について検討する。第2章では，面接調査によって大学生の友人関係の実態について検討する。現在に至るまで大学生がどのような友人関係に関する出来事を経験し，どのような付き合い方へと変化していくのかを探索的に調べることが目的である。また，友人関係の中でどのような傷つき経験が生じるのか，どのような影響があったと大学生自身が感じているのかを検討する。第3章では，先行研究でも扱われてきた傷つきを避ける友人関係について質問紙調査の結果を元に議論する。大学生のそれぞれの友人関係の中で生じている，友人間の具体的な交流が大学生の適応にどのように関連しているかを明らかにする。第4章では，友人関係で生じた傷つき経験による影響が，大学生にとってどのように認識されているのかを検討する。傷つき経験によって生じる肯定的な影響と否定的な影響がどのような

要因によって変化し得るのかを第4章では議論する。

最後の第5章では文献研究および実証研究の結果を元に、総合的な討論を行う。第2章から第4章では青年が友人関係で傷つくことを回避したり、回避できずに傷ついてしまったりすることについて明らかにすることを目的とし、友人との付き合い方に対する意識と具体的なやり取りや出来事の両者に焦点を当てて検討を行ってきた。先行研究では傷つきを避ける青年の具体的な友人関係での関わりや、傷つくことの影響について十分に議論されてこなかった。傷つくことを避けたり、避けられずに傷ついたりすることが青年にとって持つ意味を本研究では明らかにする。

第1章 従来の友人関係研究と本研究の目的

第1章では青年期の友人関係に関する研究の到達点を明確にするために、先行研究を概観する。その上でこれまでの友人関係研究の限界と本研究の目的を述べる。第1章は全4節から構成される。

第1節ではこれまでの友人関係研究を概観し、青年期における友人関係の発達やその機能について整理する。友人関係が青年にとって重要であると言われてきたが、それがどのような点で重要なのかを述べる。

第2節では現在の大学生の友人との付き合い方についての研究を概観する。大学生が友人とどのように付き合っているのか、あるいは付き合おうとしているのかを検討する。また、友人との付き合い方を明らかにしてきたこれまでの研究の成果と、その限界を述べる。

第3節では、友人関係の中で傷つくことを研究する意義について述べる。大学生が回避しようとする“友人関係で傷つく”ということが、大学生自身にとってどのような出来事となり得るのか、これまでの研究から検討する。

第4節では第1章で得られた友人関係研究の成果をまとめ、本研究の目的を述べる。

第1節 青年期における友人関係とその機能

青年期における友人関係

青年期と友人関係

青年の発達と友人関係の関連は古くから指摘されてきた。Hollingworth (1928)によれば、青年期は心理的離乳の時期にあたり、青年は親からの自立を試みることになる。また、Blos (1962)は青年が親の影響から分離し、心理的に独立する過程を第2の分離個体化過程としている。第2の分離個体化過程において、親に代わる依存愛情欲求・同一化の相手として同性の友人と相互依存の関係を形成できるか否かが、適応障害など、青年の様々な問題と関連している(皆川, 1980)。つまり、親から自立した青年の新たな心の支えとして友人関係の構築が重要になる。

青年の心の支えとして、Sullivan (1953 中井他訳 1990)は親からの自立にあたって、チャムと呼ばれる親友の存在が重要であるとしている。児童期の単なる遊び友達に対する一般的な関心ではなく、特定の一人に対して向けられる親密欲求からなる関係が青年期に生じる(Sullivan, 1953 中井他訳 1990)。このチャムのような親友との関係を通して、青年は友人同士で分かり合えるという体験をすることになる。親子関係の葛藤は青年期前期・中期にピークに達し、親に代わって友人が大きなサポート源となる (Furman & Buhrmester, 1992)。このように親や大人からの自立に直面する青年にとって、友人関係がその自立を支えるものとなる。青年期に訪れる変化や悩みは通常親や大人には相談しにくい内容であるため、不安定な青年の心の支えとなるのは、同様の悩みをかかえる同年代の仲間との深い結びつきであると言われる(遠矢, 1996)。特に同性の友人関係は青年にとって大きな支えになることも指摘されており (Bagwell, Bender, Andreassi, Kinoshita, Montarello, & Mukker, 2005), 大学新入生の孤独感は友人からサポートを得られるかどうか大きく規定されていることが明らかにされている(和田, 1992)。

また、心理的な安定だけではなく、青年期におけるアイデンティティの発達においても友人関係は重要な役割を果たしている。関係性に基づくアイデンティティの確立においては自分を取り巻く他者との関係の満足と安心感や相互に独立した他者としての認識などが必要であり、そのような感覚の根拠として友人や親友との関わりがあげられている (山田・岡本, 2008)。理想自己と現実の自分を比較し、評価する機能の発達は、青

年期前期から後期にかけて段階的に発達するが、その際に友人が比較対象や評価の基準として取り入れられていく過程も指摘されている(岡田, 1987)。青年にとって、友人は年齢や社会的立場の上では対等でありながら、家族にはない異質性を有している(松井, 1990)。このような条件が青年の発達や適応に友人が重要な役割を果たす理由であると考えられている。

以上の様に、青年期は親からの自立や子供から大人への過渡期という性質を持つため、友人関係の重要性は特にこの青年期において強調されてきた。青年期になると大人から与えられた既成の枠組みや規範から脱却し自立しようとするが、それには自分の基盤を改めて意識し、変革しなければならず、大きな不安や緊張を伴うことになる(遠矢, 1996)。特に大学生では同性の友人に対して最も自己開示が行われやすく、両親や異性の友人に比べてその内容の多様さや自己開示の深さが特徴的である(榎本, 1987)。小学4年生から大学生までを対象に親、異性の友人、同性の友人との親密度を追跡調査した Hunter & Youniss (1982)によれば、親の親密度は年代を問わず重要であるものの、同性、異性の友人の親密度は学年の上昇と共に強くなっていくことが指摘されている。青年期の重要な発達課題として同性、異性の友人との親密な関係を築くことがあげられており(Havighurst, 1943 荘野訳 1958)、青年期は児童期に比べてより深い親密な交流を必要とする時期であると言える。特に Havighurst (1943 荘野訳 1958)は青年期において同年代の仲間関係を築けることを重要視しており、仲間から認められるかどうかは青年の行動に最も影響を与えるものであり、この課題が達成されることによって、職業選択や異性関係など青年期の他の発達課題が成し遂げられるようになると指摘している。この重要な課題は中学生から発達し、大学生の後期ごろまでに課題が達成される傾向にある(Havighurst, 1943 荘野訳 1958)。以上のように、発達上不安定な青年期には友人との関係がより重要な役割を占めやすいことがこれまでに指摘されてきた。

友人関係の発達の变化

青年期の発達において重要視されている友人関係は、幼少期から青年期にかけて様々な発達の变化をとげる。Furman & Bierman (1984)や Bigelow (1977)は親しい関係となる上で重要な特性となる信念や態度や価値として表された「友人期待」の発達の变化を検討した。その結果、幼少期から児童期にかけて、外見的魅力に関する友人期待は年齢

と共に減少し、愛着や支持は増加したことが示された(Furman & Bierman, 1984)。また、児童期から青年前期にかけて、受容、誠実さ、自分が与える友人への援助などの 11 の要素が加齢に従って増加し、一般的遊びに関する要素は減少した (Bigelow, 1977)。大学生になると、友人に望むものは「言いたいことが言い合え、利害なく付き合うことができる」という真正さへと発達していく(和田, 1993)。感情の共有に関しても、児童期までは親との共有が多いのに対し、青年期以降には友人や恋人が重要な位置を占めるようになる (Rimé, 2009)。このように友人に期待する要素は発達と共に変化していくことが明らかにされている。

友人関係への期待と共に、友人との関わり方も発達に伴い変化していく。保坂・岡村(1986)は、グループ活動の発達を「ギャング・グループ」、「チャム・グループ」、「ピア・グループ」の3段階に示した。ギャング・グループは学校段階では小学校高学年に対応し、外面的な同一行動による一体感を特徴とし、全員で同じ行動をとることによって仲間意識がもてるような状態である。チャム・グループは中学生に対応し、内面的な互いの類似性の確認による一体感を特徴とし、似たような体験を語り合っ共感しあうような状態である。ピア・グループは内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う共存状態であり、他人との違いなどが確認されていく状態である。友人関係は心身の発達に従って遊びや行動などを共有する関係から、お互いのことを理解しようとする関係へと変化していく。また、落合・佐藤(1996)は中学生、高校生、大学生を対象に友人との付き合い方に関する調査を行った。その結果、中学生から大学生へと年齢が増すに連れて、まず積極的な自己開示を通して相互理解をするようになり、次に誰とでも同じように仲よくなろうとするのではなく、選択的に仲のよい友人を限定し、深く狭い友人関係を築くようになる。このような発達の過程の中で、特に高校生においては男女ともに友人との心理的な距離は最も近づきやすい (長沼・落合, 1998)。そして、青年期後期である大学生になると、お互いの相違点を認め合い、互いに尊重する関係へと発達していくことが示されている(榎本, 1999)。

友人関係と性差

前述した友人関係の発達については、性差の影響もこれまでに検討されてきた。性別によって友人関係に求めるものが異なり、男子は友人同士でスポーツや競争的なゲーム

などの競争や支配を中心とした活動や会話が多く、女子は自己開示や親密性を重視した交流、共有を中心とした活動や会話が多いことなどが示されている (Buhrmester, 1996; Maccoby, 1990)。男子は支配や力を意識した、友人に対して負けたくない感情や、友人に左右される感情を女子よりも強く感じ(榎本, 1999)、自分に自信を持って交友できる関係や、友人と自分が異なる存在であることを認識できる関係が望まれる(落合・佐藤, 1996)。一方女子では交流や共有を意識した友人との信頼感や友人にどう思われているかについて男子よりも強く感じ(榎本, 1999)、互いに理解し合い、共感し、共鳴し合うことが望まれる(落合・佐藤, 1996)。男女での友人関係の性差の背景には、「男は内面をやたらに出さず、できるだけ独立・自立しているべき」、「女は同性の友達に相談したり頼ったりして友達と仲良くするのがよい」などの性役割に関わる社会的な価値観の影響が推測されている (長沼・落合, 1993)。以上のように、男子と女子では友人関係で生じる活動や友人関係への期待などに違いが生じていることがこれまでの研究で指摘されている。この性差については、児童期から青年期まで様々な発達段階で指摘されている。

性差は友人関係の発達過程にも見られている。男子では友人と遊ぶことを中心とした「共有活動」からお互いの違いを理解しようとする「相互理解活動」へと発達するのに対し、女子では友人との行動や趣味の類似性を重要視した「親密確認活動」から他者を入れない固い絆を持った「閉鎖的活動」へと変化し、その後、「相互理解活動」へと変化する(榎本, 1999)。このような発達パターンの違いは中学生、高校生までに見られるが、大学生では性差は見られず(落合・佐藤, 1996)、青年期では年齢が増すにつれて性差が弱くなっていくと考えられている。そのため、大学生を対象とした橋本(2000)や岡田(2007)などでは、友人との付き合い方に性差は見られていない。その一方で、大学生においても性差の存在を指摘した長沼・落合 (1998)のような研究もあり、男子大学生では内面を隠した防衛的な付き合いをする傾向が高く、女子大学生は被愛願望やお互いの個別性が薄い密着した関係を保つ傾向が高いことが示されている。このように友人関係に対する性差はこれまでの研究でも一見した知見は得られていない。性差の研究では生物学的な性だけでなく、社会的な性と対人関係の関連も検討されている。男性であっても女性性が強いほど、自己開示量が増える(Lavine & Lombardo, 1984)。女性性の高い男子青年は比較的女性らしい友人関係を示し、女性であっても男性性の高い女子青年は比

較的男性らしい友人関係を示す(和田, 1993)。友人関係には性役割意識などの心理社会的な性別への意識が影響している可能性もあり,単純に性別のみによって検討することは困難である。

友人関係の機能

友人関係によるソーシャルスキルの発達

青年期において友人関係が重視される理由にアイデンティティの発達をあげてきたが,友人関係の機能はそれだけではなく,ソーシャルスキルの学習,心理的な安定化もあげられている(松井, 1990)。青年期は自分がそれまで身に付けてきたソーシャルスキルを見直し,自分の意志で自分の行動をコントロールできる存在として,対人関係のストラテジーの再構築を図る時期であると言われる(堀毛, 1990)。ソーシャルスキルとは対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と,そのような対人行動の発現を可能にする認知過程である(相川, 1996)。その中には菊地(1988)などに代表される言語的なスキルの他,表情などによるノンバーバルな情報伝達(二塚・尾田, 2004)や,感情表出の制御(對馬・松田, 2012)なども含まれる包括的な概念である。このソーシャルスキルは具体的な対人場面で用いられるなどの特徴があり(相川・藤田, 2005),スキルを獲得しているかどうかは対人関係における適応に影響することが明らかにされている。たとえば,ソーシャルスキルは対人関係で劣等感を感じる場面への遭遇頻度と負の関連が示されている(橋本, 2000)。また,ソーシャルスキルの高い大学生は初対面場面でも質問などにより会話を展開・維持する傾向にあり(谷村・渡辺, 2008),このような会話の維持や自己表現に関するスキルは,特に孤独感と関連するものであることが示唆されている(相川・佐藤・佐藤・高山, 1993; Jones, Hobbs, & Hockenbury, 1982)。友人関係に関しても,その場にあった形で自分の気持ちを伝えるスキルや,他者と親密な関係を形成するスキルは良好な友人関係に影響しており(水津・児玉, 2016),ソーシャルスキルが高いほど大学内の友人からのサポートを得やすく,孤独感の低減にも効果が認められている(堀・島津, 2005)。

ソーシャルスキルが発達していることは対人関係の適応に重要な影響を及ぼしているが,このソーシャルスキルを発達させる要因として友人関係が指摘されている。青年

にとって友人は親しく付き合う他人であり、家族とは異なる付き合い方の技術が必要となるため、どのように自分の気持ちを伝えれば良いかなど、様々な知識や振る舞い方の技術が必要とされる(松井, 1990)。特に青年期前期にあたる中学生や高校生において、友人を傷つけないように気を付けるような関係を築く青年はソーシャルスキルが高くなる傾向にあり、青年期後期には友人との付き合い方とソーシャルスキルの関連が弱くなる(岡田, 2010)ことから、中高生の時期には、友人関係を通じたソーシャルスキルが発達しやすいものと考えられる。また、大学生においても、同性異性を問わず友人関係を含む他者との交流の時間が長い大学生ほど、コミュニケーション能力を発達させていることも報告されている(都筑他, 2013)。このように友人との関わりとソーシャルスキルの関連が検討されてきている。

心理的な安定に寄与する友人関係

青年期における友人との関わりはアイデンティティの発達やソーシャルスキルの発達を促すだけでなく、青年の心理的な安定にとっても重要である。友人関係が良好であることは青年の精神的健康に好ましい影響を及ぼすことが様々な研究によって明らかにされている。友人との関係は学校への適応に影響しており(Berndt & Keefe, 1995)、大久保(2005)は、学校適応感の内、居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼感・受容感、劣等感のなさのいずれに対しても友人関係が強い影響力を持つことを示した。

友人関係による影響は学校への適応に留まらず、青年の内的適応にも影響する。友人関係満足感の高さと、生活満足度の高さには正の相関があり(高倉・新屋・平良, 1995)、同じく友人関係満足感の高さと、快感情経験や自尊感情との正の相関が報告されている(鈴木, 2002)。このような友人関係の影響は自身の友人関係を他者よりも良いものであると評価するほど、あるいは悪くないものと評価するほど、抑うつを低減したり、自尊感情や充実感を高めたりするという結果(黒田・有年・桜井, 2004)が得られている。特に深い友人関係を志向する青年において、友人関係が良好であることは精神的健康への影響が顕著である(阿部・山口・五十嵐, 2014)。大学生の良好な友人関係は「ありのままの自分でいい」などの「安心できる」という関係性から成立しており(水野, 2004)、そのような関係が築けることで、友人関係は居場所として自己受容を促進する働きを持つ(石本, 2010a)。

友人の人数と精神的健康にも関連が見られている。宮本(2012)は友人の人数(友人ネットワークサイズ)によって社会的自尊心が異なるかを日米の両文化圏で検討している。その結果、日本では友人の人数が多いと認識するほど、被受容感、被信頼感といった社会的自尊心が高くなるのに対し、アメリカではそのような関連が見られなかったことを報告している。欧米においては、他者とは異なる自己の独自性に価値を見出し、それを表出することが重視される「相互独立的自己観」が優勢であるが、日本においては、他者との協調性が重視される「相互協調的自己観」が優勢であると言われる(Markus, & Kitayama, 1999)。そのため、友人を多く作ることができているという協調性を持つことは本人の自己価値を高める方向に作用すると考えられる。この「相互協調的自己観」が高い青年ほど、友人関係の自己評価と精神的健康との関連が強くなり、自身の友人関係を良いものと評価する青年は精神的健康が保たれていることが明らかになっている(黒田他, 2004)。他者とのコミュニケーションに時間を割く青年の特徴として、友人との関係が多様であり、その関係が良好であることも示されている(都筑他, 2015)。このように相互協調的自己観が優勢な日本においては、友人との良好な関係を多く築けており、より自分を協調的であると認識できることが青年の精神的な健康に影響しやすいと考えられる。

友人関係によって適応が保たれる一つの理由に、友人から受けるソーシャル・サポートの存在がある。対人的な関係は時にソーシャル・サポートとなってストレス反応を緩和させる要因となる(城, 2012)。大学生では男女に限らず同性の友人からのサポートを最も多く知覚している(嶋, 1992)。友人からのソーシャル・サポートは適応に影響する(周・深田, 1995)ことが指摘されているように、青年期において友人関係はその関係がうまく形成、維持されれば、重要なサポート源となる(牧野, 2012)。男女いずれの学生においても友人からのサポートは情緒的なものが多く知覚され(福岡・橋本, 1997)、精神的な健康を促進する働きを持つ(嶋, 1992)。たとえば、友人からのサポートは孤独感の低減に影響していること(和田, 1992)や、友人からのソーシャル・サポートの受容が増えることで気分状態が改善されること(福岡, 2000, 2010)が示されている。異性の友人からのサポートも部分的には効果が示されており、目標の達成や義務・責任の達成へのサポートを得られる大学生ほど、特性的自尊心が高く、主観的幸福感も高いという結果が示されている(浅野・吉田, 2014)。このように青年期において友人関係はその関係

がうまく形成、維持されれば、青年の心理的な安定を助けるものとなる。

そのような良好な友人関係に加えて、サポートが適切に発生するためには青年が自ら友人にサポートを求めることが必要な場合がある。なぜなら、友人へのサポートは援助者による自発的な気づきに限らず、直接に本人から求められることがあるからである(高木, 1997)。このような問題解決のために他者に対して直接的に援助を求める行動は援助要請(Depaulo, 1983)と言われる。個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは、重要な対処方略の一つである(永井, 2013)とされる。援助要請行動そのものがストレス反応の低減に繋がるわけではないが、援助を必要とするときに適切な人に適切な方法で援助を求められたかによって、援助評価が異なり、ストレス反応も左右される(渡部・永井・桑原, 2014)。特にネガティブな経験について感情的に伝えるだけではストレスは低減されず、問題解決を目指したコミュニケーションが必要となる(Constanza, Derlega, & Winstead, 1988)。適切な援助要請が行われれば、友人関係は青年の適応を支える要因となるが、そうでない場合には友人との交流があったとしても、必ずしもサポートに繋がらないことが示唆される。友人との付き合いの中で、援助要請を適切に行えるかどうかは友人からのサポートを考える上で重要な要素である。

サポートの発生を促す援助要請であるが、その量は多ければ多い程適応的であるというわけではないし、常に援助要請が行われるわけでもない。脇本(2008)も指摘するように、他者に援助を求めることは、自己の立場の弱さ、対処能力の低さ等を自己自身および他者に伝える側面を持つと言われる。そのため、大学生のストレスへの対処場面においては、特別な対処をしなくても何とかなるだろうという態度が最も採用されやすく、他者に対するサポートの要請は最も採用されにくい(和田, 1998)。Ryan, Patrick, & Shim (2005)は学業場面における援助要請のスタイルを検討し、援助要請を回避したり、すぐに他者に頼ったりするよりも、独力では解決できない場合にのみ援助要請を行う方が適応的であることを示している。心理的な問題についても、援助要請のスタイルは自立型、回避型、過剰型の3タイプに分類され、自立型は問題を独力で解決できない時にのみ援助を要請するスタイル、回避型は援助要請を避けて自身で問題を抱え込むスタイル、過剰型は些細な問題でも援助を要請するスタイルとして示されている(永井, 2013)。この心理的な問題に対する援助要請については、援助要請自立型と援助要請回避型の援助要

請スタイルは適切な援助要請を促進するという結果が得られている（永井，2017）。

また、サポートを受けるだけでなく、サポートを提供できることも、個人の心理的な安定にとっては重要であると言われ、自尊感情の回復などの効果が示されている（Bonhote, Romano-Egan, & Cornwell, 1999; Lu & Argyle, 1992）。サポートが生じる時、そこにはサポートの提供者とサポートの受領者が存在することになる。人は日常生活の中でそのどちらにもなり得るが、自分が受け取ったサポートと提供したサポートの差が小さい方が心身の両面にいて健康的であり、自分の提供するサポートが受け取るサポートよりも多いと負担感(心理的な重荷や欲求不満)が引き起こされ、逆に自分の提供するサポートが受け取るサポートよりも少ないと負債感(恥ずかしさや申し訳なさ)が引き起こされる(周・深田，1996)。サポート授受のバランスは友人関係でも重要であり、友人間で相互に交換されるサポートの量が少ない青年は、怒りや身体的なストレス反応を多く報告している(長谷川・下田，2012)。このようにサポートは受けられれば受けられるほど良いというわけではなく、自身がサポートを提供できているという感覚も精神的な健康には重要である。

このように援助行動を実行できることそれ自体が、大学生にとっては重要であるが、援助行動を行うためには、援助行動の対象が必要であろう。友人関係は大学生にとって、身近な援助対象の一つと言える。援助行動を促進する要因として、相手への共感があげられる。相手に共感することができた時、相手に対する適切な態度や行動が生じやすくなる(加藤・高木，1980)と言われ、これまでも多くの研究で共感性と援助行動の関連が検討されてきた（e.g. Coke, Batson, & Mcdavis, 1978; 菊地，1983; 桜井，1986）。援助行動を促進する共感状況は状況的な要因によっても左右され、特に彼らの内集団に対して共感性はより援助行動を促進する（Stürmer, Snyder, Kropp, & Siem, 2006）。このように援助行動が生起するか否かは相手との関係にも影響を受ける。相手と親密であれば、それだけ援助行動は生じやすくなる（植村，1999）。友人との親密な関係はサポート源として大学生の適応を支えるだけでなく、サポートを提供する対象、つまり援助行動の対象として身近に存在することで間接的に適応に寄与すると考えられる。

以上の研究から、青年にとってはサポートを受けることができる関係が築けていることと、サポートを提供できる相手がいること、そしてお互いに十分なサポートを交換できることは、精神的な健康の保持につながると言える。

ストレスや葛藤としての友人関係

対人ストレスと青年

上記のように青年の適応にとって重要な要因となることが指摘されている友人関係であるが、同時に対人ストレスの要因となり、青年の適応を阻害する要因ともなる。心理社会的なストレスにおいて、対人関係はストレッサーになることが指摘されている (Last, Barlow, & O' Brien, 1984)。対人関係によって生じるストレスは青年が発達していく中で避け難いものであると言われ (Seiffge-Krenke & Shulman, 1993)、数あるストレスイベントの中でも精神的健康との関連性の強さや影響力の大きさが指摘されている (Bolger, DeLongis, Kessler, & Schilling, 1989; Hammen, 1991)。特に自身の対人関係にストレッサーになる成員が多く含まれるほど、対人ストレスイベントが生じやすく、結果として精神的な健康が阻害されやすいことも指摘されている (橋本, 1997a)。このように将来に渡る対人ストレスが予期されるような友人関係が築かれている場合には、対人ストレスへの対処として、関係の継続を放棄しやすい (加藤, 2001a)。そのため、友人関係が対人ストレスの要因になることにより、ここまで述べた好ましい友人関係は維持しづらくなり、結果として、友人関係が大学生の適応を促すことも少なくなってしまう恐れがある。

対人ストレスイベントの類型として、橋本 (1997b) は、対人葛藤、対人劣等、対人摩耗の3種類を提示している。対人葛藤とは、社会の規範から逸脱した顕在的な対人衝突事態である。対人劣等とは社会的スキルの欠如などにより劣等感を触発する事態である。対人摩耗とは対人関係を円滑に進めることに伴う気疲れを引き起こす事態である。この内、現代青年においては対人葛藤よりも対人劣等や対人摩耗の方が問題となっている可能性が示唆されており (橋本, 1997c)、対人摩耗の頻度は対人葛藤の頻度を上回っていることや、対人劣等が精神的な不健康に関連していることも明らかにされている (橋本, 1997b)。特に対人劣等は対人葛藤や対人摩耗に比べて抑うつへの影響が強い (安部・川人・大塚, 2014)。

対人ストレスへの対処は、その対人ストレスを生じさせる関係によって用いる方略が異なることが指摘されている (Laursen, Finkelstein, & Betts, 2001)。対人ストレスへの対処

方略である対人コーピングにはポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの3種類が示されている。ポジティブ関係コーピングとは対人ストレスイベントに対して、積極的にその関係を改善し、維持していこうとする対処方略であり、ネガティブ関係コーピングとは対人ストレスイベントの生じた関係を放棄あるいは崩壊させることでストレスから逃れようとする対処方略であり、解決先送りコーピングとは対人ストレスイベントにこだわることなく、時間が解決するのを待つような対処方略である。いずれの対処方略を用いるかは、様々な要因によって変化する(加藤, 2001b, 2007a, 2007b)。たとえば、友人関係で生じたストレスフルな状況を重要なものであると認知するほど、ポジティブ関係コーピングを用い、解決先送りコーピングは用いられなくなり、また、うまく対処できるという効力感を感じているほど、ポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングが用いられやすい(加藤, 2001b)。自分にとって苦痛だと感じるような対人ストレスの場合にはネガティブ関係コーピングが用いられやすい(加藤, 2007b)。

対人ストレスを抑制する要因の一つにはソーシャル・サポートが有効であると指摘されている(嶋, 1992)。対人関係によって生じるストレスは同時に対人関係によって低減する可能性があるということである。ストレスの低減において、どのようにストレス者とサポートが重なり合い、牽制し合っているのかはまだ十分に明らかになっておらず、議論の余地があることが指摘されている(橋本, 1995)。また、対人ストレスを身近な他者に相談する場合には、情緒的な支援を期待しているのか、解決のための情報収集の期待をしているのが重要であり、それらに合致した相手の反応が得られることで感情の回復や問題解決、成長感などが得られる(高橋, 2013)。

友人関係によるストレスや葛藤

年齢が増すにつれ、遊び仲間から少数の友人としての付き合いに変化していく過程では、お互いにぶつかり合い傷つくこともあると言われる(落合・佐藤, 1996)。中学生の学校ストレスには学業や教員との関係に関するものに加えて友人関係が存在しており、友人関係によるストレスは抑うつや不安の感情を生じさせる(岡安・嶋田・丹波・森・矢富, 1992)。また、子どもの頃のように友達にとけ込めなくなり、どんな風に友人と付き合えばよいのか迷っている青年もいる(落合・佐藤, 1996)。重要な他者との対

人関係の悪化は、精神的健康に大きな悪影響を及ぼし得ることが指摘されている(Davis, Morris, & Kraus, 1998)。友人関係は場合によって、自己の延長と感じられるほど親密な付き合いとなることもあるが(Belk, 1988), そのような関係の喪失は青年にとって大きな喪失感をもたらすものである。一方で、友人関係が親密で良好である場合、ストレスを生じさせる出来事が生じて、青年はその友人関係を維持しようとする(Laursen & Collins, 1994)。ストレスイベントを介した友人関係の変化はこれまで十分に検討されておらず、今後の知見の蓄積が期待される。

親密な友人関係で生じる対人ストレスに対しては、相互に要求や意見を譲歩し合い、お互いに受け入れられる結果を得ようとする積極的に関係を維持するような方略を用いるが、一方で友人関係でも親密ではない場合には、関係を放棄する対処方略を用いやすい(加藤, 2007; Laursen, Finkelstein, & Betts, 2001)。また、対人ストレスが生じた時に、そのストレスの解決のために積極的に関わる対処の効果も親密な友人関係では効果が見られるが、親密でない友人関係では効果が見られない(加藤, 2007a)。

また、本来は対人ストレスイベントへの対処である対人ストレスコーピングも、場合によってはその対処そのものが否定的な意味を持つ。親密な友人関係を築きたいという気持ちがより強い青年は、そうでない青年よりも、ネガティブ関係コーピングを用いることが否定的な感情を喚起させやすい(加藤, 2006)。ネガティブ関係コーピングは友人間で生じるストレスイベントに対して、距離をとったり、関係を放棄したりすることによって対処する方略であり、この方略を用いることは友人との親密な関係を阻害するものになり得る。そのために、親密な関係を持ちたいと思う青年にとって、ネガティブ関係コーピングはより否定的な感情に結び付きやすいと考えられる。また、このようなコーピングは対人関係にも影響を及ぼす(加藤, 2002)。ストレスを生じさせる関係を改善しようと努力するポジティブ関係コーピングや、時間をおこうとする解決先送りコーピングは他者に好意的な感情を抱かせる一方、関係を放棄しようとするネガティブ関係コーピングは他者に嫌悪感を生じさせる。その結果、ポジティブ関係コーピングや解決先送りコーピングはソーシャル・サポートを増加させるが、ネガティブ関係コーピングはソーシャル・サポートを減少させることになる(加藤, 2002)。対人ストレスコーピングは友人関係の満足感にも影響を及ぼしており、ポジティブ関係コーピングを用いるほど、友人関係の満足感を得やすく、ネガティブ関係コーピングを用いるほど、友人関係の満

足感が低くなりやすい(加藤, 2000, 2001b)。解決先送りコーピングも友人関係の満足感を高めるが, 葛藤を抱えた友人関係に対して積極的に関わり合うことも遠ざけることもしない対処であり, 結果として傷つけ合うこともなく関係を良好に保つというものであり, 積極的に関係を維持・改善させるポジティブ関係コーピングほど友人関係の満足感には繋がらないことが明らかにされている(加藤, 2000)。

ここまで青年期における友人関係全般についての知見を整理してきた。しかし, 一概に友人関係と言っても, その関係の実態は青年ごとに様々であろう。友人関係をとらえる際には, 友人一般について議論するだけでなく, その関係で生じるコミュニケーションの在り方についても考慮する必要がある。次節では, 青年と友人の付き合い方についての知見を整理する。

第2節 青年の友人との付き合い方に関する研究の成果

近年における友人間のコミュニケーションの変容

青年の友人関係は親密であり、自己の内面を開示して深い関わりを形成するという伝統的な友人観に対し、1980年代半ば頃からこのような関係を避ける傾向が指摘されはじめた(岡田, 2010)。この傾向について、90年代には友人関係や対人関係の希薄化という言葉が用いられるようになった(松井, 1996)。希薄化とは、人との深いつながりを持つとうとしなかったり、持とうとしてもそれが得られにくかったりするような傾向を言う(白井, 2006)。岡田(2007)は従来のように親密で内面を開示するような関係を「内面的友人関係」とし、これに対して友人から低い評価を受けないように警戒し、あるいは互いに傷つけ合わないような関係を「現代的友人関係」とした。従来のような内面的友人関係をとる青年は先行研究が示すような適応的な状態を保っているが、表面的に円滑な関係を志向する現代的友人関係をとる青年は不適応的であることが示された(岡田, 2007)。岡田(2007)によると、現代的友人関係をとる学生の人数は調査協力者の60.92%であり、調査に協力した学生の過半数は現代的な友人関係を志向していることから、多くの青年が現代的な、いわゆる希薄化した友人関係の特徴を有していることが伺える。たしかに、円滑で楽しい関係を求め、傷つかないように過度に気を使う青年の友人関係についてはいくつもの研究で指摘されているが、80年代以降の議論や研究をレビューした岡田(2010)によれば、希薄化が近年進行していると言える実証的なデータはなく、松井(1990)の提示した友人関係の機能も親密な友人関係の中では依然として機能していると結論付けている。つまり、傷つくことを避けるような友人関係は近年の青年の特別な傾向ではなく、内面を開示して深く関わるという関係とは異なる一つの友人関係の在り方と考える方が適していると言える。

現代の友人関係も、親密な関係や、心理的な距離を保った関係という違いはあれども、青年にとって重要な問題であることは変わらない。一方で、友人関係を取り巻く状況が変化しているのは事実であろう。携帯電話やSNSの普及により青年が友人とコミュニケーションをとる様式は多様になった。直接会って交流する対面的コミュニケーション(face to face communication: 以下, FTF) に対し、コンピュータを介したコミュニケーション(computer mediated communication: 以下, CMC) の機会も多くなっており、Mckenna,

& Bargh (2000) によれば、インターネット利用者の 94%が友人や家族とのコミュニケーションにインターネットが有効だと感じており、87%が日常的な対人的交流にインターネットを使用していることを報告している。また、現在多くの大学生に利用されているスマートフォン用アプリの「LINE」は対面での接触を持つ者同士が、物理的制約によって、対面のコミュニケーションができない場合でも、コミュニケーションを可能にする補完的な役割として使用されていることが指摘されている(黒川・吉田, 2016)。CMC の一つである携帯メールは電話や対面など他のメディアに比べて対人緊張が低く、その利用頻度は相手への親和感情によって規定されているという特徴がある(都築・木村, 2000)。このように日常生活に浸透している CMC の影響に関する研究が近年増加傾向にある。たとえば、CMC の利用では身体的な身近さへの欲求が満たされないため、孤独感を高める可能性や(Kraut, et al., 1998)、携帯メールの利用によって自分とは異なる考えや価値観を持つ他者に対する寛容性を低下させる可能性(小林・池田, 2007)が示唆されている。特に、携帯電話の着信やメールがないことによって孤独を感じやすい大学生は、そうでない者よりも、孤独感の解消方法としてメールを選択する割合が高く、その結果携帯メールによるつながりの常態化とそれによる不安が螺旋状に増幅する可能性も示唆されている(辻, 2006)。

しかし、CMC による影響は否定的なものばかりではなく、肯定的な結果も報告されている。まず前述の寛容性について、対面での会話などを通して交流する相手と自分との違いに対する意識が高まれば寛容性が低下しない可能性もあることが示唆されている(小林・池田, 2007)。インターネット上での同性友人との交流は、インターネットに限らず、新たな対人場面に対する効力感を育むことにつながり、異性友人との交流は、人生満足感を高めることも示されている(安藤他, 2004)。電子メールやネットワークゲームの日常的な利用がソーシャルスキルを促進することが縦断的な調査によって明らかにされている(鈴木他, 2003)ことや、高校生においては携帯メールの利用が孤独感を低減する(緒方・和泉・北池, 2006)ことから、CMC が青年期の発達や適応を支える機能を持ち得ることが伺える。ただし、携帯メールの利用については、互いの気持ちなどの情報伝達の難しさや、束縛感・不快感を生じさせる要因となるなどの欠点も報告されており(緒方他, 2006)、CMC の利用には利点だけでなく欠点も指摘されている。これらの利点や欠点はコミュニケーションへの態度によっても異なることが明らかにされて

いる。たとえば、高校生を対象とした時岡他(2017)では、友人からの否定的評価を懸念する傾向が強いほど、対面でないコミュニケーションの気軽さを感じやすくなるが、一方で非言語的な手掛かりの少ないやりとりによるコミュニケーションの齟齬を感じやすくなることが示されている。友人を相手とした CMC の利用にもポジティブ面とネガティブ面が存在しているが、友人の立場を考え、配慮しようとする傾向がネガティブ面の抑制を可能にする(時岡他, 2017)と考えられている。

このような CMC は青年の友人関係にも影響を及ぼしていることが示唆されている。友人関係が形成される時期である大学1年生の4月から7月にかけては、入学後の友人数はあまり変化しないものの、日常的に携帯メールを用いて交流している人数や交流の頻度は多くなり、特に入学直後の4月では携帯メールの送信数が多いほど孤独感が低くなる(五十嵐・吉田, 2003)。携帯メールと同じく閉じたコミュニケーションツールであるという共通点を持つ LINE の利用については、5月から7月にかけて、頻繁にアクセスする LINE のグループが対面のコミュニケーションをとるグループに類似した形になることが示された(黒川・吉田, 2016)。SNS を介したコミュニケーション・ネットワークは時間を経ても、メンバー間の密度やお互いを連絡相手として意識する相互性は変化しにくく、対面のコミュニケーションに比べて緊密なネットワークとして発展し難いことも明らかにされている(黒川他, 2015)。松尾・大西・安藤・坂元(2006)は携帯電話の利用目的が友人関係へ及ぼす影響を分析し、その結果、携帯電話の利用によって、趣味や関心などの緊急度や重要度の低い内容での連絡が気軽にできるようになったことが、様々な友人との連絡の取りやすさにつながり、目的や状況に応じて付き合う友人を選ぶことができるようになったことを報告している。

CMC によるコミュニケーションは、その内容によって、その都度選ばれるような一方的なコミュニケーションである。そのため、SNS や携帯電話による関係の維持や形成は、緊密な関係を築くという点で対面の友人関係に及ばないと考えられる。友人関係における適応感を高める要因にはキャンパスでの対面コミュニケーションにおける相互作用が多いことがあげられており(Hays, & Oxley, 1986)、友人関係の満足感に繋がるのは SNS でのコミュニケーションではなく、対面でのコミュニケーションであることが指摘されている(黒川他, 2015)。携帯メールの相手は選択性が高いゆえに、同質性の高い他者が選ばれやすい(小林・池田, 2007)ため、異質性の高い他者との関係を構築す

ることに向いていない。黒川他(2015)は、大学生のコミュニケーション形態は変化しつつも、FTFによるコミュニケーションを行う機会のある場合には、SNS コミュニケーションは FTF コミュニケーションの物理的・時間的制約に対する補完的な役割を果たすにとどまり、友人関係には対面での相互作用が重要であるとしている。携帯メールの使用頻度は所属する友人グループの満足度の高さに関連していると言われる(赤坂・高木, 2005)ように、携帯電話や SNS を利用したコミュニケーションにおいても、相手と親密な関係を築けていることが重要になる。この点は対面のコミュニケーションと変わらないものである。

青年の友人との付き合い方

友人とのコミュニケーションの在り方には、時代によって多少の変化が見られるものの、青年期における友人関係の重要さは依然として変わらない。このような背景を踏まえ、現代の青年は友人とどのように付き合っているのかを検討する必要がある。前述の通り、希薄化が近年進行していることを示す実証的なデータはなく(岡田, 2010)、CMCの一つである携帯メールの使用は対人関係の希薄化を進めないことも明らかにされている(赤坂・高木, 2005)ことから、近年の CMC の発展が青年の友人関係を希薄で浅い付き合いに変化させたとは言えない。

ただし、従来指摘されてきた青年像とは異なる友人関係を築いている青年が、一定数存在するのも事実である。岡田(1993a)は、内省傾向と友人関係の深さから青年の友人関係を3つのクラスタに分類した。その結果、友人関係全般に回避的で、円滑な付き合い方も求めない友人関係からの退却傾向を持つ群、内省傾向が高く自己に関心が向いている伝統的な青年観に近い群、精神的な関わりよりも表面的に楽しく関わることを重視する享樂的で円滑な付き合い方を志向する群を見出した。この内、第1の友人関係からの退却傾向を示す群は内省傾向も低いという特徴が見られ、他者からの視線や自分自身の内面的不安をあまり気にしない青年の姿が得られた。一方で第3の楽しく関わることを重視する群は自己評価が高いという適応的な面を示しながらも、他者からの視線や評価に対する過度な敏感さという危うさも同時に示していた。岡田(1993a)の調査において最も多く見られた群は友人関係からの退却傾向を示す群(40.75%)であり、次いで第2の伝統的な青年観に当てはまる群(33.53%)、第3の楽しく関わることを重視する群(25.72%)

の順であった。自分に当てはまる友人との付き合い方を選択肢から複数選択することを求める方法で友人関係様式の回答を求めた岡田(1993b)においても、青年の友人関係は3群に分類された。岡田(1993b)による分類では、「突然まじめな話をして友達をしらけさせない」や、「一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする」などの項目を選択している群れ志向群、「相手の言うことに口をはさまない」や、「お互いのプライバシーには入らない」などの項目を選択している対人退却群、「真剣な議論をすることがある」や、「友達グループのためにならないことは決してしない」などの項目を選択しているやさしさ志向群であった。やさしさ志向群は心を打ち明け、一人の友人との関係を大切にしたいと考えていることから、従来の青年像に近い友人関係を築いていると考えられるが、そのような青年が相手に甘えすぎず、傷つけないように気を使っていることが明らかにされた(岡田, 1993b)。岡田(1993b)の調査においては、円滑な関係を求める群れ志向群が最も多く(47.51%)、次いで伝統的な青年観に近いやさしさ志向群(41.00%)、友人関係からの退却傾向を示す群は最も少なく(11.49%)、岡田(1993a)と岡田(1999b)では青年の友人関係の割合は大きく異なることが分かる。また、友人関係への無関心さに焦点を当てた中園・野島(2003)では岡田(1993a, 1993b)とは異なる友人関係の分類が5つ得られている。それぞれ、無関心群(12.50%)、独立群(25.00%)、深化回避群(15.73%)、本音群(38.71%)、自己中心群(8.06%)である。無関心群は友人関係への意識が全般的に低く、岡田(1993a)の友人関係から退却する群に近い特徴を持つ。中園・野島(2003)は自由記述の回答から、このような青年は友人関係の気遣いに疲れ果てた結果として友人との関わり全般を避けようとしている可能性を指摘している。独立群は無関心群とは異なり、友人との親密な関わりを維持しながら、独立した一人の人間として交流する関係を築く特徴の見られた青年であり、友人関係の発達はお互いの相違点を尊重できる関係へと発達していく(榎本, 1999)と言われることから、この独立群の青年はより発達した段階にあると言える。深化回避群は友人からの評価懸念が強く、円滑な関係を志向する群れ志向的な青年(岡田, 1993a, 1993b)に近い特徴を持つ。本音群は友人と本音で関わろうとする特徴を持つという点で伝統的な青年観に近い青年と言えるが、相手を傷つけないための配慮も見られることから岡田(1993b)のやさしさ志向群に類似している。自己中心群は岡田(1993a, 1993b)には見られていない青年の分類である。本音群と同じように友人と深い関係を築こうとし、深化回避群と同じように楽しく円滑な関係

を築こうとするが、友人を傷つけないような配慮は行わない群である。以上のように、友人との付き合い方の分類の基本には、青年が友人に対して関係の深まりを求めているかという点や、円滑で楽しい関係を求めているかどうかという点などが基準として用いられやすい。

友人関係の類型を利用し、それぞれの類型の青年がどのような特徴を持つかについても検討されている。岡田(1993a)と同じく、内省傾向と友人関係によって青年を分類した橋本(2000)では、以下の4つの類型が得られている。それぞれ、友人との軽く浅い関係を望む表層群、何も望まない無関心群、自己と友人関係のいずれも深めていくことを望む積極群、友人関係の深まりは望まず、自己内省を望む内向群である。この内、無関心群が他の群よりも精神的健康の指標である **General Health Questionnaire (GHQ)** の得点が低く、精神的に健康であることが示された(橋本, 2000)。また、ソーシャルスキルに関しては表層群と内向群で低く、積極群では高いという結果が得られていることから、友人との関係を積極的に深めようとする傾向はソーシャルスキルの発達に好ましく影響する可能性がある。また、友人関係による適応指標の違いを検討した岡田(2007)では友人関係について3つの類型が得られた。友人との深い関わりを保つ傾向を特徴とする伝統的な青年観に近い群(36.02%)、深い関わりと楽しくて円滑な関わりをのいずれも避ける群(44.06%)、傷つけられることや傷つけることを回避する傾向が高く、円滑な関係を求める群(16.86%)の3群であった。これらの類型の内、伝統的な青年観に近い群は全体的に最も健康的な特徴を示したが、それ以外の2つの類型の青年は部分的に不適応な傾向が示されている。友人関係を避ける群では自尊感情が低いという特徴が現れ、円滑な関係を求める群では病理的な自己愛が他の群よりも強く現れ、他者の評価に過敏になっている姿が明らかにされた。円滑な関係を求める群は病理的な自己愛という不適応的な特徴が見られながらも、自尊感情の低さは示されなかった。これは、友人を傷つけないように気を遣うことによって、拒絶されている感覚が小さくなり、受容感を得られ、それらの感覚を通じて自尊感情を高揚・維持することができることによると考えられている(岡田, 2011, 2012)。相手を傷つけない付き合い方をすることは友人との関係を円滑にし、友人から受け入れられるために肯定的に働く可能性が示されている。特にこの特徴は、傷つけられることを回避する傾向の高い、気遣い・群れ関係群(27.39%)において見られる。この群の青年は友人から傷つけられないように防衛的な関係を持ちつつ、これ

に基づいて相手を傷つけないように配慮することで、他者からの受容感を得て、もともと低かった自尊感情を高揚させるという特徴が指摘されている(岡田, 2011)。一方で、友人関係から退却する関係回避群(44.37%)は友人を傷つけることを避ける配慮をせず受容感も得られないことが示された(岡田, 2011)。また、伝統的な青年観に従う内面関係群(27.81%)は傷つけられることを回避する傾向は低いが、友人を傷つけてしまうことは避ける傾向が高く、相手から傷つけられる懸念に基づかない自発的な配慮が行えることが示された(岡田, 2011)。岡田(2012)では傷つけられること、傷つけてしまうこと両者の回避に注目した尺度を用いて検討した結果、友人と距離をとろうとする青年の中にも、傷つけられることを恐れて友人との距離をとる岡田(2011)で得られた関係回避群に近い青年群(33.92%)と、傷つきの生じない円滑な関係も、親密な関わりもいずれも求めない岡田(1993a)の友人関係から退却する群に近い特徴を持つ青年群(12.64%)の両者が得られた。岡田(2012)ではこの2群に加えて、これまでの研究で指摘されてきた傷つきの生じない円滑な関係を維持する群(20.40%)と、傷つきを恐れずに親密な関わりを維持する群(33.04%)に分かれた。

友人関係の分類は様々な研究で行われており、それぞれが異なる指標を取り入れることにより、青年の友人関係の多様な在り方が明らかにされている。一方でどの程度の青年がどのような群の特徴を持っているのか、その割合については一貫した結果が得られていない。傷つけることを恐れ、相手との関わりを表面的に留める「希薄化」と言われるような傾向は現代青年の特徴として論じられることも多かった(栗原, 1989; 千石, 1985 など)が、それは必ずしも青年全体を表した論調とは言えない。青年期の友人関係の付き合い方は親密な距離感と自己開示による関係だけで成立しているわけではなく、それらを避けてお互いが傷つかないように配慮する関係も、青年期の友人関係の在り方なのである。

以上のように、青年期の友人関係には様々な特徴が見られる。友人との親密な関わりを維持し、お互いの情報を積極的に自己開示していく関係もあれば、傷つかないように自己開示を避けたり、あるいは友人との関わりを避けたりすることもある。自己開示とは、「他者に対し自分自身の情報を伝えること」と定義される(Collins, & Miller, 1994)。自己開示をすることは、相手に対して親密な感情を抱いていることを表明することであり、お互いの関係を強化することに重要な働きを持つ(榎本, 1997)。また、自己開示そ

のものによるカタルシス効果によって心理的ストレスを低減することができ、さらに開示した相手からの十分なフィードバックによってもネガティブな感情や行動が低減されることが示されている(丸山・今川, 2011)。ところが、自己開示はいつでも行われるわけではなく、自己開示が抑制される場面もある。たとえば、否定的な内容の自己開示においては、自分の印象の管理や自己開示に伴い傷つくなどといった悪影響を防ぐ場合に、自己開示が抑制されることが知られている(片山, 1996)。自己開示によって傷つくことを予測する傾向が高いほど、青年は友人との関わりから距離をおく傾向が高くなる(福森・小川, 2006)。他者からの評価に過敏な青年ほど自己開示に対し消極的な態度となり、結果として友人関係においてお互いの内面の開示を伴う親密な関係を形成しにくいことが考えられる。

また、青年の交友関係には、友人との心理的距離のとり方が重要な側面の1つになっている(上野・上瀬・松井・福富, 1994)。心理的距離は、自己がある他者との間で、どれほど強く心理的なつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解しあった関係をもっているのと感じているのかの度合いと定義される(金子, 1991)。青年は心理的距離を調整しながら友人と付き合っており、友人関係における心理的距離は柔軟性を持ち流動的な側面を持つことも明らかにされている(藤井, 2001a)。しかし、この心理的距離の調整は一筋縄ではいかない。友人との心理的距離を図る際には「離れたいけれど、自分が寂しい思いをすることは避けたい」、「近づきたいけれど、相手を傷つけるのは嫌だ」という葛藤が生じており(藤井, 2001b)、特にもっと相手に近づきたいと考えている青年は、相手との距離に満足している青年よりも孤独感や空虚感を感じやすい(坂本・高橋, 2009)。青年は友人と付き合いの中でどの程度心理的距離を保ち、どのように自己開示をするのか、友人との相互作用の中で思いを巡らせている。

このような葛藤によって、友人間で実際に生じる相互作用は様々な影響を受けることが示唆されている。たとえば、友人に対して援助行動を実行することは、友人への思いやりとして考えられるが、一方で相手を傷つけないためにあえて行動では示さない思いやりがあることが指摘されており、それは相手を傷つけないように気をつける態度によって生じる(満野・三浦, 2010)。援助行動の抑制要因としては援助を行うためのスキルの欠如が指摘されているが(松浦, 2006; 高木, 1997)、それだけでなく、相手を傷つけないように気をつけるという他者志向的な配慮も実際の援助行動の発生を抑制し

ている可能性がある。援助行動を行う動機があっても、援助行動としては実現せず、あえて手を貸さないという態度も示されているように（永井，2013），この援助行動の発生を抑制する要因の一つには，青年がその援助行動によって自他が傷つくことを避けようとするという態度が考えられる。

自他が傷つくことを避けようとする気遣いに疲れた青年は，友人関係全般から退却することがある（中園・野島，2003）。友人関係が青年にとって居場所として機能することは前述したが，居場所は必ずしも他者の存在が必要となるわけではない。居場所を感じられないということは，その場から早く逃げ出したいという衝動や，自分に対する肯定的な関心の不足による孤独，自分のあり方を見失いかけることなど，大学生の精神的健康に直接影響しうる問題となる（飯田他，2011）。友人と一緒にいたとしても，居場所を感じられないのであれば，そのような関係から身を引くことは自然なことであり，友人から離れて心の安定を図る居場所が必要となる。居場所の研究を概観した石本(2009)や，原田・滝脇(2014)によれば，居場所は前述した他者との関わりで生じる社会的居場所と，一人で過ごせる個人的居場所に分類できる。これらは他者の関わりの有無によって区別され，同じ居場所でも意味するところが異なる(石本，2010b)と言われる。個人的居場所は「一人になることで，緊張の解消や自己内省を安定的にできることにより，自己にまとまりを与えることができる場や時間」と定義されている（原田・滝脇，2014）。大学生にとって，友人関係は居場所として自己受容を促進する働きを持つ(石本，2010a)が，一人でいられる時間や場所を居場所と感じている青年の存在も指摘されており(小畑・伊藤，2001)，多くの大学生が一人の時間に意味があると感じている(海野，2007)。プライベートな空間や時間は，拘束感を感じる時や，抑うつや苛立ちなどを感じる時に必要とされる(泊・吉田，1999)ように，個人的な居場所を実感できるということは，いざという時の避難場所，逃避場所があるとも言える。大学生にとって自分の部屋や深夜の時間といった空間や時間は緊張の解消をもたらし，散歩や深夜の時間は大学生を自己内省に向かわせることが示唆されている(泊・吉田，1999)。このような個人的居場所は情緒不安定性の性格特性が高い青年に，特に必要とされる(泊・吉田，2001)。また，対人恐怖心性の高い青年は一人で過ごす時間を孤独・不安と感じながらも，休息の時間として過ごしていることが示されている（海野・三浦，2010）。友人関係への気遣いで疲弊しやすいあるいは疲弊した青年たちにとっては，一時友人から離れてリラックスでき

る個人的居場所はより必要とされる可能性がある。しかし、対人関係の在り方と個人的居場所についての関係はこれまで十分に検討されてきていない。

友人関係への期待

友人との付き合い方には様々な類型が存在し、またどのように親密さを調整・維持していくかがこれまで多くの研究によって明らかにされてきた。青年が友人関係を調整・維持する時、彼らは自身にとって良好な関係を求めていると言い換えることができる。友人関係への期待が高い青年ほど、友人関係に満足していることが明らかにされており、友人関係に満足できていることが自尊心や肯定的な感情を高めることが明らかにされている(鈴木・寺寄・金光, 1998)。このことから、青年が友人関係に期待を持ち、その期待に沿って関係を維持できるということは好ましいことである。

岡田(1999)によれば、青年の理想としては親密で深い関わりを求めている友人関係を理想としている姿が指摘されており、「自分たちの親友関係は、他の表面的な関係とは違って、親密であると思いたい」という欲求に基づいて、自分の友人関係を好ましく評価することが、青年の高い自己評価や充実感に結びつくことが明らかにされている。友人関係の深さを志向している青年ほど、自分たちの友人関係をより肯定的に評価しており、浅い関係を志向している青年よりもストレス反応が低いことから精神的健康も保たれやすいことが示されている(阿部他, 2014)。このことから、自身の友人関係を親密なものであると認識できることは大学生の適応にとっては重要な要因となる。大学生は良好な友人関係を「ありのままの自分でもいい」などの「安心できる」という関係性として考えており(水野, 2004)、また、感性や気持ちなど友人間で多様な要素を共通できることが親密さとして現れている(池田・葉山・高坂・佐藤, 2013)。ありのままの自分が友人から受け入れられており、また互いの気持ちなどが共有できているという感覚を抱ける関係が、大学生に期待されている友人関係である。

一方で、楽しく円滑な関わり方も理想的なものとして捉える傾向があり、友人との深い関わりと、円滑で楽しい関係のいずれも理想として肯定的に捉えていることが示唆されている(岡田, 1999)。女子大学生の面接調査から現代の大学生における対人関係の理想像をまとめた橋本(1997)によれば、それは「集団内でスムーズに関係を形成し、関係

に積極的に関与しつつも、個人の価値観やプライバシーを侵害せず、葛藤は極力回避する」ものであると言われる。葛藤を回避することや個人の立場を尊重するという強力な規範を持ちながら、他者への働きかけや環形を深化させたいという意志も少なからず見られるような態度が大学生には表れている。ところが、この理想を満たすのは現実的には非常に困難である(橋本, 1997)。青年にとって、友人の意義や友人からの評価は大きな意味を持つ一方で、それゆえにその評価によって自己が傷つきダメージを受けないよう、距離を持った関わり方をする(岡田, 2012)と言われ、親密になることへの期待を抱きながらも、実際の行動としては親密な関係形成のための働きかけが行えていない青年も多い(坂本・高橋, 2009)。坂本・高橋(2009)によれば、心理的距離に関して現状に満足している青年も、もっと近づきたいと希求している青年も、干渉しない距離を理想的だと捉えている。つまり、青年は友人に依存した関係よりも自立した関係を望んでおり、それは榎本(1999)の示している自立した友人関係への発達を志向していると捉えることができる。

第3節 友人関係における傷つきについての知見

友人関係における傷つきと本研究におけるその定義

青年にとって、友人の意義や友人からの評価は大きな意味を持つ一方で、それゆえにその評価によって自己が傷つきダメージを受けないよう、距離を持った関わり方をする(岡田, 2012)と言われるように、青年は心理的な距離を調整し、自己開示を避けるような付き合い方をするのがこれまでの研究から明らかにされてきた。青年の中には友人関係で傷つかないように気を遣うことのでかろうじて自尊感情を維持している者もいると言われる(岡田, 2011)。他者との関わりによって生じる苦痛は身体的な苦痛と同じくらい苦痛と感じられやすく、また身体的な苦痛よりも追体験しやすいという問題が指摘されている(Chen, Williams, Fitness, & Newton, 2008)。しかし、いくら傷つきを回避しようと友人と付き合っている限り衝突や不和が生じる可能性は残る。青年が傷つくことや友人を傷つけることを望まなくても、傷つきを経験することは多いに起こり得ることであろう。

日常的な言葉でも心が傷つく、傷つけてしまうという表現は用いられている。傷つくということ¹は、「親しい他者との関係の中で、自分が相手から不当に低く評価されると感じる時に、生じる傷つき感情(hurtful feeling)」(Leary et al., 1998)が生じることであると言えよう。高校生を対象として調査を行った宅(2005)は「これまでの人生で最も辛かった体験」として、人間関係を挙げた青年が 44.56%と過半数近くにのぼったことを報告し、大学生を対象とした小田部他(2009a)の調査では傷つくことを経験した時の相手として、友人・先輩が挙げられる割合が 63.20%と報告している。このように、少なくとも青年が対人関係、特に友人関係でネガティブな経験に直面した経験を有する。先の傷つくことを避けようとする青年が一定数いるにも関わらず、青年は友人関係の中で傷ついている可能性が十分にある。

それでは青年を傷つけてしまうような友人関係における出来事にはどのようなものがあるのか。Leary et al. (1998)は傷つき感情を生起させる経験の内容を明らかにするため、大学生を対象に傷ついた出来事に関する自由記述調査を行っている。その結果、傷つき経験の分類として、「積極的な分離」、「消極的な分離」、「避難」、「裏切り」、「か

¹ 本文の中では「傷つき」、「傷つくこと」、「傷つくということ」などの表現を用いているが、いずれも傷つき感情を生起させることを指す。

らかい」, 「大切にされない, 使われる, 軽視される」という類型を見出している。さらに小田部他 (2009a)では, 日本の大学生を対象に傷つき経験の内容に関する自由記述調査を行い, この Leary et al. (1998)の類型に「理不尽な扱い」を加えている。このように大学生の傷つき経験については, その類型が明らかにされており, そのいずれにおいても, 他者との関係性の中で, 自分は相手から低く評価されているという知覚が基底にあると見なすことができる(小田部他, 2009a)。

小田部他 (2009b) はこのような日常的な場面で生じる傷つき経験を「心の傷」という包括的な概念の中に位置づけている。「心の傷」は「自己が身体的あるいは心理的に傷つけられるようなストレスフルな体験が, 記憶に内在化されたものであり, その個人の後の認知や感情や行動をネガティブな方向に歪める機能を持つ一種のスキーマ」と定義されている(小田部他, 2009b)。小田部他 (2009b) は, この心の傷の中に下位概念としてトラウマと日常型心の傷の両者を並列して位置づけている。トラウマと心の傷の違いとして身体的・心理的ストレスの程度と症状の病理レベルに言及している。トラウマはより身体的・心理的ストレスが強く, 言語的にアクセスが可能な記憶(verbally accessible memories: 以下, VAMs)による症状と, 状況に依存した自動的にアクセスされる記憶(situationally accessible memories: 以下, SAMs)による症状 (Brewin, Dalgreish, & Joseph, 1996)のいずれも病理的なレベルにある。これに対して日常型心の傷は, 心理的なストレスと言語的にアクセスが可能な記憶(VAMs)による症状が優勢となるものとして区分されている(小田部他, 2009b)。この区分に基づいた時, 本研究で扱う友人関係における傷つき経験は, 日常型心の傷の中の一部であると言える。友人関係における傷つき経験を改めて定義すると「友人との関係の中で, 自分は相手から不当に低く評価されているという知覚による傷つき感情を生じさせる経験」となり, その経験による症状はトラウマと診断されるほど病理的ではないものを指す。

また, 「心の傷」や「傷ついた」という表現を使う場合に, それぞれが個人にとってどの程度重大な出来事であったのかは異なる。その出来事が本人にとって脅威であったと評価されるほど, その出来事から受けるストレスも高いと言われ (Davis & Macdonald, 2004), ストレスや脅威の強さは PTSD の発症とも関連する。友人関係で生じた傷つき経験も, その程度は傷ついた人ごとに, またその経験ごとに異なるものと予想されるが, 本研究ではいずれもその経験が本人にとって傷つき感情を生じさせるものであれば, 傷

つき経験として見なすこととする。本研究で扱う友人関係で生じる傷つき経験と関連概念の関係を Figure1-3-1 に示した。心の傷と言われる概念の中にはより病理的なトラウマや PTSD と、日常的な場面で生じる傷つき経験がある。これらはいずれもネガティブな経験であるが、その経験に対する脅威の主観的評価は出来事やその出来事を経験した本人によって異なる。トラウマや PTSD と診断される心の傷もあるが、本研究では Figure1-3-1 の下部に示した日常的な友人関係の中で生じた傷つき経験を主に扱う。

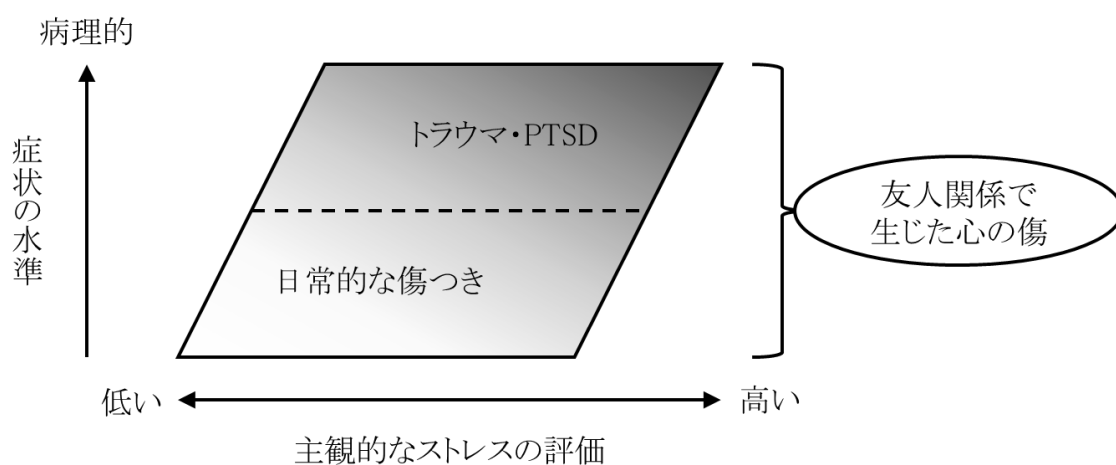


Figure 1-3-1 友人関係で生じる心の傷に関する概念の模式図

上記で示したように、傷つくという経験は傷つき感情を伴うものである。そのため、青年にとっては不快な出来事として経験されることが推測される。青年は傷つくことを避けるようないわゆる浅い、あるいは表面的と言われる友人関係や心理的距離を保つと言われる。小塩(1998)は大学生において、表面的な友人関係の特徴とされる「広く浅いつき合い方」のような友人関係を自己報告するものは、自己愛傾向のうち特に「注目・賞賛欲求」が高いことを示した。この「注目・賞賛欲求」は自分に対して自信を持っているが、その自信は他者からの評価によって容易に崩れてしまうような危うい自己愛のあり方を示していると言われる。この結果から小塩(1998)は深い対人関係を回避し、広く表面的につき合う傾向をとる理由を、深い対人関係をとると自分自身に対する肯定的評価が崩れてしまう可能性が高くなるためであると述べている。このように他者からの評価によって自己の価値を保っている青年は、そのような価値が脅かされる事態が生じると自己の価値が低減されたと感じ、傷ついてしまう可能性がある。

青年の中でも友人関係の問題に対して、友人関係から退却することで心理的な安定を得ようとする青年がいることが明らかにされており、この退却の理由には自分自身が傷つくことへの防衛が働いている可能性が指摘されている(岡田, 2002)。自分が傷つくことの予測を介して友人関係からの退却が生じるため、友人との関わりを避ける付き合い方は、他者との間に壁を作り、自分を守ろうとする自己優先的な関係の在り方であると指摘されている(福森・小川, 2006)。特に親密な友人のように心理的に近い他者との関係では、個人の自己評価に及ぼす影響が重大となるため、自己評価に脅威を及ぼしうる状況で、自己評価の維持を志向した反応が見られる(下田, 2009)。友人関係が親密であるがゆえに、その友人からの低い評価を受けることは青年にとって大きな意味を持ちうると言えよう。

しかし、自分が傷つくことを恐れた付き合い方は、当面の葛藤を回避することはできるものの、相手が自分を傷つける存在であるという脅威そのものは低減せず、その結果友人に拒絶されている感覚は高いままとなってしまう(岡田, 2011)。友人との関係を維持することに気を遣い、他者のまなざしを強く意識することが青年期の特徴(柴橋, 2001)と言われる。友人に気を遣うことは友人関係の中で傷つかないようにする青年の対人関係方略であると言える。

傷つくことの影響

本来友人にとって気の置けない、心地よいものである友人関係であるが、前述のように青年はその関係の中で傷つくことがある。日常的で安定的な関係であっても、継続されていく過程において、関係のあり方は常に過去に影響され、未来に影響する(中村・浦, 2000)。青年にとっても、傷ついたという経験は、その後の彼ら自身にとって何らかの影響や変化をもたらすものとなる。

傷つき経験の影響としては、まずそのような傷つきを生じさせる対人関係上の問題として顕在化することが考えられる。自分を傷つけた相手との関係が崩壊したり、後の対人関係へのネガティブな影響があったりすることが報告されている(Leary et al., 1998)。中園・野島(2003)は青年が友人関係から退却し、関心を持とうとしない理由として、これまでの友人関係での疲弊をあげている。傷つくことや、それを避けるために日々気を

遣うことは、友人関係から消極的、退却的に振る舞わせる要因となっていることが推察される。特に相手との関係性の質によらず、傷つくような言葉を意図的に受けたと感じる場合、意図的ではなかったと感じるよりも、その後の関係を心理的な距離のあるものとして知覚することも指摘されている(Vangelisti & Young, 2000)。このように傷つき経験が生じたことにより、青年はそれ以後の友人関係に慎重になったり、関係を築くのをためらったりすることが示唆されている。

対人関係上の問題だけではなく、長期的な影響として、「性格がゆがんだ」などの自己の変化があることも報告されている(小田部他, 2009a)。対人関係はソーシャル・サポートのように精神的健康を維持する働きを持ちながら、同時に強力なストレスナーにもなることが指摘されている (Last, Barlow, & O'Brien, 1984)ように、青年にとって友人関係で生じる対人ストレスは大きな問題となる。傷つき経験を思い出す頻度の高い青年は低い青年よりも自尊感情が低く、想起の仕方が無意図的であると自尊感情が低くなりやすい可能性も示唆されている(小田部他, 2009a)。このように一度経験した傷つきはその後の精神的健康にも影響を及ぼす。また、友人関係は多くの場合、継続的な関係であることから傷つくという経験も一度ではないかもしれない。それが比較的軽度の心の傷であっても、それが反復性のある出来事によって生じた場合には、それが人格形成や感情制御、行動制御などに関わる様々な問題に影響している可能性が指摘されている(小田部・加藤, 2007)。

一方で、その数は必ずしも多くないものの、傷つき経験を乗り越えて自信が持てたなどのポジティブな影響も示されている(小田部他, 2009a)。つまり、友人関係などの日常的に接する中で生じる傷つき経験は、本人にとって不快だけで終わる経験というわけではない。Park(2010)の意味づけの統合モデルによれば、ストレスフルな体験が生じると、人はまずその出来事を評価する。その評価がその人が元々持っていた価値観などによる「世界観的な意味」と一致しなければ、出来事を意味づける過程に動機づけられることになる。そしてその出来事の価値や重要性を見出そうと積極的に繰り返し思い出すことが適応的なコーピングや成長に繋がる (Cann, et al., 2011)。出来事への意味づけがうまくいくと、生成された意味が得られ、出来事を肯定的に捉えることが可能になっていく (Park & Folkman, 1997)。友人関係における傷つき経験についてもまず傷つくような出来事が生じ、それは青年にとってストレスフルな出来事であるが、その後、経験に

何らかの意味づけが行われることによって傷ついた出来事自体を肯定的に受け止めることができるようになっていく。この過程では、ストレスフルな体験を繰り返し思い出す反芻が重要であり、反芻によってその出来事の理解や意味づけが促されることが示唆されている (Joseph & Linley, 2005)。このような過程はストレスフルな出来事をより脅威と評価するほど生じやすくなることが示唆されている (上條・湯川, 2016; Joseph & Williams, 2005; Park, 2008, 2010)。そのため、友人関係における傷つき経験であっても、病的な水準ではないとは言え本人にとって重大な経験であれば、小田部他 (2009a) の報告するポジティブな影響が見出されるようになると考えられる。

そのためにはネガティブな経験に対する肯定的な意味づけが必要であるが、過去の出来事の意味づけの在り方には個人差があることが指摘されている。尾崎・上野(2001)では過去の挫折経験は、それを振り返った時に自分にとって価値のある経験だったとポジティブに評価する人も、肯定的な意味づけはされずにその経験をネガティブに評価する人もいることが示された。石川(2014)によれば、過去のとらえ方タイプには「過去軽視群」, 「葛藤群」, 「統合群」, 「とらわれ群」の4タイプに分かれることが示されている。過去を受け入れ、現在や未来につながるものとする統合群の青年や、自身の過去を否定的に捉えてしまっているとらわれ群など、過去をどのようにとらえるのかという態度に違いがあることが示されている。ストレスフルな体験はあくまで意味づけを生起させる原因となるだけで、それ自体が自動的に意味づけを導くとは限らない (上條・湯川, 2014)。また、意味づけの結果は常に肯定的なものとは限らず (Joseph & Linley, 2005; Park, 2008, 2010)、すべての人が意味を見出すことができるわけではないことも指摘されている (Davis & Morgan, 2008)。たとえば、精神的に不安定な大学生は過去のネガティブな出来事を、現在や未来に対してもネガティブな意味をもつものとして認識しやすくなる (松下, 2007)。傷つき経験は元々、傷つき感情を伴うネガティブな経験であるから、その傷つき経験との付き合い方に対して、青年がネガティブな経験として引きずるのは自然なことと言える。

このようにネガティブな経験への意味づけやその結果は一様ではない。これらを検討するために堀田・杉江(2013)は意味づけの過程を明らかにすることを意味づけ研究の課題としている。過去をどのように捉えようとするのか、その態度が異なれば、ネガティブな経験への意味づけの過程も異なってくるということが考えられる。過去を自分の成長や現

在、未来につながるものとして捉える傾向を持つ青年であれば、過去のネガティブな出来事を積極的に意味づけて友人関係における傷つきの経験に対しても肯定的な評価を与えることができるだろう。一方で、「とらわれ群（石川，2014）」や、「苦悩継続型（松下，2005）」のように過去をネガティブなものとして捉えていたり、「過去軽視群」や、「忘却楽観型（松下，2005）」のように過去と現在を切り離して捉えていたりしている場合には意味づけが行われず、傷つき経験は不快な経験として残り、青年の現在や未来に影を落とすことになることが予想される。

友人関係の傷つきを検討する意義

友人関係における不適応は、場合によって抑うつリスクとなり得る(Cambron, Acitelli, & Steinberg, 2010)。特に傷つき経験が青年にとって脅威として体験されれば、それは繰り返し思い出され、ストレスを高めることになる (Joseph & Williams, 2005)。友人関係が青年期で重要であるからこそ、友人関係の中で生じる問題を取り上げることは青年の精神的健康にとって重要な課題と言える。青年期にはアイデンティティの形成が重要な課題の1つであるが、傷つき経験の記憶が重要な準拠点となり得ることと、想起の在り方がアイデンティティ形成にも重要な意味を持つ可能性があることが指摘されている(小田部他，2009a)。上記のように、傷つき経験をいかにとらえるか、あるいは意味づけるかということは、青年の適応だけではなく発達面においても重要である。

前述のように友人関係で生じる傷つき経験が現在や未来に及ぼす影響は一様ではない。青年は自身の過去に対して、自分の成長や現在・未来に繋がるものとしてとらえていると言われるが(石川，2013)、日常的な友人関係の中で生じた傷つき経験が青年にどのような意味を持つのかはまだ十分に明らかにされていない。この点を明らかにすることで、青年が日常的に関わる友人との関係の中で、傷つくこととどのように向き合っていくのかの資料が得られるであろう。

これまでの友人関係研究では、様々な方法で青年の友人関係に迫ってきた。しかし、友人関係の中で、青年がどのように傷つくのかという過程については明らかにされていない。また、友人関係で傷つくという経験が、あるいはそれを避けようとするのが、青年個人の発達や適応にとってどのような意味を持っているのか十分に検討されて

いない。青年期における傷つきがその後の対人関係などに影響する可能性が指摘されている（小田部他，2009b）以上，青年の主観的な傷つき経験そのものと，その意味を取り上げて検討する必要がある。小田部他(2009a)の自由記述による傷つき体験についての研究は，ほとんど検討されてこなかった青年の日常的な傷つきに焦点を当てた点で意義の深い研究であったが，その経験が青年自身の主観的体験の中でどのように意味づけられているものか，またどのようにして傷ついたのでかの検討を行っていない点に課題が残る。心の傷がその後の心理的適応に影響をどのように与えるのかを理解するための一つの方略として，特定の経験に対する解釈や意味づけ，その体験によって生じた認知の歪みを測定する必要性があげられている(小田部他，2009a)ことから，青年が友人関係で何に傷つき，その傷つき経験を捉えているのかを検討していくことは，大きな意義があると言える。

第4節 友人関係研究の課題と本研究の目的

友人関係研究の成果と課題

友人関係研究の成果

これまで様々な観点から大学生の友人関係が研究されてきた。以下にこれまでの友人関係研究の成果を整理する。

まず、大学生にとって友人関係は発達や適応を促すものであることが、多くの研究から明らかにされてきた (e.g. Bagwell et al., 2005; 山田・岡本, 2008)。友人関係を通して自己の発達(岡田, 1987)が生じ、友人関係自体も発達に従って変化していく(落合・佐藤, 1996)。また、友人関係はその関係がうまく形成、維持されれば、重要なサポート源となる(牧野, 2012)。このような研究によって、友人関係は大学生にとって重要な対人関係の一つとして位置づけられている。

一方で、友人関係は大学生にとって対人ストレスの源にもなる。親しい間柄だからこそ、心理的な距離の模索が生じたり(藤井, 2001)、劣等感を抱いたりする要因ともなる(橋本, 2000)ことが明らかにされてきた。友人関係が大学生にとって重要な対人関係であるからこそ、その関係の中では様々な問題が生じ得ることが示唆されている。

このような友人関係における問題を避けようとする付き合い方についても研究されている。大学生の友人との付き合い方は、従来考えられていたように葛藤や衝突する可能性を内包したものに限定されず、互いが傷つかないように配慮する関係を築こうとする青年の姿が近年研究されるようになってきた(e.g. 橋本, 1997; 岡田, 1999)。傷つくことを回避し、相手の内面には踏み込まない関係を保つ大学生の不適應的な側面が指摘されている(e.g. 岡田, 2007; 小塩, 1998)。

友人関係研究の課題

これまでの友人関係研究では、主に友人とどのように付き合うかという意識から青年の発達や適応について議論してきた。その中では調査に参加した青年が、友人関係について抱いている意識のみを切り取って、友人関係と見なしてきた。しかし、友人関係は青年と友人の少なくとも二者関係によって成り立つものである。二者関係の中で生じている相互作用が友人関係の本質であるが、従来の研究では青年の一方的な関係への意識

を扱うことが多かった。友人との付き合い方に対する意識は青年個人の中で完結しているものであり、友人関係の一部分を表したものである。現実の関係はそれぞれの青年の友人関係の意識があり、現実でのやり取りがあるため、意識による友人関係の検討は実際の友人関係をとらえる枠組みとしては友人間のやり取りという点が不足している。

一方で、具体的な行動を扱った研究では、たとえばソーシャル・サポートが実行されることにより青年の適応が促されることや(福岡, 2010), ソーシャルスキルが高いことによって他者との関わりが円滑になること(谷村・渡辺, 2008)などが示されている。しかし、これらの対人場面での行動を扱った研究では、そのような行動が生じる前提となる対人関係ごとの違いがほとんど考慮されていない。たとえば、表面的な友人関係の特徴として、友人に嫌われないようにする、友人に気を遣うという特徴(岡田, 1995)が見られたが、このような友人関係の関わり方が重視されるのであれば、自分自身の対処能力の低さを他者に伝える側面を持つ援助要請に対しては消極的になることも考えられる。友人関係の中で生じる出来事であれば、友人との関わりを踏まえた検討が必要であろう。

また、友人との付き合い方の研究では傷つくことを避ける青年の存在が指摘されており、その特徴について議論されてきた(e.g. 橋本, 2000; 岡田, 1999, 2007)。しかし、青年が避けようとしている、友人関係場面における傷つくことそのものについての検討は不足している。友人関係は前述のように青年と友人の少なくとも二者関係のやり取りによるものであるため、片方の青年が傷つくことを避けようとしたとしても、必ず傷つくことを避けられるとは限らない。傷ついたという経験はその後の対人関係にも影響することが示唆されている(小田部他, 2009)が、傷つきを経験することによる友人関係の変化については十分に議論されていない。友人関係で気を遣うことに疲れてしまい、友人に対して無関心になる(中園・野島, 2003)ことが示唆されているように、これまでの友人関係におけるやり取りや出来事はその後の友人関係にも影響すると考えられる。友人関係で生じる出来事として、青年が傷つくことを検討することは、青年が避けようとする傷つきそのものについての知見を蓄積し、またその影響を考える上で重要な課題であると言える。

本研究の目的と検討課題

本研究の目的

以上のように、友人関係研究で扱われてきた友人との関係に対する意識と、サポートの研究などで扱われてきた具体的なやり取りは、それぞれ独立して研究が発展してきた。本研究では青年の友人関係への意識と具体的な出来事や行動の両者を同時に扱って検討する。本研究において友人関係への意識と具体的な出来事の両方に注目する意義として、これまで友人との付き合い方という意識でとらえられてきた友人関係について、その関係の中で具体的な行動や出来事が生じることの意味についての検討ができる。これを検討することで青年の友人関係の実態が明らかになり、傷つくことを避けようとする青年や内面的な関わりを求めようとする青年が友人関係を通して適応していく中で実際の関わりが持つ機能が明確になる。

そのため、本研究では青年の友人との付き合い方を踏まえた上で、具体的なやり取りや出来事の影響を検討していく必要がある。ところが、友人との付き合い方を検討する上で、なぜそれぞれの青年が傷つくことを避けるようになったのか、あるいは傷つくことを避けないようになったのか明らかになっていない。以上の課題を明らかにするためには、第1に傷つくことを避けるような関係を求めるに至った背景に、どのような出来事があったのかを現象的にとらえていく必要がある。傷つくことを避ける関係や、傷つくことを避けようとはしない関係を青年が志向するようになったきっかけはこれまで検討されていないが、傷つくことを避けることが青年にとってどのような意味を持つかを明らかにするためには、そのような友人関係の背景を知ることは重要であろう。第2に、この背景を踏まえた上で、傷つくことを避ける関係の中でどのようなやり取りが適応に関連しているのかを検討していく必要がある。サポートの授受は青年の適応を促すが、そのようなサポートの効果はいずれの友人関係でも同様に見られるのかは明らかではない。それぞれの友人関係の中で生じるやり取りが、大学生の適応にとって持つ機能について明らかにすべきであろう。これを明らかにすることによって、実際に基づいた友人関係の機能の研究となる。

また、傷つくことを回避する傾向は従来から注目されてきたが、青年が避けようとしている友人関係で傷つくことそのものについての知見も不足している。日常的な対人関係で傷つくことは Leary et al. (1998)や小田部他 (2009a) にて類型化されているが、青年

が避けようとする友人関係で生じる傷つきについては十分に知見が蓄積されていない。そのため、友人関係の中で青年が何に傷ついているのか、またその傷つき経験によってどのような影響があるのかは不明瞭である。これを明らかにするためには、第1に青年が何に傷ついているのか、またその傷つき経験から受けている影響を具体的に調べる必要がある。友人関係の実際に即した研究をしていく上では、その関係の中で生じる出来事について理解を深めることは重要であり、特にこれまで明らかにされてこなかった友人関係で傷つくということが、青年にとってどのような出来事であるのかについての知見を蓄積しなければならない。第2に、友人関係で傷ついたことによる影響を明らかにするためには、定量的な研究も必要である。傷つき経験が青年の発達に及ぼす影響について検討するためには、条件や要因によって傷つき経験の影響が異なるのかを明らかにしなければならない。これを明らかにすることで、友人関係の中で生じる出来事と青年の発達との関連についての議論が進展すると考えられる。

以上をまとめると、本研究の目的は本研究では大学生の友人関係の中で生じている具体的な行動や心理状態に注目して、友人関係と大学生の適応や発達との関係を明らかにすることと言える。第1の視点として、傷つくことを避けるような付き合い方を志向する青年について、実際の友人関係から適応との関連を明らかにする。第2の視点として、友人関係で生じる傷ついたという出来事による影響について、その経験の影響を明らかにする。

本研究における検討課題

第1の視点について、まず傷つくことを避けるような友人関係を志向するに至る背景を個別的な事例から検証する。これまでの友人関係の発達的变化に言及した研究からでは、傷つくことを避ける付き合い方の背景は十分に理解できない。本研究では友人関係の変化に至る要因について、大学生の語りから分析する（第2章第2節）。この結果を踏まえて、友人関係とその関係の中で生じる行動が、大学生の適応を保つことに寄与するかを質問紙調査によって明らかにする（第3章）。これまで適応に影響があると考えられてきたサポートの授受と、実際の対人場面で用いられるスキルであるソーシャルスキルを具体的な行動の指標として、友人関係への意識と同時に取り上げる。以上の流れによって、これまでの「傷つきを避ける関係を志向する青年が不適応的である」という

論調に対して、友人関係の実際から得られた知見によって改めて青年の友人との付き合い方について議論する。

第2の視点について、まず大学生がこれまでの友人関係で傷ついたと感じる出来事について、個別的な事例から検証する。友人関係という関係の中で生じた日常的な傷つきについては知見が不足している。そのため、まずは友人関係で生じる傷つき経験と、その傷つき経験による影響を大学生がどのようにとらえているかに焦点を当てて分析する(第2章第3節)。この結果を踏まえて、友人関係で生じた傷つき経験の影響について、質問紙調査によって明らかにする(第4章)。意味づけに関する知見を援用し、傷つき経験の影響を青年自身がどのようにとらえているのかを検討する。その際に個人的な要因として過去のとらえ方、社会的な要因として他者への相談の有無を取り上げる。以上の流れによって、青年が避けようとしている傷つくということの実際的な意味について議論する。

本研究の構成

本研究では友人関係の中で生じる実際的なやり取りに焦点を当てて検討する。博士論文では以下の章および節によって研究を進める。全体は5章から構成され、第1章が文献研究、第2章から第4章が実証研究、第5章が総合的討論である(Figure1-4-1)。

まず第1章の文献研究では、青年期の友人関係について、先行研究を整理してきた。友人関係は従来の研究においても様々な視点から検討されてきている。大学生にとって友人関係はそれだけ身近で、かつ重要な関係である。そのような友人関係について、未だ研究が不十分な課題として、友人関係の実際に踏み込んだ研究の不足があげられる。従来では傷つくことを避ける付き合い方は不適応的であると言われていたが、本来ネガティブな出来事である傷つき経験を避けることは必ずしも不適切とは言えない。傷つきを避ける大学生の友人関係の中で、何が生じているのか、あるいは生じていないのか十分に検討されていない。また、そのような大学生が避けようとしている傷つきについての知見が不足している。友人関係でどのような傷つきを経験しているのか、傷つき経験は大学生の発達にとってどのような影響をもたらすのかを検討していく必要がある。

次の第2章からは実証研究によって大学生の友人関係を検討していく。まず第2章で

は大学生の友人関係を半構造化面接調査によって探索的に検討する。第2章の第1節では本研究の面接調査の方法についてまとめる。第1節の内容を踏まえて第2節では友人関係の発達について、多様な発達的变化やその変化のきっかけについて検討する。第3節では友人関係で生じる傷つき経験と、その傷つき経験の影響を青年自身がどのように捉えているかを検討する。第4節では第2章の知見をまとめ、特に青年の友人関係の変化と傷つき経験の関連について議論する。

第3章では大学生の友人関係において、その友人関係の中で生じているやり取りによって、大学生の適応がどのように異なるかを質問紙調査から検討する。第1節では友人との付き合い方の中で、ソーシャル・サポートを得られるかどうかによって、大学生活への適応感の違いについて検討する。第2節では同じく適応的な友人関係の要素となるサポートの提供について、友人との付き合い方がどのように関連しているかを検討する。第3節では友人との付き合い方に加えて、友人関係の中で相手に配慮できるソーシャルスキルによって、居場所を実感できるかどうか異なることについて検討する。第4節では第3章で得られた知見を整理し、友人との付き合い方と大学生の適応について、実際の友人関係の中で生じるやり取りが大学生にとってどのような意味を持つのかを議論する。

第4章では友人関係における傷つき経験が、大学生の発達にどのように影響しているのかを検討する。第1節では、傷つき経験の影響が大学生自身にどのように捉えられているのかを測定する尺度を自由記述調査を元に構成する。第2節では第1節で作られた尺度を元に、過去のとらえ方や意味づけによって、傷つき経験の影響がどのように異なるかを検討する。第3節では同じく第1節で作られた尺度を元に、友人への傷つき経験の相談によって傷つき経験の影響がどのように異なるかを検討する。第4節では第4章で得られた知見をまとめ、大学生の友人関係の中で生じた傷つき経験が、大学生の発達においてどのような影響があると認識されているのかを議論する。

第5章では実証研究および文献研究の知見をまとめ、大学生の友人関係と傷つきについて総合的に議論する。第1節では本研究で得られた知見を概観する。第2節では本研究全体を通して、友人関係について総合的に議論する。第3節では本研究の結論を述べる。

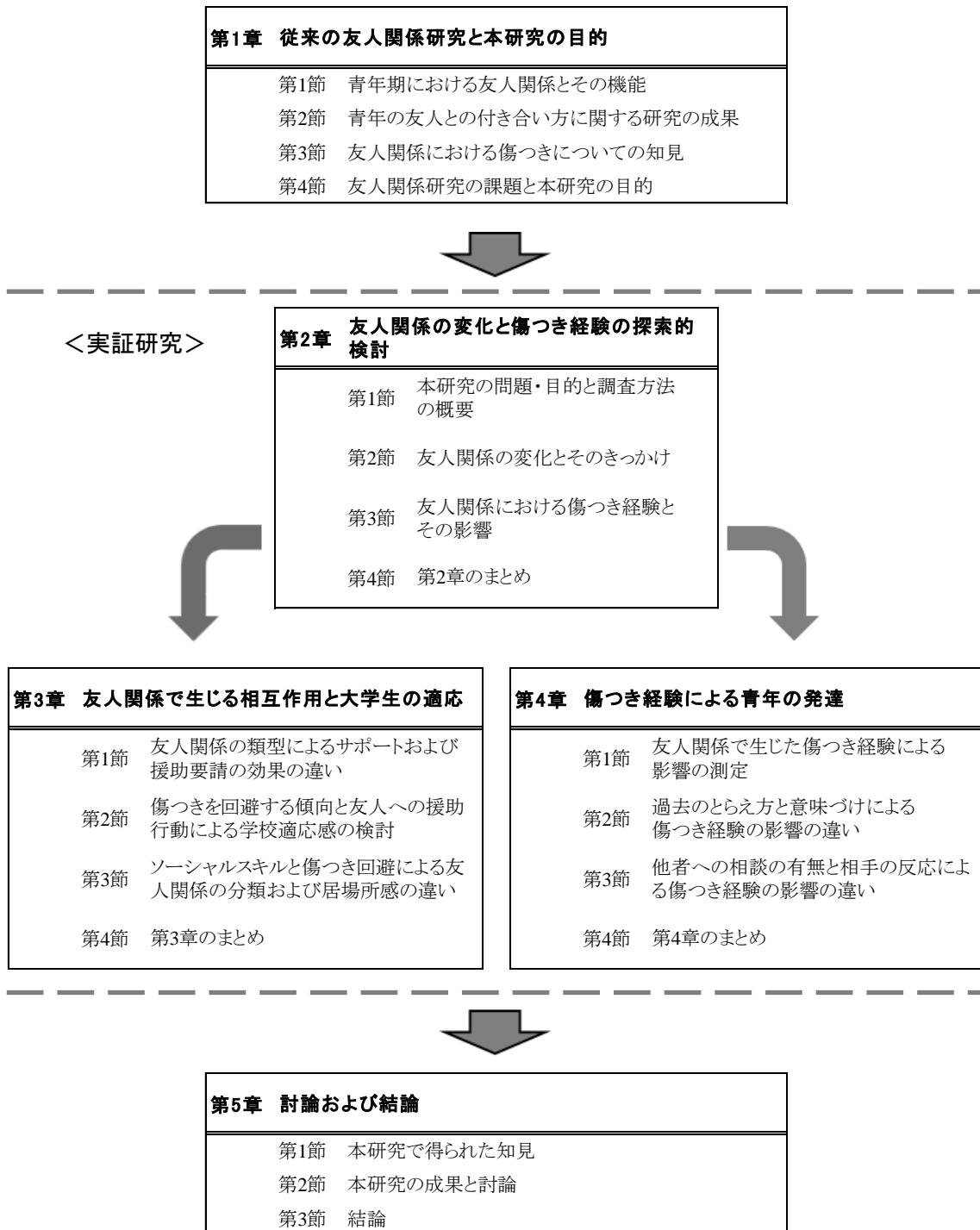


Figure 1-4-1 本研究の構成図

第2章 友人関係の変化と傷つき経験の探索的検討

第2章では第3章・第4章で行う質問紙調査に先駆けて、面接調査を元に大学生の友人関係や友人関係の中で生じた傷つき経験について検討する。

これまでの友人関係に関する研究では青年の友人関係の付き合い方や満足感など、その青年の状態を測定し、友人関係とその他の変数との関連を検討することが多かった。それらの研究により友人関係について様々な知見が明らかになってきたが、一方で青年同士が相互にやり取りをする友人関係の実態については軽視されがちである。そこで本研究では大学生に面接調査を行い、友人関係の中で生じるやり取りや、友人関係の変化について具体的な知見を得ることを目指す。

第1節では、本節の問題と目的を整理し、調査の方法と調査協力者の情報をまとめた。

第2節では、友人関係の変化に焦点を当てて分析を行った。先行研究においても友人関係の発達的な変化については言及されてきたが、その多くは横断研究に頼っており、個人内での変化の過程についてはほとんど検討されていない。そのため、傷つくことを避けたり、あるいは傷つくことを避けない付き合い方が何をきっかけに求められるようになるのかは明らかになっていない。本研究では個人内での友人関係の変化について大学生自身の回想から検討する。

第3節では、友人関係の中で生じる傷つき経験に焦点を当てて分析を行った。これまでの先行研究では友人関係で生じる傷つき経験についてはあまり検討されてきておらず、その知見も十分に蓄積されていない。日常的な傷つき経験のタイプやその影響については Leary et al. (1998) や小田部他(2009a)によって示されているが、その影響が生じる過程については十分に検討されていない。本研究では傷つき経験が大学生にとって何らかの意味を持つ時、その影響や変化の過程について検討する。

第4節では、本節で得られた知見をまとめ、第3章と第4章において検討すべき課題を改めて提示する。

第1節 本研究の問題・目的と調査方法の概要

問題・目的

本章では青年の友人関係の変化と、傷つき経験が友人関係の影響を探索的に検討していく。そのために、本研究では大学生 16 名に半構造化面接による調査を行い、青年自身の友人関係や、友人との間で生じた出来事について探る。

これまでの研究で友人関係は様々研究によって、発達的な変化を遂げることが示されてきた(Bigelow, 1977; 榎本, 1999; Furman & Bierman, 1984; 長沼・落合, 1998; 落合・佐藤, 1996; 和田, 1993)。しかし、これらの研究は各年代に対する横断調査の結果を比較し、その結果として発達的な変化を推察したものであった。これらの研究は個人の発達に沿って友人関係の変遷を取り上げたものではない。そのため、個人内で生じる友人関係の変化の過程や、何をきっかけに変化するのかは明らかにされていない。青年期の後期では、友人関係が深く狭い関係や(落合・佐藤, 1996)、自他を尊重する親密な付き合い(和田, 1993)へと発達していくことは指摘されているものの、そのような友人との付き合い方に至る背景は考慮されていない。質問紙調査による友人との付き合い方の類型と、自由記述調査によるその付き合い方をする理由を同時に取り上げた中園・野島(2003)では、友人関係に無関心な態度をとる理由として、友人関係で気を遣うのに疲れたからというものがあつたことを報告している。このように、過去の友人関係のやり取りは現在の友人との付き合い方に影響を与えている可能性は十分にある。しかし、これまでの友人との付き合い方の研究では現在の付き合い方のみに注目して検討されており、その付き合い方をする理由や、その付き合い方に至る過程についての知見が不足している。そこで第2章の第1の目的として、友人関係の変化とそのきっかけについて調査協力者の回想を元に検討し、友人のとの付き合い方が変化してきた契機を明らかにする。この点については、第2章第2節で主に取り上げる。

また、第2章第3節では友人関係で生じた傷つき経験に焦点を当てて検討する。第1章第4節にあげたように、これまでの友人関係研究では友人との付き合い方に主眼が置かれて検討されてきた。現状の友人関係研究では、友人関係の中で生じる傷つき経験と、その影響についての知見が不足している。そのため、従来の研究では青年の友人との関係において、傷つくことを避けるという意識についての検討に留まり、青年の友人関係

で実際に生じている傷つきに対して、避けることができず、傷ついた後に生じる影響や変化については議論してこなかった。そこで第2章の第2の目的として、友人関係における傷つき経験について、また、その経験による影響や変化について検討する。この点については第2章第3節で取り上げる。

方法

調査対象

4年制大学に通う大学生16名の協力を得た。本研究は友人関係という青年にとって身近なテーマであったため、調査協力者の選定にあたって、特に条件は設けなかった。調査協力者の特徴は後述した。

調査方法

調査は2015年の4月から7月および、2016年3月に行われた。面接者と調査協力者による一対一の半構造化面接調査を行った。調査協力者には事前に友人関係に関するインタビュー調査である旨を伝えて募集し、調査の協力を承諾した学生を対象とした。調査の実施にあたっては、倫理的な配慮として本研究が青年の友人関係の変化や友人関係で生じる傷つき体験を主に検討する目的であること、そのため、不快な体験について聞くことがあることを伝えた。不快な体験については、語りたくない内容については拒否することができること、またそれによる不利益が生じない事を伝えた。万が一、この調査に協力したことで心理的な問題が生じた際には臨床心理学の専門家に紹介する旨を伝えた。以上の注意事項に対して同意できた場合にインタビューを開始した。調査への同意は16名の参加者の内、16名が同意した。

得られた調査協力者の発言は調査協力者の同意を得た上でICレコーダーを用いて録音し、その後全て逐語記録として文章化した。得られた逐語記録を分析する上でのデータとした。面接者と分析者は同一人物であった。

調査内容

半構造化面接調査では主に以下の質問を協力者全員に行い、協力者の発言に従いその

発言に関する質問を適宜行い、面接を続けた。

第1の質問として、「これまでの友人関係で変化したことが何かあるか？」を質問した。これまでの経験から、友人関係の変化に思い当たることがある場合には、どのような事柄が変化したと感じるかを質問した。また、いつから変化したか、なぜ変化したのかを質問した。これまでに友人関係の変化に心当たりがない場合には、今と昔の友人関係のどのような点が変わっていないと感じているのかを質問した。

第2の質問として、「これまでの友人関係で傷ついた経験は何かあるか？」を質問した。傷ついた経験がある場合には、その経験がいつ、どのような状況で生じたのか、なぜ傷ついたのか、その経験によって何か変わったことがあったかを質問した。

その他、友人関係の変化や傷つくことに関する出来事をインタビューするために、友人関係の構成や友人とのエピソード、友人関係に対する価値観などを必要に応じて質問した。

分析方法

第2章では分析方法として主にグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、GTA)を用いた。GTAによる分析には複数の方法が提案されているが、本研究では戈木(2006)を主に参考にした。具体的には以下の手順で分析を進め、必要に応じて前段階の手順に戻りながら行った。

- (1)切片化：第2節、第3節のそれぞれ目的となる友人関係に関する語りについて、逐語記録の中からデータを抜き出した。
- (2)コーディング：切片化されたデータ1つ1つに対して、その意味内容を的確に表すような概念名を付けた。
- (3)カテゴリーの生成：コード化されたデータを比較し、類似したデータをまとめ、より抽象度の高いカテゴリーを生成した。また、カテゴリー同士の類似性によって上位概念を設定できた場合には、それをカテゴリーグループとした。
- (4)カテゴリーの精緻化：データから抽出された概念名、カテゴリー、カテゴリーグループの統合を行った。
- (5)仮説モデルの生成：友人関係の変化と、そのきっかけの両者で得られた概念間の関係を明確にし、仮説モデルの生成を行った。

第2章ではカテゴリーグループの名前は [], カテゴリーの名前は {} 概念の名前は <> で表記した。個別の語りを引用する際には斜体で示し、そのエピソードを語った調査協力者の ID を 【】 内に示した。() 内は分析時に分析者によって加えた補足であり、面接者（分析者）の発言は《》内に示した。ただし、相槌などの調査協力者の発言を促す反応は省略した。

調査協力者の概要

本研究では大学生 16 名の調査協力を得られた。調査協力者の年齢、性別および友人関係に関連する青年の属性を Table2-1-1 にまとめた。本研究では青年期までの友人関係の変化を調査するため、既に大学生活を経験して時間が経過している大学3年生と4年生に依頼した。

Table 2-1-1 調査協力者の属性

ID	性別	学年	年齢	主な特徴
1	女性	4	22	大学受験の際に上京
2	男性	4	21	特になし
3	女性	4	21	学校移行に伴い仲の良かった子ども疎遠になる
4	女性	4	21	大学への進学は付属高校から
5	女性	4	21	高校は女子高
6	男性	4	24	大学への進学は付属高校から/大学で留年を経験
7	女性	3	21	学校移行に伴い仲の良かった子ども疎遠になる
8	女性	3	21	特になし
9	女性	3	21	特になし
10	男性	4	21	高校は男子校
11	女性	3	20	インターネットを利用した友人関係や恋人関係を持っている
12	男性	3	21	帰国子女(大学から帰国)
13	女性	3	21	学校移行に関わらず仲の良かった子と継続している
14	男性	4	23	中学から遠方に通学
15	男性	4	21	小学校は少人数の学校/大学受験の際に上京
16	男性	3	22	大学受験の際に上京

第2節 友人関係の変化とそのきっかけ

目的

第2節の目的は、大学生の友人関係について、その中で生じているやりとりや関係の変化について、大学生の実際に即した知見を得ることであった。そのため、第2節では大学生の友人関係に関する回想の内、自身の友人関係の変化をどのように感じているか、また、友人関係の変化がどのように生じてきたのかに焦点を当てて分析した。

方法

第2節では友人関係の変化を中心に、以下の手順によって逐語記録を分析した。まず、友人関係の変化として、どのような変化があったと認識しているかを概念およびカテゴリーに分類した。次に、友人関係の変化がどのような出来事や変化をきっかけとして生じたと感じているかを概念およびカテゴリーに分類した。最後に、きっかけと変化の内容がどのように生じていくのか、概念間の関連を検討した。

結果と考察

友人関係の変化の内容

青年がこれまでの友人関係の中で、何がどのように変化したと感じられているのかを分析した。その結果、3つのカテゴリーグループ([] で表記)、11のカテゴリー({} で表記)、20の概念(<>で表記)が得られた。各概念およびカテゴリーとの関係を Table2-2-1 にまとめた。

まず、これまでの友人関係の変化に関する研究(落合・佐藤, 1996 など)では、変化は友人との接し方に対して言及することが多かった。しかし、本研究では[接し方の変化]の他に、[感情の変化]と[付き合う対象への変化]がカテゴリーとして見られた。友人関係の発達的な変化は複数の側面において生じていると言える。

[感情の変化]について [感情の変化]では、{友人関係への不快感情の増加}と{友人関係の快感情の増加}の2つのカテゴリーが得られた。友人関係を通して<友人

関係への不安や迷いの発生および増加>や<友人関係への不満や退屈さの発生および増加>が生じる。友人関係はこれまで、青年にとって支えとなる好ましい関係であることが前提として研究されてきた。しかし、これらの発言のように、親しい関係だからこそ不安や迷いを生じさせたり、また、不満を抱いたりする要因ともなる。一方、友人関係は先行研究の指摘するように、青年にとって精神的な安定をもたらすものであり、<友人との会話や過ごす時間の楽しさの実感>を感じられるようになるという発言も得られ、<友人関係への不安や迷いの解決>という変化も生じることが示された。

友人関係の変化は従来取り上げられてきたような付き合い方の変化だけではなく、友人関係に対する満足感や不満感、あるいは不安や悩みなどの感情の変化としても現れてくることが明らかになった。友人関係で不安や悩みが生じ、またその解決という形でそれぞれの青年の友人関係が変化していくことが示された。

【接し方の変化】について [接し方の変化] では {関係の親密化や深化}、{内面の開示を伴う関わり方の回避}、{関わること自体の回避や拒否}、{関係の形成や維持に対する積極性の変化}、{連絡頻度や関わる時間の変化}、{円滑な関係維持を目的とした態度の変化} の6カテゴリーが得られた。本研究でも先行研究と同様に接し方の変化についての言及が得られた。特に、{関係の親密化や深化} や、{関係の形成や維持に対する積極性の変化} に含まれる<積極的な交流への挑戦>という友人付き合いが親密になっていく過程が実感されていった結果は先行研究に従うものであった。先行研究では青年の友人関係が深く親密な付き合いへと発達していくとされる点が本研究の語りからも確かめられた。一方、様々な要因により、{内面の開示を伴う関わり方の回避} という友人関係に深く踏み込めなくなるという変化や、{関わること自体の回避や拒否} も生じることが示唆された。{内面の開示を伴う関わり方の回避} には<深い関わり方の回避やその場だけの関係への変化>、<相談やプライベートな自己開示の減少>といった概念が含まれ、友人関係から距離を置こうとする様子が語られた。また、{関係の形成や維持に対する積極性の変化} に含まれる<関わりに対する消極的な態度への変化>も見られた。また、友人関係の変化として、{円滑な関係維持を目的とした変化} というカテゴリーも得られた。このカテゴリーには<友人への気遣いや配慮の増加>や、<自分のキャラや理想像への適応>といった概念が含まれ、青年が友人との関わりの中で、お互いの関係を良好に保つために付き合い方を変化させていく過程が見られた。

以上の結果から、大学生自身が認識するこれまでの友人関係の変化には、落合・佐藤(1996)などによって指摘されてきたような付き合い方の変化の過程が確認された。ただし、この付き合い方の変化は浅い—深い, 狭い—広いという2次元上のものとは限らず、友人関係に対する積極性—消極性や、連絡頻度の増減に関する変化も見られた。そして友人関係の変化は発達に従って親密になっていくという一方向的な変化ではなく、関係が深まったり浅くなったり、積極的になったり消極的になったりという双方向的な変化をとる可能性が示された。

【付き合い対象の変化】 について [付き合い対象の変化] では、{付き合い対象の性別の変化}, {付き合い対象の多様性の変化}, {友人の態度の変化}, {良好な関係の形成や出会い} の4カテゴリーが得られた。本研究からは友人として付き合い対象が変化していく過程も語られた。友人として付き合い相手は性別や自他の類似性の観点から多様化したり、画一化したりする。友人の選択や親密化の過程を検討する上で、付き合い友人がどのように変遷していくかということも今後詳しく検討していく必要がある。

Table 2-2-1 友人関係に対する変化の実感

カテゴリグループ	カテゴリ	概念	定義	発言例
感情の変化	変化の実感が ない	変わらない関係・付き合 い方	付き合い方や友人との関わりに 対する変化のなさ。	同性の友達がやっぱり中高通してものごとく、あ の一人にとって大切だった、っていうのもあって。そ こは今でもやっぱり変わらない...ですかね。【ID05】
		友人関係への不安や迷 いの発生および増加	友人との関わりに対する不 安、悩み、迷いなどの発 生・増加。	小学校の頃は普通に、あの、遊んでたんですけど、 中学校になってちよつと...、友達ってなんだろうとか を...、意味のわからないことを思い初めて。俺友達 いんのかなあとか、もう...訳がわからなくなって。 【ID02】
	友人関係へ の不快感情 の増加	友人関係への不満や退 屈さの発生および増加	友人との会話や過ごす時間へ の不満の増加や楽しさ・面白さ の欠如。	高校の時は、なんか、恋愛の話とかまったくせず、 女の子って感じじゃなくてなんか男女別学だったの もあるんですけどやっぱり女子校っぽい、なんかお笑 いみたいな。(中略)なんかその場で楽しめた感じ。 でもなんか大学入って、そういうタイプの子がいなく て。なんかみんな女の子の子みたい。なんか 「その服どこの〜?」とか、恋愛の話、とか。(中略)な んかそういう話ばっかで、実際つまんない、けど...。 でもま大学、そゆ人しかいないし。【ID11】
	友人関係へ の快感情の 増加	友人との会話や過ごす時 間の楽しさの実感	友人との会話や過ごす時間の 楽しさや満足感を実感できるよ うになった。	中学の時の部活がすごく楽しかったというのがあるん ですけど。まあ、やっぱりレギュラー争いとかあるの で。どうしても、部の中で、ちよつと、何ていうん ですか、ライバル意識的な。(中略)その、高校に入っ てから入った部活が、すごく緩くて。その、こんなにも 緩いんだっていう環境の中で、そこで初めて部の中 で友達とすごく楽しめる。楽しんで運動できる、一緒 にどっか行ったりするっていうのが、すごい、自分 の中で楽しかったなっていうイメージがあります。 【ID15】
接し方 の変化	関係の親密化や深化		特定の人や少人数の友人との 深い関わりを志向するよ うになった。	やっぱり、あの、小学生とかの時は、あの、何て言う んですかね、広く浅くっていう付き合いが多かった と思うんですけど。いつぐらいかな?あの、中学生か らですかね、は、やっぱり特定の人と深く付き合いよ うになったり、っていうので変化はあったと思います。 【ID01】
	内面の開示 を伴う関わり 方の回避	深い関わり方の回避や その場だけの関係への 変化	深く関わらず、相談事や深 刻な話などは避けるよ うな付き合い方への 変化。	ああ、それから、でも、だいふ、変わったのかもしれない です。あんまり、その時(仲間外れにされた)から、 結構、表面上の付き合いが多くなったのかな。表面 上っていうか、深く、関わらない方がいいなっていう 感じ、たぶん。【ID09】
	相談やプライベートな 自己開示の減少	友人への自己開示が浅くな り、プライベートな内容は 自分から話さなくなった。		まあ結構...それ(信頼していた友人の裏切り)によ って、もう周りの人がどんなもんかわからないから、と 思って、あんまりおおっ広げに言える事はなくなりました ね。【ID03】
関係の形成 や維持に対 する積極性 の変化	関わること自体の回避や拒否		友達と関わることの回避や、関 係を維持・形成することを拒否 するようになった。	(中学では)なんかクラス内の、自分も女だから言うの は変ですけど、女の子ってすごいめんどくさいじゃ ないですか。だからなんかそういうのに関わりたくな くて。【ID09】
	関わりに対する消極的 な態度への変化	友人との交流に消極的になり、 自分から働きかけなくなった。		すごく最初から、自分から話かけたり、するよ うになったりもしました。けど、それは本当に最初の方 だけで(笑)。ある程度仲良くなってきたらどんでん、自 分からはいかなくなりました。【ID16】
	積極的な交流への挑戦	友人との交流に対して積極的な 試みをするようになった。		今までは自分から声かけるのは、なんていうん ですかね、内気というか、苦手だったりしたんですけど。 大学に入ってから、自分からでも声をかけていか ないと、友だちができないんじゃないかって気にし て(笑)。なので、本当にサークルも長続きはしなかつ たんですけど、行った時には自分から話をするよ うにしました。【ID15】

次ページへ続く

前ページの続き

連絡頻度や 関わる時間 の変化	連絡頻度や関わる時間の増加	友達と関わる時間や連絡頻度などの増加。	結構遊ぶ頻度とか関わる回数っていうのは今のほうが多いかなっていう、感覚がありますね。結構中学の時とかって僕、あのスクールバスで通わなきゃいけないくらいの距離だったので、(中略)逆に今だと、結構自由な時間も多いですし...、学校終わりに遊んだりとかは、っていうのも増えてきているのかなあっていう感覚はありますね。【ID14】
	連絡頻度や関わる時間の減少	友達と関わる時間や連絡頻度などの減少。また、それによって関係が疎遠になった。	その中学の友達だったら高校になるとやっぱ薄れちゃってたし、あの高校の友達も大学になるとみんなバラバラになったりして、こう...、そういう友達でもやっぱ会えなくなったりとか連絡が取りづらくなることで、なんか減っちゃったなというかそういう風に思ってます。【ID07】
接し方の 変化	友人への気遣いや配慮の増加	友人への配慮や気遣いをするようになった。	高校に入ってから、本当に友人に恵まれたっていうか。良い人達ばかりで、だんだん人間関係に対する恐怖は全然なくなっていった。人の事を考えるようになって、それからは全然、上手に行くようになりました。【ID08】
	円滑な関係維持を目的とした変化	自分のキャラや理想像への適応	なんか中学校から高校にかけて場所がすごく変わった。今までは、中学校までは、小学校のときからいる友達が必ずクラスにいたけど、高校は誰も同じ中学の人がいなかった。変えたつもりはないんですけど、自分のキャラが変わったというか。なんかそれから、友達に対する接し方も、そういう周りが作ってくれたキャラにあわせてた気がします。【ID09】
付き合う対象の性別の変化	性別によらない関係から同性重視の関係への変化	性別に関係ない友人関係から、同性の友人関係を重視した関わり方への変化。	中学の時は(異性の友だちが)あんまりいなかったんですけど、小学生の時はいました。そのやっぱ、普通に家が近い子。【ID04】
	同性重視の関係から性別によらない関係への変化	同性を重視した関係から性別によらない友人関係への変化。	あの中高からもすごく同性を意識しているような友人関係だったんですけど、大学に進学して、その...あの、共学になって。で、あの一サークルとかでも割と男の子の方が人数的には多かったんで、あの同性の友達との付き合いは今でも一番大切には考えてしまうんですけども、あの相談事とかを異性の友達にするようにもなりました。大学生になってから。【ID05】
付き合う対象の変化	付き合う友人や会話内容の多様化	会話の内容や、付き合う友人が多様になり、様々な人と友人になった。	一回クラスで飲み会をしようってなったときに結構いろいろ話して。あー結構全然違う人も話すと面白いなあって思って。ちよっと考えが変わったなあってかんじです。【ID10】
	付き合う友人や会話内容の画一化	会話の内容や、付き合う友人が多様ではなく、特定のタイプへと偏るようになった。	小・中はまあいろんなところとまあ...スポーツ系の人もよく喋ったし...みたいな。なんかあんまり文学系の人とも喋ってたりしたんですけども、高校入ったらスポーツの話一切しないとか。まあ結構、自分と似てる人が多かったというか。【ID10】
友人の態度の変化	友人の好ましい変化	友人が自分に合わせてくれるようになったり、接しやすくなったりなど、自分にとって好ましくなった。	えっと、その子もちょっと反省というか、してもらって、もう今は全然、(中略)まあ大丈夫になったというか、認識が変わったみたいでうまく付き合えるようにはなりました。【ID01】
	友人の好ましくない変化	友人との距離を置きたくなったり、思う関わりたくないと思ったりするような態度を友人がとるようになった。	こう、わりとそいつが変わってきて。(中略)今までこう気にしてなかった訳じゃないですけど、そこそこ気になってたことが余計に目について、イライラし始めて、もういいやと思って連絡しなくなったらまあ向こうも連絡してくることもないんで。消えたっていう。【ID02】
良好な関係の形成や出会い		一緒に楽しめたり、重要だと思えたりする関係を形成するようになった。	小学生の頃はよく2人で居ることが多くて。で、なんか中学校の頃からなんかインターネットで、チャットとかよくやって。なんかそっちの方がなんか重要、ではないですけど、なんか、友達って感じがしました。実際の友達よりもそっちの方が...、うん。【ID11】

注) 《》は回答者の発言、()は筆者による補足、【】は回答者ID。

友人関係の変化が生じたきっかけ

次に、青年がこれまでの友人関係の変化が何をきっかけとして生じたと感じているのかを分析した。その結果、3つのカテゴリーグループ([] で表記), 9のカテゴリー({} で表記), 20の概念(<>で表記)が得られた。各概念およびカテゴリーとの関係を Table2-2-2 にまとめた。

友人関係の変化のきっかけは大きく分けて、[自身の内的な要因] が変化したり、見つけ直したりすることをきっかけとするもの、[関わる他者の要因] のように友人を含む周囲の人の変化や言動をきっかけとするもの、[環境や状況の要因] が変化したことをきっかけとするものが主に語られた。

[自身の内的な要因]というきっかけには{自身の発達や成長}, {自身の言動や結果}, {時間の管理}, {友人関係への問題意識}の3つのカテゴリーが得られた。{自身の発達や成長}にはさらに<発達の要因>, <自己評価>, <不安や悩み事の発生>という3つの概念を定義した。これまでの友人関係の発達の变化を扱った先行研究(落合・佐藤, 1996)では主に学校段階や発達段階によって友人関係の違いに言及することが多かった。学校段階の移行や、子どもから思春期・青年期へと発達するにつれて友人関係が変わると感じる事が大学生自身の語りにも現れた。また、それだけではなく、自分自身について考えたり、自分のことを評価したりすることをきっかけとして友人関係が変わる<自己評価>や、<不安や悩み事が発生>することを通して、友人関係が変わる様子も語られた。特にこれまでの先行研究では大学生が抱える悩みや不安などと、友人関係の関連は検討されていないため、このような個人内の要因によって友人関係にどのような変化が生じるのかを検討する必要がある。同じく[自身の内的な要因]としては、{自身の言動や結果}というカテゴリーが得られた。このカテゴリーには、<友人への働きかけとその結果>, <自分勝手な言動>というきっかけが含まれた。<友人への働きかけとその結果>では友人に対して何らかの働きかけを行おうとする積極的な行動が語られた。また、<自分勝手な言動>によっても友人関係が変化することが示されており、これらのような友人関係で生じる言動と大学生の友人関係の関連について検討していく重要性が確認できた。{時間の管理}については、<自由な時間>に関する語りと<自身の多忙さ>についての語り得られた。これらは自身が時間をどのように使えるかを語ったものである。生活の時間の中で他者との関わりに積極的な大学生はコミュニケーション

ン能力が高く(都筑他, 2013), 多様な友人関係を築いている(都筑他, 2015)。友人との交流に使う時間と, 大学生の友人関係の研究も少ないが, 実際の友人関係に踏み込んで研究していくためには, 彼らの生活時間は重要な視点であると考えられる。{友人関係への問題意識}によって友人関係に変化が生じることも示された。〈友人関係の悩み〉や〈友人関係の不満〉については, 友人関係に関する問題として扱うべき課題であるが, これらの悩みや不満によって友人関係が変わっていくという過程を経ることが本研究から示唆された。

[関わる他者の要因] というきっかけには {他者との交流}, {新しい関係の形成}, {友人の成長や性格の変化}, {人間関係のトラブル} の4つのカテゴリーが得られた。これまでの友人関係の研究の一つの限界として, 友人関係を一人の青年が友人とどう付き合うかという研究に頼っている点あげられる。本研究から友人関係が変化していくきっかけとして, 友人の言動や友人との関わりの中で生じた出来事があげられているように, 友人を青年がどのようにとらえているのかという視点は今後も必要となる。{他者との交流}として〈様々な人や友人との交流〉や, 〈友人からの働きかけ〉が含まれ, これらによって友人関係が変化することが語られた。{新しい関係の形成}は, それ自体が友人関係の変化でもあるが, さらにその変化をきっかけとして大学生の友人関係が変化していくことが示された。このカテゴリーには〈友人関係の形成〉と〈それまでの対人関係からの離脱や別離〉が含まれた。{友人の成長や性格の変化}によっても友人関係の変化が認識されていた。〈友人の成長〉によって関わり方が変わったり, 〈友人の性格〉をきっかけとして関係が変化したりする様子が語られた。{人間関係のトラブル}も友人関係を変化させるものであり, 〈喧嘩や不和〉, 〈傷ついたこと〉, 〈傷つけてしまったこと〉があげられた。〈傷ついたこと〉と〈傷つけてしまったこと〉に関しては, 本研究で面接協力者に傷ついたことの有無やそれによる変化を質問しているため, 友人関係の変化においてもきっかけとして示した。

[環境や状況の要因] というきっかけには {進学先の環境} と {友人との距離の隔たり} という2つのカテゴリー兼概念が得られた。進学などによって大きく環境が変わったことをきっかけに友人関係が変化の様子が語られた。

Table 2-2-2 友人関係の変化が生じたきっかけ

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念	定義	発言例
自身の内的な要因	発達の要因	発達の要因	年齢や学校段階の発達がきっかけとなった。	小学校は誰とでも、って感じだったと思うんですけど、中学校に入ったりするとやっぱり、その思春期とかの影響なのか、異性と会話すること自体が私はあまり無くて。で、なので同性の友達とよく一緒に遊んでいた【ID05】
			不安や悩み事の発生	不安や悩み事が生じたことがきっかけになった。
	自身の発達や成長	自己評価	自分自身を評価し、その評価に基づいて、あるいは評価したことがきっかけになった。	きっかけ、は、やっぱり、みんなが遊んでたりするのに、自分は勉強してるっていう状況で、つらいなって(笑)。別に嫌じゃないんですけど、抱える発表とか準備があつたりして忙しくなった時に、そういう愚痴を言えるのが、やっぱり話すって大事なんだなって。それまでは、そういう悩み事とかがあんまりなかったのかもしれないです。【ID15】
			友人への働きかけとその結果	友人に自分から働きかけることにより、その結果として変わった。
	自身の言動や結果	自分勝手な言動	自分勝手な言動がきっかけになった。	中学校特有っちゃ特有なんですけど、毒舌吐いたりとか、自分のやりたい事したりとかで、結構横暴な感じの事ばかり、人の事考えない事ばかりしてたら、ある日突然、なんか全然話しかけてくれなくなって。【ID08】
			自由な時間	自由な時間、自分で管理できる時間が増えたことによって変わった。
	時間の管理	自身の多忙さ	自由な時間が減り、忙しくなったことによって変わった。	1年生の時はたぶん、みんな付き合っている人がいなかったんですよ。それで結構遊びにいったりしてたんですけど、今はまあいる人はいるっていう感じなんで、まあそっちに時間を割いているというか。《ID01さんも?》そうですね。【ID01】
			友人関係の悩み	友人関係に関する悩みや不安を通して変わった。
	友人関係への問題意識	友人関係の不満	友人関係に対する不満がきっかけになった。	すごい会う度遊ばなきゃいけないし、もうなんかずっと一緒だってたったら、なんか面倒、面倒くさく...【ID03】

次ページへ続く

前ページの続き

他者との交流	様々な人や友人との交流	様々な人との交流がきっかけになった。	その一小中高ってずっとスポーツやってたんですけど、なんか、小中高はずっと運動系の人と関わってきたんですけど、大学生になってサークルに入ると、文科系の人と関わるようになって違う一いつて感じました。【ID08】
	友人からの働きかけ	友人からの意見や助言などの働きかけがきっかけになった。	むしろみんなとすぐそういう風に仲良くなれるのが、羨ましいっていう話をしてくれた子がいて。それで、ああ、まあ無い物ねだりというか、なんか違った視点から見たらそうなのかなあっていうのを考えてから【ID05】
新しい関係の形成	友人関係の形成	新しい友人関係が形成される際に、それまでとは異なる関係の在り方に変ったことがきっかけになった。	毎回あの小学校から中学校行ったり、中学校から高校っていう、あの一友達が変わるじゃないですか、新しい環境に行くときに。で、毎回あの一初対面が苦手だから友達できるかなってすごい悩むんですけど、結局気づいたらできてるんで、あーじゃあこれでいいんだって思って生きてきたってかんじです。【ID13】
	それまでの対人関係からの離脱や別離	それまでの友人関係が失われていくにつれて変わった。	その小学生から中学生に上がる時に、小学校が凄く小さくて、尚且つ私立中学を受験する人が多くて。で、その一受験した人と仲良かったんで、(中略)その一、男の子とかは結構受験した子が多かったです。【ID04】
関わる他者の要因	友人の成長	友人が成長したことがきっかけになった。	あとまあ、さすがに大人になったんじゃないっすか【ID02】
	友人の成長や性格の変化	友人の性格に従って、自分の友人関係が変わった。	僕にはそんなに来ないんですけど、一緒に遊んだりすると、どうしても暴れるといいですか...オラるっていうんですか(笑)。ちょっとやめてって思う事も、高校で多くなったんで。【ID06】
人間関係のトラブル	喧嘩や不和	喧嘩や仲違いなどをきっかけに友人関係が変わった。	で、やっぱりそのこと(遊ぶ人数のこと)でトラブルというか、二人で遊びにいったりしたら、あ、誘ってくれば良かったのに、みたいなことを言われたりして。ちょっと、トラブルじゃないですけど、軽い、軽く喧嘩になったりは、しますね。【ID01】
	傷ついたこと	傷ついたことによって友人関係が変わった。	もう、なんか、私がおのあんまり人に向かって色々言う人間じゃないんで...。その時はまた、まあ色々、相手の子から言われてて、もう感極まっちゃって(私が)泣いちゃった時があつて。【ID03】
環境や状況の要因	傷つけてしまったこと	相手を傷つけてしまったことがきっかけになった	やっぱ中学のときに、自分が嫌われたくないから、誰かを嫌うしかなくて。なんかその、自分を守るために、別に嫌いじゃないけど、一人、嫌いな人を作らなきゃいけない雰囲気。まあどどん順番にハブいてったっていうことがそうなんですけど。それで、すごい仲良い子だったのに、周りに合わせて、無視したり、しちゃったのが、傷つけちゃったかなあつて。【ID09】
	進学先の環境	進学先の環境や、進学による環境の変化がきっかけになった。	圧倒的に(女子の)割合が増えたんですよ。その、ちょっと、小学校から中学校で。で、なんか、そこら辺からなんか違う存在だぞって思い始めてから、なんか意識が変わり始めましたね。【ID16】
友人との距離の隔たり	友人との距離がそれまでと変わったことがきっかけになった。	はい。あの、その保育園の子と部活一緒だったんで近過ぎたんで分わかんなかったんですけど、高校になって高校、学校別れて。なんたら客観的に見るようになって、そう思えるようになりました。【ID13】	

注) 《》は回答者の発言、()は筆者による補足、【】は回答者ID。

友人関係の変化とそのきっかけの関連

最後に、各友人関係の変化ときっかけがどのように関連しているのかを検討する。

【自身の発達や成長】による友人関係の変化 まず、＜発達の要因＞のきっかけから語られた友人関係の変化は＜関係の親密化や深化＞、＜友人への気遣いや配慮の増加＞、＜積極的な交流への挑戦＞といった[接し方の変化]や、＜性別によらない関係から同性重視の関係への変化＞という[付き合い対象の変化]が見られた。以下の例のように、年齢や大人になっていくという発達のな変化に連れて友人関係の変化が感じられることがあり、そのような変化はおおむね肯定的に受け入れられやすいものと考えられる。

【ID05】 小学校は誰とでも、って感じだったと思うんですけど、中学校に入ったりとするとやっぱり、その思春期とかの影響なのか、異性と会話すること自体が私はあまりなくて。で、なので同性の友達とよく一緒に遊んでいた。

【ID12】 小学校のときとかはたぶん、友達いっぱい、みたいなそういう感じだったんですけど、たぶん。まあ歳を取るに連れて、まあそのいっぱいってよりかは、まあ少ないけど仲が良いみたいな感じに。

【ID15】 その違いは、うーん。なんですかね。なんか、まず。なんか中学校からその、まあ。大学で、なんか自分は大人に成長したのかなってというのが。自分で言うのもあれですけど。相手のことをよく考えるようになったというのがあるかなと思います。

同じく {自身の発達や成長} のカテゴリーに含まれる＜自己評価＞においては、自分自身に対してどのような評価が行われるかによって＜相談やプライベートな自己開示の減少＞、＜積極的な交流への挑戦＞、＜友人への気遣いや配慮の増加＞などが生じる様子が語られた。これまでの研究では発達に従い青年は深い自己開示をするようになると言われてきた（落合・佐藤，1996）が、一方で ID01 のように自分の成長を実感することによってむしろ悩み事などの相談が減少していくプロセスも得られた。

【ID01】 高校では、ちょっと結構プライベートだと思うんですけど、相談とか悩み事とかいっぱい話してたなっていうのはあって。でも大学に入ってから別になんか言わなくてもいいかなっていう(笑)感じで。で、そんなに自分のことは言わないようになったなっていうので。ちょっと(高校と大学では)違うかなって思いますね。《そのような変化が起きてきたきっかけや理由はわかりますか?》うーん、そうですね。うーん。繋がらないかもしれないんですけど、自分の時間を大切にしたいなっていう風に思ってきたり。その、何だろう、仲間といるよりかは自分一人でいろいろできるようになったりっていうのがあったかとも思います。

ID01 とは逆の例として、発達に伴い不安や悩み事の発生によって、相談やプライベートな自己開示の増加が生じることもある。以下には、悩み事や愚痴が生じたことによって、友人と会話する事の重要性を認識した ID15 の例を示した。

【ID15】 (悩み事などを話すようになったのは) 最近ですね。大学になってからです。小中高の時は、悩み事を他人に話すっていうのが、なんですか、変なプライドかもしれないんですけど、あんまり好きじゃなかった。でもここ最近悩み事を話したり、笑いにできたりもするようになった。《そのような変化のきっかけって何かありますか?》きっかけ、は、やっぱり、みんなが遊んでたりするのに、自分は勉強してるっていう状況で、つらいなって(笑)。別に嫌じゃないんですけど、抱える発表とか準備があったりして忙しくなった時に、そういう愚痴を言えるのが、やっぱり話すって大事なんだなって。それまでは、そういう悩み事とかがあんまりなかったのかもしれないです。今は悩み事があるから、…話す。

以上のように、友人関係の変化のきっかけを{発達的な変化や成長}によるものと大学生が考えている場合、その後の変化は肯定的に評価されやすい。従来の研究では現状の友人関係にのみ焦点を当てたため、たとえば友人に相談などの自己開示を行わない青年は不適応的な群であるとされていた(岡田, 1999)が、その群の中には成長に伴い深い自己開示をことさら必要としなくなっている青年も含まれている可能性が十分にある。従来の研究で多く行われてきた付き合い方による分析からだけでは、大学生の友人関係を捉えることは困難であり、その他の指標を取り入れて改めて青年の友人関係

を理解する必要がある。

【自身の言動やその結果】による友人関係の変化 次に、{自身の言動やその結果}による友人関係の変化について検討する。〈友人への働きかけとその結果〉では友人に対して自分から何か働きかけたことによる変化が語られた。その働きかけが成功した時には〈友人の好ましい変化〉や、〈良好な関係の形成や出会い〉といった肯定的な変化が語られるが（例 ID09）、それが無為に終わったと感じられることもあり、その場合には〈関わりに対する消極的な態度への変化〉や、〈友人への気遣いや配慮の増加〉という形で大学生自身が相手に合わせているという語りが得られた（例 ID10）。

【ID09】 その、大学に入ってから、**「〇〇（名前）」**って呼ばせてっていうか（笑）。なんか高校のときの友達はやっぱ**「△△（あだ名）」**って呼んでくれるんですけど、それはもうなくしたいって思って。みんなに〇〇って呼んでくれて。

【ID10】 大学入ってサークルでちょっと…トラブルの仲裁をしたんですけど、まあ言っても変わらない人っているんだなあ、と。まあ明らかに一方が悪い感じなんですけど、その、悪いほうは何言っても分からないというか。そういうのがちよつとあるんで、あんま…あんまり言ってもしょうがないのかな。まあそういうような、言っても分からないんだろうなあって人に対してはあんまり、まあ厳しく言わないというか。まあほとんどははーって笑って流すくらいで…するようには以前と比べてなりました。

また、過去の〈自分勝手な言動〉に関する反省が語られることがあった。その反省と共に〈関係の悪化や軋轢の発生〉が語られ、おおむね否定的な結果を導いたと認識されている（例 ID08）。

【ID08】 小中のときは、結構自分勝手な子だったと思うんですけど。それをきっかけに、結構ハブられたりとか、《自分勝手というのは？》中学校特有っちゃ特有なんですけど、毒舌吐いたりとか、自分のやりたい事したりとかで、結構横暴

な感じの事ばかり、人の事考えない事ばかりしてたら、ある日突然、なんか全然話しかけてくれなくなって。

以上のように友人関係に変化をもたらす要因の一つとして、{自身の言動や結果}があるということが語られた。特に<友人への働きかけとその結果>などのように、自身が友人に何か働きかけるという試みを行っている様子がうかがえた。また、過去の友人関係の変化を回想する際には<自分勝手な言動>をしていたこと、それによって<関係の悪化や軋轢の発生>が生じたと認識していることが示された。

{時間の管理}による友人関係の変化 大学生は友人関係の変化の要因として、自分の管理できる時間が変化したことを語ることが示された。学校段階の変化などによって<自由な時間>が増えることは、{連絡頻度や関わる時間の変化}という形で青年の友人関係の変化をもたらす。以下の例のように、自由な時間の増加により友人との関係が密になるとは限らず、<自由な時間>は<連絡頻度や関わる時間の増加>に繋がることもあれば(例 ID14)、<連絡頻度や関わる時間の減少>に繋がることもある(例 ID15)。

[ID14] 結構遊ぶ頻度とか関わる回数っていうのは今のほうが凄いいかかっていう、感覚がありますね。結構中学の時とかってぼく、あのスクールバスで通わなきゃいけないくらいの距離だったので、(中略)放課後に会って、あの一学校のそばで遊ぶっていうのがあまり無くてですね。そーですね、逆に今だと、結構自由な時間も多いですし…、学校終わりに遊んだりとかは、っていうのも増えてきてるのかなあっていう感覚はありますね。(中略) 特別友達に対する考え方が変わった、から付き合うようになったっていうよりは、なんだろう。友達と遊ぶ時間が、なんかできたから、結構繋がりを持っているっていう感じですかね。

[ID15] 大学に入って、友人関係は…。そうですね。バイトとか自分の自由な時間が増えると、あんまり友達とどこか、土日遊びに行こうとか、っていうのはなくなった気がします。

また、同じく {時間の管理} という点では、<自身の多忙さ>によって<連絡頻度や関わる時間の減少>が生じることも語られた。忙しくなること、あるいは時間を割くべ

き事柄が生じることによって、友人との関わる頻度は減少していく。

【ID01】 あ、でもやっぱり(遊びに行くことは)減りましたね。(大学)1年生の頃とかはだいぶ遊びに行っていましたね。《どうして遊びに行くことが減ってしまうのでしょうか?》 どうしてですかね…。1年生の時はたぶん、みんな付き合っている人がいなかったんですよ。それで結構遊びにいったりしてたんですけど、今はまあいる人はいるっていう感じなんで、まあそっちに時間を割いているというか。《ID01さんも?》 そうですね。

【ID16】 小学校の頃は皆ですぐ集まって、遊んだりしていたんですけど。中学校では部活もやってたので、元々遊ぶ時間もなかったかもしれないんですけど。部活も厳しかったです。

以上のように、{時間の管理}が変わったことをきっかけとする友人関係の変化は、同じく{連絡頻度や関わる時間の変化}のように、どの程度友人との交流に時間を使うかという点に直接的に関連していると考えられる。

{友人関係への問題意識}による友人関係の変化 友人関係が変化するきっかけには自身の抱える友人関係への問題意識が語られることもあった。<友人関係の悩み>が生じ、その悩みに向きあった結果<友人関係の不安や迷いの解決>に至るケースや(例ID02)、<自分のキャラへの適応>、<積極的な交流への挑戦>などの[接し方の変化]へと繋がる過程が示された(例ID11)。

【ID02】 ザーっと、そうですね。なんだかんだで俺友達いねえや、友達ってなんだろうっていうのを考えながらいて、最終的になんかこう…。自分の、きょうだいがいて。で、お前らにとって友達ってなんなのって聞いた時に、『いや別に友達はさあ、遊べばいいんじゃない』みたいな感じで言って。いやそれは違うだろと思って。仮に遊んでたとしても、心の中でなんだこいつって思っていればそいつは友達じゃないはずだと思って。…それで行き着いたのが、やっぱり自分が友達だと思っていりや友達なんじゃない?っていう結論だった。

【ID11】 だって、私のなんかこう、良いところ、かわかんないですけど。なんか明るくて、ポジティブではないけど、周りからポジティブって見られる、こと？かなあって思って。面白いことかなあみたい。それがなくなったらだってもう何もないみたい。って思っちゃうんで、面白い、みんなに笑ってほしいなって、思ってる…。《どうしてそのように思うんですか？》一番最初に思ったのはネットで。注目集めるには面白くなきゃいけないじゃないですか。っていうのがまあ根底にあり。(中略) なんか面白くない人はなんか、こう…なんだろう、あんまり気にかけてもらえないではないけど、なんだろう。なんか、やっぱり重要性が低くなるじゃないですか。やっぱ面白い子は、こう遊びに誘っても面白いし、っていうので絶対誘われるんですけど面白くないと誘ってもらえないっていう。だから私も面白くないようって思う。

自身の過去や現在の＜友人関係の不満＞について語る大学生もいた。友人関係への不満は友人関係への[感情の変化]として、＜友人関係への不満や退屈さの発生および増加＞をもたらす。[接し方の変化]としては、＜関わること自体の回避や拒否＞という友人関係への拒絶が生じる一方、＜積極的な交流への挑戦＞、＜友人への気遣いや配慮の増加＞という形で自身の態度を積極的に変えようという試みも見られた。以下には友人の遅刻などへの不満と、それを自分が許容するようになったという変化が見られたID13の例を示した。

【ID13】 グループワークとかすごいみんな協力してやらなきゃいけないやつでも、協力しない人がいるじゃないですか。(中略) なんて、あー遅刻する子に関してはなんか、授業とかも遅刻しちゃうんですよ。で、その子の(グループワークの作業の)ペースがほんと遅いんで。そういう子って思ってるんですけど…。でも、遅刻してくるってことはその、私の待ち合わせより自分の準備を優先してるわけってことを考えると、なんでだろうってみたい(笑)、思ってイライラしてますいつも。《それでも友達付き合いは続いているんですね？》はい。もちろんイライラして、するんですけど。まあ、そういう子もいるし仕方ないかー、自分が大きくなるかあって思ってます(笑)。そう思うようになってきた(笑)。

以上のように、友人関係に対する悩みや不満をきっかけとして、青年の友人関係が変

わっていく姿が語られた。友人関係への悩みや不満は必ずしも友人関係を回避させる方向に影響するとは限らず、悩みや不満が自身の関わり方を変える原動力にもなり得ることが示された。

【他者との交流】による友人関係の変化 次に、[関わる他者の要因]が友人関係の変化に対してどのようなきっかけになったと認識されているのかを検討する。まずく様々な人や友人との交流>によって、生じた変化としては<友人との会話や過ごす時間の楽しさの実感>が語られた。また、<積極的な交流への挑戦>、<友人への気遣いや配慮の増加>という[接し方の変化]に加え、<同性重視の関係から性別によらない関係への変化>、<付き合う友人や会話内容の多様化>、<良好な関係の形成や出会い>という[付き合う対象の変化]が語られた。いずれも好ましい変化として語られたことから、大学生が<様々な人や友人との交流>によって友人関係にポジティブな影響がもたらされたと感じていることが示唆された。以下にサークル活動での交流を通して、<積極的な交流への挑戦>をするようになった例（例 ID03）と、大学のクラスでの関わりを通して<付き合う友人や会話内容の多様化>が生じた例（例 ID10）を示した。

【ID03】 サークルとかいう広い世界の物もあつたりしたんで、まあ…まあ、でも、癖っていうか自分の本質としてはあんまり、こう自分から行くとって事は出来ないんですけど、でもまあその、前に比べたら自分から色んな人にこう話しかけたりとか、一緒にどっか遊びに行こうとか、そういう事をまあ言える、ようにすごいなつた、のかな

【ID10】 大学入った直後くらいは全然クラスでももう、あんまり、複数の人とは話さない、2、3人としか会話しなかつたんで。でも、一回クラスで飲み会をしようってなつたときに結構いろいろ話して。あー結構全然違う人とも話す面白いなあつて思つて。ちょっと考えが変わつたなあつてかんじです。

次に、<友人からの働きかけ>を通して生じた友人関係の変化には、<友人関係への不安や迷いの解決>という友人からの働きかけによって、不安や迷いに解決の示唆が得られたとする語り（例 ID05）が得られた。一方で、ネガティブな働きかけによって<友人関係への不満や退屈さの発生および増加>に繋がる語り（例 ID11）も見られた。

【ID05】 その、中学校の頃とかはやっぱりすごい本気で悩んで。なんで私、こうやって色々な人に、なんだろう、気軽に（冗談やからかうような発言などを）言われやすいんだろうっていうのを思ってたんですけど。でそれを高校生ぐらいになった時に、なんだろう、なんか友達に…すごく、まあ…『親しみやすくて』みたいな話をされた時に、じゃあいっかなーと思って。で今でもそういう風に（軽口などを）言われてもまあ、本当に気にしないようにしてますね。で、私は全然考えたことがないんですけど、『むしろみんなとすぐそういう風に仲良くなれるのが、羨ましい』っていう話をしてくれた子がいて、それで、ああ、まあ無い物ねだりというか、なんか違った視点から見たらそうなのかなあっているのを考えてからあんまり度が過ぎたら怒りますけど、流すようにしています。

【ID11】 中学校の頃になんか、その頃だけすごい男子とつるんで…、その頃ってか男子とつるんで、私と女の子とあと男子3人くらい、4人かな、3人4人でつるんで。その時になんかクラスの子からなんかお前らビッチかよみたいなことと言われて。全然意味がわかんないんですけど。本当なんかその時は『ハア!?』って思いました。普通に仲良くしてるだけなのに何でそんなこと言われなきゃいけないのみたいな。…うん、なんかお前、お前が男子とつるめばいいじゃんみたいな、なんか自分がやりたいのに多分出来ないからそんな事言うんだなって思って、その時は納得してましたけど、でもなんかそう偏見を受けることが嫌でした。

以上のように、{他者との交流}は青年にとって、好ましい友人関係の要因として認識されやすいものの、ネガティブな<友人からの働きかけ>も見られ、ネガティブな交流からは不快感が生じるという語りが得られた。

【新しい関係の形成】による友人関係の変化 新しい<友人関係の形成>を、友人関係の変化のきっかけとして語る青年もいた。[感情の変化]としては新しい関係の形成に伴い<友人との会話や過ごす時間の楽しさの実感>と、<友人関係への不安や迷いの解決>が語られ、{友人関係への快感情の増加}をもたらすことが示唆された。併せて<関係の親密化や深化>、<積極的な交流への挑戦>、<友人への気遣いや配慮の増加>などに繋がる語りが得られた。以下に<新しい関係の形成>によって、<友人関係へ

の不安や迷いの解決>とく友人への気遣いや配慮の増加>が生じたことを語った ID08 の例を示した。

【ID08】 高校に入ってから、本当に友人に恵まれたっていうか。良い人達ばかりで、だんだん人間関係に対する恐怖は全然なくなっていった。人の事を考えるようになって、それからは全然、上手く行くようになりました。

また、<新しい関係の形成>と共に、<それまでの対人関係からの離脱や別離>も語られた。ID11 の例では、<新しい関係の形成>と同時に<それまでの対人関係からの離脱や別離>、<友人関係への不満や退屈さの発生および増加>が生じており、それが友人関係の変化として<深い関わり方の回避やその場だけの関係への変化>に繋がっている様子が語られた。この結果からは、友人との新しい関係への変化は、肯定的にとらえられるとは限らないことが示唆された。

【ID11】 なんか中学校になって、なんか中1の時って新しく入学したばっかだから友達ってすぐ出来るっていうか、こう仲良くなりやすいじゃないですか。で、なんか(小学校から同じ友達と)全然なんか、まあ話すけど…積極的に来ない、みたいな。クラスも変わっちゃってて。お互い別の友達がいて、でそっちと喋る、みたいな感じになっちゃって。でも私はその子が一番仲良いと思ってて…思ってた。でなんか、このクラスでつるんでる子は、なんか親友っていう立ち位置ではなくて、親友の一個下ぐらい?の人となんかいつも一緒に、なんか適当な事喋る、みたいな…感じ。

以上のように、{新しい関係の形成}に伴い、新しい友人関係が形成される点に焦点が当たる語りの場合にはより肯定的な語りが得られやすい。一方で、<それまでの対人関係からの離脱や別離>も生じ、友人関係の変化に伴って、否定的な語りも得られた。新しい対人関係の形成は古い対人関係との決別を促すこともあり、ポジティブかネガティブかという単純な図式ではとらえられないものであることが示唆された。

{友人の成長や性格の変化}による友人関係の変化 友人関係の変化は、付き合う友人の成長や性格の変化に従って生じる面もあることが示された。<友人の成長>による

変化は＜友人の好ましい変化＞や、＜良好な関係の形成や出会い＞として認識されることが示された（例 ID02）。

【ID02】 そうですね。1時間くらいとか普通にざらで。酷いとき1時間半とか2時間くらい遅刻してくるんですよ。なんで最初の頃すげえイライラしてましたね。こいつ時間にルーズ過ぎだろと思いながら。(間) 最近はそれないですね。結構言いましたからね。(中略) あとまあ、さすがに大人になったんじゃないっすか? 時間を、守れるようになったのは。

また、友人の変化は成長という形ではなく、ネガティブな変化としても語られた。＜友人の性格＞が自分と合わなくなるにつれて、＜友人関係への不安や迷いの発生および増加＞、＜連絡頻度や関わる時間の減少＞、＜関わること自体の回避や拒否＞、＜付き合う友人や会話内容の画一化＞といった変化が生じることが示された。以下の例は上記と同じく ID02 の語りであり、ID02 は友人との性格の不一致から、連絡頻度の減少が生じ、友人関係に対して悩むことになったきっかけになったと感じていた。

【ID02】 こう、わりとそいつが変わってきて。なんでしょう、趣味嗜好はそんなに大きくずれてる訳じゃないんですけど、ちょっと方向性がずれてきて。で、そのずれてきたことによって今までこう気にしてなかった訳じゃないんですけど、そこそこ気になってたことが余計に目について。それでイライラし始めて、もういいやと思って連絡しなくなったら、まあ向こうも連絡してくることもないんで、消えたっていう。基本的に僕の、あの一なんでしょう、友人観にしる友人関係にしる、こう自己中なところ多いんですけど(笑)。こう、その中でもまあ、わりとそれを意識しだした、きっかけっすかね。(中略) 連絡とらなくなってから、友人関係ってなんだろう、自分の、関係とかを、意識しましたね。

以上のように、友人関係の変化は{自身の発達や成長}に伴って生じるものだけではなく、相手の変化や成長によっても生じることが示された。友人関係は大学生が単独で成立するものではないため、その関係を形成する個人間の相互作用を理解することは、友人関係を検討していく上で重要となる。友人関係の発達的变化をとらえる視点として

も、友人が変化したという認識については今後さらなる知見の蓄積が必要である。

〔人間関係のトラブル〕による友人関係の変化 青年とその友人との間で生じる出来事として語られたのが、〔人間関係のトラブル〕であった。まず、〈喧嘩や不和〉といった友人間の葛藤によって生じる変化としては、〔感情の変化〕として、〈友人関係への不満や退屈さの発生および増加〉が語られた。また、〔接し方の変化〕としては、〈深い関わり方の回避やその場だけの関係への変化〉、〈関わること自体の回避や拒否〉や〈連絡頻度や関わる時間の減少〉という形で、その関係がより消極的なものへと変化する様子が語られた。〈喧嘩や不和〉という特徴から、これらは自然な結果であったと言える。本研究ではこれらの変化に加えて、〈積極的な交流への挑戦〉という〔接し方の変化〕や、〈同性重視の関係から性別によらない関係への変化〉、〈付き合う友人や会話内容の多様化〉、〈友人の好ましい変化〉といった肯定的な語りも得られた。喧嘩やすれ違いを通して、お互いの関係を改善しようとする様子が見られた。以下の ID01 の例では友人との喧嘩を通して、友人との関係が改善していく様子が語られた。

【ID01】 結構1年生の最初の方が、結構4人で何でもやりたいという意識が強い子が1人いて。で、それで、んと、仲良かったのが、2人一緒のサークルで、2人一緒のサークルの4人なんですよね。で、なので、どうしても、2人、2人になってしまうことが多くて。で、やっぱりそのことでトラブルというか、2人で遊びにいったりしたら、あ、誘ってくれば良かったのに、みたいなことを言われたりして、ちょっと、トラブルじゃないですけど、軽い、軽く喧嘩になったりは、しますね。ま、そういうことがあって、ま、今後こういうことがあったら嫌だなと思ったので、とりあえず4人全員で話し合いというか、こういうこと(4人で集まらないこと)もあるから、あの、しょうがないっていうのを分かってほしっていうのを伝えて。解決したんですよ。もう今は全然、誰、ま、3-1で自分だけ誘われなかったら、たぶん傷つくと思うんですけど、そんな2・2で遊びにいったりとかしても、まあ大丈夫になったというか、その子の認識が変わったみたいで、うまく付き合えるようにはなりました。

また、本研究では傷ついた経験についても質問しており、傷ついた経験によるの変化も示された。〈傷ついたこと〉によって生じた変化としては、〈友人関係への不安や迷

いの発生および増加>に見られる[感情の変化]や、<深い関わり方の回避やその場だけの関係への変化>、<相談やプライベートな自己開示の減少>、<関わること自体の回避や拒否>、<関わりに対する消極的な態度の変化>などの[接し方の変化]が語られた。以下の ID03 の例のように、傷ついた出来事を境に接し方がより消極的になっていく様子が語られた。

【ID03】 んーと、一回大学入ってから、こう、信用して喋った事が、他のところから出てたって事があって。もう…、なんだろうって。人間関係って何だろうって、すごい思っていましたね。すごい…、友達…。あ、でもそこで自分の友達、なんだろう、友人関係の持ち方、がちょっとなんか違ったのかな、考え直す機会なのかなこれが…とかも色々思っ。て。(中略) やっぱり信用してたってというのが、いとも簡単に崩されてしまって。あ、裏切られたのか一みたいな感じになっ…たから。まあ結構…それ(信頼していた友人の裏切り)によって、もう周りの人がどんなもんかわからないから、と思って、あんまりおおっ広げに言える事はなくなりましたね。

一方で、<傷ついたこと>をきっかけとして、<積極的な交流への挑戦>や<友人への気遣いや配慮の増加>などの[接し方の変化]が生じたと認識されることも示された。たとえば、行事の時に仲の良い子がないがしろにされたことに傷ついた ID07 の体験として、その出来事をきっかけに自分が積極的に問題を解決しようと試みたり、友人への配慮などを心がけたりするようになったことが語られた。

【ID07】 すごい私がその時…、行事の時にすごい、もうなんか悲しいというか、許せなかったというか、そういうのは、なんか、その、体育祭の時に、私のクラスで仲良い子が、その1人、その子が、結構その行事とかに参加するのが苦手な子で、で、なんかそういうその子に、その、クラスで行事を仕切るリーダーみたいな人たちが、なんか、その子たち(行事にうまく参加できない生徒)はなんか邪魔、その子が邪魔というか。(中略)ま、今思えばっていうか、その後から考えたらその子たちの大変さは、こんなに何人も、何十人も仕切るの大変なんだろうなってのは、わかるんですけど、なんかそれ、その子が…その子邪魔って言われた、ことにすごい、もう腹が立ったというか、悲しかっ…くて。なんか、私がど

うにかしようというか、風に思ったなあっていうの、がありますね。それで、なんかそういう中で、なんだろう。もう相手の気持ち、そんな時は必死すぎて、なんか、その子のことしか考えてなかったけど、なんだろう。その、みんなの気持ちとかをもっと考えたら、なんか熱くなりすぎてたなあとか思ったりもしたし。ん、なんか、もっとその人達のこと、とかも考えればよかったなあ、とか、そうやって思うようになった…、うん。

自身が<傷ついたこと>とは逆に、友人を<傷つけてしまったこと>によって生じた変化としては<友人への気遣いや配慮の増加>が見られた。傷つけてしまったことによる相手の反応などにより、その後、傷つけないようにという配慮をする様子が多く語られた（例 ID12）。

【ID12】 ちょっと思ってたことを、ぼろって言っちゃったときに、まあ…、女の子だったんですけど、泣かしちゃったってことがあって。まあ、自分としてはそんな悪い事言ったつもりでは無いんですけど。なんか泣いちゃって、ああそっか、ああー、悪かったなっていうか。それ以降、あんまり、自分が思ったままに、とか、感じたままにじゃなくて、一回ちょっと、自分で考え、整理してみるみたいな。そういうことはしようかな、うん。してるつもりでは、いますけどね、はい。

以上のように、{人間関係のトラブル} は青年の友人関係にとって重大なイベントであるため、その出来事を中心に様々な変化が語られた。特に友人関係の変化に焦点を当てた場合、上記のような友人関係を回避するような消極的な変化と、相手を思いやり、友人との関係を改善させようとしたりする積極的な変化の両面が生じる可能性があることが明らかになった。

【環境や状況の要因】による友人関係の変化 最後に、[環境や状況の要因]が友人関係の変化に対してどのようなきっかけになったと認識されているのかを検討する。まず、大きな環境の変化として<進学先の環境>がそれまでと変化し、それをきっかけとして<積極的な交流への挑戦>が試みられるようになったり（例 ID15）、<自分のキャラや理想像への適応>が生じたりする（例 ID09）ことが語られた。また、<性別によらない

関係から同性重視の関係への変化>と<同性重視の関係から性別によらない関係への変化>という〔付き合い対象の性別の変化〕も語られた（例 ID16）。

【ID15】 今までは自分から声かけるのは、なんていうんですかね、内気というか。苦手だったりしたんですけど。大学に入ってから、自分からでも声をかけていかないと、友だちができないんじゃないかって気にして(笑)。なので、本当にサークルも長続きはしなかったんですけど、行った時には自分から話をするようにしてました。(中略) やっぱ周りに、知り合いが全くいなかったという状況から、自分からアクションを起こさないと。

【ID09】 なんか中学校から高校にかけて場所がすごく変わったから。今までは、中学校までは、小学校のときからいる友達が必ずクラスにいたけど、高校は誰も同じ中学の人がいなかったの。変えたつもりはないんですけど、自分のキャラが変わったというか。なんかそれから、友達に対する接し方も、そういう周りが作ってくれたキャラにあわせてた気がします。

【ID16】 あの、僕が、あの、だいぶ、なんか、結構、何て言ったらいいですかね。小学校の頃から比べて奥手になったっていうか(笑)、人の目を気にするようになったのもあって、男子とばっかり喋って、あんまり女の子と仲良くはなかったです。《それは、なぜ中学校からそうなったんですか?》圧倒的に(女子の)割合が増えたんですよ。その、ちょっと、小学校から中学校で。で、なんか、そこから辺からなんか違う存在だぞって思い始めてから、なんか意識が変わり始めましたね。

以上の結果をまとめると、友人関係の変化のきっかけを〔発達的な変化や成長〕によるものと大学生が考えている場合、その後の変化はいずれの変化であっても肯定的に評価されやすい。これまでの研究では現状の友人関係にのみ焦点を当てていたため、たとえば友人に相談するなどの自己開示を行わない青年は不適応的な群であるとされていた(岡田, 1999)。ところが、青年がそのような友人関係を形成していたとしても、その形成過程では、自己の成長に伴い深い自己開示をことさら必要としなくなるという可能性も十分にある。

また、友人関係の変化は、友人とのやり取りの中で生じていく過程も見られた。自身から友人に働きかけることで友人関係が変化し、逆に友人からの働きかけによって自身の友人との付き合い方が変化していく様子が語られた。また、{人間関係のトラブル}も友人関係を変化させる一要因として考えることができる。これらのきっかけによって生じた友人関係の変化は、青年自身にとって好ましいととらえられているものから、好ましくないととらえられているものまで多岐に渡った。

第2章第2節の結果から、青年の友人関係の在り方は、その付き合い方や友人関係への態度なども含めて流動的であり、友人関係で生じた出来事などを契機として様々な変化が生じるものであると言える。また、従来の実証研究で得られてきた「友人関係」はこのような変化の過程を経て形成されたものと考えることができる。つまり、従来の研究で傷つきを避ける付き合いとして類型化された青年であっても、その友人関係が生じた背景は異なる。付き合い方の態度だけで青年の友人関係で生じる様々なやり取りをとらえることは難しく、それぞれの友人関係の中で生じるやり取りに注目していくことが今後の課題としてあげられる。

第3節 友人関係における傷つき経験とその影響

目的

第3節では、友人関係で傷ついた経験について、調査協力者の回想を元に、傷つき経験の内容と傷つき経験による影響を検討する。

第3節の目的は、友人関係で生じた傷つき経験と、その傷つき経験による影響や変化をどのようにとらえているかについて、実際の友人関係に即した知見を得ることであった。そのため、第3節では大学生の友人関係に関する回想の内、自身の友人関係で生じた傷ついた経験にどのようなものがあるか、また、その傷つき経験による影響をどのように自己評価しているのかに焦点を当てて分析した。

方法

第3節では友人関係で生じた傷つき経験を中心として、以下の手順によって逐語記録を分析した。まず、面接にて得られた傷つき経験について、そのエピソードを提示した。本研究における傷つき経験とは「友人との関係の中で、自分は相手から不当に低く評価されているという知覚による傷つき感情を生じさせる経験」と定義されるが、特に面接調査では、面接協力者自身が傷つき経験として語ったものを取り上げた²。次に、傷つき経験がどのような変化や影響をもたらしたと考えているかを概念およびカテゴリーに分類した。最後に、傷つき経験による変化や影響がどのように生じていくのかを検討した。

結果と考察

本調査で語られた傷つき経験の概要

自身の友人関係で生じた傷つき経験を語った面接協力者は16名のうち11名であつ

² 例として、「傷つきとは違うけど…」、「そんなに傷ついたわけではないけど…」という言葉などが出た場合には、傷つき経験ではないことを面接中に確認した。このようなエピソードについては「相手から低く評価されている」という知覚を伴う発言があったとしても、傷つき経験ではないものと見なした。傷つきかどうかについて本人が明示しなかった場合には、語られた経験が傷つき感情を伴うものであったかを本人に確認した。

た。語られたエピソードは計 16 であった。まず、本調査で傷つき経験として語られたエピソードを以下にまとめた。

エピソード 1【ID03】 第 1 のエピソードとして、ID03 の小学生の時の友人関係が語られた。ある友人との関係の中で、友人から依存されたことが ID03 にとっては苦痛であり、傷ついたと感じたことが語りから得られた。

【ID03】 そ…れ（傷つくようなこと）、はあった。小学校、4 年、の時にあった…。一緒にいつも居た子が居て。で、最初は全然なんとも思わなかったんですけど、その子すごい、なんか人に依存しちゃう子で。だからなんか私が他の、たとえば別のクラスの女の子と遊んでたりすると、「もう！なんでそっち行っちゃうの?」とか、「もう！私とあなたは親友でしょ！」みたいな、（中略）もう、なんか、私がおのあまり人に向かって色々言う人間じゃないんで…。その時はまた、まあ色々、相手の子から言われてて、もう感極まっちゃって（私が）泣いちゃった時があつて。で、そ…れ以降、ちょっともうここまで自分が嫌な気持ちになる様な人とは、なんか関…わりたくないし、そういう事をしてきた子と、同じ様なことを、人にしちゃいけないな、だからなんか必要以上に相手にこう近づこうとするっていうか。こう、依存、なんか、なんだろう。いつも一緒だよみたいな関係性を求めるのって、ダメだろうなっていうのをすごいそこで、なんかまあ身をもって体験したっていうか。ああはならない様にしようっていうの、は、あった。

エピソード 2【ID03(2)】 第 2 のエピソードとして、同じく ID03 の大学生の友人との出来事が語られた。大学でできた友人に話したことが、他人に話されていたことに ID03 は傷ついたようであった。

【ID03】 んーと、一回大学入ってから、こう、信用して喋った事が、他のところから出てたって事があつて。もう…、なんだろうって。人間関係って何だろうって、すごい思っていましたね。すごい…、友達…。あ、でもそこで自分の友達、なんだろう、友人関係の持ち方、がちよっとなんか違ったのかな、考え直す機会なのかなこれが…とかも色々思つて。なんか、もうすごく私にとっては大事件だったんですけど…。なんか、もうそのことを考えざるを得なく…、得なくって、も

う、やっぱりすごい個人的にはショックだったので、ずっともう、その事ばかり考えちゃってて。結構、もうそれが大学で出来た、友達だったからこそ、ま大学に行くイコールそれを思い出してしまうみたいなの。でも大学行かなきゃ単位取れないし、授業もあるしみたいなの。っていうので2、3ヶ月ずっとそんな感じ…。やっぱり信用してたっていうのが、いとも簡単に崩されてしまって。あ、裏切られたのかーみたいな感じになっ…たから。まあ結構…それ(信賴していた友人の裏切り)によって、もう周りの人がどんなもんかわからないから、と思って、あんまりおおっ広げに言える事はなくなりましたね。

エピソード3【ID04】 第3のエピソードとして、ID04の小学生の友人との出来事が語られた。小学生の友人グループの中でインターネットのチャットを介したトラブルに巻き込まれたことが傷つき経験としてあげられた。

【ID04】 傷ついたこと…は、1個だけ、あって。小学生の時に。小学校、えー、6年生か5年生だったと思うんですけど、あの、チャットって覚えてます？ すーごい流行って、私の小学校で。すごい流行って。(中略) その何人か、7、8人の仲の良い女の子のグループがあって、そのチャットのなん、なんていう、部屋？っていうのがあって。でなんか私以外のみんなが入っててやってたんですよ。ただその中のある女の子がなんか、なんか死ねみたいなかんじのアカウント名を使った人が現れて、なんか悪口を言い始めたんですよ、そのチャット部屋の中で。私だけそのチャットの中に入ってないから、「これは絶対“ID04”だ」みたいに疑われ(笑)。いや、でも待って、私家でパソコン触れてないしみたいな、かんじで。でも疑われて、その子の親とかからも電話かかってきたりとかして、なんか結構、大事になったんですけど。結局まあその中にいた1人の子が家にある2台のパソコンを使ってやっていたということが、発覚は、一応したんですけど、やっぱりなんかその子はその、そのうーんと死ねって言われてた女の子はそのパソコンを2台使っていた子と一番仲が良かった。だからその子自身はその子だってことを認めたくなくて、まあ発覚したけどずっと私を疑い続けるっていう(笑)。…ことが起こって、もういいし別になってなったの覚えてます。もうなんかその子とはもう、ちょっとあまり。別に嫌いじゃなかったけど、向こうがそこまで言って、もう発覚してるのに私のこと疑うなら、もう友達辞めようか

なみたな。て感じで、別に全く喋らないとかでは無いですけど、まああの、クラスにいたら喋る程度の子になりました。

エピソード 4【ID06】 第4のエピソードとして、ID06の中学時代から大学生にかけて仲良くしていた友人との金銭トラブルが語られた。ID06は信頼してお金を貸したが、友達と連絡がとれなくなってしまったことを傷つき経験としてあげた。

【ID06】 あ、1人、さっき4人で遊んでるって言ってたんですけど、ほんとはもう一人いたんですけど、そいつにお金貸して逃げられたことは傷つきました。
《それは困りますね》しかも、十何年の付き合いの友達だったんで。ほんとに今まったくどこにいるか分かんない、生きてるかも。どっか逃げちゃったか分かんないんですけど。《それはなぜ傷ついたのでしょうか?》えっと…やっぱ信用して、お金貸してたので。今までも貸してあげたりとかしてたんで、で、返ってきたんで。こいつなら絶対返ってくる、核心じゃないんですけど、裏切られたとも、はい。…でも良い勉強になったなって。…人にお金貸すのも一、友人といえども、人にお金貸すのってシビアに考えないとだめなんだなーってちょっと。甘く考えちゃうところもあったので…。

エピソード 5【ID07】 第5のエピソードとして、ID07の高校時代での学校行事での経験が語られた。ID07は学校行事で友達が邪魔者扱いされたことに傷つき、怒りや悲しみの感情が生じたことをあげた。

【ID07】 結構（学校行事を）もう、それくらいやっ…、熱心にやるようなやつだったんで。そういう時に、どうしてもこう、みんな本気になってる、本気でやるんで。（中略）その係りとかの時に、なんだ、お互いの不満とかがやっぱ出てきちゃう。この係りはやってんのに、とか、この係りは何やってんの、とか。あとはなんか、すごい私がある時…、行事の時にすごい、もうなんか悲しいというか、許せなかったというか、そういうのは、なんか、その、体育祭の時に、私のクラスで仲良い子が、その1人、その子が、結構その行事とかに参加するのが苦

手な子で。で、なんかそういうその子に、その、クラスで行事を仕切るリーダーみたいな人たちが、なんか、その子たち（行事にうまく参加できない生徒）はなんか邪魔、その子が邪魔というか。その子も、私はその子とよく話してるから、本当はみんなと参加したい気持ちがあるんだけど、どうしてもいけないとか。でも私はやっぱり邪魔だからそれだったら中途半端に参加しない方がいいんじゃないか、とかすごい、そういう話を聞いてたんで、その、私は参加させてあげたかったんですよ、どうしても。で、でもなんか、その、メインにいるリーダーの子たちはそういう子達がやっぱり邪魔って思うというか、…なんか、でも、「その子まで目届かない」とか、そういう風に言われて。そういうことがあって、私のことじゃないけど、すごく嫌で、それ、は、傷ついたことかなあ。

エピソード 6【ID08】 第6のエピソードとして、ID08の中学生時代に仲間外れにされた経験が語られた。ID08は小学生、中学生の時に自分勝手だったと自己評価しており、そのせいで仲間外れにされたと語っている。その経験がID08にとっては傷つき経験となったことが述べられた。

【ID08】 小中のときは、結構自分勝手な子だったと思うんですけど。それをきっかけに、結構ハブられたりとか、《自分勝手というのは？》中学校特有っちゃ特有なんですけど、毒舌吐いたりとか、自分のやりたい事したりとかで、結構横暴な感じの事ばかり、人の事考えない事ばかりしてたら、ある日突然、なんか全然話しかけてくれなくなって。何がいけなかったんだろうって、なんかしたかなって思うようになって。それで自分の横暴さに気づいて、割と消極的になったっていうか、ちょっと人間関係が怖くなった部分もありつつ…。高校に入ってから、本当に友人に恵まれたっていうか。良い人達ばかりで、だんだん人間関係に対する恐怖は全然なくなっていった。人の事を考えるようになって、それから全然、上手く行くようになりました。《仲間外れにされたことで傷ついたということ？》そうですね、やっぱりつらかったですね。やっぱり、嫌なことってしちゃいけないって思います、今は。

エピソード 7【ID09】 第7のエピソードとして、ID09が小学生の時にクラスメイトの女子に言われたことが、傷つき経験として語られた。小学生の時、男子に混ざってク

ラブ活動をやっていた時に、そのクラブに好きな男子のいる女子が怒ってきたことに傷ついたことが述べられた。

【ID09】 なんか小学校のときに、その小学校のスポーツクラブに私入っていて。そこは男の子しかなくて、その中に私は一人女の子で入ってて。なんか、同じクラスの子で、そのクラブに入ってる男の子のことが好きな子がいて。私はふつーにクラブで一緒だからよく話すし、なんだろう、恋愛関係じゃないのに。なんだろう、ふつーに友達として話してるだけなのに、女の子がすごい怒って、「知ってるんでしょ」みたいな。知ってるけど、みたいな。そのときはすごいなんか嫌でした。《それはなぜ嫌だったんですか?》 うーん…、なんだろう、うーん。なんか、そう見られてるのが、なんか。うーん…。《言われたことで傷ついた?》…うん。なんか、そんなんじゃないくて、クラブでスポーツをやっただけなのにつて。その時は、傷…ついた、のかな。

エピソード 8 【ID09】 第 8 のエピソードとして、同じく ID09 の中学生の時に友人グループで、グループのメンバーを順番に仲間外れにしていくという経験が語られた。ID09 自身も友人を仲間外れにした。自身が仲間外れにされたことに傷ついたことをあげた。

【ID09】 なんか、順番に、すごい、省いてくんですよ。それがすごい嫌で。なんか、一週間前ぐらいまではめっちゃ仲良かったのに、とか思って。それが嫌だった。《それは ID09 さんもおぼいたり、おぼかれたりしたんですか?》…うん。すごく嫌だったし、傷ついた、傷つけちゃったことも嫌。嫌われないようにしなきゃいけないって思うようになった。でも、中学はもうどうしようもないかなって思って、男の子のグループに混ざってたりとか。学校生活は、なんだろう、とりあえず過ぎてけばいいっていうか。そんなに楽しくなかったわけではないけど、特別楽しかったっていう思い出もなくて。

エピソード 9 【ID10】 第 9 のエピソードとして、ID10 の中学時代の友人に再会した際に、自分だけ友人の集まりに呼ばれていなかったことが語られた。ID10 は普段会っ

ていないため、呼ばれないことに納得もしつつ、一方で不満やショックを感じたことがあげられた。

【ID10】 傷ついたこと、うーん…。《特に思い浮かばないかな?》うーん、あ。これちょっとあったんですけど、はい。まああんまり、中学校の友人とかって今全然会ってないんですけど、まあこないだたまたま会ったときに、まあ、「なんでこないだの集まり来なかったのー?」って言われて、えっ知らないんだけどってなって、何それーって。それはちょっと傷つきましたね(笑)。あつ、呼ばれてないんだ…って。《それはなぜ傷ついたんですか?》なんでですかねー。まああんまり会ってないんで、別に誘われなくても…まあ、しょうがないかなーって思うん…だけど。まあ当時は仲良くしてたんだから、声かけてくれてもっていうか。ってか実際会ったときになんで来なかったのって言うくらいなら誘ってくれても(笑)。なんかショック…(笑)

エピソード 10 【ID10】 第 10 のエピソードとして、同じく ID10 は仲の良くない相手に体型などをからかわれたりするのが嫌で、特に名前について言われることで傷つくことが示された。

【ID10】 あとは、まあ…そんな仲良く無い人…仲良い人に言われるのは全然いいんですけど、痩せてるねーとか言われるのは、ちょっと嫌。痩せてることをちゃかされたりするのはちょっと嫌ですね。全然仲が良い友人同士だったら、「お前痩せてんなー、ちょっと肉分けてやろうかー」。「うるせえよデブ」みたいな軽口は、全然いいんですけど。全然仲良くない奴に言われるのはちょっと。イラッとしますね。…とか、体型に関わらず、名前とかですねー。《名前、ですか?》名前が、まあ〇〇なんで、まあ、結構、授業とかで、先生が名前だけ見て、女の子とかだと思ったりすることが結構あるんで。〇〇さんって言われたときに、笑われたりするみたいな。とか、ユキちゃんって言われたりするの、嫌ですね。《それは傷つきますか?》うーん、傷つく…、体格の方は、傷つくってほどでもない、かな、嫌だけど。名前は、昔はちょっと、うん、傷ついたこともあった。《今は傷つかない?》今は、そんなに傷つかないかな。《ちなみに、昔というのはいつくらいですか?》うーん…、小学校、中学生くらいかな、たぶん。

エピソード 11【ID11】 第 11 のエピソードとして、ID11 の中学生時代にインターネットの動画サイトでの活動を一緒にやると約束していたグループに先に始められてしまう経験を、傷ついた出来事として語った。

【ID11】 それ（インターネットの動画サイトでの活動）を3人でやろうって言うてたんですけど、2人が、私が知らない間に勝手に始めちゃったんですよ。で、私は3人で一緒にやるって言ったんで3人居ないと始まらないものだと思ってたんですよ、私の中で。なのに、なんか勝手に始めて、なんか、こうすごいなんか仲良さそうにしてて、で私だけなんか阻害された気持ちになっちゃって、なんか、それは傷ついた。なんか、「そういうのってどうなの」みたいな、「え?なんでそうやって勝手に始めるの」みたいな事を言ったら、なんか「いや、でも」みたいな感じになって、なんか喧嘩になっちゃって。

エピソード 12【ID11】 第 12 のエピソードとして、同じく ID11 の大学生時代のエピソードが語られた。ID11 は傷つき経験として日常的な会話の中で、信頼されていないことを感じる時に傷つくことをあげた。

【ID11】 嫌だな、傷つくなって思ったのは、その、大学の子（友達A）で、その子は、その1年の時から一緒にいた子（友達B）も居て、その子とも仲良いんですけど。なんかその、（友達A）彼氏の話とか私、私が聞かないと、私にあんまりしてくれないんですけど、なんか、その子（友達B）には私の知らない事を色々話してて。そういう話をしてるところを目撃するってか、その、私きい…、なんか、その3人で話してて、「こうこうこうだったって言ったよね」みたいな話してて、「あれ私聞いてないな」って思った時に、なんか、すごい嫌だなって。私まだ信頼されてないのかなみたいな気持ちになったり。しますね。《傷つきますか?》そういう時に、傷つくかも。ショックっていうか…。嫌、な気持ち。

エピソード 13【ID14】 第 13 のエピソードとして、ID14 の同窓会での経験が語られた。同窓会にて、大学受験のための浪人をしていることをからかわれたことが、ID14にとつての傷つき経験となったことが示された。

【ID14】 中学の時の友達なんですけど。ただ全然今は関わり持ってない人なんですけど、同窓会の時に、あの一まあ浪人のことを弄られるというか。うーん、ていうのがすごい嫌だったなっていう。それこそ今の仲間内だったら全然嫌だなっていうふうには思わないと思うんですけど、なんかすごく、もうそれがきっかけで、もう同窓会も行きたくないかなーみたいな、思ったりもしちゃうくらいちょっと傷付いたというか。《それはなぜ傷ついたのでしょうか？》うーん。まあプライドを傷付けられたっていうのもありますし、(間) こっちの苦勞を、もうわかってない言い方というか。まあもちろん好きでしてるわけじゃないのになんていう。

エピソード 14 【ID15】 第 14 のエピソードとして、ID14 の中学生時代の部活での経験が語られた。部活でのミスその後も指摘されることに当時の ID14 は傷ついていたことが報告された。

【ID15】 うーん、中学時代のことでいいですか？ 《はい、お願いします》 中学ではやっぱりその、部活がらみで、なんか、ミスをして、ミスすると、ずっと終わってからも、言われるのが、すごく嫌でしたね、やっぱり。言ってくる人もいて、それは嫌だったな。《傷つきますか？》 はい。やっぱり当時はミスをして、そのミスのことを自分でも考える、考えたり、してるのに、こう、ずっと言ってくるのは、傷ついたなって思いますね。

エピソード 15 【ID16】 第 15 のエピソードとして、ID16 の小学生時代に仲間外れにされたことが語られた。いじめや仲間外れにされる様子を見るのが嫌な ID16 は自身も小学生時代に仲間外れにされ、その経験は傷ついた経験として記憶されていることを述べた。

【ID16】 そういう、いじめってわけじゃないですけど、なんか、はぶいたりとか。…というのが、ありましたね。気づいたら、そこ仲悪いんだ、みたいな。そういの、遅れて知るんですよ、いつも。で、そういうの知るのが嫌だから、あんまり、そこまで人と深く関わろうとしないのかもしれない。《ご自身が当事者にな

ることはありましたか?》は、ないですね。…あ、小学校の時には少し、小学校の時にははぶられたことがありましたね。《その経験についてお聞きしてもいいですか?》そうですね。なんで、あの、こう、はぶられるんだらうなって、分からなかったですね。その時も、僕がすぐ離れて、全然遊ばなくなって、時間が解決してくれました。僕からは特に何も言わなかったです。ただ単に遊ばなくなって、ちょうど、たまたま春休みか夏休みかな、長期休業に入って、新しい学期になって遊ぼうって誘って、小学生だったので何も考えずに(笑)。そしたら普通に、気づいたら、まあ、直ってみたいな感じです。《それは傷つきましたか?》そうですね。その当時は傷つきましたけど、まあ時間が解決してくれて良かったですね。

エピソード 15【ID16】 第16のエピソードとして、同じく ID16 の小学生時代に嫌なあだ名をつけられたことが語られた。嫌なあだ名をつけられたことは当時の ID16 には傷つくことであり、その結果進路選択にも影響があったことが語られた。

【ID16】 あとは、小学校の時が一番いろいろあったなっていう感じなんですけど、あだ名、が嫌で。自分につけられた。…嫌で。それだけずっと嫌で嫌でしょうがなかったなって。それを言ってたのが、僕の一個上の人だったんです、小学校の。その人が卒業してからは、言われなくなったんです。でも、本当にそういうのがあって、中学も変えたっていうのがあって。皆が行く中学があって、一人だけ違う中学に行きましたね。《それも傷ついた?》その時は、そうですね。でもどうしようもなかったので、嫌だなって感じが、ずっと。

以上のようなエピソードが調査協力者から得られた。Leary, et al. (1998)や、小田部他(2009a)によれば日常的な傷つき経験は「積極的な分離」、「消極的な分離」、「避難」、「裏切り」、「からかい」、「大切にされない、使われる、軽視される」、「理不尽な扱い」に分類することができ、これらは「自分が相手から低く評価されているという知覚」を伴うことが共通点であるとされる。本研究で得られた傷つき経験も、おおよそこれらの分類に従う結果となった(Table 2-3-1)。そのため、本研究で得られた16のエピソードについても、「友人との関係の中で、自分は相手から不当に低く評価されているという知覚に

よる傷つき感情を生じさせる経験」という本研究の定義に沿うものであったと言える。Leary, et al. (1998), 小田部他(2009a)の研究で傷つき経験とされたものは、主に自分自身への言語的攻撃や関係性に対する攻撃であった。しかし、本研究ではエピソード5のように、自身の友人への非難によっても傷つくことが示された。親しい友人に対しても自己の一部であるように感じる(Belk, 1988)ため、その友人が不当に低い評価を受けていると感じることによっても、青年にとっては傷つき経験となることが伺えた。

Table 2-3-1 傷つき経験の分類

カテゴリー	定義	エピソード番号
積極的な分離	明らか・露骨に嫌ってのけものにしたり, 要求・期待・接近を拒んだりする行為	6, 8, 15
消極的な分類	無意図的・暗黙的に要求・期待・接近を拒んだりする行為	11
非難	約束・信義・期待に背く行為	7, 14
裏切り	実際の欠点や過失の有無を問わず, その人の能力・性格や行ったことを責める言及	2, 4
からかい	その人が困ったり怒ったりするようなことをしておもしろがるような揶揄や嘲笑	10, 13, 16
大切にされない/ 使われる/軽視される	その人の能力や性格に対して疑念をかけたたり不審を示したりするような態度や言及	9, 12
理不尽な扱い	道理に合わない意図的な暴力や暴言	1, 3
その他		5

注) 分類および定義は小田部他(2009a)を踏襲した。

傷つき経験による影響や変化の認識

傷つき経験が生じた結果として、どのような影響や変化が生じたと感じられているのかを分析した。その結果、3つのカテゴリーグループ([] で表記), 6のカテゴリー({} で表記), 12の概念(<>で表記)が得られた。各概念およびカテゴリーとの関係を Table2-3-2 にまとめた。

まず第2節で示した友人関係の変化と同じく[感情の変化]が得られた。感情の変化としては {心理的な動揺} と, {関係への不快な感情} が傷つき経験の影響として語られ

た。傷つき経験によって<喪失感>を覚えたり、<ショック>を受けたりすることが見られ、これらを{心理的な動揺}とした。不快な感情は個人内に向けられるものだけでなく、他者との関係に対しても生じ、<関係への不満や怒り>、<関係への不安や悩み>として語られた。

次に、やはり第2節でも示した[対人関係への変化]に関する語りが得られた。<内面を開示することの回避>、<関わりに対する消極的な態度の変化>といった自身の友人との{付き合い方の変化}が見られた。加えて、<関係の悪化や軋轢の発生>、<関係の崩壊や放棄>のようなそれまでの{友人関係の悪化や崩壊}という形での影響が語られた。

最後のカテゴリーグループとして[経験からの学び]に関する発言が得られた。この発言は大きく分けて{対人関係への学び}と{自分自身の見直し}という特徴が見られた。

{対人関係への学び}では<付き合い方の修正>と<友人への気遣いや配慮>、{自分自身の見直し}では<自己変容への志向や考え方の修正>と<現実の受容>に関する語りが得られた。傷つき経験を現在から振り返った結果、その経験に意味を見いだせていることが示唆された。

Table 2-3-2 傷つき経験による影響や変化

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念	定義	発言例
感情の変化	心理的な動揺	喪失感	対人関係や自己に関する何らかの喪失感を抱いた。	私には、その、話してくれないんだなっていうのは...。多分その子の重要性の中に、その大事な友達の中に、私は入ってないのかなみたい。...思ったことはあります...。ちょっと...、ね、悲しい...、なーみたい...。(笑)。でも、そういうことされたらじゃあもうその子は、私の中でも重要じゃな...、くなくなっちゃう...寂しい感じ。【ID11】
		ショック	出来事に対してショックを感じた。	もうそのことを考えざるを得なく...、得なくて、もう、やっぱすごい個人的にはショックだったので。ずっともう、その事ばかり考えちゃってて。結構、もうそれが大学で出来た、友達だったからこそ、ま大学に行くイコールそれを思い出してしまうみたい。でも大学行かなきゃ単位取れないし、授業もあるしみたい。って...。で、3ヶ月ずっとそんな感じ...。【ID03】
	関係への不快な感情	関係への不満や怒り	友人関係などに対する不満を抱くようになった。	んーやっぱ、思ったのは、女の子ってめんどくさいなって(笑)。なんか男の子の方がよかったってすごい思います。男の子のほうが、なんだろう、男の子たちってそういうの(仲間外れにした・されたこと)が無いっていうイメージなんで、うらやましいなって。【ID09】
		関係への不安や悩み	友人関係などに対する不安が生じるようになった。	ある日突然、なんか全然話しかけてくれなくなって(中略)、ちょっと人間関係が怖くなった部分もある。人間関係全般がちょっと...恐怖というか...。【ID08】ああ、そつから、でも、だいたい、変わったのかもじゃないです。あんまり、その時(仲間外れにされた)から、結構、表面上の付き合いが多くなったのかな。表面上って...。深いか、関わらない方がいいなっていう感じ、たぶん。【ID16】
対人関係の変化	付き合い方の変化	内面を開示することの回避	自身のプライベートなことは話さないようになった。	なんか、嫌われないようにしようと思ったのと、でも中学はもうどうしようもないかなって...。諦めもあつて。(中略)学校生活は、なんだろう。とりあえず過ぎてけばいいって...。そんなに楽しくなかったわけでもないけど、特別楽しかったって...。思い出もなくて。自分からは別に、いえない感じかな【ID09】
	関わりに対する消極的な態度への変化	友人との交流に消極的になり、自分から働きかけなくなった。	友人との交流に消極的になり、自分から働きかけなくなった。	いやーもう、そいつが嫌いになるって...。(笑)。その時はもう嫌いになって、顔を合わせないようにするようになって...。感じでした。ね。まあ嫌でも顔合うんですけど(笑)。【ID15】
	友人関係の悪化や崩壊	関係の悪化や軋轢の発生	友人を嫌いになったり、関係が悪化したりした。	でも、本当にそういうの(嫌いなあだ名をからかわれる)があつて、中学も変えたって...。皆が行く中学があつて、一人だけ違う中学に行きましたね。【ID16】
対人関係への学び	付き合い方の修正	自分の対人関係の在り方や他者との付き合い方を修正しようとした。	自分の対人関係の在り方や他者との付き合い方を修正しようとした。	あ、でもそこで自分の友達、なんだろう、友人関係の持ち方、がちよつとなんか違ったのかな、考え直す機会なのかなこれが...。とかも色々思つて。【ID03】
	友人への気遣いや配慮の増加	友人に対する気遣いや配慮をするようになった。	友人に対する気遣いや配慮をするようになった。	んー。変わったのはわからないんですけど、私は自分の話、自分の、その相手に聞きたいことは自分が先に言う。「私こう、こういう体験をした」とか、そう、「したんだけど、最近どうだった?」とか。そういう風に自分から開示していく形式になりました。【ID11】
経験からの学び	自己変容への志向や考え方の修正	自分を変えたいと思うようになり、自分の考えや行動が変わった。	自分を変えたいと思うようになり、自分の考えや行動が変わった。	あー、人にお金貸すのも、友人といえども、他人にお金貸すのってシビアに考えないとだめなんだなって。ちょっと、甘く考えちゃうところもあつたので...。はい。でも良い勉強になったなって。【ID06】
自分自身の見直し	現実の受容	現実を受け入れたり、傷つき経験を受け止めたりすることができるようになった。	現実を受け入れたり、傷つき経験を受け止めたりすることができるようになった。	そんな時はすごいなんか怒りとか、意味わかんないとか、はあつたんですけど...。でもなんか、もうそれはそれで、(中略)でもなんか、こうネガティブに考えるというよりは、その...。あんなに、あんなになんかみんな泣き合いながら、思いをぶつけたとか、そういうことで、なんだろう、こう、なんかそういう経験もしたことなかったし、そういうのも良かったって...。成長できた気は、してる。【ID07】

注)《》は回答者の発言、()は筆者による補足、【】は回答者ID。

傷つき経験とその影響についての結果

傷つき経験による影響が生じていく過程を検討するため、調査協力者の語りから傷つき経験による影響の各カテゴリ間の関連を分析した。

感情の変化について まず、多くの傷つき経験のエピソードは不快な感情を生起させるものであった。特に裏切られることのショックや喪失感などが生じるが、エピソード1のように時間が経過することで、そのショックが和らいでいく様子が語られた（例ID03）。

【ID03】 もう、やっぱりすごい個人的にはショックだったので、ずっともう、その事ばかり考えちゃってて。結構、もうそれが大学で出来た、友達だったからこそ、ま大学に行くイコールそれを思い出してしまうみたい。でも大学行かなきゃ単位取れないし、授業もあるしみたい。っていうので2、3ヶ月ずっとそんな感じ…。(中略)《その2、3ヶ月は辛かったわけですね》はい。でも大学行かなきゃいけないし、2、3ヶ月したらちょっと落ち着いてきて。

対人関係の変化について 感情の変化と共に語られることが多かったのが[対人関係の変化]であった。傷つき経験に伴い、<内面を開示することの回避>や<関わりに対する消極的な態度への変化>が生じることが示された。ただし、これらの変化はID03のように現在まで引きずっていると感じられる場合と、ID09のようにその後の他者との交流からまた積極的な態度を持つようになる場合が示された。このことから、傷つき経験による影響は永続的なものとは限らず、その後の発達を通して柔軟に変化していく可能性が示唆された。ID09の場合には<自己変容への志向や考え方の修正>と、高校での友人との交流から自身の友人との付き合い方が変わってきたことが認識されていた。

【ID03】 もう、なんか、私とそのあんまり人に向かって色々言う人間じゃないんで…。その時はまた、まあ色々、相手の子から言われてて、もう感極まっちゃって(私が)泣いちゃった時があつて。で、そー…れ以降、ちょっともうここまで自分が嫌な気持ちになる様な人とは、なんか関…わりたくないし、そういう事をしてきた子と、同じ様なことを、人にしちゃいけない、だからなんか必要以上

に相手にこう近づこうとするっていうか。こう、依存、なんか、なんだろう。いつも一緒だよみたいな関係性を求めるのって、ダメだろうなっていうのをすごいそこで、なんかまあ身をもって体験したっていうか。ああはならない様にしようっていうの、は、あった。(中略)どこまで、なんだろう、関係性を入れていっていいのか、ってのがわからなくていつもこう、なんか一個線を引くみたいな。あんまり近づいちゃいけない境界線が私とあなたの間にはあるんだろうなって思っ
て、あんまり自主的にこう相手に、なん…こう積極的に?こう行くって事は、あまり出来なくて。いつも相手からなんか言ってもらうとかいう、こう受け身な感じ
でっていう、関係が、多かったですね。《それはいつくらいまでですか》いつ…、いつ。うーん、今でもやっぱり、そういうところはある。…ずっと。

【ID09】なんか、順番に、すごい、省いてくんですよ。それがすごい嫌で。なんか、一週間前ぐらいまではめっちゃ仲良かったのに、とか思って。それが嫌だった。《それはID09さんもはぶいたり、はぶかれたりしたんですか?》…うん。すごく嫌だったし、傷ついた、傷つけちゃったことも嫌。嫌われないようにしなきゃいけないって思うようになった。(中略)《今でも嫌われないようにしなきゃいけないって思う?》ううん。今は、今ってか高校ですごく、高校はすごく変わりたいっていう意志が強かつ…、強くて。で、高校はいじめとかほんとなくて、なんだろう、中学だったらあの子ちょっと嫌われちゃうんだろうなっていうところがある子でも、なんか個性としてみんながむしろ尊敬してるって言うか。ああ、なんかこういう考え方もあるんだなって高校に入って思って、よかった。《ID09さんも変われました?》変わった、かな?分からないけど、でも自分から友達に
いけるようにはなった。高校は楽しかった。

また、友人関係の中で生じた傷つき経験は、その経験を生じさせた関係そのものを悪化させたり、崩壊させたりすることも示された。傷つくという出来事によって生じた{心理的な動揺}や{関係への不快な感情}は、{友人関係の悪化や崩壊}に繋がること
が示唆された(例ID11)。

【ID11】そういう話をしているとこを目撃するってか、その、私きい…、なんか、その3人で話してて、「こうこうこうだったって言ったよね」みたいな話して

て、「あれ私聞いてないな」って思った時に、なんか、すごい嫌だなって。私まだ信頼されてないのかなみたいな気持ちになったり。しますね。《傷つきますか?》そういう時に、傷つくかも。ショックっていうか…。嫌、な気持ち。私には、その、話してくれないんだなっていうのは…。多分その子の重要性の中に、その大事な友達の中に、私は入ってないのかなみたいな。…思ったことはあります。…ちょっと…、ね、悲しい…、な…みたいな…(笑)。でも、そういうことされたらじゃあもうその子は、私の中でも重要じゃな…、くなっちゃう。…寂しい感じ。《重要じゃなくなると何か変わりますか?》うん。なんか、わ、私が一緒にいなくても、いても、い…、あまり変わらないのかなって。いなくても、いなくても別に、いいかなって思う。

経験からの学びについて 傷つき経験に関するエピソードについては、一部でその経験から何らかの学びを得たという語りが得られた。まず、{対人関係への学び}に含まれる<付き合い方の修正>では、傷つき経験による影響の<喪失感>、<ショック>、<関係への不満や怒り>、<関係への不満や悩み>などの[感情の変化]の後に、傷つき経験をきっかけとして、自身の対人関係の見直しが図られる様子が語られた。その際に、友人に対して自身の抱える不安や悩みを打ち明けたことも語られた（例 ID03）。

【ID03】 んーと、一回大学入ってから、こう、信用して喋った事が、他のところから出てたって事があって。もう…、なんだろうって。人間関係って何だろうって、すごい思っていましたね。すごい…、友達…。あ、でもそこで自分の友達、なんだろう、友人関係の持ち方、がちよっとなんか違ったのかな、考え直す機会なのかなこれが…とかも色々思って。自分の、その関係、関係のとり方が、間違っていないか、聞いてみたり。《友達に?》友達。聞いたら、大丈夫って言ってくれて、よかった。なんか、考え直して、今はうまく、うま、自分なりに、接することができ、てる…と思う。

{自分自身の見直し}に含まれる<現実の受容>においても、傷つき経験を友人に相談することによって、不快な[感情の変化]をもたらす経験が、受容されていく過程が示された。ID03 の場合は、友人に相談することで、自分の考え方が間違っていないことを

確認し、傷つき経験を受け入れることができるようになった（例 ID03）。また、時間をかけて傷つき経験に向きあうことによっても〈現実の受容〉に繋がることが示唆された（例 ID07）。

【ID03】 んーと、一回大学入ってから、こう、信用して喋った事が、他のところから出てたって事があって。もう…、なんだろうって。人間関係って何だろうって、すごい思っていましたね。すごい…、友達…。あ、でもそこで自分の友達、なんだろう、友人関係の持ち方、がちよっとなんか違ったのかな、考え直す機会なのかなこれが…とかも色々思っ。自分の、その関係、関係のとり方が、間違っ
てないか、聞いてみたり。《友達に？》友達。聞いたら、大丈夫って言ってくれて、よかった。なんか、考え直して、今はうまく、うま、自分なりに、接することができ、てる…と思う。《友達はどのように聞いてくれたんですか？》ん…、なんか、「そこで普通に、ショックを受けるのは、普通だし、その、彼女がやった事は間違ってる事だよ」っていうのを改めて言ってもらって。ああ、そうなんだ、それで合ってたんだって。そこで、改めて気付いて、あっその、今、ん、起きたことは、私にとってすごい、やっぱショックな事だったんだなって、改めて感じたというか。なんか、ショックを受けていいんだって、そう…、受け入れた感じ。

【ID07】 そんな時はすごいなんか怒りとか、意味わかんないとか、は、あったんですけど。…でもなんか、もうそれはそれで、(中略)でもなんか、こうネガティブに考えるというよりは、その…。あんなに、あんなになんかみんなで泣き合いながら、思いをぶつけたとか、そういうことで、なんだろう、こう、なんかそういう経験もしたことなかったし、そういうのも良かったっていうか。成長できた気は、してる。あの、なんか、そういう風にあの、ぶつかったことは良かったっていう風に思ってます。《どうしてそう思えるようになったんですか？》うーん。でも、その時も一生懸命考えて、で、その結果だったから、かな。傷ついたこと、だけど、それも今振り返ってみれば、繋がってるなって、後からは、思う。やっぱり経験になったなって、うん、そんな感じ。

以上の結果をまとめると、友人関係の中で生じる傷つき経験によって、第2節で示さ

れた友人との関わりの変化に加えて、対人関係全般に対する不信感や自信の喪失などの影響が見られた。特に過去の友人関係の中で傷ついたという出来事を大学生が語るにあたっては、非常にネガティブな経験としてその後の対人関係や自分自身への認識に対して影を落とす。これは重要な対人関係の悪化が精神的な健康に悪影響を及ぼす(e.g. Davis, et al., 1998) という知見からも予想されていた。傷つき経験を語った大学生は、傷つき経験にまつわるトラブルは既に解決していたとしても、他者への不信感や自信の喪失という形で影響が残っていることが本研究から示された。

一方で、その出来事について反芻し、何らかの意味を見つけようとする態度も、幾人かに見られた。ストレスフルな体験について、意味を見出すためには、その出来事を繰り返し思い出す過程が必要であり、それによって出来事への理解が促される (Joseph & Linley, 2005)。友人関係で生じた傷つき経験についても、回想したり意味づけたりすることによって、振り返ってみることで新たに傷つき経験から気づくことがあることも示された。

また、過去の経験の意味づけを助けるものとしては、友人への相談があり、その相談によって友人から受け入れてもらうことを経て、自己評価の回復などが促される可能性が示された。悩みについての自己開示はそのものがストレスの低減に効果的であり、さらに相手の受容やサポートを引き出す(丸山・今川, 2001)。本調査でも友人に傷つき経験を相談し、受容されたことが傷つき経験のとらえ方に影響していく過程が得られた。しかし、このような過程は調査協力者に共通して見られたわけではない。否定的な内容を自己開示することは傷つきを生じさせる可能性を持つ(片山, 1997)。そのために調査協力者の中には傷つき経験を相談しなかった人もいることが考えられる。また、傷つき経験が他者への援助を求めるほど脅威ではなかったり、他者からの援助が期待できない場合にはサポートを求める過程に進まない(高木, 1997)ことも指摘されており、その場合には傷つき経験について自己開示をする可能性は低くなると考えられる。青年が傷つき経験の影響を受ける中で、他者に相談することの作用については、さらに検討していく必要がある。

第4節 第2章のまとめ

第2章で得られた知見

第2章では、大学生の友人関係の中でどのような出来事が生じているか、また友人関係における傷つき経験をどのようにとらえているかの検討を目的として、半構造化面接を行った。友人関係の中で生じている青年同士の具体的なやり取りに関してはこれまで十分に明らかにされていないため、本研究では探索的に検討した。

以上の課題を明らかにするために、第2章では以下の2点を主に分析した。まず、友人関係の変化が大学生にとってどのように感じられており、そのきっかけはどのようなものか、という点であった。次に、友人関係で生じる傷つき経験が、大学生にとってどのようにとらえられているか、という点であった。

第2章第2節では、主に友人関係の変化をどのようにとらえているか、およびその変化のきっかけをどのように認識しているかを分析した。これまでの友人関係研究でも友人関係の発達的な変化については言及されてきたが、その変化の要因や過程については十分に議論されていない。そのため、友人関係で生じる出来事をきっかけとして、友人関係がどのように変化し得るのかを検討した。

その結果、大学生にとって、友人関係の変化は、友人との接し方の変化だけではなく、その関係で生じる感情の変化や、どのような相手と付き合うかという対象の変化としても示された。これらの変化を生じさせるきっかけとしては、進学という環境の変化だけではなく、自身の内的な要因、関わる他者の要因と多様であった。青年の発達によって、友人関係は狭く深くなると考えられていたが、発達したからこそ友人との距離が離れていくプロセスがあることや、一見ネガティブな出来事である友人関係のトラブルを通して自身の友人関係を見直したり、友人への気遣いを意識するようになったりすることなどが示唆された。これらの結果から、どのような付き合い方をしているのかという視点だけでは大学生の友人関係をとらえるには不十分であり、その付き合いの中で大学生が友人とどのようなやり取りをしているかを検討していく必要がある。

第2章第3節では友人関係で生じる傷つき経験が、大学生にとってどのように感じられているかを分析した。これまでの友人関係研究ではその関係の中で生じる具体的な傷つくという経験についてはほとんど議論されていない。そこで本研究では探索的に検討

することで、友人関係の中で傷つくという出来事について知見を蓄積することを試みた。

その結果、第2節で示された友人との関わりの変化に加えて、対人関係全般に対する不信感や自信の喪失などの影響が見られた。大学生が語った過去の友人関係における傷ついた出来事は、非常にネガティブな経験としてその後の対人関係や自分自身への認識および評価に対して好ましくない影響を及ぼすものであることが示唆された。傷つき経験を語った大学生は、傷つき経験そのものは既に解決していたとしても、他者への不信感や自信の喪失という形で影響が残っていることが本研究から示された。一方で、その出来事について反芻し、何らかの意味を見つけようとする態度も語られた。回想したり意味づけたりすることによって、振り返ってみることで新たに傷つき経験から気づくことがあることも示された。また、そのような意味づけを助けるものとしては、友人への相談と、その相談によって友人から受け入れてもらうことを経て自己評価の回復が促される可能性が示された。

第2章のまとめ

第2章では、主に以下の2点が明らかになった。第1に、友人関係の変化は深く狭く発達していくという一方向的なものとは限らないことである。第2に、友人関係で傷つくという経験は長期的な影響や対人関係の変化をもたらす経験となることである。

第1の点については、第2章第2節の結果から示された。面接調査の結果、発達したからこそ友人との距離が離れていくプロセスがあることや、一見ネガティブな出来事である友人関係で傷ついたり、傷つけてしまったりすることを通して自身の友人関係を見直し、友人への気遣いを意識するようになることなどが示唆された。従来の研究では青年の発達によって、友人関係は親密になっていくとされていたが、必ずしも深い付き合いへと変化するとは限らないことが示唆された。友人との付き合い方のみでは、大学生の発達や適応をとらえるには不十分であり、その付き合いの中で生じる友人とのやり取りを具体的に検討していくことが必要である。

第2の点については、第2章第3節の結果から示された。面接調査の結果、傷つき経験によって対人関係全般に対する不信感や自信の喪失などの影響が見られた。過去の友人関係の中で傷ついたという出来事を大学生が語るにあたっては、非常にネガティブな

経験としてその後の対人関係や自分自身への認識に対して影を落とすことが示唆された。一方で、その出来事について反芻し、何らかの意味を見つけようとする態度も語られた。また、そのような傷つき経験の振り返りを助けるものとして、友人への相談と、その相談によって友人からの受容を経て自己評価の回復が促される可能性が示された。

第3章・第4章への課題

第2章の結果から、大学生の友人関係を検討する上で以下の課題が得られた。

第1に、大学生の友人関係の実際に即して友人関係を明らかにしていくためには、友人との付き合い方だけではなく、その友達付き合いの中で生じているやり取りに注目する必要があるということである。同じ友人との付き合い方をしているように見えても、その関係が形成されるに至った過程は異なることが本調査から示唆された。現在の時点で傷つくことを避けようとする友人関係を志向していたとしても、過去の経験による影響は異なり、その結果友人への配慮・気遣いの仕方や関わり方が異なる可能性がある。これまで友人と親密な関係を形成しないことは不適応的であると見なされることが多かった。しかし、人によってはその友人関係の中で、相手に良好な関係を保つに十分な配慮ができていることも考えられる。友人との付き合い方に加えて、その関係の中でどのような相互作用が行われているのかを検討していく必要がある。

第2に、友人関係の中で生じる傷つき経験は、ネガティブな経験として大学生に認識されており、その長期的な影響が示唆された。友人関係の中で生じる傷つき経験は、その後の対人関係や自信の喪失という形で長期的に影響を及ぼす可能性があるが、このような日常的なネガティブな経験についての研究は不足している現状がある。まずは友人関係で生じる傷つき経験がどのような影響があるのかを、より多くの調査協力者からデータを得る必要がある。また、本研究では傷つき経験の認識を変える要因として、その出来事について意味づけを行うことや、友人に相談することが示唆された。これらの要因と傷つき経験の影響のとらえ方との関連も検討していく必要がある。

以上が第2章の探索的な検討によって得られた課題である。これらの課題に対して、第1の課題を第3章で検討し、第2の課題を第4章で検討する。

第 2 章の結論

これまでの友人関係の研究では大学生同士が相互にやり取りをする友人関係の実態については軽視されてきた。そこで本研究では友人関係の中で生じるやり取りや、友人関係の変化について具体的な知見を得ることを目的とした。大学生に対する面接調査において、それまでの友人関係を回想してもらい、友人関係の中で生じた変化や出来事について分析した。その結果、以下の 4 点が主に明らかになった。

第 1 に、これまでの研究で友人関係の変化として扱われていた付き合い方の変化以外にも、友人関係で生じる不安や悩みなどの感情的な変化や、付き合う対象の変化などが見られた。このように友人関係の変化として主に 3 つの変化が本研究から得られた。

第 2 に、友人関係は発達に伴いより深く親密になっていくことがこれまで指摘されてきたが、必ずしもその通りではなく、発達したからこそ友人との関係が希薄になっていく様子も見られた。

第 3 に、友人関係で生じる傷つき経験は、それが語られる場合には長期的な影響があると大学生自身に感じられやすく、それは対人関係に対する不信感や、自己不全感として現れやすい。

第 4 に、友人関係で生じる傷つき経験の影響は否定的なものだけではなく、対人関係の見直しや、友人への気遣いという形で大学生の発達を促している側面もあることが示唆された。

第 2 章で得られた結果から、第 3 章と第 4 章における課題が改めて示された。

第3章 傷つきを避けようとする関係と大学生の適応

第3章では友人関係において傷つきを避けようとする事と、大学生の適応の関連について検討する。傷つきを避けようとする友人関係と適応の関連を検討するために、友人関係で実際に生じているサポートや援助行動、また対人場面で用いられるソーシャルスキルを取り入れて大学生の友人関係について新たな知見を提供する。

これまでの青年期の研究では、青年の友人関係は深く親密な関わりとなり、葛藤や衝突を経験すると考えられてきた。しかし、そのような青年ばかりではなく、葛藤を避け表面的で楽しい関係を求める青年の姿が指摘されるようになった(岡田, 1999)。そして、いくつかの研究でそのような関係を形成する大学生の不適応的な側面が指摘されてきた(小塩, 1998; 岡田, 2007)。岡田(2011,2012)においても、傷つくことを避けようとする傾向が高まるほど、友人から拒絶されているという感覚が強くなることが示されている。

しかし、友人からのサポートの受容は青年の感情状態を向上させる(福岡, 2010)という指摘もあるように、いずれの友人関係であっても、その関係の中で受容的な相互作用が行われていれば、大学生の適応が保たれることも十分に考えられる。従来の友人関係研究では友人関係を付き合い方によって検討してきたが、それだけではなく、実際に友人間で行われる相互作用への注目が必要であろう。

そこで第3章では大学生の友人関係を検討するにあたって、友人との付き合い方だけでなく、友人関係の中で生じる行動やその行動のためのスキルを取り入れて検討する。

第3章第1節では、友人関係が大学生にとって重要なサポート源であるという指摘(嶋, 1991)に従い、ソーシャル・サポートの受容とそのサポートを生起させる援助要請が、様々な友人関係の中で適応に対してどのような効果があるのかを検討する。

第3章第2節では、第1節とは逆に友人に対するサポートの提供者となることが、大学生の適応にどのような効果があるのかを検討する。

第3章第3節では、援助要請や援助行動を起こすための基盤ともなるソーシャルスキルと友人関係における傷つきへの態度を元に大学生を分類し、その分類によって適応が異なるかを検討する。

第3章第4節は、第3章で得られた知見をまとめて、友人との付き合い方と大学生の適応の関連について検討する。

第1節 友人関係の類型によるサポートおよび援助要請の効果の

違い—学校適応感への影響の検討—

目的

友人関係は青年にとって重要なサポート源となることが指摘されている(牧野, 2012)。友人との葛藤を避け、深い関わりを求めない青年は不適応であるとも言われる(岡田, 2007)が、そのような青年であっても、友人からのサポートを得られているのであれば、適応が維持されることは十分に考えられる。これまでの研究では傷つくことを回避しようとするかどうか主に焦点が当たっていたが、そのような友人との付き合い方だけから検討するのではなく、それぞれの友人関係の中で生じるサポートが青年にとってどのような意味を持つのかを明らかにすることで、友人関係の実際を理解することに役立つであろう。

青年がこのようなサポートを得るためには、友人にサポートを求めることが必要になる場合もある。他者に援助を求めることは、自己の立場の弱さ、対処能力の低さ等を自己自身および他者に伝える側面を持つ(脇本, 2008)。友人に嫌われないようにする、友人に気を遣うという特徴(岡田, 1995)を持つ青年にとっては、この援助要請を行うことができるかどうかはサポートの受容や学校適応を考える上で重要な要因となる。

このようなソーシャル・サポートや援助要請行動は、援助者と被援助者の関係によっても異なってくる。たとえば、援助者と親密でない他者からの援助はネガティブな効果をもたらす可能性があり(菊島, 2003)、相手との親密さは援助要請に影響する(高木, 1997)。ところが、これらの行動が生じる背景となる友人との付き合い方と、サポートや援助要請の関連はこれまで研究されてきていない。それぞれが独立した変数として検討されているのが現状である。

そこで第1節では大学生が、それぞれの友人関係の中でソーシャル・サポートの受容ができていないか、また援助要請を積極的に行っているかを検討する。また、それぞれの友人との付き合い方ごとに、援助要請やサポートの受容が適応を促すのかを青年の友人関係の特徴を踏まえて検討する。具体的には本節では以下の2点を明らかにする。

第1に現在の大学生の友人関係の特徴と適応の関連を取り上げる。まず、傷つきを回避する傾向を測定できる友人関係尺度をもとに、友人関係のタイプを分類する。次に、

それぞれの友人関係タイプによるソーシャル・サポートの受容と援助要請スタイルの差異を検討する。最後に、得られた友人関係による学校適応感の差異を検討する。

友人関係による適応については、友人に対して自己を開示する関係を志向する大学生が適応的であることは先行研究からも予測される場所であるが、学校場面という点で表面的な友人関係を志向する大学生が適応感を得られているかどうかを明らかにする。

第2に学校適応感に対する友人からのソーシャル・サポートの受容や友人への援助要請の影響を友人関係のタイプごとに明らかにする。そのために友人関係別に、ソーシャル・サポートの受容と援助要請スタイルが学校適応感に与える影響を検討する。

ソーシャル・サポートの受容は適応に肯定的な影響を及ぼすことが予想されるが、その影響は友人関係のタイプによって異なることが予想される。

方法

調査協力者

調査協力者は270名(男性140名,女性130名)であった。平均年齢は19.65歳(SD=1.03)であり、学年の内訳は1年生127名,2年生102名,3年生27名,4年生14名であった。調査は2013年10月~11月に2つの大学で行われ、国立大学で143名(男性86名,女性57名),私立大学で127名(男性54名,女性73名)の協力者が得られた(有効回答率96.08%)。

質問用紙の配布の際には、調査の目的についての説明と、以下の倫理的な配慮を行った。第1に調査への協力は任意であり、回答をしないことによる不利益がないことを伝えた。第2に、調査の途中で回答をやめなくなった場合には、途中で回答をやめても不利益がないことを伝えた。第3に調査によって得られた個人情報に厳重に管理することを伝えた。調査用紙の表紙では上記の倫理的配慮と調査の目的を記した。以上の調査目的および倫理的な配慮に同意できた場合には以下の尺度からなる質問用紙への回答を求めた。

調査内容

本研究では学年、年齢、性別の他に以下の尺度への回答を求めた。

学校への適応感尺度(大久保, 2005) この尺度は「居心地の良さの感覚」, 「課題・目的の存在」, 「被信頼感・受容感」, 「劣等感の無さ」の4因子30項目からなり, 「全くあてはまらない(1点)」～「非常によくあてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めるものであった。

援助要請スタイル尺度(永井, 2013) この尺度は「援助要請過剰型」, 「援助要請回避型」, 「援助要請自立型」の3因子からなり, 計12項目から構成された。各項目について, 「全くあてはまらない(1点)」～「非常によくあてはまる(7点)」の7件法で回答が求められた。永井(2013)ではこの尺度を援助要請スタイルによる分類に用いていたが, 本研究ではそれぞれの援助要請スタイルの程度を測定するために用いた。そのため, 本研究ではそれぞれの因子名を「援助要請過剰傾向」, 「援助要請回避傾向」, 「援助要請自立傾向」と表現した。

友人関係尺度(岡田, 2007) 「現代青年に特有な友人関係の取り方に関する尺度項目(岡田, 1999)」を岡田(2007)が改めて尺度項目を検討したものをを用いた。岡田(1999)では自分自身の内面を相手に見せないようにする「自己閉鎖」, 友人から否定的な評価を受けないようにする「自己防衛」, 友だちを不快にさせないようにする「友だちへのやさしさ」, 群れながら楽しい関係を持つようとする「群れ」の4因子からなり計42項目であった。一方, 岡田(2007)における同尺度は「自己閉鎖」, 「傷つけられることの回避」, 「傷つけることの回避」, 「快活的関係」の計35項目となった。このように本尺度は同一の因子が常に得られるわけではなく, 必ずしも安定した構造が得られないことも指摘されている(岡田, 1999)ため, 本研究においても因子分析を行うことにした。本調査においては, 「全くあてはまらない(1点)」～「非常によくあてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。

友人からのソーシャル・サポートの受容尺度(福岡, 2010) この尺度ではストレス状況と, そのストレス状況時に情緒的なサポートが得られたかを福岡(2010)に従って測定した。各項目は前半部と後半部に分かれ, 前半部ではストレス状況が示され, そのストレス状況が過去1か月間にどの程度あったかを「全然なかった(1点)」から「大いにあった(3点)」の3件法で評定させた。後半部では友人からソーシャル・サポートが得ら

れたかどうかを「そうでない(1点)」から「非常にそうである(4点)」の4件法で回答させるものであった。このソーシャル・サポートの尺度は計8項目から構成された。次にソーシャル・サポート受容の得点の算出として、まず各協力者のストレス状況の合計点とソーシャル・サポートの得点の合計点を算出した。次にソーシャル・サポートの得点をストレス状況の得点で除することで、ストレス状況あたりの平均サポート量を算出した。本研究ではこの得点をソーシャル・サポート受容の得点とした。ソーシャル・サポート受容の範囲は理論上の最小値として0.33をとり、理論上の最大値として4.00となった。

分析方法

本研究では得られたデータに対して以下の分析を行った。

第1に岡田(2007)の友人関係尺度の因子構造が本調査で得られたデータに適合するか確認するために、確認的因子分析を行った。その上で最尤法、プロマックス回転を用いて因子分析を行った。

第2に、友人関係の分類を行うために、尺度の因子を元にward法によるクラスタ分析を行った。また、クラスタごとの特徴を明らかにするために、各クラスタを独立変数とし友人関係尺度の得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。有意差が得られた場合にはTukeyのHSDによる多重比較を行った。

第3に友人関係によって、ソーシャル・サポート受容や援助要請スタイルに違いが生じているかについて検討するために友人関係の分類を独立変数、ソーシャル・サポートの受容、援助要請スタイルの各下位尺度を従属変数とした1要因の分散分析を行った。有意差が得られた場合にはTukeyのHSDによる多重比較を行った。

第4に友人関係によって学校適応感に差が生じるかを検討するために、友人関係の分類を独立変数、学校適応感の各下位尺度を従属変数とした1要因の分散分析を行った。有意差が得られた場合にはTukeyのHSDによる多重比較を行った。

第5に友人関係によって異なると考えられた援助要請のスタイルとソーシャル・サポートの受容が学校適応に及ぼす影響を検討した。友人関係の取り方ごとに、援助要請スタイルとソーシャル・サポートの受容を説明変数とし、学校適応感の各下位尺度を目的変数としたパス解析を行った。

結果

友人関係尺度(岡田, 2007)の因子の確認

岡田(2007)の友人関係尺度が本研究で得られたデータに適しているか調べるために確認的因子分析を行ったが、十分な適合度が得られなかった。そのため、友人関係尺度(岡田, 2007)に対して探索的因子分析を行った(最尤法, プロマックス回転)。固有値が1以上となることと、因子負荷量が.40に満たない項目、複数の項目に因子負荷量の高い項目を除外するという基準のもとに因子分析を繰り返した。その結果、20項目が4因子にまとまった (Table 3-1-1)。

Table 3-1-1 友人関係尺度(岡田, 2007)の探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)の結果

自己開示	I	II	III	IV	
7 悩みごとを相談する	.90	-.04	.11	.07	
25 落ち込んだとき話を聞いてもらう	.83	-.07	.14	.13	
1 自分の心をうち明けて話す	.65	.13	-.09	-.07	
26 本当の気持ちは話さない *	-.54	.00	.21	.00	
3 浅い付き合いにとどめる *	-.46	-.19	.11	.11	
配慮・気遣い					
19 友だちを傷つけないようにする	.05	.80	.07	.06	
17 相手にやさしくするよう心がける	.07	.72	-.07	-.04	
30 相手の気持ちに気をつかう	.10	.67	-.12	.17	
20 友だちをがっかりさせないよう気をつける	-.05	.59	.34	.08	
28 楽しい雰囲気になるようにふるまう	-.06	.50	.10	-.06	
傷つき懸念					
12 友だちから傷つけられないようにふるまう	-.11	-.03	.79	.11	
11 友だちからどう見られているか気にする	.00	.12	.63	-.03	
23 友だちと意見が対立しないよう気をつける	.05	-.21	.53	.27	
13 ウケるようなことをする	.10	.10	.45	-.23	
18 友だちから「つまらない人」と思われないように気をつける	-.09	.30	.43	-.22	
干渉回避					
31 相手の世界に口出ししない	.08	-.01	.05	.64	
6 相手に自分の意見を押しつけないようにする	.11	.16	-.10	.64	
8 相手の言うことに口出ししない	.04	-.06	.04	.56	
29 お互いのプライバシーに立入らない	-.26	-.04	.04	.46	
4 相手に甘えすぎない	-.33	.23	-.17	.42	
	因子間相関	I	II	III	IV
	II	.36			
	III	.07	.21		
	IV	-.22	.15	.18	

注) *は逆転項目

第1因子には「悩みごとを相談する」や、「落ち込んだとき話を聞いてもらう」といった項目が高い因子負荷量を示していたことから「自己開示」因子と命名した。第2因子には「友だちを傷つけないようにする」や、「相手にやさしくするように心がける」といった項目が高い因子負荷量を示していたことから「配慮・気遣い」因子と命名した。第3因子には「友だちから傷つけられないようにふるまう」や、「友だちからどう見られているか気にする」といった項目が高い因子負荷量を示していたことから「傷つき懸念」因子と命名した。第4因子には「相手に自分の意見を押しつけないようにする」や、「相手の世界に口出ししない」といった項目が高い因子負荷量を示していたことから「干渉回避」因子と命名した。この因子モデルに対して確認的因子分析を行った結果、 $CFI=.76$ 、 $RMSEA=.06$ となった。

友人関係尺度とその他の尺度の記述統計量、 α 係数を Table 3-1-2 に示し、各変数の相関係数は Table 3-1-3 に示した。評価懸念の項目においてはクロンバックの α 係数の値が 0.69 と低いが、おおむね許容できる信頼性係数が得られた。

Table 3-1-2 本節で用いた各下位尺度の記述統計量, α 係数			
尺度名	M	SD	α 係数
学校適応感尺度			
居心地の良さの感覚	3.72	0.76	.93
課題目的の存在	3.65	0.78	.83
被信頼感受容感	2.94	0.77	.84
劣等感のなさ	3.37	0.68	.61
援助要請スタイル尺度			
援助要請過剰傾向	3.85	1.51	.91
援助要請回避傾向	3.22	1.33	.86
援助要請自立傾向	4.66	1.10	.78
友人関係尺度			
自己開示	2.71	0.80	.82
配慮・気遣い	3.93	0.63	.81
傷つき懸念	3.34	0.70	.69
干渉回避	3.32	0.65	.70
ストレスおよび			
ソーシャル・サポート			
ストレス量	2.09	0.53	.88
ソーシャル・サポートの量	2.32	1.11	.89
ソーシャル・サポートの受容	1.06	0.45	

Table 3-1-3 本節で用いた各下位尺度間の相関係数

尺度名	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
学校適応感尺度													
居心地の良さの感覚 (1)													
課題目的の存在 (2)	.40 ***												
被信頼感受容感 (3)	.68 ***	.40 ***											
劣等感のなさ (4)	.31 ***	.16 *	.22 ***										
援助要請スタイル尺度													
援助要請過剰傾向 (5)	.23 ***	.09	.18 **	.04									
援助要請回避傾向 (6)	-.21 **	-.10	-.09	-.22 ***	-.47 ***								
援助要請自立傾向 (7)	.13 *	.22 ***	.20 **	.15 *	-.26 ***	.11							
友人関係尺度													
自己開示 (8)	.53 ***	.13 *	.32 ***	.33 ***	.53 ***	-.45 ***	.11						
配慮・気遣い (9)	.42 ***	.30 ***	.27 ***	.20 **	.09	-.13 *	.32 ***	.33 ***					
傷つき懸念 (10)	-.15 *	.05	.08	-.20 **	.30 ***	-.11	-.06	.06	.31 ***				
干渉回避 (11)	-.08	.10	.02	-.05	-.19 **	.21 **	.16 **	-.22 ***	.19 **	.10			
ストレスおよび													
ソーシャル・サポート													
ストレス量 (12)	.07	.14 *	.05	-.05	.27 ***	-.10	.05	.24 ***	.28 ***	.27 ***	.04		
ソーシャル・サポート量 (13)	.34 ***	.20 **	.22 ***	.05	.41 ***	-.30 ***	.10	.50 ***	.38 ***	.23 ***	.03	.74 ***	
ソーシャル・サポート の受容 (14)	.35	.17 **	.25 ***	.08	.36 ***	-.31 ***	.10	.47 ***	.35 ***	.17 **	.04	.50 ***	.92 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

友人関係尺度による友人関係の分類

友人関係尺度の4つの下位尺度の得点を元にクラスタ分析を行った。その結果クラスタの数を4つに分けた時に、最も解釈できる結果となった。

各クラスタの友人関係尺度の得点および分散分析の結果を Table 3-1-4 の上段部に示した。自己開示因子において、クラスタ1はクラスタ2~4に比べて得点が低いことが示された($p < .05$)。また、クラスタ2はクラスタ3, 4に比べて得点が低いことが示された($p < .05$)。次に配慮・気遣い因子において、クラスタ1はクラスタ2~4に比べて得点が低いことが示された($p < .05$)。また、クラスタ3はクラスタ4に比べて得点が低いことが示された($p < .05$)。次に評価懸念因子において、クラスタ1, 3はクラスタ2, 4に比べて得点が低いことが示された($p < .05$)。最後に干渉回避因子において、クラスタ4はクラスタ1~3に比べて得点が低いことが示された($p < .05$)。また、クラスタ1, 3はクラスタ2に比べて干渉回避得点が低いことが示された($p < .05$)。

次に、上記の4群によるソーシャル・サポート受容と援助要請スタイルの違いを検討するために分散分析を行った (Table 3-1-4 下段部)。ソーシャル・サポート受容において、クラスタ1はその他のタイプに比べてソーシャル・サポート受容の得点が低いことが示された($p < .05$)。次に、援助要請スタイルについて検討した。まず、援助要請過剰傾向において、クラスタ1はその他のタイプに比べて得点が低いことが示された($p < .05$)。また、

クラスタ 2 とクラスタ 3 はクラスタ 4 に比べて得点が低いことが示された($p<.05$)。次に、援助要請回避傾向において、クラスタ 3 とクラスタ 4 はクラスタ 1 とクラスタ 2 に比べて得点が低いことが示された($p<.05$)。最後に、援助要請自立傾向において、クラスタ 4 はクラスタ 2 とクラスタ 3 に比べて得点が低いことが示された($p<.05$)。

Table 3-1-4 友人関係による分類ごとの友人関係と援助要請, サポートの受容の差

	クラスタ1 (n=52)		クラスタ2 (n=106)		クラスタ3 (n=76)		クラスタ4 (n=36)		F	η^2	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
自己開示	2.40	0.64	3.25	0.73	3.65	0.51	3.90	0.59	52.46 ***	0.37	1<2<3, 4.
配慮・気遣い	3.23	0.65	4.11	0.49	3.98	0.47	4.33	0.49	42.44 ***	0.32	1<2, 3, 4. 3<4.
傷つき懸念	2.82	0.68	3.76	0.39	2.82	0.41	3.99	0.56	95.38 ***	0.52	1, 3<2, 4.
干渉回避	3.24	0.56	3.69	0.51	3.21	0.50	2.54	0.65	43.40 ***	0.33	4<1, 3<2.
サポート受容	0.58	0.47	1.13	0.41	1.18	0.34	1.26	0.24	33.32 ***	0.27	1<2, 3, 4.
援助要請過剰	3.05	1.45	3.80	1.44	3.86	1.42	5.15	1.15	15.98 ***	0.15	1<2, 3<4.
援助要請回避	3.86	1.28	3.49	1.37	2.77	1.00	2.43	1.21	14.53 ***	0.14	3, 4<1, 2.
援助要請自立	4.44	1.24	4.88	0.87	4.90	0.91	4.68	1.08	2.97 *	0.03	1<2, 3.

注) * $p<.05$, *** $p<.001$

以上の結果を踏まえて、各クラスタの特徴をまとめると、クラスタ 1 は自己開示、配慮・気遣い、傷つき懸念はいずれも低く、干渉回避のみ中程度であった。また、ソーシャル・サポート受容も低く、援助要請を回避する傾向が高かった。この群は友人との関わりを避けるため、自己開示も友人への配慮も他の群よりも少なく、また援助要請にも消極的である点を特徴としていた。また、友人との関わりが薄いため、傷つくことへの懸念も抱く必要がないため、傷つき懸念の得点も低いものと考えられた。このような傾向が読み取れたため、このクラスタを「友人関係回避」群とした。

クラスタ 2 は自己開示がやや低く、配慮・気遣いが中程度であり、傷つき懸念や干渉回避が他の群に比較して高かった。また、クラスタ 1 と同じく援助要請は回避する傾向にあった。この群は傷つき懸念の高さに伴い友人への干渉を回避する傾向も高くなり、傷つかないようにするために自己開示に消極的な特徴が見られた。そのため、このクラスタを「傷つき回避」群とした。

クラスタ 3 は自己開示が高く、傷つき懸念が低かった。このことから他者に自分の内面を打ち明け、また友人から低い評価を受けて傷ついてしまうことを気にしない傾向が読み取れた。この群は援助要請を回避する傾向が低く、自立的な援助要請をする傾向が高いという特徴も見られた。クラスタ 2 と比べても、クラスタ 3 に見られるこれらの傾向は自己開示や援助要請という友人との関わりに対する積極性が表れている。そのため、

このクラスタを「積極的關係」群とした。

クラスタ 4 は自己開示、配慮・気遣い、傷つき懸念がいずれも高く、干渉回避のみが低かった。このことから友人との関係の中で傷つくことに対して意識を向けながらも、同時に友人と積極的に関わろうとするために、自己開示や気遣いの高さ、干渉回避の低さが現れた群であった。また、援助要請に関しては、援助要請回避傾向が低く、援助要請過剰傾向が高かった。このため比較的援助要請に対して積極的であり、見方を変えるとやや援助要請を過剰に行う傾向にあるともとれる。援助要請は自己の弱さを相手に伝えることにもなる行動であるが、傷つくことを懸念しながら、友人に対して自身の弱みを見せることもできる群という特徴が見られた。そのため、このクラスタを「傷つきリスク」群とした。

友人関係の分類による学校への適応の違い

友人関係の分類を独立変数、学校適応感を従属変数とした分散分析の結果を Table 3-1-5 に示した。居心地の良さの感覚において、友人関係回避群はその他の群に比べて得点が低いことが示された($p<.05$)。次に、課題・目的の存在において、友人関係回避群は傷つき回避群に比べて得点が低いことが示された($p<.05$)。次に、被信頼感・受容感において、友人関係回避群は傷つき回避群と積極的關係群に比べて得点が低いことが示された($p<.05$)。最後に、劣等感の無さにおいて、傷つき回避群は積極的關係群に比べて得点が低いことが示された($p<.05$)。

Table 3-1-5 友人関係の分類による学校適応感の差の検討

	友人関係回避(1)		傷つき回避(2)		積極的關係(3)		傷つきリスク(4)		F	η^2	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
居心地の良さの感覚	3.17	0.89	3.82	0.72	3.83	0.54	3.97	0.74	13.10 ***	0.13	1 < 2, 3, 4
課題・目的の存在	3.41	0.93	3.78	0.70	3.63	0.73	3.64	0.82	2.76 *	0.03	1 < 2
被信頼感・受容感	2.63	0.74	3.03	0.78	3.00	0.65	3.02	0.92	3.65 *	0.04	1 < 2, 3, 4
劣等感の無さ	3.31	0.63	3.25	0.79	3.56	0.56	3.42	0.53	3.35 *	0.04	2 < 3

注) * $p<.05$, *** $p<.001$

友人関係ごとの援助要請スタイルおよびソーシャル・サポートの受容が学校適応に与える影響の検討

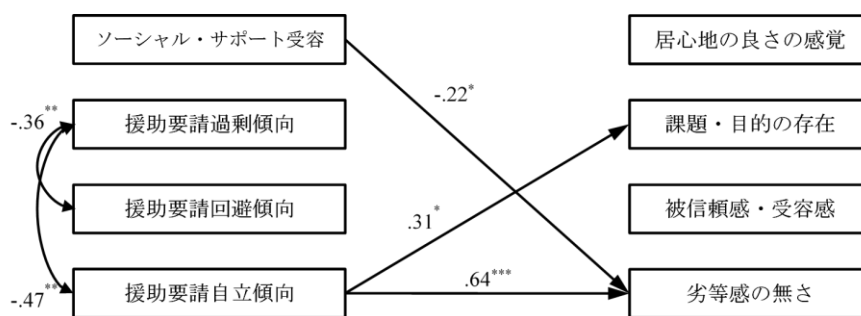
友人関係の分類ごとに、サポートの受容と援助要請傾向が学校適応感に関連するかを

調べるために、友人との付き合い方の各クラスタを異なる母集団から得られたものと仮定した多母集団同時分析を行った。まず、各クラスタに等値制約を置かない配置不変モデルとパス係数に等値制約を置いた弱測定不変モデルを比較した(Table3-1-6)。その結果、等値制約を置かない配置不変モデルの適合度が良かったため、本研究では配置不変モデルを採用した。このモデルの適合度は $CFI=0.89$ 、 $RMSEA=0.04$ であった。以下に各友人関係の分類ごとの援助要請およびソーシャル・サポートが学校適応感に及ぼす影響を検討した。

Table 3-1-6 配置不変モデルと弱測定不変モデルの適合度比較

	χ^2	df	p	AIC	CFI	RMSEA
配置不変モデル	103.64	48	<.001	285.64	0.89	0.04
弱測定不変モデル	157.98	72	<.001	311.98	0.78	0.06

友人関係回避群における影響 友人関係回避群における結果を Figure 3-1-1 に示した。課題・目的の存在に対しては援助要請自立傾向が正の影響($\beta=.31, p<.05$)を示した。劣等感の無さに対してはソーシャル・サポートの受容は負の影響($\beta=-.22, p<.05$)、援助要請自立傾向は正の影響($\beta=.64, p<.001$)を示した。

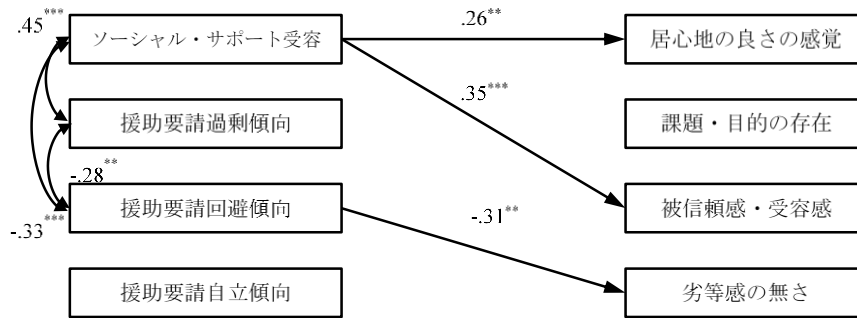


注) 有意なパスおよびパス係数のみ記述した。
* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Figure 3-1-1 友人関係回避群におけるソーシャル・サポート受容および援助要請スタイルの学校適応感への影響

傷つき回避群における影響 傷つき回避群における結果を Figure 3-1-2 に示した。ソーシャル・サポートの受容は居心地の良さの感覚($\beta=.18, p<.01$)と被信頼感・受容感(β

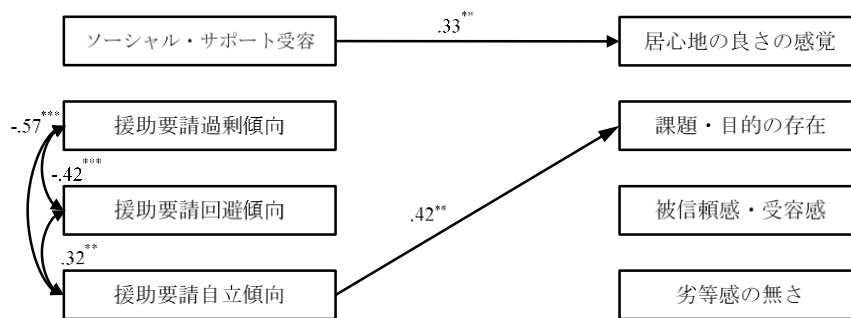
=.35, $p<.01$)に正の影響を示した。援助要請回避傾向は劣等感の無さに負の影響があることを示した($\beta=-.31, p<.01$)。



注) 有意なパスおよびパス係数のみ記述した。
* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Figure 3-1-2 傷つき回避群におけるソーシャル・サポート受容および援助要請スタイルの学校適応感への影響

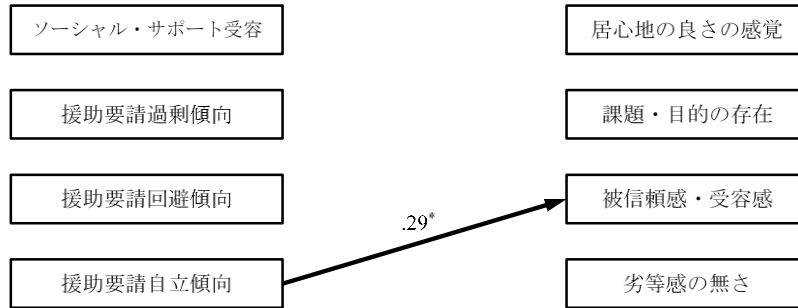
積極的關係群における影響 積極的關係群における結果を Figure 3-1-3 に示した。ソーシャル・サポートの受容が居心地の良さの感覚に正の影響を示した($\beta=.33, p<.01$)。また、援助要請自立傾向($\beta=.42, p<.01$)が課題・目的の存在に対して正の影響を示した。



有意なパスのみ記述
** $p<.01$, *** $p<.001$ 値はパス係数

Figure 3-1-3 積極的關係群におけるソーシャル・サポート受容および援助要請スタイルの学校適応感への影響

傷つきリスク群における影響 傷つきリスク群における結果を Figure 3-1-4 に示した。援助要請自立傾向が被信頼感・受容感に対して正の影響を示した($\beta=.29, p<.05$)。



有意なパスのみ記述
 * $p < .05$, 値はパス係数

Figure 3-1-4 傷つきリスク群におけるソーシャル・サポート受容および援助要請スタイルの学校適応感への影響

考察

友人関係と学校適応感の関連について

本節の第1の目的として、現在の大学生の友人関係のタイプと適応の関連を検討することがあげられた。まず大学生の友人関係のタイプについて検討するために、岡田(2007)の尺度を利用して、大学生の友人関係を4群に分類した。

本節において示された友人関係は「友人関係回避群」、「傷つき回避群」、「積極的關係群」、「傷つきリスク群」の4群であった。この内、友人関係回避群、傷つき回避群、積極的關係群に関しては先行研究で示された友人関係と同様の特徴を有していた。友人関係回避群は中園・野島(2003)の示した無関心群と同様の特徴を持っていた。この無関心群の特徴は深い関わりを避け、評価懸念が低く、友人への配慮も少ないことが指摘されている。また、傷つき回避群は友人への配慮や傷つくことへの懸念が高いことを特徴としていることから岡田(2007)で得られた自他が傷つくことを避ける友人関係と類似した特徴を持つ群であった。積極的關係群は他者との親密な関わりを持つという従来の青年像に合致した内面的友人関係(岡田, 2007)に対応した特徴を有すると言える。一方で、本節で得られた傷つきリスク群は自分や相手が傷つかないようにする配慮などの現代的な特徴(岡田, 2007)を持ちつつ、自己開示に対しても積極的な姿勢を持っているとい

う特徴が見られた。

本節ではこれらの友人関係の分類によって適応が異なるかを検討するために、友人関係による学校適応感の差を分析した。その結果、居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼感・受容感のいずれにおいても友人関係回避群の適応感が低いという結果が得られた。一方、劣等感の無さにおいて傷つき回避群は積極的關係群よりも低く、劣等感を感じやすいということが示された。ただし、居心地の良さの感覚を除いた学校適応感については、効果量がいずれも低かった($\mu^2=.03\sim.04$)ため、本節では特に居心地の良さの感覚について考察する。

本節において、学校への適応という側面に関して他の群に比べて学校に居心地の良さを感じられていない群は、友人関係を回避するタイプであった。青年にとって友人関係は学校での適応感に影響している(大久保, 2005)ように、友人関係に対して消極的である青年は友人関係からの良い影響を享受しにくく、そのため他の群に比べて適応感が低くなったものと思われる。また、この群は友人からのソーシャル・サポートも他の群に比べて受けておらず、援助要請も回避的である。ソーシャル・サポートの受容も援助要請も一概に適応に良い影響を与えるとは言えない(菊島, 2003 ; Ryan et. al., 2005)が、友人関係に消極的な青年は援助の要請を回避し、友人からサポートを受ける機会を低減していることが示された。

一方で、傷つき回避群は友人関係回避群と同様に援助要請を回避する傾向を示したものの、ソーシャル・サポートの受容は低くならなかった。友人関係回避群は傷つき回避群と比べて自己開示を避ける傾向が強い。自己開示について、自分の内面性に触れるような深いレベルではなく、比較的表層的な悩みの自己開示を行うことが、相互の関係を発展させ、ソーシャル・サポートの知覚を高めることにつながる(城, 2012)と言われる。本節においては自己開示の深さについては検討していないものの、友人関係回避群においては友人に対する自己開示を避けてしまう傾向が他の群より強かったため、ソーシャル・サポートの受容が低くなったことが考えられる。

自己開示に積極的である、積極的關係群と傷つきリスク群の2種類のタイプは先行研究と同様に適応的な傾向を示した。自己開示が適応に与える影響について、城(2012)は自己開示を行う傾向にあることが、ソーシャル・サポートの知覚に影響し、ソーシャル・サポートの知覚が被受容感に影響することを示した。積極的關係群と傷つきリスク群が

居心地の良さの感覚、ソーシャル・サポートの受容が共に高かったことから自己開示を行える友人関係は適応に良い影響を与えやすいことが指摘できる。積極的關係群と傷つきリスク群では他の2群に比べて、より援助要請を回避しようとする傾向が低かった。援助を要請する人物として適当かどうかの判断には親密さが関係している（高木, 1997）ことから、積極的關係群の青年の友人関係がより親密な関係を築いていることが予想される。特に、他者に援助を求めることは、自己の立場の弱さ、対処能力の低さ等を自己自身および他者に伝える側面を持つ（脇本, 2008）が、傷つくことへの意識が強い傷つきリスク群でも援助要請が行われているということは、傷つきリスク群の青年たちは友人に援助を求めることによって自己の評価が低くなるとは感じにくい可能性がある。また、この2群では友人間における自己開示が積極的であるため、より友人同士の情報が共有されていると考えられる。その結果、お互いに適切なサポートをし合う関係を作りやすくなっている可能性も指摘できる。

傷つきリスク群では、自己開示得点の高さ、および干渉回避得点の低さから、友人との心理的距離が近いものと予想される。この心理的距離について、友人とのズレが生じるならば、坂本・高橋(2009)が指摘するように不適応になり得るが、本研究において不適応は見られていない。このことから、心理的距離の近さを求める青年同士がその関係で傷つくことは避けながらも、お互いに学校内での居心地の良さを提供し合っているのではないだろうか。また、傷つきリスク群の特徴として困難でない問題においても友人の援助を求める傾向が見られた。過剰に援助要請を行ってしまうことは不適応的であることが示唆されている（永井, 2017 ; Ryan et.al., 2005）。しかし、本研究からは援助要請を過剰に行う傾向が見られる傷つきリスク群は不適応的ではなかった。援助要請を過剰に行う理由として、相手から見捨てられることを恐れるが故に、相手に受容や共感を多く求める（永井, 2017）ことが指摘されている。傷つきリスク群の大学生は積極的に自己開示をし、友人に対してある程度干渉する傾向を持つため、例え困難でない問題だとしても友人に相談するという傾向があり、その相談するという自己開示が彼らの適応的な友人関係を支えていることが予想される。

各友人関係における援助要請スタイルおよびソーシャル・サポートが学校適応に与える影響について

本節の第2の目的は友人関係の分類ごとに援助要請やソーシャル・サポートの受容が学校適応に対して異なる影響を持つかどうかを検討するという点であった。

まずそれぞれの友人関係のタイプによって援助要請スタイルとソーシャル・サポート受容の影響は、その影響の有無も含めて各群で異なることが本研究から示された。援助の要請も、友人からサポートを受けることも、それらが生起する友人関係の存在が前提となる。そのため、それぞれの友人関係のタイプによって援助要請のスタイルやサポートの受容による適応への影響が異なるという結果が示されたと考えられる。

本研究では友人関係回避群においてはソーシャル・サポートを受容しているほど劣等感を感じることを示された。ソーシャル・サポートがネガティブな効果をもたらす状況の一つに被援助者と親密な関係でない援助者からのサポートが指摘されている(菊島, 2003)。友人関係回避群の大学生は、友人関係を回避する傾向から、ポジティブなサポートを受けられるような親密な関係性を維持、もしくは形成するのが難しくなっている可能性がある。一方で、この群ではサポートを求める前に自分自身で問題の解決を試みるという援助要請自立傾向が高いと、劣等感が低減されるという結果が得られた。援助要請自立傾向が高いとサポートを受ける機会の減少につながると思われるが、不要なサポートを受け取らずにすむために、結果として友人関係回避群においては劣等感が低くならないと考えられる。劣等感を低める効果が表れたのが、サポートを受けることを避ける援助要請回避傾向ではなく、援助要請自立傾向だったことから、友人関係回避群の青年においても、サポートの受容を全て避けることが適応的というわけではないと言える。単純にサポートを避けるのではなく、彼ら自身の問題解決能力とサポートの受容との折り合いをつけることが重要であろう。

一方で傷つき回避群ではソーシャル・サポートの受容が高いほど、居心地の良さや被信頼感・受容感が、積極的關係群では居心地の良さという点で学校適応感を促進するという結果が得られた。これらの結果は従来と同様なソーシャル・サポートの効果(福岡, 2010)が得られたと言える。特に、傷つき回避群の青年は、援助要請を回避しがちであるが、そのような友人関係の中でソーシャル・サポートの効果が見られているため、援助要請を行うスキルの向上によって、より学校適応感を向上させられる可能性もある。

本研究によって分類された友人関係のうち、傷つきリスク群においては、ソーシャル・サポートの受容の程度は学校適応に影響しないという結果が得られた。この結果から親密な友人関係を築いていると考えられるこの群では、ソーシャル・サポートの受容の量が増えることが適応に良い影響を及ぼしているとは言えないという可能性が示唆される。単純な量の増加による検討ではなく、どのようなサポートを受けているかなど、多様な側面からの検討が必要であろう。また、傷つきリスク群においては、援助要請自立傾向が被信頼感・受容感を予測するという結果が得られた。傷つきリスク群は友人へ配慮する傾向も高いため、自身の困窮状態を踏まえた適度な援助要請ができることが友人からの信頼や受容を高めると思われる。

第2節 傷つきを回避する傾向と友人への援助行動による学校適

応感の検討

目的

第1節では友人関係の特徴を踏まえた上で、サポートの受容と学校適応感の関連を検討した。しかし、サポートを受けるだけでなく、サポートを提供できることも、個人の心理的な安定にとっては重要であると言われる(Lu & Argyle, 1992)。援助行動が生じる相手としては親密な他者や自身の身内が選ばれやすく (Stürmer, et al., 2006; 植村, 1999)、友人との関係は大学生にとって援助行動を実行しやすい場面であると言える。大学生が援助行動を行うことによって、彼らの適応が促進される可能性があることから、友人関係で生じる援助行動を検討することは、大学生の適応感に寄与する要因を明らかにすることに繋がる。

しかし、援助行動は友人相手だからといって、いつでも、あるいは誰もが行うわけではない。援助することが相手のプライドなどを傷つけてしまうという懸念は援助行動を躊躇させる要因ともなり、傷つくことを避けようとする青年は援助行動に消極的となることが示唆されている(満野・三浦, 2010)。これらの研究からも、友人関係において傷つきを回避する傾向と援助行動によって、大学生の適応がどのように異なるのかを検討していく必要がある。

そこで、本節では大学生の学校適応感に影響する要因として、友人との付き合い方に加えてその関係で生じる援助行動も取り入れて検討する。具体的には友人関係で傷つきを回避する傾向と、援助行動がそれぞれ学校適応感にどのように影響するのかを重回帰分析によって明らかにする。また、友人関係で傷つきを回避する傾向と、援助行動の交互作用効果についても検討する。

方法

調査協力者

調査は2016年6月～7月に3つの大学で行われた。1つ目の大学(大学A)は茨城県に所在する大学であり、協力者の人数は63名(男性17名、女性46名)であった。東京都に

所在する2つ目の大学(大学 B)での協力者の人数は62名(男性28名, 女性34名)であった。同じく東京都に所在する3つ目の大学(大学 C)での協力者の人数は91名(男性30名, 女性61名)であった。調査協力者は合計216名(男性75名, 女性141名)であった。平均年齢は19.36歳(SD=2.63)であり, 学年の内訳は1年生115名, 2年生57名, 3年生31名, 4年生13名であった。

質問用紙の配布の際には, 調査の目的についての説明と, 以下の倫理的な配慮を行った。第1に調査への協力は任意であり, 回答をしないことによる不利益がないことを伝えた。第2に, 調査の途中で回答をやめたくなくなった場合には, 途中で回答をやめても不利益がないことを伝えた。第3に調査によって得られた個人情報に厳重に管理することを伝えた。調査用紙の表紙では上記の倫理的配慮と調査の目的を記した。以上の調査目的および倫理的な配慮に同意できた場合には以下の尺度からなる質問用紙への回答を求めた。

調査内容

本研究では学年, 年齢, 性別の他に以下の尺度への回答を求めた。

学校への適応感尺度(大久保, 2005) この尺度は「居心地の良さの感覚」, 「課題・目的の存在」, 「被信頼感・受容感」, 「劣等感の無さ」の4因子30項目からなり, 「全くあてはまらない(1点)」～「非常によくあてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めるものであった。

友人への援助行動尺度 この尺度は永井(2013)によって作成された友人への愛他行動尺度を元に菊池(1988)による向社会的行動尺度(大学生版)などの援助行動を測定している尺度や, 満野・三浦(2010)の研究で用いられている場面を参考に, 大学生が日常的に遭遇すると思われる18の場面を選択して援助行動の項目とした。提示されたそれぞれの項目について, 自分が普段友人に対して援助行動を行っているかどうかを5件法(1.全くしないと思う～5.とてもすると思う)によって尋ねた。

友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度(岡田, 2012) この尺度は友人関係において自分が傷つくことや相手を傷つけてしまうことを回避する傾向を測定する尺度(以下「傷つけ合い回避尺度」と略称)であった。「傷つけられ回避(友だちからバカにされないように気をつけるなど)」9項目, 「距離確保(自分の内面的なことは話さ

ないようにするなど)」7項目、「礼儀(自分が悪いと思ったらすぐに謝るなど)」9項目、「傷つけ回避(友だちの気分を害するようなことを言わないようにするなど)」8項目の全33項目からなる尺度であった。それぞれの項目は岡田(2012)に従い、「1. 全くあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. ややあてはまる」、「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

分析方法

本研究では得られたデータに対して以下の分析を行った。

第1に友人への援助行動の積極性尺度に対して因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。

第2に, 友人関係における傷つけ合い回避の各下位尺度と援助行動の積極性を独立変数, 学校適応感を従属変数として重回帰分析を行った。本節では主効果と交互作用効果を検討するために階層的回帰分析を行った。ステップ1では傷つけ合い回避尺度と援助行動を投入し, ステップ2では傷つけ合い回避尺度と援助行動の交互作用項を投入した。交互作用が有意であった場合には単純傾斜の分析を行った。単純傾斜の分析には基準として±1SDを用いた。

結果

友人への援助行動尺度に対する因子分析

本研究で用いた援助行動尺度に対して探索的因子分析を行った(最尤法, プロマックス回転)。固有値が1以上となることと, 因子負荷量が.40に満たない項目, 複数の項目に因子負荷量の高い項目を除外するという基準のもとに因子分析を繰り返した。その結果, 17項目が2因子にまとまった (Table3-2-1)。

第1因子には「友人が辛い思いをしている時になぐさめる」や、「困っている友人の相談にのる」などの友人に対して実際に行動を起こすことで生じる援助行動の項目がまとまった。一方で第2因子には「辛い思いをしている友人に声をかけずに見守る」や、「友人が落ち込んでいる時に一人にしておく」などの実際には行動として現れない援助行動の項目がまとまった。そのため第1因子を「積極的援助」因子, 第2因子を

「見守りの援助」因子とした。

Table 3-2-1 友人への援助行動の積極性尺度の探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)結果

	I	II
積極的援助		
10 友人がづらい思いをしている時になぐさめる。	.76	.27
3 困っている友人の相談に乗る。	.75	-.17
18 落ち込んでいる友人を励ます。	.72	.24
11 筆記用具を忘れた友人に自分の筆記用具を貸す。	.72	-.02
9 友人にプリントをコピーさせてあげる	.69	.24
1 体調不良の友人に付き添う。	.66	-.14
8 授業を休んだ友人にノート・プリントなどを貸す。	.66	-.04
16 友人が悩んでいる時にその悩みを聞く。	.63	-.02
14 気落ちしている友人の傍にいる。	.62	-.20
2 友人の苦手な作業を代わりにやる。	.57	.04
4 友人を気遣ってメールや電話をする。	.57	-.22
13 探し物をしている友人を手伝う。	.51	-.15
見守りの援助		
7 つらい思いをしている友人に声をかけずに見守る。	-.02	.69
15 友人が落ち込んでいる時に一人にしておく。	.01	.66
12 困っている友人をそっとしておく。	-.09	.59
17 疲れている友人をそっとしておく。	.25	.51
5 友人が悩んでいる時に悩み事に触れない。	.01	.49
因子間相関		
	I	II
	II	-.37

次に、各変数の記述統計量、 α 係数、相関係数を Table3-2-2 に示した。いずれの下位尺度も許容できる信頼性が確認された(α 係数=.72~.92)。

Table 3-2-2 各変数間の記述統計量, α 係数, 相関係数

	M	SD	α 係数	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
学校適応感												
(1) 居心地の良さの感覚	3.56	0.75	.92									
(2) 課題・目的の存在	3.68	0.76	.86	.54 ***								
(3) 被信頼感・受容感	3.08	0.73	.86	.74 ***	.52 ***							
(4) 劣等感のなさ	3.38	0.68	.73	.38 ***	.31 ***	.32 ***						
友人への援助行動												
(5) 積極的援助	3.88	0.61	.90	.42 ***	.32 ***	.35 ***	.54 ***					
(6) 見守りの援助	3.15	0.62	.72	-.12	-.03	-.10	-.16 *	-.29 ***				
傷つけ合い回避												
(7) 傷つけられることの回避	3.03	0.84	.86	-.18 *	-.02	-.13	-.19 **	-.01	.03			
(8) 距離確保	2.64	0.87	.87	-.26 ***	-.11	-.19 **	-.22 **	-.31 ***	.13	.65 ***		
(9) 礼儀	3.98	0.59	.81	.16 *	.17 *	.20 **	.16 *	.39 ***	-.03	.42 ***	.20 **	
(10) 傷つけることの回避	3.43	0.72	.81	.01	.07	.05	-.04	.06	.05	.65 ***	.55 ***	.64 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

傷つけ合いの回避と援助行動による学校適応感への影響

傷つけ合い回避尺度と援助行動尺度を独立変数とし、学校適応感尺度を従属変数とした階層的回帰分析を行った。学校適応感の下位尺度のいずれに対してもステップ1では傷つけ合い回避尺度と援助行動尺度をそれぞれ独立変数として投入し、ステップ2では傷つけ合い回避尺度と援助行動尺度の交互作用項を投入した。交互作用効果が見られた際には単純傾斜の分析を行った。

居心地の良さの感覚への影響 まず学校適応感の居心地の良さの感覚への影響を検討した(Table3-2-3)。その結果、積極的援助と傷つけることの回避に正の効果が見られた($\beta = .38, p < .001$, $\beta = .20, p < .05$)。そのため、本研究では積極的援助を行う青年ほど、また友人を傷つけることを避けようとする青年ほど、大学において居心地の良さを感じていることが示された。一方で、傷つけられることの回避に負の効果が見られた($\beta = -.22, p < .05$)。そのため、友人関係で傷つくことを避けようとする青年ほど、大学において居心地の良さを感じにくいことが示された。

居心地の良さの感覚に対しては、交互作用効果を投入したことによる R^2 値の上昇量は有意ではなかった($\Delta R^2 = .03, p > .05$)。

Table3-2-3 居心地の良さの感覚に対する援助行動と傷つけ合い回避の影響

	β	R^2	ΔR^2	$adjR^2$
ステップ1		.23		.21 ***
積極的援助	.38 ***			
見守りの援助	.01			
傷つけられることの回避	-.22 *			
距離確保	-.10			
礼儀	.01			
傷つけることの回避	.20 *			
ステップ2		.25	.03	.21 ***
積極的援助×傷つけられることの回避	-.05			
積極的援助×距離確保	.13			
積極的援助×礼儀	.00			
積極的援助×傷つけることの回避	.05			
見守りの援助×傷つけられることの回避	.08			
見守りの援助×距離確保	-.10			
見守りの援助×礼儀	-.04			
見守りの援助×傷つけることの回避	-.05			

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

課題・目的の存在への影響 次に課題・目的の存在への影響を検討した(Table3-2-4)。その結果、積極的援助に正の効果が見られた($\beta=.30, p<.001$)。そのため、本研究では積極的援助を行う青年ほど、大学において自身の課題や目的を感じていることが示された。

課題・目的の存在に対しては、交互作用効果を投入したことによる R^2 値の上昇量は有意ではなかった($\Delta R^2=.02, p>.05$)。

Table3-2-4 課題・目的の存在に対する援助行動と傷つけ合い回避の影響

	β	R^2	ΔR^2	$adjR^2$
ステップ1		.11		.09 ***
積極的援助	.30 ***			
見守りの援助	.06			
傷つけられることの回避	-.06			
距離確保	-.04			
礼儀	.03			
傷つけることの回避	.10			
ステップ2		.14	.02	.08 **
積極的援助×傷つけられることの回避	.18			
積極的援助×距離確保	.05			
積極的援助×礼儀	-.01			
積極的援助×傷つけることの回避	-.06			
見守りの援助×傷つけられることの回避	.03			
見守りの援助×距離確保	-.04			
見守りの援助×礼儀	-.05			
見守りの援助×傷つけることの回避	.04			

注) ** $p<.01$, *** $p<.001$.

被信頼感・受容感への影響 次に被信頼感・受容感への影響を検討した(Table3-2-5)。その結果、積極的援助に正の効果が見られた($\beta=.27, p<.01$)。そのため、本研究では積極的援助を行う青年ほど、大学において他者からの信頼感や受容感を得ていることが示された。一方で、傷つけられることの回避に負の効果が見られた($\beta=-.23, p<.05$)。そのため、友人関係で傷つくことを避けようとする青年ほど、大学において他者からの信頼感や受容感を得にくいことが示された。

被信頼感・受容感に対しては、交互作用効果を投入したことによる R^2 値の上昇量は有意ではなかった($\Delta R^2=.02, p>.05$)。

Table3-2-5 被信頼感・受容感に対する援助行動と傷つけ合い回避の影響

	β	R^2	ΔR^2	$adjR^2$
ステップ1		.17		.14 ***
積極的援助	.27 **			
見守りの援助	-.01			
傷つけられることの回避	-.23 *			
距離確保	-.06			
礼儀	.11			
傷つけることの回避	.14			
ステップ2		.18	.02	.13 ***
積極的援助×傷つけられることの回避	.16			
積極的援助×距離確保	.04			
積極的援助×礼儀	-.05			
積極的援助×傷つけることの回避	-.01			
見守りの援助×傷つけられることの回避	.07			
見守りの援助×距離確保	-.02			
見守りの援助×礼儀	-.01			
見守りの援助×傷つけることの回避	.00			

注) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$.

劣等感のなさへの影響 最後に劣等感のなさへの影響を検討した(Table3-2-6)。その結果、積極的援助に正の効果が見られた($\beta = .47, p < .001$)。そのため、本研究では積極的援助を行う青年ほど、大学において劣等感を抱きにくいことが示された。一方で、傷つけられることの回避に負の効果が見られた($\beta = -.29, p < .01$)。そのため、友人関係で傷つくことを避けようとする青年ほど、大学において劣等感を抱きやすいことが示された。

劣等感のなさに対しては、交互作用効果を投入したことによる R^2 値の上昇量は有意であった($\Delta R^2 = .04, p < .05$)。積極的援助と傷つけられることの回避の交互作用項が正の効果を示した($\beta = .18, p < .05$)。交互作用効果が見られたため、単純傾斜の分析を行った(Figure3-2-1)。傷つけられることの回避に平均値 $\pm 1SD$ の値を代入した時の積極的援助の効果を検討したところ、傷つけられることの回避の得点が高い場合、積極的援助に正の効果が見られた($\beta = .27, p < .001$)。傷つけられることの回避の得点が高い場合、積極的援助の効果は有意ではなかった($\beta = .04, p > .05$)。そのため、傷つけられることを回避する青年の場合、積極的な援助行動を行うほど、劣等感を抱きにくくなることが示された。

Table3-2-6 劣等感のなさに対する援助行動と傷つけ合い回避の影響

	β	R^2	ΔR^2	$adjR^2$
ステップ1		.33		.31 ***
積極的援助	.30 ***			
見守りの援助	.00			
傷つけられることの回避	-.27 **			
距離確保	.12			
礼儀	.00			
傷つけることの回避	.04			
ステップ2		.36	.04 *	.34 ***
積極的援助×傷つけられることの回避	.19 *			
積極的援助×距離確保	.00			
積極的援助×礼儀	-.04			
積極的援助×傷つけることの回避	-.05			
見守りの援助×傷つけられることの回避	.05			
見守りの援助×距離確保	-.04			
見守りの援助×礼儀	-.17			
見守りの援助×傷つけることの回避	.06			

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

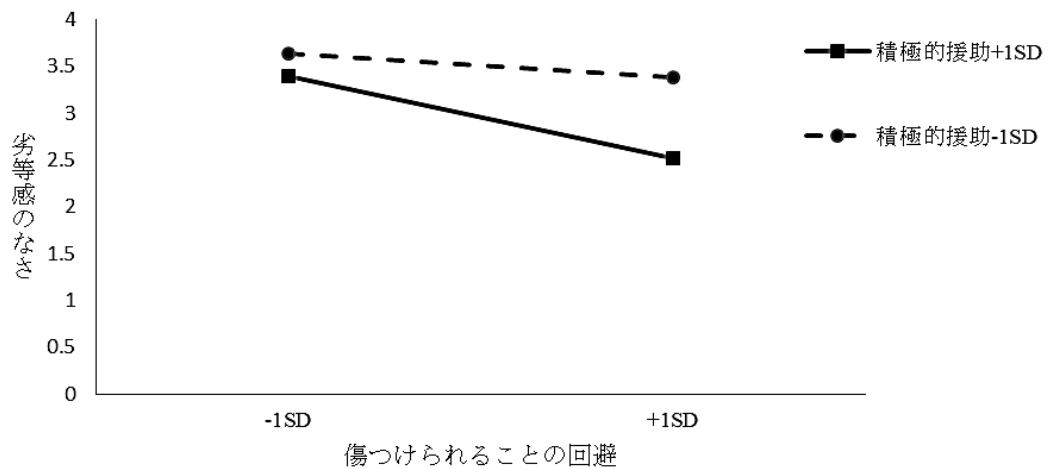


Figure3-2-1 積極的援助と傷つけられることの回避による劣等感のなさへの単純傾斜

考察

本研究では大学生の学校適応感に対して、友人への援助行動と傷つけられること・傷つけることを回避する傾向がどのように影響しているかを検討することを目的とした。

まず、自他の傷つきを避けようとする傾向と友人への援助行動の相関係数は非常に小さかった。満野・三浦 (2010) は援助行動の抑制要因として、思いやりの気持ちの低下、社会的スキルの低下に加えて傷つけてしまうことの懸念があげられていた。本研究では傷つけてしまうことを避ける傾向も、自分が傷つくことを避ける傾向のいずれも非常に小さな相関係数にとどまった。満野・三浦 (2010) は仮想的な場面に対してどのように行動するかという予測を用いて検討したのに対し、本調査では普段の自身の行動を振り返る形式で検討した。この違いにより、傷つきを気にしやすい大学生であっても、実際の場面に基づく援助行動の評価では、仮想的な場面に対する回答と異なる結果になった可能性がある。本調査では友人関係への意識、援助行動ともに質問紙調査によって一時点のみの評価になっている。援助行動の調査では尺度への回答の他、仮想的な場面での行動の予測、援助行動の頻度など、様々な方略で検討されている。友人との付き合い方と援助行動の関連については、その他の要因や研究方法なども含めて今後のさらなる検討が必要であろう。

次に、学校適応感の複数の側面に対して、積極的な援助行動を行う傾向と傷つけられることを回避しようとする傾向が関連していることが示唆された。また、劣等感のなさについては交互作用も見られた。友人関係で傷つけられることを回避する態度をとる大学生では、積極的な援助行動を行わない大学生の方が劣等感を感じやすくなっているということが明らかになった。

これまでの研究で傷つきを避けるような表面的な友人関係をとる青年の不適応的な側面が指摘されてきた(岡田, 1999)。本節でも学校適応感という点では傷つけられることを回避する傾向が高いほど、学校適応感を抱きにくくなることが示された。岡田(2012)では友人から傷つけられることを避ける傾向は被拒絶感に直接の負の効果が見られている点も、本調査において傷つけられることを回避する傾向が高くなると、大学での被信頼感・受容感を得にくいという結果と一致している。本研究から友人関係における被拒絶感という問題だけではなく、大学生にとって主な生活の場である大学での適応感にも影響し得るものということが明らかになった。

また、援助行動に関しては、積極的に友人に援助行動を行う傾向を示す大学生ほど、大学での適応感を抱いていることが明らかになった。援助行動について、それを行うことの効果がこれまでに指摘されてきた(妹尾, 2001)。本研究ではこれらの知見に加えて、大学での適応感についても、援助行動が行えることが重要な役割を持つということが示唆された。本研究では行動として現れない援助行動(満野・三浦, 2010)も扱ったが、行動として現れない援助行動は学校適応感を促進する効果を得られなかった。援助行動に対する成否の判断は被援助者の観察により行われる(高木, 1997)。本研究で扱った「見守る」という実質的には行動を生じさせていない援助では、その援助行動の成否を判断させるような状況の変化は認識されず、そのため援助行動の結果として生じる自尊感情の高揚や関係の発展などが生じなかったと考えられる。

最後に本研究では劣等感に対してのみ交互作用が見られた。傷つけられることを回避する傾向の低い青年は、援助行動の有無に限らず劣等感は低く適応的な傾向にある。傷つけられることを回避する傾向の高い青年に対しては、援助行動を行うことによって劣等感を感じにくくなることが示された。援助行動を行うことは、援助者にとっても自尊感情の高揚などの効果がある(Bonhote, et al., 1999)。このような効果は特に劣等感を抱きやすい大学生にとっては援助行動が適応を促す要因ともなり得る。また、援助行動を

行った経験は、次回の援助行動を動機づける（松浦，2006；高木，1997）ため，友人に対して援助行動を積極的に行うことで，劣等感の抑制や友人関係の向上などの成果が得られ，さらにその後の援助行動も動機づけられるという好循環が生じる可能性が示唆された。

第3節 ソーシャルスキルと傷つき回避による友人関係の分類

および居場所感の違い

目的

ここまで第1節、第2節と学校での適応と友人関係の関連を検討してきた。第3節では大学生の友人関係の適応として居場所の実感を取り上げる。大学生においても居場所は重要であり(飯田他, 2011), 大学生の良好な友人関係は「ありのままの自分でいい」などの「安心できる」という関係性から成立していることも指摘されている(水野, 2004)ように, 青年の友人関係が居場所として機能しているかどうかは重要である。

友人関係において, 相手に踏み込まないような気遣いをする理由の一つにソーシャルスキルの未熟さが指摘されている(白井, 2006)。しかし, 傷つきを避けるために気を遣う大学生が皆, 一様にソーシャルスキルが低いとは考えにくい。ソーシャルスキルには相手との関係を良好に保つために配慮するというスキルが含まれているからである(相川・藤田, 2005)。相手を傷つけてしまうことを避けることで受容感を得る(岡田, 2011)ことができるということは, 友人を傷つけない配慮ができたとも言え, それはソーシャルスキルを駆使した結果と捉えることができる。第1節, 第2節ではサポートの受容およびサポートの提供という点から友人関係と適応の関係を明らかにすることを試みた。しかし, サポートは常に必要としている時に提供されるとは限らず, 援助行動は常に成功するとは限らない。これらを円滑に行い, 関係の維持や向上のためには対人場面におけるソーシャルスキルが必要である。

これまで大学生の友人との付き合い方はいくつかのタイプに分けて検討されてきた(橋本, 2000; 中園・野島, 2003; 落合・佐藤, 1996; 岡田, 2007, 2011)。第1節でも友人関係のタイプに分けることで, それぞれのタイプの特徴を理解することを試みた。しかし, それぞれのタイプの中にもソーシャルスキルに優れた大学生と, そうではない大学生が混在していると考えられる。

そこで, 本節では傷つくことを回避する傾向だけではなく, 対人場面で発揮されるソーシャルスキルをどの程度備えているかという視点も含めて, 大学生の友人との付き合い方を分類することを試みる。この分類を通して, 傷つくことを回避する傾向を持つ大学生の中にも, 円滑な対人関係を実現することが得意な大学生とそうではない大学生が

いることを示す。そして、彼らの特徴を社会的な適応と言える居場所の実感を得ているかどうかという点からも検討する。

なお、ソーシャルスキルについては、性差があることも指摘されている(二塚・尾田, 2004) ため、本節では性差についても考慮にいれて検討する。

方法

調査協力者

本研究では5つの大学での協力が得られた。1つ目の大学(大学A)は茨城県に所在する大学であり、協力者の人数は96名(男性20名, 女性76名)であった。残る4つの大学(大学B~E)は東京に所在する大学であった。2つ目の大学(大学B)での協力者の人数は69名(男性22名, 女性46名, 不明1名)であった。3つ目の大学(大学C)での協力者の人数は75名(男性24名, 女性51名)であった。4つ目の大学(大学D)での協力者の人数は54名(男性36名, 女性17名, 不明1名)であった。5つ目の大学(大学E)での協力者の人数は93名(男性32名, 女性61名)であった。本研究では合計387名(男性134名, 女性251名, 不明2名)の大学生の協力を得た。学年の内訳は1年生166名, 2年生153名, 3年生42名, 4年生26名, 不明2名であった。この内、データに欠損のなかった357名(男性122名, 女性235名)を分析対象とした(有効回答率92.25%)。大学A~Cでは2015年の4~6月に調査が行われ、大学Dでは2015年の10月に調査が行われた。大学Eでは2016年の7月に調査が行われた。

質問用紙の配布の際には、調査の目的についての説明と、以下の倫理的な配慮を行った。第1に調査への協力は任意であり、回答をしないことによる不利益がないことを伝えた。第2に、調査の途中で回答をやめなくなった場合には、途中で回答をやめても不利益がないことを伝えた。第3に調査によって得られた個人情報に厳重に管理することを伝えた。調査用紙の表紙では上記の倫理的配慮と調査の目的を記した。以上の調査目的および倫理的な配慮に同意できた場合には以下の尺度からなる質問用紙への回答を求めた。

調査内容

本研究では学年、年齢、性別に加えて以下の尺度への回答を求めた。

居場所尺度(原田・滝脇, 2014) この尺度は社会的居場所と個人的居場所の2通りの居場所を測定する尺度であった。社会的居場所は「所属的居場所(いつでも一緒にいられる仲間がいる, 居心地のよい関係があるなど)」、「受容的居場所(自分の良いところも悪いところもすべていつも認めてくれている人がいる, 居心地のよい関係があるなど)」、「承認的居場所(自分の能力をいつも必要としてくれる人がいる, 居心地のよい関係があるなど)」の3つの下位尺度(計15項目)からなり、それぞれの下位尺度に含まれる項目は各5項目であった。個人的居場所は「内省的居場所(将来のことを一人で考えることができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもあるなど)」、「解放的居場所(人から離れて一人でストレスを解消することができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもあるなど)」の2つの下位尺度(計8項目)からなり、「内省的居場所」が5項目、「解放的居場所」が3項目であった。それぞれの項目は原田・滝脇(2014)に従い、「1. 全くあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. ややあてはまる」、「4. とてもあてはまる(4点)」の4件法で回答を求めた。本研究では社会的居場所に関しては友人関係における居場所に対して回答するように教示した。社会的居場所尺度は他者との関わりから構成される居場所を測定するものであったため、その他者を友人と指定することで、友人関係の中で居場所を保持できているかどうかの指標とした。

本尺度の信頼性と妥当性は原田・滝脇(2014)によって確認された。原田・滝脇(2014)では居場所尺度によるクラスタ分析が行われており、この結果、社会的居場所尺度、個人的居場所尺度のいずれも高い1つ目の群、どちらかのみが低い2つ目、3つ目の群と分類された。その上で、これらの群間で自己肯定意識に仮説通りの差が認められたことから妥当性が確認された。そのため、本研究では社会的居場所、個人的居場所の各下位尺度は用いず、社会的居場所尺度(15項目)と個人的居場所尺度(8項目)を居場所の実感の指標とした。それぞれの居場所尺度に含まれる項目の平均値を社会的居場所得点、個人的居場所得点とし、各得点が高いほど、居場所を実感できていることを表した。

友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度(岡田, 2012) この尺度は友人関係において自分が傷つくことや相手を傷つけてしまうことを回避する傾向を測定する尺度(以下「傷つけ合い回避尺度」と略称)であった。「傷つけられ回避(友だちから

バカにされないように気をつけるなど)」9項目、「距離確保(自分の内面的なことは話さないようにするなど)」7項目、「礼儀(自分が悪いと思ったらすぐに謝るなど)」9項目、「傷つけ回避(友だちの気分を害するようなことを言わないようにするなど)」8項目の全33項目からなる尺度であった。それぞれの項目は岡田(2012)に従い、「1. 全くあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. ややあてはまる」、「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。各下位尺度に含まれる項目の得点の平均値を各下位尺度の得点として用いた。各得点が高いほど、それぞれの友人関係の付き合い方をしていることを表した。

本尺度の信頼性と妥当性は岡田(2012)によって確認された。アサーションの心理的要因における「配慮・熟慮」の下位尺度と岡田(2011)で示されたモデルとの関連から本尺度の妥当性が確認された。

成人用ソーシャルスキル尺度(相川・藤田, 2005) この尺度は複数の側面からソーシャルスキルを測定するものであった。尺度は「関係開始(相手とすぐに、うちとけられるなど)」8項目、「解読(表情やしぐさで相手の思っていることがわかるなど)」8項目、「主張性(自分が不愉快な思いをさせられたときには、はっきりと苦情を言うなど)」7項目、「感情統制(感情をあまり面にあらわさないでいられるなど)」4項目、「関係維持(相手の立場を考えて行動するなど)」4項目、「記号化(表情が豊かであるなど)」4項目であった。それぞれの項目は相川・藤田(2005)に従い、「1.ほとんどあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. ややあてはまる」、「4. かなりあてはまる」の4件法で回答を求めた。それぞれの得点が高いほど、高いソーシャルスキルを有していることを表した。本尺度の信頼性と妥当性は相川・藤田(2005)によって確認された。ソーシャルスキルの各下位尺度と対人不安、孤独感、抑うつとの関連から本尺度の妥当性が確認された。その際に「感情統制」はその他のソーシャルスキルとは異質であると結論付けられており、ソーシャルスキルの算出について、相川・藤田(2005)は「感情統制」尺度の項目を除いた5つの下位尺度の合計を用いることを提案した。そこで本研究では感情統制尺度に含まれる4項目を除いた31項目の平均値によってソーシャルスキルの得点とした。

分析方法

本研究では得られたデータに対して SPSS ver.20 を用いて以下の分析を行った。

まず、得られたデータの記述統計量を確認した。

次に、友人との付き合い方のタイプを検討するために友人関係の傷つけ合い回避尺度の各下位尺度とソーシャルスキル尺度を用いて Ward 法によるクラスタ分析を行った。また、クラスタごとの特徴を明らかにするために、各クラスタを独立変数とし、傷つけ合い回避尺度の下位尺度とソーシャルスキル尺度を従属変数とした 1 要因の分散分析を行った。有意差が得られた場合には Tukey の HSD による多重比較を行った。

最後に、各クラスタと性別を独立変数とし、各居場所尺度を従属変数として 2 要因の参加者間計画による分散分析を行った。交互作用が得られた場合には単純主効果の検定を行い、クラスタ要因の主効果が有意であった場合には Tukey の HSD による多重比較を行った。

結果

各変数の記述統計量の確認

本研究で用いた変数の記述統計量、クロンバックの α 係数、各変数の相関係数を確認した(Table 3-3-1)。本研究のデータでも各尺度のクロンバックの α 係数は許容できる値であり($\alpha = .78 \sim .94$)、一定の信頼性が確認された。

Table 3-3-1 本研究で使用した変数の記述統計量およびクロンバックの α 係数

尺度名	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
居場所尺度			
社会的居場所	3.08	0.59	.94
個人的居場所	3.09	0.61	.91
傷つけ合い回避尺度			
傷つけられ回避	3.03	0.82	.85
距離確保	2.65	0.87	.88
礼儀	3.94	0.56	.79
傷つけ回避	3.41	0.68	.78
ソーシャルスキル尺度	2.60	0.40	.90

注) 居場所尺度およびソーシャルスキル尺度の値の範囲は1~4であり、傷つけ合い回避尺度の値の範囲は1~5であった。

傷つけ合い回避とソーシャルスキルによる分類

傷つけ合い回避尺度とソーシャルスキル尺度の各下位尺度の得点を元に、クラスタ分析を行った。その結果クラスタの数を5つに分けた時に最も解釈できる結果となった。各クラスタの人数および性別ごとの割合を Table 3-3-2 に示した。性別の偏りが見られるかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、有意ではなかった($\chi^2(4)=2.16$, $p>.05$)。

Table 3-3-2 性別と各クラスタのクロス集計表

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5	計
男性	36	26	9	33	18	122
行%	29.51%	21.31%	7.38%	27.05%	14.75%	100.00%
女性	55	54	23	62	41	235
行%	23.40%	22.98%	9.79%	26.38%	17.45%	100.00%
計	91	80	32	95	59	357
行%	25.49%	22.41%	8.96%	26.61%	16.53%	100.00%

注) 数値は度数

次に、クラスタ分析に用いた各尺度を従属変数とした分散分析を行った(Table 3-3-3)。「傷つけられ回避」では、クラスタ3が最も高い得点であり、次いでクラスタ4、クラスタ1、クラスタ5の順に高く、クラスタ2が最も低い得点であった($p<.05$)。「距離確保」では、クラスタ3が最も高い得点であり、次いでクラスタ1とクラスタ4が高く、クラスタ2とクラスタ5が最も低い得点であった ($p<.05$)。「礼儀」では、クラスタ3が最も高い得点であり、次いでクラスタ4とクラスタ5が高く、クラスタ1とクラスタ2が最も低い得点であった($p<.05$)。「傷つけ回避」では、クラスタ3が最も高い得点であり、次いでクラスタ4が高く、クラスタ1とクラスタ5がその次に高かった。最も低い得点はクラスタ2であった($p<.05$)。「ソーシャルスキル」では、クラスタ3とクラスタ5が最も高い得点であり、次いでクラスタ2が高く、クラスタ1とクラスタ4が最も低い得点であった($p<.05$)。各群の相対的な特徴を明確にするため、Figure 3-3-1 に各クラスタのz得点をまとめた。

Table 3-3-3 クラスタごとの傷つきの回避とソーシャルスキルの得点

	クラスタ1		クラスタ2		クラスタ3		クラスタ4		クラスタ5		F	η^2	多重比較
	(n= 91)	(n= 80)	(n= 32)	(n= 95)	(n= 59)	M	SD	M	SD	M			
傷つけられ回避	3.02	0.49	2.10	0.54	3.97	0.60	3.66	0.46	2.77	0.64	123.99***	0.59	3>4>1>5>2.
距離確保	2.91	0.66	1.84	0.55	3.71	0.66	3.12	0.60	1.98	0.54	98.10***	0.53	3>1,4>2,5.
礼儀	3.56	0.36	3.57	0.57	4.74	0.26	4.17	0.36	4.21	0.36	79.82***	0.48	3>4,5>1,2.
傷つけ回避	3.24	0.42	2.71	0.56	4.39	0.30	3.89	0.35	3.29	0.52	118.78***	0.58	3>4>1,5>2.
ソーシャルスキル	2.35	0.27	2.59	0.35	3.07	0.30	2.46	0.31	2.98	0.30	62.65***	0.42	3,5>2>1,4.

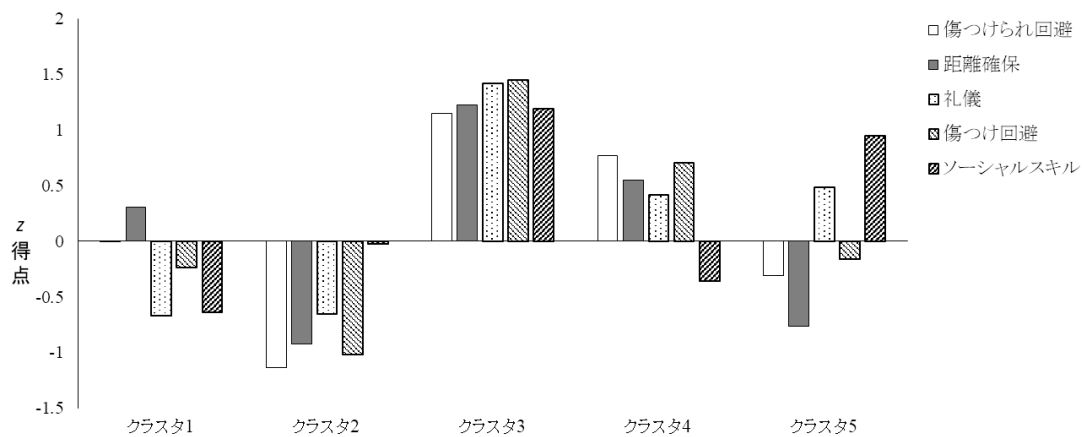
注1) *** $p < .001$ 注2) $df=4,352$, 多重比較は全て $p < .05$ であった。

Figure 3-3-1 友人との付き合い方による各クラスタの特徴

これらの結果から、大学生の友人との付き合い方を分類した。クラスタ1はお互いのプライバシーに踏み込むことをやや避ける傾向にあり、また付き合う相手への礼儀や相手を傷つけてしまうことへの配慮はやや低い特徴を示した。この特徴は岡田(2012)の孤高を保ち他者を遠ざける群に近い特徴と言えるが、両者の違いは岡田(2012)で見出された群では自分が傷つけられることを回避する傾向が低かったのに対し、本研究のクラスタ1ではこの傾向は標準的であった。またクラスタ1ではソーシャルスキルが低かった。これらの結果から、この群では対人関係を円滑にするための他者への気遣いやスキルの不足という性質と、友人を遠ざけようとする性質の2点が特徴的であった。そのため、クラスタ1は「配慮・スキル不足距離確保群」と命名した。クラスタ2は友人関係における自他の傷つきに関する得点がいずれも低いという特徴を持つ群であった。友人から傷つけられたり、友人を傷つけてしまったりする不安が低く、お互いのプライバシー

トにも踏み込むことを避けようとはしない。さらにこの群では礼儀という態度が低い点も特徴的であった。単に自他の傷つきを恐れないだけではなく、友人への配慮を示す傾向も他の群に比べて控えめであり、傷つくことに関する態度全般が低い傾向にあることが示された。この群のソーシャルスキルは全体の平均値に近く、また相川・藤田(2005)の示した平均値とも類似していることから標準的な値であった。以上の特徴からクラスタ2は「スキル標準傷つき無関心群」と命名した。クラスタ3はクラスタ2とは逆に、自他の傷つきに関する得点がいずれも最も高いという特徴を持つ群であった。つまり、友人から傷つけられたり、友人の気分を害してしまったりすることを避けようとし、お互いの内面に踏み込むことも避ける。また、他者への礼儀も遵守しようとする群である。この群のソーシャルスキルは、他の群に比べて最も高かった。そのため、クラスタ3は「スキル成熟傷つき回避群」と命名した。クラスタ4はクラスタ3ほどではないが、自他の傷つきに関する得点がいずれも高いという特徴を持つ群であった。この群ではクラスタ3と異なり、ソーシャルスキルが低いという特徴を示した。そのため、クラスタ4は「スキル不足傷つき回避群」と命名した。

クラスタ3およびクラスタ4はいずれも友人との傷つきを避ける傾向にある群としての特徴を示した。これらの特徴は、先行研究では岡田(2011)の気遣い・群れ関係群や橋本(2000)の表層群の特徴と近い。橋本(2000)では、表層群はソーシャルスキルが低いという特徴が指摘されていたが、本研究ではそのような特徴はクラスタ4のみに見られた。友人関係で傷つきを回避しようとする大学生の中にも、ソーシャルスキルの高いクラスタ3に属する大学生が見られることが明らかになった。

クラスタ5は自分が傷ついてしまうことと友人を傷つけてしまうことへの不安がやや低く、友人との距離を保とうとする傾向が低いという特徴を持つ群であった。この特徴は岡田(2012)の傷つけ合うことへの恐れを持たずに相手に対する礼儀を遵守しながら関係を維持する群と同じ特徴であった。この群はソーシャルスキルも高かった。このような特徴から、この群の大学生は他者への礼儀を示す付き合い方をしており、それを支えるソーシャルスキルも備えていると考えられた。また、自他の傷つきを回避する傾向の低さや、お互いのプライベートにも踏み込める親密な関わりを維持する付き合い方が見いだされた。そのため、クラスタ5は「スキル成熟親密関係群」と命名した。

友人付き合いの分類と性別による居場所の実感の違い

友人との付き合い方と性別を独立変数とし、居場所の実感を従属変数とした5×2の2要因の分散分析を行った。その結果をTable 3-3-4とTable 3-3-5に示した。

社会的居場所(Table 3-3-4)では、友人との付き合い方の主効果のみが見られた。多重比較の結果、スキル成熟傷つき回避群とスキル成熟親密関係群が、配慮・スキル不足距離確保群とスキル不足傷つき回避群よりも社会的居場所の平均値が高かった($p<.05$)。また、スキル標準傷つき無関心群は配慮・スキル不足距離確保群よりも平均値が高かった($p<.05$)。

Table 3-3-4 友人の付き合い方と性別による社会的居場所の違い

	配慮・スキル不足 距離確保群 (1)		スキル標準 傷つき無関心群 (2)		スキル成熟 傷つき回避群 (3)		スキル不足 傷つき回避群 (4)		スキル成熟 親密関係群 (5)		計		F	偏 η^2	多重比較	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				
男性	2.72	0.66	3.16	0.58	3.38	0.54	2.89	0.59	3.20	0.63	2.98	0.64				
女性	2.85	0.56	3.23	0.54	3.26	0.67	3.03	0.47	3.44	0.43	3.13	0.56				
計	2.80	0.60	3.21	0.55	3.29	0.63	2.99	0.52	3.37	0.51	3.08	0.59				
													付き合い方の主効果	11.19 ***	0.11	3,5>1,4., 2>1.
													性別の主効果	1.74	0.00	
													交互作用効果	0.49	0.01	

注1) *** $p<.001$

注2) $df=4,352$, 多重比較は全て $p<.05$ であった。

個人的居場所尺度(Table 3-3-5)では、友人との付き合い方の主効果のみが見られた。多重比較の結果、スキル標準傷つき無関心群とスキル成熟傷つき回避群とスキル成熟親密関係群が、配慮・スキル不足距離確保群よりも個人的居場所の平均値が高かった($p<.05$)。

Table 3-3-5 友人の付き合い方と性別による個人的居場所の違い

	配慮・スキル不足 距離確保群 (1)		スキル標準 傷つき無関心群 (2)		スキル成熟 傷つき回避群 (3)		スキル不足 傷つき回避群 (4)		スキル成熟 親密関係群 (5)		計		F	偏 η^2	多重比較	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				
男性	2.84	0.56	3.19	0.67	3.36	0.47	3.06	0.53	3.15	0.75	3.06	0.61				
女性	2.85	0.60	3.21	0.57	3.43	0.59	3.02	0.53	3.27	0.62	3.11	0.60				
計	2.84	0.58	3.20	0.60	3.41	0.55	3.03	0.53	3.24	0.66	3.09	0.61				
													付き合い方の主効果	6.90 ***	0.07	2,3,5>1.
													性別の主効果	0.23	0.00	
													交互作用効果	0.18	0.00	

注1) *** $p<.001$

注2) $df=4,352$, 多重比較は全て $p<.05$ であった。

考察

傷つけ合いの回避とソーシャルスキルによる友人関係の類型

本研究の第1の目的として、現在の大学生の友人関係を、友人関係への態度と対人場面の能力という枠組みの中で分類し、大学生の友人との付き合い方の特徴を理解することがあげられた。そこで、岡田(2012)と相川・藤田(2005)の尺度を利用して、大学生の友人との付き合い方を5群に分類した。

本研究の結果、第3クラスターのスキル成熟傷つき回避群と第4クラスターのスキル不足傷つき回避群は、いずれも友人関係において傷つきを回避する傾向が高かった。これは岡田(2011)の気遣い・群れ関係群や橋本(2000)の表層群、中園・野島(2003)の深化回避群に近い特徴と言える。この群の大学生は好んで深い関係を避けているわけではなく、消極的受動的な関わりを求めており(中園・野島, 2003)、橋本(2000)の表層群ではソーシャルスキルが低いことが明らかにされている。しかし、本研究から傷つきを回避する傾向にある大学生の中にも、ソーシャルスキルが高い大学生がいることが明らかになった。岡田(2007)では友人関係のパターンによって自己愛の程度の違いを検討したが、自己愛の健康な側面である「自己主張性」には差が見られなかった。これは傷つきを回避するタイプの大学生にも、対人場面で自己主張などを適切に行うことができる大学生と、それが難しい大学生が混在していたため、その他の友人関係のパターンと比較してもその違いを明確にできなかったものと考えられる。

第1クラスター、第2クラスター、第5クラスターは、それぞれ従来の友人関係の類型と同様な特徴を示した。第1クラスターの配慮・スキル不足距離確保群は、中園・野島(2003)の無関心群に類似していた。無関心群について、中園・野島(2003)は精神的安定や社会的スキルの学習などの役割を果たしている友人関係の経験が乏しいことを懸念していた。本研究からは中園・野島(2003)の懸念を、ソーシャルスキルの低さという特徴から部分的に支持するものと言える。

第2クラスターのスキル標準傷つき無関心群は自他が傷つくことを避けようとせず、また、友人との距離も近いタイプの大学生である。このような特徴は中園・野島(2003)の自己中心的群に近い。中園・野島(2003)によればこの群の大学生は友人を傷つけないようにする配慮よりも、遠慮なく自分を出すことへの意欲や楽しさへの関心が強いという特徴がある。本研究でも自他が傷つくことへの意識の低さと、友人との距離をとろうと

はしない態度が見られた。このような大学生は自分を出すという点でのソーシャルスキルは高く、相手への配慮という点でのソーシャルスキルは低いという可能性がある。そのため、ソーシャルスキル全般を測定した本研究ではその値が平均的となったと考えられる。様々なソーシャルスキルの特徴をふまえた検討により、この群の特徴はより詳細になることが予想される。

第5クラスターの「スキル成熟親密関係群」は、橋本(2000)の積極群、中園・野島(2003)の本音群、岡田(2011)の内面関係群などに近い特徴を持っている。友人との距離が近く、友人が傷つくことへの配慮は行えるタイプと言える。積極群はソーシャルスキルが高いという結果(橋本, 2000)と同様に、本研究でもソーシャルスキルが高かった。この群はいずれの研究においても適応的な特徴を示している。

大学生を対象とした本研究では、これらの分類に性差は見られず、友達の付き合い方に関する性差は年齢が増すにつれてなくなっていくという落合・佐藤(1996)の指摘に従うものとなった。

友人関係の類型による居場所の実感の違い

本研究では得られた類型の特徴をより理解するために、居場所の実感の違いを検討した。本研究の結果、性別によらずスキル成熟傷つき回避群とスキル成熟親密関係群の2タイプは、配慮・スキル不足距離確保群とスキル不足傷つき回避群よりも、友人との関わりから生じる社会的な居場所を実感できていることが示された。

スキル成熟傷つき回避群とスキル不足傷つき回避群の大学生は、本研究で得られた他のクラスターに比べて、傷つくことを避ける傾向が強く現れた。この2タイプの大きな違いはソーシャルスキルの得点にあった。ソーシャルスキルが低く他者との交流に積極的でない人は、社会的接触の機会が減少し、孤独感が高まる機会の増加に繋がると指摘されており(相川ら, 1993)、本研究でも社会的居場所とソーシャルスキルの間に正の相関が見られている($r=.45$)。友人関係の中で気を遣うことは、必ずしも否定的な意味あいだけではない(岡田, 2012)と言われるが、それは特にソーシャルスキルを用いて適切な気遣いができる大学生に当てはまる指摘であろうことが本研究から示された。

ソーシャルスキルの低い大学生の付き合い方には、傷つくこと全般を回避しようとするスキル不足傷つき回避群のようなタイプもいれば、傷つきを避けるわけではないが、

相手への配慮という態度が比較的low、心理的な距離をとろうとする配慮・スキル不足距離確保群のようなタイプも見られた。前者のスキル不足傷つき回避群については、類似した友人関係への態度を持つが、ソーシャルスキルは高いというスキル成熟傷つき回避群が、その数は多くない($n=32$)ものの、別途存在した。このことから、スキル不足傷つき回避群においてはソーシャルスキルの向上により居場所の実感の向上も見込めるものと考えられる。一方で配慮・スキル不足距離確保群にはそのような対応する群は得られなかった。そのため、この群の大学生はソーシャルスキルの向上という単純な方略で、居場所をより実感できるようになるとは限らない。この群の大学生がソーシャルスキルを向上させた時、どのような態度とスキルを持ったタイプとなるのか、本研究からは明らかにならなかった。ソーシャルスキルの向上に伴い、付き合い方も変わっていくのか、あるいは付き合い方を変えることでソーシャルスキルの向上が生じるのかという問題については今後検討していく必要がある。この問題を明らかにすることで、配慮・スキル不足距離確保群のような相手への配慮がlow、ソーシャルスキルも低めな大学生についての有益な知見が得られる。

また、居場所をよく感じられていた群として、ソーシャルスキルの高いスキル成熟親密関係群が得られた。これは岡田(2011)などに示される内面関係群の特徴に従う結果となった。一方で、同じく自他の傷つきを恐れないスキル標準傷つき無関心群は、他の群と比較して居場所の実感が高くも低くもなかった。自他が傷つくことを避けないという態度はこれまで肯定的に捉えられていたが、それだけで青年の好ましい友人関係が維持されるわけではなく、ソーシャルスキルも大学生の友人関係を支える重要な要因であると言える。

本研究では一人で過ごすことのできる個人的な居場所についても検討した。個人的な居場所が実感できることは、一人になることで情緒を安定させたり、自分らしさを取り戻したりできるような場や時間があることを意味する。この個人的な居場所に関しては、スキル標準傷つき無関心群、スキル成熟傷つき回避群、スキル成熟親密関係群の3群が、配慮・スキル不足距離確保群よりも実感できていることが示された。スキル成熟傷つき回避群のように、従来から適応的とされてきた大学生は一人で過ごす時間や場所も居場所として実感できていることが示された。

また、傷つきを回避する傾向にある大学生であっても、ソーシャルスキルの高い大学

生は個人的な居場所を実感できており、これはソーシャルスキルと孤独感には負の相関がある(相川, 1993)ために、孤独を感じずに一人の時間を充実させることができると考えられる。これらの結果から一人で過ごす時間や場所を居場所として肯定的に捉え、自分のことを省みたり、リラックスしたりするためには、ソーシャルスキルの向上が有効であることが本研究から示唆された。

一方で、スキル標準傷つき無関心群は特別ソーシャルスキルの高い大学生というわけではなかった。海野・三浦(2010)では対人恐怖心性の高い大学生は一人の時間をネガティブに捉えがちであることを示したが、逆に傷つくということを恐れていないスキル標準傷つき無関心群は一人の時間や空間も、友人関係に囚われずに充実した居場所とできるのかもしれない。青年の友人関係では、意図せぬ形で互いを傷つけあうことを怖れながら、「個」としてのあり方が確立できずに相手と離れられないという心理的な距離の葛藤が生じている(藤井, 2001)と言われる。このような特徴が青年一般に指摘されているが、スキル標準傷つき無関心群は自他が傷つくことへの関心が低く、友人との心理的な距離が近い。そのため、傷つけあうことの怖れに伴う葛藤が生じにくく、相手から離れて一人になる個人的な居場所も感じやすいものと考えられる。

上記の群と比較した時に個人的な居場所を実感できていない大学生として、配慮・スキル不足距離確保群があげられた。個人的な居場所は、他者との関わりから離れてリラックスしたり自己内省をしたりする働きが特徴的であるが、友人との距離をとる大学生が、友人から離れ、一人の時間を居場所として実感しているかという点、そうではないという結果となった。この群の大学生は社会的居場所も他の群に比べて感じにくいため、友人といっても、一人でいても居場所を得られていないと言える。彼らにとってどのような場や時間が居場所として機能するのか、彼らがどのような場や時間を居場所として感じるのか、あるいは求めているのかを今後検討していく必要がある。

本研究では居場所の実感に性差は見られなかった。本研究における性別は本人の性自認の自己評価によるものであり、そこから本人の性に対する意識は十分に読み取ることができない。これまでにも大学生の友人関係には性役割タイプが影響を及ぼすことが明らかにされている(和田, 1993)。友人関係に何を求めどのように付き合っていくかを検討していく上で、性別の影響を考慮する際には性役割意識などを含めて検討していくことで、大学生の友人関係を適切に把握できるものと思われる。

第4節 第3章のまとめ

第3章で得られた知見

第3章では友人関係で傷つきを回避する傾向が、大学生の適応とどのように関連するのかを検討してきた。

第1節では、友人関係とサポートの違いによって、学校適応感がどのように異なるのかを検討した。その結果、自己開示にあまり積極的ではない友人関係を志向する群においても学校に居心地の良さを感じていることが新たに示された。一方で、友人関係を回避する傾向を示した群では居心地の良さという点で不適応的であるという結果が示された。これらの結果から、改めて友人関係が大学生の生活に重要な意味を持つことが確認された。

また、友人関係回避群の青年はソーシャル・サポートを受けるほど劣等感が高くなるが、自分では解決できない問題が生じた際に友人に助けを求められることが劣等感の軽減に繋がること示された。つまり、友人関係に消極的な青年に対してはソーシャル・サポートの量ではなく、どのような時に助けを求めるといった点が劣等感を考える上で重要である。一方で傷つき回避群の青年や積極的な関係群の青年にとってはソーシャル・サポートの量が増えることが居心地の良さや被信頼感・受容感を促進する。友人との関わりにおいて、傷つくことを避ける青年であっても、援助を要請でき、その結果として友人からのサポートを十分に受けることができれば、適応感を促すことができる。

第2節では、友人関係と友人への援助行動がそれぞれ学校適応感にどのように関連しているかを検討した。その結果、援助行動を友人に対して実際に行う積極的なものと、行動としては現れないものに分けた時、学校への適応感を促進し得るのは積極的な援助行動であることが明らかになった。また、第2節の結果からは友人関係で傷つくことを避ける傾向が高い青年ほど学校適応感が低いという結果が得られた。

学校適応感の内、劣等感についてのみ交互作用が見られた。友人関係において傷つくことを回避する傾向が高い青年は大学において劣等感を抱きやすいと言えるが、友人に対して援助行動を行うことによって、その劣等感が低減する可能性が示された。

第3節では、大学生の友人関係について、傷つきを避けようとする態度と、ソーシャルスキルという2点から、青年の友人との付き合い方がどのように分類できるか、また、

その分類によって居場所の実感がどのように異なるかを検討した。その結果、大学生の友人との付き合い方の特徴を5タイプに分類することができた。その中でも、自他が傷つくことを避けるソーシャルスキルの高いタイプ(スキル成熟傷つき回避群)、自他が傷つくことや内面に踏み込むことを避けないソーシャルスキルの高いタイプ(スキル成熟親密関係群)が比較的適応的な傾向を示した。自分の本音や心の内を友人に話さず、傷つくことを避けようという付き合い方を求める青年の中にも、他者と関わる際に円滑に関係を形成したり、維持したりできる青年と、それが難しい青年がいることが明らかになった。傷つくことを避け、友人との距離をとろうとしてしまう青年はこれまでの研究から不適応的な特徴を持つことが指摘されていたものの、その中でもソーシャルスキルの高い青年は友人関係を居場所として実感しやすいことが示された。

第3章の結論

第3章では、主に以下の3点が明らかになった。第1に、友人との付き合い方ごとにソーシャル・サポートの受容や援助要請行動の適応への影響が異なることである。第2に、傷つくことを避けようとする青年が劣等感を感じやすいものの、援助行動を行うことで劣等感を感じにくくなることである。第3に、傷つきを回避しようとする大学生の中にもソーシャルスキルに優れた大学生がおり、そのような青年は居場所感を得ていることである。

第1の点については、第3章第1節の結果から示された。友人関係を回避しようとする大学生はソーシャル・サポートを受けるほど劣等感が高くなるが、自分では解決できない問題が生じた際に友人に助けを求められることが劣等感の軽減に繋がることが示された。つまり、友人関係に消極的な青年に対してはソーシャル・サポートの量ではなく、どのような時に助けを求めるといった点が劣等感を考える上で重要である。一方で傷つくことや傷つけてしまうことを気にする大学生にとってはソーシャル・サポートの量が増えることが居心地の良さや被信頼感・受容感を促進する。友人との関わりが控えめな友人関係ではストレス状況においてサポートを十分に受けることができるかどうか重要であることが明らかになった。

第2の点については、第3章第2節の結果から示された。積極的な援助行動は友人関

係で傷つきを避けようとする傾向に関わらず大学での適応感を高めることが明らかになった。特に、劣等感については、友人関係において傷つくことを回避する傾向が高い大学生は劣等感を抱きやすいと言えるが、友人に対して援助行動を行うことによって、その劣等感は低減する可能性が示された。

第3の点については、第3章第3節の結果から示された。自分の本音や心の内を友人に話さず、傷つくことを避けようという付き合い方を求める大学生の中にも、他者と関わる際に円滑な関係を形成したり、維持したりできる大学生(スキル成熟傷つき回避群)と、それが難しい大学生(スキル不足傷つき回避群)がいることが明らかになった。前者のような自他が傷つくことを避けるソーシャルスキルの高いタイプは居場所を実感できていることが示された。

以上の結果から、本研究では大学生の友人関係について、実際に友人とどのように関わっているのか、その中で生じるやり取りが大学生の適応を支えることを示した。従来のような「自分がどのように友人と関わろうとしているか」という大学生個人内の友人観による検討だけでは大学生の友人関係をとらえるのに不十分である。それぞれの友人関係の中で、実際にどのように接しているのかを考慮して検討することで、大学生と友人との関係が、大学生にとってどのような意味を持つのかが示唆された。

第4章 傷つき経験による青年の発達

第4章では傷つき経験が大学生の発達にとってどのような影響を生じさせているのかを検討する。

これまでの友人関係研究では、傷つくことを避ける付き合い方については検討されてきたが、大学生が避けようとしている傷つきそのものについてはあまり取り上げられてこなかった。日常的な場面で生じる傷つきは、トラウマなどの人生に重大な影響を及ぼす心の傷に比べて軽視されてきた(小田部他, 2009b)。友人関係においても同様であり、特に本来親しい関係であるはずの友人関係では、その機能や役割などに焦点が当たりやすかった。そこで本研究では、友人関係で生じた傷つき経験について、その影響を大学生がどのように感じているのかを明らかにする。

第4章第1節では、これまでの友人関係で傷ついたことが、どのような影響や変化をもたらしたと感じているのかを測定する尺度を作成した。まず、予備調査によって、傷つき経験による影響を具体的に収集し、その結果を元に尺度を構成した。また、その後の調査の中で尺度の構成に関する結果を第1節にまとめる。

第4章第2節では、第1節で作成した尺度を元に、大学生の過去のとらえ方の傾向と、意味づけによって傷つき経験による影響がどのように異なるかを検討した。第2節では、個人内の要因によって傷つき経験による影響のとらえ方がどのように異なるかを明らかにすることを試みる。

第4章第3節では、第1節で作成した尺度を元に、傷ついた経験を相談したか否か、また相談した相手の反応によって、傷つき経験による影響がどのように異なるかを検討した。第3節では、他者との関係によって傷つき経験による影響のとらえ方がどのように異なるかを明らかにすることを試みる。

第4章第4節は、第4章で得られた知見をまとめて、友人関係の中で傷ついた経験によって、どのような影響があったと感じられるのかを検討する。

第1節 友人関係で生じた傷つき経験による影響の測定

目的

第4章では友人関係における傷つきが青年の発達にどのように影響するのかを検討する。しかし、友人関係で生じた傷つき経験による影響や変化を測定する尺度はこれまで作成されてこなかった。そこで、第1節では友人関係で生じた傷つき経験による影響を測定できる尺度を構成する。

本節では2017年1月に行った自由記述調査(第1次調査)、2017年4月に行った調査(第2次調査)、2017年7月に行った調査(第3次調査)を通して傷つき経験による影響を評価する尺度の構成を試みた³。

第1次調査では自由記述調査を行い、青年が傷つき経験からどのような影響を受けたと感じているのかを分類し、原尺度の構成を行った。第2次調査では大学生に原尺度への回答を求め、傷つき経験からの影響に対する因子モデルの検討を行った。第3次調査では第2次調査と同様に傷つき経験からの影響尺度へ回答を求め、再度因子モデルの検討を行った。また、第2次調査と第3次調査では傷つき経験からの影響尺度と傷つき経験に対する主観的なストレスの評価へ回答を求めた。傷つき経験によるストレスが大きければ、それだけ傷つき経験による影響はネガティブなものとなる(Davis, et al., 1998)であろう。また、Park(2010)の意味づけの統合モデルによれば、意味づけは個人にとって脅威となる出来事に対して生じることが指摘されており、成長感などのポジティブな影響もストレスが大きいと感じられる方が生じやすくなると考えられる。つまり、傷つき経験に対する認知的評価が大きいほど、傷つき経験による影響は大きくなることが推測される。そのため、部分的であるが傷つき経験に対する認知的評価との相関係数から構成概念妥当性を検討する。

方法 (第1次調査)

調査協力者

2017年1月に茨城県に所在する大学(大学A)にて調査を行った。調査に協力した大学

³ 第2次調査と第3次調査はそれぞれ本稿第4章第2節、第4章第3節においてその結果を詳述している。本節では尺度の構成に関わる変数のみをまとめた。

生は 49 名(男性 14 名, 女性 35 名)であった。平均年齢は 20.34 歳($SD=1.15$)であった。質問用紙は上記の大学の講義中に一斉に配布, 回答の後に回収された。回答にかかる時間は約 15 分であった。

質問用紙の配布の際には, 調査の目的についての説明と, 以下の倫理的な配慮を行った。第 1 に調査への協力は任意であり, 回答をしないことによる不利益がないことを伝えた。第 2 に, 調査の途中で回答をやめなくなった場合には, 途中で回答をやめても不利益がないことを伝えた。第 3 に調査によって得られた個人情報と厳重に管理することを伝えた。調査用紙の表紙では上記の倫理的配慮と調査の目的を記した。以上の調査目的および倫理的な配慮に同意できた場合には以下の調査内容への回答を求めた。

調査内容

学年, 年齢, 性別の他, 以下の項目について自由記述形式によって回答を求めた。

過去の友人関係における傷ついた経験について 過去の傷つき経験の影響について問う前に, どのような傷つき経験をしたかを簡潔に記述することを求めた。この質問は傷つき経験にどのような影響があったかを質問するための導入として取り入れられた。この傷つき経験についてはいくつ記述しても良い旨が記載された。

友人関係における傷つき経験によるその後の変化影響 上記で記述した傷つき経験について, その後の影響や変化について回答を求めた。傷つき経験の影響についても, 複数思い浮かぶ場合には, それぞれの記述を求めた。

結果と考察 (第 1 次調査)

友人関係における傷つき経験の分類

傷つき経験のエピソードを第 2 章の基準に従い, 本調査で得られた傷つき経験を分類した。まず, 傷つき経験に関する自由記述を 1 つの意味内容を示す記述に切片化した。切片化された記述の総数は 118 であった。この内, 傷つき経験の影響に関する記述⁴のみを基礎データとして扱った。その数は 113 であった。次に, それぞれの切片化されたデータについて, 著者と心理学を専攻する大学院生 1 名が協議の元, データの意味内容

⁴ 回答者が「傷つきとは違うが…」などの注釈を入れているエピソードを除外した。

から記述を分類した。最終的な一致率は 97.23%であった。その結果を Table 4-1-1 に示した。

得られた分類は「裏切り」が最も多く、次いで「積極的な分離」、「からかい」、「大切にされない/使われる/軽視される」、「非難」の順で傷ついた経験として記述された。この割合は先行研究である Leary, et al. (1998)や小田部他 (2009a) と異なるが、これは先行研究が身近な相手全般を対象とし、傷つけられた相手として家族、恋人、先生などを含んでいたためである可能性がある。本研究では友人との関係のみに焦点を当てたため、傷つき経験の割合が変化したと考えられる。先行研究では傷つけられた相手ごとの分類はされていないため、相手によって傷つく行動が変わるかどうかは日常的な傷つき経験を検討していく上での課題である。

Table 4-1-1 自由記述調査で得られた傷つき経験の分類

カテゴリー	定義	記述数	割合	記述例
積極的な分離	明らか・露骨に嫌ってのけものにしたたり、要求・期待・接近を拒んだりする行為	20	17.70%	友達のグループから仲間外れにされたことがある。
消極的な分類	無意図的・暗黙的に要求・期待・接近を拒んだりする行為	5	4.42%	私も悪かったのは、分かっているけど、それでも避けられたのは嫌な感じだった。
非難	約束・信義・期待に背く行為	16	14.16%	陰で悪口を言われているのを知った時。
裏切り	実際の欠点や過失の有無を問わず、その人の能力・性格や行ったことを責める言及	25	22.12%	信じてた友人に裏切られたのが今までで一番傷ついた。
からかい	その人が困ったり怒ったりするようなことをしておもしろがるような揶揄や嘲笑	19	16.81%	男の子からからかわれて、それ以来男性と関わるのは怖くなった。
大切にされない/ 使われる/軽視される	その人の能力や性格に対して疑念をかけたり不審を示したりするような態度や言及	17	15.04%	なんか、私を利用しようとしてくるのが、私は嫌で(以下略)
理不尽な扱い	道理に合わない意図的な暴力や暴言	9	7.96%	軽い気持ちなのかもしれないけど、叩いてくる人がいる。そういうのは傷つくのでやめてほしい。
その他		2	1.77%	相手を傷つけてしまったんだということに気づいた時。
		計	113	100.00%

注) 分類および定義は小田部他(2009a)を踏襲した。

傷つき経験による影響の分類

次に、傷つき経験によって生じた影響についての記述を分類した。友人関係における傷つき経験によるその後の変化や影響に関する自由記述について、1つの意味内容を示す記述に切片化した。切片化された記述の総数は139であった。この内、傷つき経験の影響に関する記述のみを基礎データとして扱った。その数は124であった。次に、それぞれの切片化されたデータについて、著者と心理学を専攻する大学院生1名が協議の元、データの意味内容から記述を分類した。3段階のカテゴリー化を経て、6つのカテ

ゴリーに分類することができた(Table 4-1-2)。最終的な一致率は96.40%であった。

第1のカテゴリーは「積極的な対人関係」に関する変化や影響が報告されたものであった。この記述群では、「相手の気持ちになって考えるようになった」などの肯定的な対人スキルの獲得や、「今では本当に信用していて、お互い素をだしあえる少数の友達といつも遊んでいます」などの付き合い対人関係に対する肯定的な影響が報告された。第2のカテゴリーでは「消極的な対人関係」に関する変化や影響が報告されたものであった。この記述群では、「人間不信になりました」や「人を信頼するのはやめようと思った」などの他者との関わりを避けたり関係を深めないようにしたりする変化が報告された。第3のカテゴリーでは「受容的な自己」に関する変化や影響が報告されたものであった。この記述群では「とても視野が広がりました」や「現在は考え方も変わって成長できていると思う」など、自己の受け止め方の肯定的な変化や成長感が報告された。第4のカテゴリーでは「否定的な自己」に関する変化や影響が報告された。この記述群では「周りの目を強く意識するようになってしまった」や、「それをきっかけに、自分には他人よりも魅力がないなど、自信がなくなった」など、自信の喪失や性格などの否定的な変化に関する記述が報告された。第5のカテゴリーでは「傷つき経験の引きずり」に関する記述が報告された。この記述群では「今でも思い出すだけで無力感にさいなまれます」や、「ふとしたときに思い出して不愉快な気持ちになる」など、今でも傷つき経験を思い出したり、嫌な経験としてそのまま残っていたりする記述が報告された。第6のカテゴリーでは「影響や変化のなさ」に関する記述が報告された。「対人関係については何も影響はなかったと思う」など変化のなさや小ささに関する記述が報告された。

Table 4-1-2 傷つき経験による影響や変化の分類および記述例

カテゴリー	定義	記述数	割合	記述例
積極的な対人関係	他者との関わりや接触に対する積極的な態度やポジティブな気持ちなどが生じるようになった	29	23.39%	相手の気持ちになって考えることの重要さも感じました。
消極的な対人関係	他者との関わりや接触に対する消極的な態度やネガティブな気持ちなどが生じるようになった	43	34.68%	友人はいらないと思うようになった。
受容的な自己	自分自身の性格や価値観、行動、態度などを受け止めていたり、良いものとして感じている	22	17.74%	自分を下げて人と関わるのをやめて、自分を大事にしようと思いました。
否定的な自己	自分自身の性格や価値観、行動、態度などを否定的に捉え、好ましくないものとして感じている	13	10.48%	それをきっかけに、自分は他人よりも魅力がないなど、自信がなくなった。
傷つき経験の引きずり	今でも過去の経験を引きずり、不快な気持ちを抱いてしま	11	8.87%	今でも思い出すだけで無力感にさいなまれます。
影響や変化のなさ	特に変化を感じない	6	4.84%	対人関係については何も影響は無かったと思う。
	計	124	100.00%	

自由記述の分類を元に、友人関係における傷つき経験の影響に関する項目を選定した。6つのカテゴリーに対して、「積極的な対人関係」、「消極的な対人関係」、「受容的な自己」、「否定的な自己」、「傷つき経験の引きずり」に関しては8つずつの項目を作成した。「影響や変化のなさ」については5つの項目を作成した。

方法（第2次調査）

調査協力者

2017年4月から7月にかけて、4つの大学で調査を行った。1つは予備調査と同じ大学(大学A)であり、調査協力者は大学生92名(男性20名、女性72名)であった。その他3つの大学は東京都に所在する大学(大学B~D)であり、大学Bの調査協力者は66名(男性25名、女性40名、不明1名)、大学Cの調査協力者は83名(男性31名、女性52名)、大学Dの調査協力者は76名(男性44名、女性31名、不明1名)であった。調査全体の有効回答数は317名であり(男性120名、女性195名、不明2名)、平均年齢は19.04歳($SD=1.20$)であった。大学Bおよび大学Dでは各大学の授業担当者の了解を得た上で調査用紙を配布し、自宅で回答後翌週に質問用紙の提出を求めた。調査用紙の表紙では調査の目的と得られた個人情報とを厳重に管理する注意事項を記した。倫理的な配慮として調査の途中で回答をやめても不利益がないことや、回答したくない場合には回答しなくて良い旨を記した。回答の前に倫理的な配慮を含む注意事項を確認することを求めた。

調査内容

本研究では学年、年齢、性別に加えて以下の尺度への回答を求めた。なお、本節では傷つき経験による影響尺度の構成に関する尺度のみ記載した。

認知的評価尺度(加藤, 2001) この尺度は実際に経験した対人ストレスイベントに対する認知的評価を測定するものであった。下位尺度は「ストレスの原因をうまく解決できる」など4項目からなる「対処効力感」、「自分にとって苦痛なことだと思う」など3項目からなる「脅威」、「自分にとって重要なことだと思う」など2項目からなる「重要性」の全9項目から構成される尺度であった。本研究では調査協力者が想定した傷つき経験に対して、その当時どのような認知的評価を行っていたかの回答を求めた。回答は「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5件法で求めた。得点が高いほど、

傷つき経験に対して下位尺度に示されている評価をしていたことを表した。

友人関係における傷つき経験の影響尺度 この尺度は友人関係における傷つき経験の影響を測定することを目的とした尺度であり、本研究の予備調査において作成された。本尺度の教示文は「思い浮かべた傷ついた経験や、その後の自分自身について、あなたがどのように感じているかを教えてください。」と教示された。質問は全部で45項目あり、「1. 全く当てはまらない」、「2. あまり当てはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. やや当てはまる」、「5. とても当てはまる」の5件法で回答を求めた。

分析方法

本研究では得られたデータに対して、SPSS ver.20 と Amos ver.20 を用いて以下の分析を行った。

第1に予備調査を元に作成した友人関係における傷つき経験の影響尺度の因子モデルを調べるために最尤法、プロマックス回転を用いて因子分析を行った。また、得られた因子モデルを仮定して確認的因子分析を行った。

第2に得られた友人関係における傷つき経験の影響尺度と傷つき経験に対する認知的評価の相関係数を確認した。

結果（第2次調査）

傷つき経験の影響尺度の因子分析

予備調査で得られた友人関係における傷つき経験の影響尺度について、探索的因子分析を行った(最尤法, プロマックス回転)。固有値が1以上であること, 因子負荷量が.40に満たない項目, 複数の項目に因子負荷量の高い項目を除外するという基準のもとに因子分析を繰り返した。その結果, 32項目が6因子にまとまった (Table 4-1-3)。第1因子には「この経験を思い出すと, モヤモヤした気持ちになる」や「ふとしたときにこの経験を思い出して不愉快な気持ちになる」といった, 傷つき経験が不快な経験として残っていることを示す項目が高い因子負荷量を示していたことから「傷つき経験の引きずり」因子と命名した。第2因子には「この経験によって, 友達なんかいらないと考えるようになったと思う」や, 「この経験から友達とあまり深く関わりたくないと思うように

なったと思う」といった、傷ついた経験によって友人関係に対する態度が否定的・消極的になったことを示す項目が高い因子負荷量を示していたことから「消極的な友人関係への変化」因子と命名した。第3因子には「この経験によって、自分は他人よりも劣っていると感じるようになったと思う」や、「この経験がきっかけで、自分に自信を持てなくなったと思う」といった、自信の喪失に関する項目が高い因子負荷量を示していたことから「自己価値の低下」因子と命名した。第4因子には「自分にとって、この経験は何かの変化をもたらすものではなかったと思う」や、「この経験以後、特に変わったものはない」といった、変化や影響を小さいものと評価する項目が高い因子負荷量を示していたことから「変化・影響の小ささ」因子と命名した。第5因子には「この経験は自分にとっていい経験になったと思う」や、「この経験から友達とちょうどよい距離をとれるようになったと思う」といった、自分自身や他者のことについて、傷つき経験をきっかけとして新たな考え方や態度への修正や、経験から何かを学び取っていることに関する項目が高い因子負荷量を示していたことから「新しい視点や態度の獲得」因子と命名した。第6因子には「この経験によって、前よりも相手を傷つける言葉は使わないようになったと思う」や、「この経験から友達をからかったりいじったりする時には相手のことを考えるようになったと思う」といった、相手への配慮をするようになったことを示す項目が高い因子負荷量を示していたことから「友人への気遣いの増加」因子と命名した。以上の因子モデルに対して、確認的因子分析を行った。その結果、適合度は $CFI=0.92$, $RMSEA=0.05$ であった。

Table 4-1-3 友人関係における傷つき経験の影響尺度の探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)結果

	I	II	III	IV	V	VI
傷つき経験の引きずり						
35 この経験を思い出すと、モヤモヤした気持ちになる	.91	-.08	.00	.06	.10	-.19
20 ふとしたときにこの経験を思い出して不愉快な気持ちになる	.83	.05	-.04	.12	.00	.01
25 この経験は嫌な思い出として残っている	.76	.04	-.16	.02	-.11	.06
16 今でも切なさや悲しさを感じる	.63	-.10	.19	-.06	-.15	.07
3 この経験を今でも引きずっている	.60	.05	.08	-.07	-.02	.07
30 この経験を忘れることはないと思う	.59	-.13	-.12	-.28	.15	-.01
41 今でもこの経験を思い出して無力感を感じる	.51	.13	.27	.00	.06	-.07
消極的な友人関係への変化						
23 この経験によって、友達なんかいらないと考えるようになったと思う	-.05	.87	-.06	-.03	-.09	-.02
42 この経験から友達とあまり深く関わりたくないと思うようになったと思う	.02	.85	.00	-.08	.01	.00
32 この経験から友達に自分のことをあまり話さなくなったと思う	-.16	.61	.12	-.07	.14	-.04
39 この経験によって、人間不信になったと思う	.19	.56	.17	-.09	-.03	.02
27 この経験以降、友達とはつきり言える人は少なくなったと思う	.10	.55	.13	-.06	.06	-.04
自己価値の低下						
19 この経験によって、自分は他人よりも劣っていると感じるようになったと思う	-.12	.00	.93	.03	.03	.06
14 この経験がきっかけで、自分に自信を持てなくなったと思う	.02	.09	.77	-.07	-.07	.08
5 この経験によって、自分のことをダメな人間だと考えるようになったと思う	.04	.06	.61	-.02	-.04	.03
36 この経験によって、自分の中身が空っぽだと感じるようになったと思う	.04	.24	.59	.17	.07	-.03
44 この経験から自分のことを大事にできなくなったと思う	.03	.23	.54	.12	.01	-.09
22 この経験があっても、自分の価値は下がるわけではないと思うようになったと思う*	-.05	.21	-.44	.03	.39	.06
変化や影響の小ささ						
45 自分にとって、この経験は何かの変化をもたらすものではなかったと思う	.08	.01	.06	.88	-.05	.14
15 この経験以後、特に変わったものはない	.03	-.17	.03	.74	.01	-.04
37 この経験によって、何かが変わったとは思わない	-.05	.02	.01	.73	-.01	-.02
9 この経験による影響は小さかったと思う	-.22	.00	-.04	.51	.06	-.02
4 この経験があっても、自分の友達との付き合い方は変わらなかったように思う	.07	-.16	.06	.46	.10	-.14
新しい視点や態度の獲得						
24 この経験は自分にとっていい経験になったと思う	-.22	-.18	.24	-.13	.68	-.11
33 この経験から友達とちょうどよい距離をとれるようになったと思う	-.05	.05	.00	.02	.64	-.02
2 この経験によって、視野が広がったと思う	-.01	-.17	.03	-.07	.51	.06
34 人は良くも悪くも変わるものだと、この経験から学べたと思う	.08	.03	.03	-.17	.49	.06
31 この経験に負けたくないと思うようになったと思う	.32	-.09	.00	.06	.47	.12
11 この経験から自分のことを大事にするようになったと思う	-.03	.10	-.15	.08	.44	.18
友人への気遣いの増加						
38 この経験によって、前よりも相手を傷つける言葉は使わなくなったと思う	-.09	-.03	.00	-.09	.02	.73
21 この経験から友達をからかったりいじったりする時には相手のことを考えるようになったと思う	.01	-.04	-.01	.04	.08	.72
26 この経験によって前よりも友達への接し方や言葉に気をつけるようになったと思う	.05	-.04	.16	.03	.12	.62
因子間相関						
	I	II	III	IV	V	VI
II		.44				
III			.47			
IV				-.39		
V					-.01	
VI						.48

* は逆転項目

傷つき経験の影響と認知的評価の関連

次に第2次調査で得られた各変数の記述統計量と α 係数、相関係数をTable4-1-4に示した。今回の調査で用いた尺度は全て5件法であり、各下位尺度に含まれる項目の平均値をその下位尺度の得点としているため、取り得る値の範囲は1~5点であった。

まず各尺度の信頼性について、いずれも許容できる値が得られた($\alpha=.73\sim.89$)。本節で尺度を構成した傷つき経験の影響に関しては、自己価値の低下が他の下位尺度に比べて低い α 係数を示したものの、 α 係数が0.73という数値から、このままの下位尺度として用いることとした。

傷つき経験の引きずりは認知的評価の対処効力に対して負の相関($r=-.29, p<.001$)、脅威と重要性に対して正の相関を示した($r=.26, p<.001, r=.27, p<.001$)。消極的な友人関係の変化は対処効力に対して負の相関($r=-.22, p<.001$)、脅威と重要性に対して正の相関を示した($r=.32, p<.001, r=.17, p<.01$)。自己価値の低下は対処効力に対して負の相関($r=-.24, p<.001$)、脅威と重要性に対して正の相関を示した($r=.28, p<.001, r=.14, p<.001$)。変化や影響の小ささは対処効力に対して正の相関($r=.21, p<.001$)、脅威と重要性に対して負の相関を示した($r=-.18, p<.01, r=-.24, p<.001$)。新しい視点や態度の獲得は対処効力、脅威、重要性のいずれに対しても正の相関を示した($r=.29, p<.001, r=.29, p<.001, r=.16, p<.01$)。友人への気遣いの増加は脅威と重要性に対して正の相関を示した($r=.16, p<.01, r=.21, p<.001$)。

Table 4-1-4 第2次調査における各変数の記述統計量, α 係数, 相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
傷つき経験の影響											
(1) 傷つき経験の引きずり	3.04	0.95	.88								
(2) 消極的な友人関係への変化	2.53	1.01	.86	.49 ***							
(3) 自己価値の低下	2.81	0.86	.73	.59 ***	.58 ***						
(4) 変化や影響の小ささ	2.60	0.88	.79	-.42 ***	-.20 **	-.31 ***					
(5) 新しい視点や態度の獲得	3.38	0.75	.89	.13 *	.02	.02	-.21 ***				
(6) 友人への気遣いの増加	3.42	0.93	.79	.24 ***	.02	.17 **	-.24 ***	.49 ***			
認知的評価											
(7) 対処効力	2.50	1.04	.87	-.29 ***	-.22 ***	-.24 ***	.21 ***	.29 ***	.05		
(8) 脅威	3.43	1.41	.80	.26 ***	.32 ***	.28 ***	-.18 **	.29 ***	.16 **	-.31 ***	
(9) 重要性	3.14	1.29	.76	.27 ***	.17 **	.14 *	-.24 ***	.16 **	.21 ***	.40 ***	.46 ***

注) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$.

考察（第2次調査）

第2次調査では第1次調査で得られた記述データから、友人関係で生じた傷つき経験の影響についての尺度を構成することを目的とした。この尺度によって、青年が友人関係で傷ついた経験をどのように振り返って評価しているのかを測定することを目指した。

因子分析の結果、傷つき経験による影響尺度は6因子から構成された。本研究で作成された尺度は友人関係で生じた傷つき経験について、現在の時点から振り返ってその影響やその経験による変化を主観的に測定するものであった。傷つき経験の影響尺度の因子は予備調査や先行研究から想定されたように、現在から振り返ると肯定的にとらえているというものと、現在から振り返っても否定的なものにとらえているというものの両者が得られた。

「傷つき経験の引きずり」因子は松下(2005)が示す苦悩継続型に従うものと言える。この項目の得点によって、その青年が友人関係で生じた傷つき経験が、現在も継続している傷として感じられていることを示すものと言える。本研究では認知的評価によって脅威・重要群と非脅威・重要群の2群間の平均値差を検討した結果、「傷つき経験の引きずり」は脅威・重要群の方が高かった。これはより脅威と感じられる傷つき経験の方がその後も引きずりやすいという妥当な結果を示したものである。本研究では精神的健康を示す指標との関連は検討していないが、今後はその他の精神的健康との関連を検討していき、この因子の妥当性を確かめていく必要がある。

「消極的な友人関係への変化」因子と「自己価値の低下」因子は、元々ネガティブな経験であろう傷つき経験によって、その後好ましくない変化が生じたと感じられているものである。これは小田部他(2009a)の自由記述調査で示されている結果や、過去の出来事が意味づけられた結果がポジティブなものになるとは限らないという指摘(Joseph & Linley, 2005; 松下, 2007)を表した項目と言える。「傷つき経験の引きずり」と、「消極的な友人関係への変化」、「自己価値の低下」の2因子は比較的因子間相関が高いことから、傷つき経験を引きずっている青年ほど、その経験をネガティブに捉えやすいと言えるであろう。本研究の結果から、傷つき経験による変化や影響に対して、意味づけの結果としてネガティブにとらえているのか、意味づけがされなかった結果、ネガティブにとらえているのかは定かではない。堀田・杉江(2013)は意味づけの過程に注目する必要性を

指摘している。本研究で得られた傷つき経験によるネガティブな変化や影響についても、青年がネガティブな出来事を意味づけしていく過程とどのように関連するのかを検討することで、傷つき経験の影響や変化がどのように実感されていくのかを明らかにしていくことができる。

一方で、「新しい視点や態度の獲得」因子と「友人への気遣いの増加」因子は傷つき経験によるポジティブな変化や影響を感じていることを示す項目であった。松下(2005)や松下(2007)においても、ネガティブな経験を意味のあるもの、成長させてくれたものとしてとらえる青年もいることが示されている。これらの先行研究の結果を表す項目として、本研究の尺度では上記の2因子が抽出された。この2因子と、傷つき経験によるネガティブな影響を示す第1因子～第3因子の因子間相関係数が負の値にならなかったことから、傷つき経験による変化や影響はポジティブかネガティブのいずれかが二項対立的に実感されるものではなく、その両者が同時に感じられる側面があると言えよう。傷つくというネガティブな経験に対しては、そこから生じる肯定的な意味と、その経験によって残る否定的な影響の両者を扱っていく必要がある。

また、第4因子として「変化や影響の小ささ」因子が得られた。この項目は上記の因子群とは異なり、傷つき経験による変化や影響を良くも悪くも、あまり感じていないことを表す項目であった。そのため、本研究で他の因子との相関係数は負の値を示したことは妥当な結果であったと言える。ネガティブな経験が生じたとしても、それは必ずしも意味づけを生じさせるわけではない(上條・湯川, 2014)。脅威となる出来事を理解し、適応するためには意味づけが必要である(Jodeph & Linley, 2005)が、本調査で扱った友人関係での傷つき経験は、調査に協力した大学生ごとにそれぞれの経験を回想させたため、あまり脅威ではない傷つき経験から、本人にとって脅威となる傷つき経験まで様々なものがあつたと考えられる。そのため、青年が回想した傷つき経験があまり脅威でなければ、その後の変化や影響が小さいことは十分に考えられる。本調査においても、「変化や影響の小ささ」と、傷つき経験に対する認知的評価の「脅威」の間には正の相関が見られた。この結果からも「変化や影響の小ささ」がある程度先行研究によって考えられる構成概念の特徴を示したと言える。

傷つき経験に対する認知的評価との関連では、「変化や影響の小ささ」を除けば、脅威や重要性に対して正の相関を示した。出来事に対する脅威の評価が高いほど、ストレ

スを受けやすくなることが指摘されており (Joseph & Williams, 2005), 友人関係での傷つき経験に対しても, 脅威や重要性が高いほど傷つき経験を引きずったり, その出来事によるネガティブな影響を感じたりすることは妥当な結果である。一方で, ストレスフルな出来事ほど繰り返しその出来事を思い出し, それが意味づけへと繋がっていくことも示唆されている (Park & Folkman, 1997)。そのため, 脅威や重要性が高い経験を回想した大学生ほど, 傷つき経験からの影響を肯定的とらえる傾向が見られたと考えられる。これらの結果は, 友人関係で生じた傷つき経験の影響を測定した結果としてある程度妥当なものと言える。

方法 (第3次調査)

調査協力者

2017年7月に, 3つの大学で調査を行った。1つは予備調査と同じ大学(大学A)であり, 調査協力者は大学生79名(男性16名, 女性61名)であった。その他2つの大学(大学B~C)で調査の協力を得た。大学Bの調査協力者は56名(男性18名, 女性37名, その他・不明1名), 大学Cの調査協力者は66名(男性23名, 女性43名)であった。調査全体の有効回答数は199名であり(男性57名, 女性141名, 不明1名), 平均年齢は19.16歳($SD=1.40$), 学年の割合は1年生101名, 2年生59名, 3年生24名, 4年生17名であった。大学Bでは授業担当者の了解を得た上で調査用紙を配布し, 自宅で回答後翌週に質問用紙の提出を求めた。調査用紙の表紙では調査の目的と得られた個人情報とを厳重に管理する注意事項を記した。倫理的な配慮として調査の途中で回答をやめても不利益がないことや, 回答したくない場合には回答しなくて良い旨を記した。回答の前に倫理的な配慮を含む注意事項を確認することを求めた。

調査内容

本研究では学年, 年齢, 性別に加えて以下の尺度への回答を求めた。なお, 本節では傷つき経験による影響尺度の構成に関する尺度のみ記載した。

友人関係で傷つくことを経験した時期 第3次調査では傷ついた出来事がいつ生じたのかを質問してから以下の尺度への回答を求めた。教示は「あなたが友達との付き合

いの中で傷ついたと思う経験がいつ頃の出来事かを教えてください。回答は最も当てはまると思う番号に1つ○をつけてください。」というものであった。選択肢は「1. ここ3か月以内」, 「2. 大学生の時」, 「3. 高校生・浪人生の時」, 「4. 中学生の時」, 「5. 小学生の時」, 「6. 小学校入学以前」, 「7. 友人関係で傷ついたことはない」の7つであり、7番を選択した場合にはこの時点で回答をやめることを記した。

認知的評価尺度(加藤, 2001) この尺度は実際に経験した対人ストレスイベントに対する認知的評価を測定するものであった。下位尺度は「ストレスの原因をうまく解決できる」など4項目からなる「対処効力感」, 「自分にとって苦痛なことだと思う」など3項目からなる「脅威」, 「自分にとって重要なことだと思う」など2項目からなる「重要性」の全9項目から構成される尺度であった。本研究では調査協力者が想定した傷つき経験に対して、その当時どのような認知的評価を行っていたかの回答を求めた。回答は「全く当てはまらない」から「とても当てはまる」の5件法で求めた。得点が高いほど、傷つき経験に対して下位尺度に示されている評価をしていたことを表した。

友人関係における傷つき経験の影響尺度 この尺度は第2次調査で作成された友人関係における傷つき経験の影響を測定することを目的とした尺度であった。本尺度の教示文は第2次調査と同様に「思い浮かべた傷ついた経験や、その後の自分自身について、あなたがどのように感じているかを教えてください。」と教示された。質問は全部で32項目であり、「1. 全く当てはまらない」, 「2. あまり当てはまらない」, 「3. どちらでもない」, 「4. やや当てはまる」, 「5. とても当てはまる」の5件法で回答を求めた。

分析方法

本研究では得られたデータに対して、SPSS ver.20 と Amos ver.20 を用いて以下の分析を行った。

第1に友人関係における傷つき経験の影響尺度の因子モデルが第3次調査でも成り立っているかを調べるために確認的因子分析を行った。

第2に傷つき経験の生じた時期について確認した。加えて傷つき経験の生じた時期と友人関係における傷つき経験の影響尺度の順位相関係数を確認した。

第3に第2次調査と同様に得られた友人関係における傷つき経験の影響尺度と傷つき経験に対する認知的評価の相関係数を確認した。

結果（第3次調査）

傷つき経験の影響尺度の因子モデルの確認

第2次調査で得られた傷つき経験の影響尺度の因子モデルを仮定し、確認的因子分析を行った。その結果、適合度は $CFI=0.88$, $RMSEA=0.06$ であった。第2次調査に比べて適合度指標は悪くなったが、許容できる範囲であった。

傷つき経験の生じた時期と傷つき経験による影響の関連および再検査信頼性

傷つき経験の生じた時期を確認したところ、Table4-1-5の通りになった。調査協力者が回想した傷つき経験の出来事が起きた時期は、中学生の時が74名(37.37%)であった。次いで高校生・浪人生の時が43名(21.72%)であった。その次に多かったのは小学生の時であり、38名(19.19%)であった。大学生の時に関しては3か月以内、それ以前と分けた結果、それぞれ16名(8.08%)、12名(6.06%)となった。最も少なかった時期は小学校以前であり1名(0.51%)のみがこの時期の傷つき経験を回想して尺度に回答した。友人関係で傷つきを経験していないと回答した学生は14名(7.07%)であった。

Table 4-1-5 友人関係における傷つき経験が生じた時期の分布

	3か月以内	大学生	高校生・浪人生	中学生	小学生	小学校以前	傷つき経験なし	計
人数	16	12	43	74	38	1	14	198
割合(%)	8.08	6.06	21.72	37.37	19.19	0.51	7.07	100.00

傷つき経験の生じた時期と傷つき経験の影響との関連をスピアマンの順位相関係数によって検討した(Table4-1-6)。傷つき経験の生じた時期と傷つき経験の影響の順位相関係数には一部有意な相関係数が得られた。傷つき経験の生じた時期と傷つき経験の引きずりには負の相関が見られた($r_s=-.22, p<.01$)。つまり傷つき経験の生じた時期が調査時期に近いほど、傷つき経験を引きずりやすく、逆に傷つき経験の生じた時期が過去であるほど、傷つき経験は引きずられにくいことが明らかになった。また、傷つき経験の生じた時期と新しい視点や態度の獲得、友人への気遣いの増加にはそれぞれ正の相関が見られた($r_s=.17, p<.05$, $r_s=.18, p<.05$)。

Table 4-1-6 傷つき経験の生じた時期と傷つき経験の影響とのスピアマンの順位相関係数

	傷つき経験の 引きずり	消極的な 友人関係への変化	自己価値の 低下	変化や影響の 小ささ	新しい視点や 態度の獲得	友人への 気遣いの増加
時期	-.22 **	.02	-.14	-.05	.17 *	.18 *

注1) * $p < .05$, ** $p < .01$.

注2) 時期の値は小さいほど調査時期に近く、大きいほど調査時期からは遠い。

傷つき経験の生じた時期に対して 3 か月以内と傷つき経験なしという回答をした者を除いた 168 名の大学生のうち、第 2 次調査も参加した大学生に対しては、第 2 次調査と第 3 次調査の回答の相関係数を算出した (Table 4-1-7)。該当者は 158 名であり、いずれの尺度についても有意な正の相関が示された。傷つき経験の引きずり、消極的な友人関係への変化 ($r = .72, p < .001$)、自己価値の低下 ($r = .70, p < .001$)、新しい視点や態度の獲得 ($r = .70, p < .001$) は .70 以上と高い相関係数を示した。小塩 (2016) によれば 12 週以上の間隔をあけた再検査信頼性では基準として $\rho = .70$ (95% CI = .62-.78) という値が得られていることから、これらの下位尺度では許容できる範囲の再現性が示された。一方で、変化や影響の小ささ ($r = .58, p < .001$) と友人への気遣いの増加 ($r = .62, p < .001$) は他の変数に比べるとやや相関係数が低かった。

Table 4-1-7 第2次調査と第3次調査における傷つき経験の影響尺度の相関

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
傷つき経験の影響						
(1) 傷つき経験の引きずり	.72 ***					
(2) 消極的な友人関係への変化	.44 ***	.70 ***				
(3) 自己価値の低下	.50 ***	.36 ***	.71 ***			
(4) 変化や影響の小ささ	-.37 ***	-.25 **	-.32 ***	.58 ***		
(5) 新しい視点や態度の獲得	.15	.08	.08	-.19 *	.70 ***	
(6) 友人への気遣いの増加	.33 ***	.03	.27 **	-.32 ***	.37 ***	.62 ***

注1) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

注2) 同じ下位尺度同士の相関係数を太字で示した。

傷つき経験の影響と認知的評価の関連

次に第 3 次調査で得られた各変数の記述統計量と α 係数、相関係数を Table 4-1-8 に示した。第 2 次調査と同様に、尺度は全て 5 件法で測定されており、各下位尺度に含まれる項目の平均値をその下位尺度の得点としているため、取り得る値の範囲は 1~5 点であった。

Table 4-1-8 第3次調査における各変数の記述統計量, α 係数, 相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
傷つき経験の影響											
(1) 傷つき経験の引きずり	2.93	1.02	.89								
(2) 消極的な友人関係への変化	2.46	1.02	.86	.65 ***							
(3) 自己価値の低下	2.64	0.89	.78	.65 ***	.61 ***						
(4) 変化や影響の小ささ	2.47	0.89	.81	-.43 ***	-.28 ***	-.41 ***					
(5) 新しい視点や態度の獲得	3.46	0.73	.82	.14	.10	.02	-.35 ***				
(6) 友人への気遣いの増加	3.48	0.95	.83	.28 ***	.22 **	.29 ***	-.47 ***	.49 ***			
認知的評価											
(7) 対処効力	2.57	0.86	.83	-.33 ***	-.24 **	-.37 ***	.27 ***	.27 ***	-.04		
(8) 脅威	4.06	0.78	.72	.20 **	.22 ***	.17 **	-.27 ***	.24 ***	.19 *	-.41 ***	
(9) 重要性	3.52	1.02	.70	.26 ***	.13 *	.19 **	-.32 ***	.21 **	.28 ***	.31 ***	.28 ***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

まず各尺度の信頼性について、いずれも許容できる値が得られた($\alpha = .70 \sim .89$)。第2次調査に引き続き、自己価値の低下が他の下位尺度に比べて低い α 係数を示した($\alpha = .78$)が、おおむね十分な内的一貫性が得られた。

傷つき経験の引きずりは認知的評価の対処効力に対して負の相関($r = -.33, p < .001$)、脅威と重要性に対して正の相関を示した($r = .20, p < .01, r = .26, p < .001$)。消極的な友人関係の変化は対処効力に対して負の相関($r = -.24, p < .001$)、脅威と重要性に対して正の相関を示した($r = .22, p < .001, r = .13, p < .05$)。自己価値の低下は対処効力に対して負の相関($r = -.37, p < .001$)、脅威と重要性に対して正の相関を示した($r = .17, p < .01, r = .19, p < .01$)。変化や影響の小ささは対処効力に対して正の相関($r = .27, p < .001$)、脅威と重要性に対して負の相関を示した($r = -.27, p < .001, r = -.32, p < .001$)。新しい視点や態度の獲得は対処効力、脅威、重要性のいずれに対しても正の相関を示した($r = .27, p < .001, r = .24, p < .001, r = .21, p < .01$)。友人への気遣いの増加は脅威と重要性に対して正の相関を示した($r = .19, p < .05, r = .28, p < .001$)。

考察 (第3次調査)

第3次調査では第2次調査に引き続き、友人関係で生じた傷つき経験の影響についての尺度を構成することを目的とした。第3次調査では、第2次調査と同様に認知的評価

との関連を検討した。また、第2次調査と第3次調査の両者を回答した調査協力者のデータを用いて3か月の期間をあけた再検査信頼性も併せて検討した。

まず、信頼性については、内的一貫性は第2次調査と同様にやや低い因子もあるものの、全体的には十分な結果が得られた。一方で再検査信頼性については、 $r=.58\sim.72$ と十分な値は得られなかった。本調査では第3次調査の際に、第2次調査と同じ傷つき経験について回答することを求めなかった。16名は第2次調査と第3次調査の間に生じた傷つき経験について回想して本調査に参加したように、調査協力者は必ずしも同様の傷つき経験を想定した回答したわけではない。そのため、本調査では第2次調査と第3次調査の相関係数が全体的に低くなることは想定範囲内であった。また、ストレスフルな体験への意味づけは、その出来事が生じてから即時に行われるとは限らず、時間の経過と共に意味の探索やその結果、出来事に対する感情は変化していく (Cann, et al., 2011; 松下, 2007)。本調査において、仮に大学生が同じ傷つき経験について、その影響を評価したとしても、3か月の期間を経て、傷つき経験の影響は変化し得るものと言える。この点については本研究では詳細を明らかにすることは適わなかった。今後は傷つき経験を時系列に沿ってとらえ、どのようにその影響が変化していくかを検討していくことで、意味づけの過程やその結果についての知見が得られる。

次に、第3次調査における認知的評価との関連であるが、これはおおむね同様の相関関係を示した。そのため前述のように再検査信頼性は低いものの、友人関係での傷つき経験を測定する尺度としてはある程度安定して用いることのできる尺度であると考えられる。第3次調査の確認的因子分析の結果も、第2次調査の結果よりも適合度は下がったものの、許容できる因子モデルと言える。

ここまでにとどめた第1次から第3次の調査結果から、友人関係で生じた傷つき経験の影響尺度は十分とは言えないまでも、ある程度の信頼性と構成概念妥当性のある尺度であると見なすことができる。以下の節では友人関係で生じた傷つき経験の影響尺度を用いて、傷つき経験の影響がどのような要因によって変化する可能性があるか、その要因について検討する。

第2節 過去のとらえ方と意味づけによる傷つき経験の影響の違い

目的

これまで述べたように、友人関係における傷つき経験は傷つき感情を伴うネガティブな経験であるが、その経験の影響は否定的なものだけではなく、肯定的なものとも評価されることがある。ストレスフルな体験を肯定的にとらえ直すためには、その出来事の意味が見出される必要がある (Park, 2008, 2010)。意図的な努力を要する意味探索は調節と呼ばれ、自動的な意味づけである同化と区別されており (堀田・杉江, 2013)、特に出来事の肯定的な意味を得るためには、意図的な意味探索が有効であることが示されている (上條・湯川, 2016)。以上のような知見から、友人関係における傷つくという経験についても、意図的な意味づけがなされた場合には、その経験を糧にするような肯定的な評価が得られやすくなるものと考えられる。

ネガティブな経験の意味づけを行うかどうかについては、大学生が自身の過去、現在、未来をどのようにとらえているかが関連することが示唆されている。自己や物事のネガティブな側面に注目しやすい人は、出来事をあまり脅威に感じなくても、その出来事について繰り返し思い出しやすいと言われる (上條・湯川, 2014)。青年の中には過去を否定的にとらえており、その過去にとらわれている大学生の一群がいることが明らかにされている (石川, 2014)。そのような過去をネガティブにとらえやすいことは、ネガティブな出来事を繰り返し思い出しくなり、結果として自動的な意味づけが生じやすくなることが予想される。また、青年の過去のとらえ方は否定的なものだけではなく、過去を現在や未来に繋がるものとしてとらえる態度や、過去を現在や未来とは切り離す態度も見られている (石川, 2013)。

自身の過去に対する態度には上記のように個人差があり、このような過去への態度の違いは、同じく過去の出来事に対する態度である意味づけや、その結果である傷つき経験への影響を変化させることが予想される。しかし、このような過去への態度全般と意味づけや意味づけの結果であるネガティブな出来事の影響についてはこれまで検討されてきていない。そこで本調査では、傷つき経験の影響の評価がどのように異なるかを、過去のとらえ方 (石川, 2013)、意味づけの過程 (堀田・杉江, 2013) から説明する。肯定的な意味づけを行うことができるかどうかは、その青年の過去のとらえ方に規定され

るものと考えられる。過去全般に対してのとらえ方が肯定的であれば、より積極的に意味づけが行われるが、過去全般を否定的なもの、あるいは現在や未来に繋がらないものにとらえていれば、意味づけは積極的には行われず、結果として傷つき経験もネガティブな経験として残る可能性がある。また、意味づけの過程はストレスフルな出来事をより脅威と評価するほど生じやすくなることが示唆されている (e.g. Park, 2008, 2010) ため、本調査においても、調査協力者に傷つき経験のストレス評価を求め、その評価によって一連の過程が異なるかを検討する。

方法

調査協力者

2017年4月から7月にかけて、4つの大学で調査を行った。1つ目の大学は茨城県に所在する大学(大学A)であり、調査協力者は大学生92名(男性20名、女性72名)であった。その他3つの大学は東京都に所在する大学(大学B~D)であり、大学Bの調査協力者は66名(男性25名、女性40名、不明1名)、大学Cの調査協力者は83名(男性31名、女性52名)、大学Dの調査協力者は76名(男性44名、女性31名、不明1名)であった。調査全体の有効回答数は317名であり(男性120名、女性195名、不明2名)、平均年齢は19.04歳(SD=1.20)であった。いずれの調査においても各大学の授業担当者の了解を得た上で調査用紙を配布し、自宅で回答後翌週に質問用紙の提出を求めた。

質問用紙の配布の際には、調査の目的についての説明と、以下の倫理的な配慮を行った。第1に調査への協力は任意であり、回答をしないことによる不利益がないことを伝えた。第2に、調査の途中で回答をやめなくなった場合には、途中で回答をやめても不利益がないことを伝えた。第3に調査によって得られた個人情報に厳重に管理することを伝えた。調査用紙の表紙では上記の倫理的配慮と調査の目的を記した。以上の調査目的および倫理的な配慮に同意できた場合には以下の尺度からなる質問用紙への回答を求めた。

調査内容

本研究では学年、年齢、性別の他に以下の尺度への回答を求めた。

過去のとらえ方尺度(石川, 2013) この尺度は青年の過去のとらえ方を測定するものであった。下位尺度は、「過去のマイナスな出来事は自分の糧になった」などの10項目からなる「連続的とらえ」、「過去に対して、後悔をしていることが多い」など5項目からなる「否定的態度」、「過去に向き合うようにしている」など7項目からなる「受容的態度」、「マイナスな出来事は忘れてしまうことが多い」など4項目からなる「わりきり態度」、「自分の過去は暗い思い出が多い」など10項目からなる「否定的認識」であり、全36項目から構成される尺度であった。石川(2013)では連続的などらえと受容的態度、否定的態度と否定的認識にはそれぞれ高い正の相関があり($r=.69, p<.001, r=.80, p<.001$), これらの変数間には本研究においても同様に高い相関が認められた($r=.75, p<.001, r=.83, p<.001$)。そのため本研究では過去のとらえ方を表す尺度として、相関係数の高かった連続的とらえと受容的態度を統一して「連続的・受容的態度」、否定的態度と否定的認識を統一して「否定的態度・認識」とした。その結果、本研究では「連続的・受容的態度」、「否定的態度・認識」、「わりきり態度」の3因子モデルを想定して以下の検討に用いた。石川(2013)に従い「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、下位尺度に示されている特徴が強いことを示した。

本研究では以下の尺度に回答するため、青年にとって印象的だった友人関係における傷つき経験を回想することを求めた。これまでに友人関係で全く傷ついた経験がない場合と、思い出したくないほど不快な体験である場合には以下の尺度への回答を控えることを教示した。

認知的評価尺度(加藤, 2001) この尺度は実際に経験した対人ストレスイベントに対する認知的評価を測定するものであった。下位尺度は「ストレスの原因をうまく解決できる」など4項目からなる「対処効力感($\alpha=.79$)」、「自分にとって苦痛なことだと思う」など3項目からなる「脅威($\alpha=.73$)」、「自分にとって重要なことだと思う」など2項目からなる「重要性($\alpha=.62$)」の全9項目から構成される尺度であった。本研究では調査協力者が想定した傷つき経験に対して、その当時どのような認知的評価を行っていたかの回答を求めた。回答は「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5件法で求めた。得点が高いほど、傷つき経験に対して下位尺度に示されている評価をして

いたことを表した。

意味づけにおける同化・調節尺度(堀田・杉江, 2013) この尺度はストレスフルな体験に対する意味づけの過程を測定するものであった。下位尺度は「私は、その経験が持つ意味を見つけようと思っている」など7項目からなる「調節($\alpha=.88$)」、「その経験が持つ意味を理解するのに時間はかからないだろう」など7項目からなる「同化($\alpha=.86$)」の全14項目から構成される尺度であった。堀田・杉江(2013)では、意味づけの過程を明らかにしていくうえで、体験に対する初期の意味づけを検討することが、未検討かつ重要な視点であるという考えから、ストレスフルな体験当初を回想してこの尺度への回答を求めていた。しかし、本研究では意味づけの過程ではなく、過去の出来事に対して意味づけが行われたかどうかを検討することが目的だったため、本研究では傷つき経験の当初という限定はせず、傷ついた経験に対して、各項目をどの程度考えたかを答えるように求めた。堀田・杉江(2013)に従い「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、下位尺度に類する意味づけを行ったことを示した。

友人関係における傷つき経験の影響尺度 この尺度は友人関係における傷つき経験の影響を測定することを目的とした尺度であり、第1節で構成したものであった。「傷つき経験の引きずり」、「消極的な友人関係への変化」、「自己価値の低下」、「変化や影響の小ささ」、「新しい視点や態度の獲得」、「友人への気遣いの増加」の全32項目からなる。「1. 全く当てはまらない」、「2. あまり当てはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. やや当てはまる」、「5. とても当てはまる」の5件法で回答を求めた。

分析方法

本研究では得られたデータに対して、SPSS ver.20 と Amos ver.20 を用いて以下の分析を行った。

第1に傷つき経験の回想について、比較的強いストレス体験を回想した青年と、そうではない青年に分類するため、ward法によるクラスタ分析を行った。

第2に過去のとらえ方、意味づけ、傷つき経験の影響の各変数の関連を調べるため、過去のとらえ方が意味づけを媒介して傷つき経験に影響するという仮定に基づくパス解析を行った。その際に、比較的強い傷つき経験を回想した青年と、比較的弱い傷つき

経験を回想した青年をそれぞれ別の母集団から得られた標本であると仮定し多母集団同時分析を行った。

結果

傷つき経験の回想による青年の分類

本研究では傷つき経験に対して青年の印象的な出来事について回想を求めた。そのため、傷つき経験と言っても、本人にとって重大な出来事かそうでないか個人差が生じるものと考えられた。そこで、傷つき経験の影響についての検討をする前に対人ストレスに対する認知的評価尺度を元に、ストレスの評価が比較的強い傷つき経験を回想した青年と、比較的弱い傷つき経験を回想した青年とにクラスタ分析(ward法, ユークリッド距離)を用いて分類した(Figure 4-2-1)。

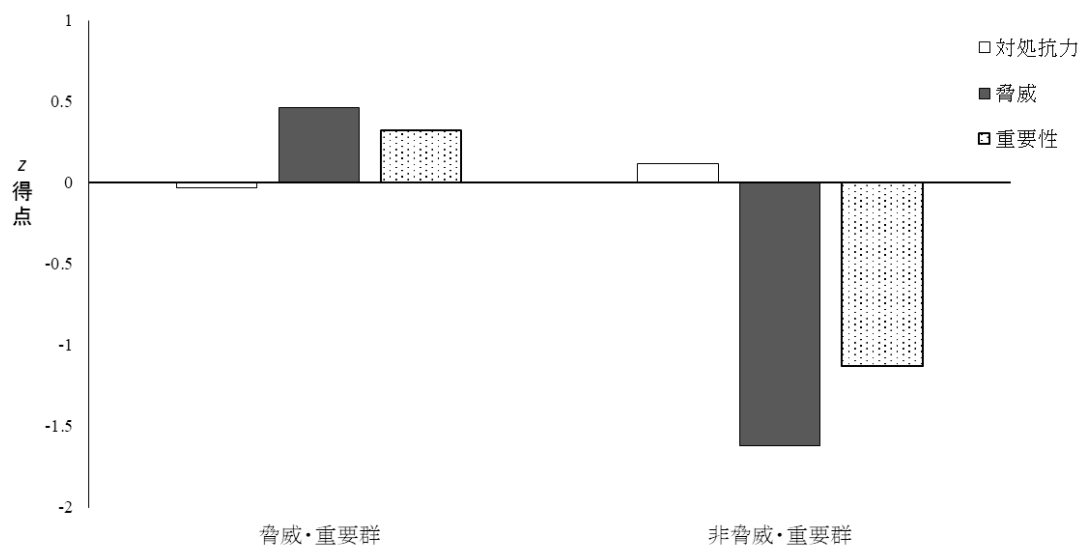


Figure 4-2-1 対人ストレスへの認知的評価による分類

第1クラスタと第2クラスタを比較すると、対処効力の得点には有意差は見られず ($t(294)=1.08, p>.05$), 脅威の得点 ($t(294)=30.04, p<.001$) と重要性の得点 ($t(294)=13.04, p<.001$) に有意差が見られた。第1クラスタは第2クラスタに比べて脅威の得点と重要性の得点のいずれも高かった。このような特徴から第1クラスタを脅威・重要群 ($n=230$),

第2 クラスタを非脅威・重要群($n=66$)とした。

友人関係における傷つき経験の影響尺度とその他の変数との関連

本研究で扱う各変数同士の関連を明確にするため、基礎統計量と相関係数を算出した。まず、各変数の平均値および標準偏差と、信頼性係数として α 係数を算出した(Table 4-2-1)。また、本研究では認知的評価によって2群に分けたため、この2群間に各尺度の差が見られるかをt検定により確認した。その結果、過去のとらえ方尺度では連続的・受容的態度に差が見られ、脅威・重要群の方が高い得点となった($t(293)=2.14, p<.05$)。意味づけにおける同化・調節尺度では、同化に差が見られ、脅威・重要群の方が高い得点となった($t(294)=3.87, p<.001$)。傷つき経験による影響尺度では、傷つき経験の引きずり、新しい視点や態度の獲得、友人への気遣いの増加に差がみられ、いずれも脅威・重要群の方が高い得点となった($t(294)=2.99, p<.01, t(294)=2.56, p<.05, t(294)=3.23, p<.01$)。

Table 4-2-1 本研究で使用した変数の記述統計量および信頼性

尺度名	n	尺度全体			脅威・重要群		非脅威・重要群		t	d
		M	SD	α 係数	M	SD	M	SD		
過去のとらえ方尺度										
連続的・受容的態度	314	3.75	0.63	.93	3.80	0.62	3.61	0.65	2.14 *	0.31
否定的態度・認識	314	3.31	0.82	.92	3.36	0.79	3.22	0.92	1.13	0.17
わりきり態度	314	2.79	0.83	.74	2.77	0.84	2.82	0.81	0.46	0.06
認知的評価尺度										
対処効力	296	2.69	0.83	.87	2.66	0.81	2.79	0.93	1.08	0.15
脅威	296	3.69	1.12	.95	4.21	0.56	1.88	0.53	30.04 ***	4.19
重要性	296	3.39	1.00	.86	3.71	0.82	2.25	0.74	13.04 ***	1.82
意味づけにおける同化・調節尺度										
同化	296	3.24	0.88	.95	3.35	0.86	2.88	0.84	3.87 ***	0.54
調節	296	2.90	0.80	.86	2.92	0.79	2.84	0.82	0.71	0.10
傷つき経験による影響尺度										
傷つき経験の引きずり	296	3.05	0.95	.88	3.14	0.93	2.74	0.95	2.99 **	0.42
消極的な友人関係への変化	296	2.51	1.01	.86	2.51	1.03	2.52	0.94	0.02	0.00
自己価値の低下	296	2.81	0.87	.82	2.83	0.87	2.76	0.84	0.60	0.08
変化や影響の小ささ	296	2.60	0.89	.80	2.55	0.91	2.78	0.78	1.97	0.25
新しい視点や態度の獲得	296	3.38	0.75	.77	3.44	0.75	3.18	0.73	2.56 *	0.35
友人への気遣いの増加	296	3.43	0.92	.78	3.52	0.91	3.11	0.90	3.23 **	0.45

注)全ての値の範囲は1~5であった。

次に、各変数間の相関係数を算出した(Table 4-2-2)。傷つき経験の影響尺度の内、否定的影響の認識は過去のとらえ方の否定的態度や否定的認識と正の相関があった。また、

対人関係の見直しや相手への気遣いは過去のとらえ方の連続的とらえや受容的態度と正の相関があり、意味づけにおける同化・調節のいずれとも正の相関があった。

Table 4-2-2 各変数間の相関係数

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
過去のとらえ方														
(1) 連続的受容的態度		-.35**	.02	.27*	-.25*	-.07	.24	.32**	-.02	-.35**	-.05	-.09	.47***	.16
(2) 否定的態度・認識	-.44***		-.45***	-.53***	.08	-.11	-.13	-.31**	.56***	.49***	-.22	-.28*	-.11	.59***
(3) わりきり態度	-.09	-.27***		.34**	-.01	.15	.27*	.15	-.16	-.30**	.24*	.26	.02	-.23*
認知的評価														
(4) 対処効力	.32***	-.42***	.30***		-.18	.17	.26*	.39***	-.22	-.37**	.23	.20	-.05	-.41***
(5) 脅威	-.04	.26**	-.10	-.42***		.15	-.11	-.15	.07	.12	.02	.17	-.29*	-.06
(6) 重要性	.10	-.14	.03	.33***	-.06		.54***	.19	.23	-.03	.01	-.09	.16	.02
意味づけ														
(7) 調節	.50***	-.35***	.14	.48***	-.05	.24**		.64***	.15	-.19	.13	-.20	.61***	.20
(8) 同化	.30***	-.36***	.31***	.55***	-.16	.26**	.72***		-.28*	-.40***	-.18	-.09	.66***	.19
傷つき経験の影響														
(9) 傷つき経験の引きずり	-.03	.32***	-.05	-.07	.05	.07	.07	-.03		.57***	.69***	-.39**	.03	.25*
(10) 消極的な友人関係への変化	-.06	.43***	-.21**	-.28***	.20*	.07	-.03	-.11	.56***		.65***	-.13	-.30*	.12
(11) 自己価値の低下	-.02	-.21*	.20*	.25**	-.25**	-.11	-.06	.07	-.32***	-.39***		-.34**	-.06	.33**
(12) 変化や影響の小ささ	.48***	-.33***	.11	.36***	.00	.06	.53***	.48***	.00	.04	-.13		-.28*	-.32**
(13) 新しい視点や態度の獲得	.45***	-.10	-.11	.18*	.08	.15	.46***	.30***	.08	.21**	-.24**	.52***		.23
(14) 友人への気遣いの増加	-.13	.46***	-.15	-.17*	.08	-.02	.04	-.06	.64***	.52***	-.31***	.04	.09	

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$. 左下は脅威・重要群, 右上は非脅威・重要群の相関係数を表す。

過去のとらえ方および意味づけと傷つき経験による影響の関連

各変数の関連を仮説に従って調べるために、傷つき経験の脅威・重要度の異なる2群を異なる母集団から得られたものと仮定した多母集団同時分析を行った。まず、脅威・重要群と非脅威・重要群のそれぞれのモデルに対して、等値制約を置かない配置不変モデルとパス係数に等値制約を置いた弱測定不変モデルを比較した。その結果、等値制約を置かない配置不変モデルの適合度が良かったため、本研究では配置不変モデルを採用した(Table 4-2-3)。

Table 4-2-3 配置不変モデルと弱測定不変モデルの適合度比較

	χ^2	df	p	AIC	CFI	RMSEA
配置不変モデル	69.94	46	<.05	285.94	0.98	0.04
弱測定不変モデル	119.82	64	<.001	299.82	0.95	0.05

配置不変モデルに基づいて算出されたパス係数および決定係数を Figure 4-2-2 に示した。配置不変モデルを採用したため、脅威・重要群と非脅威・重要群を異なる母集団と

見なし、それぞれの群を分けて結果を示した。

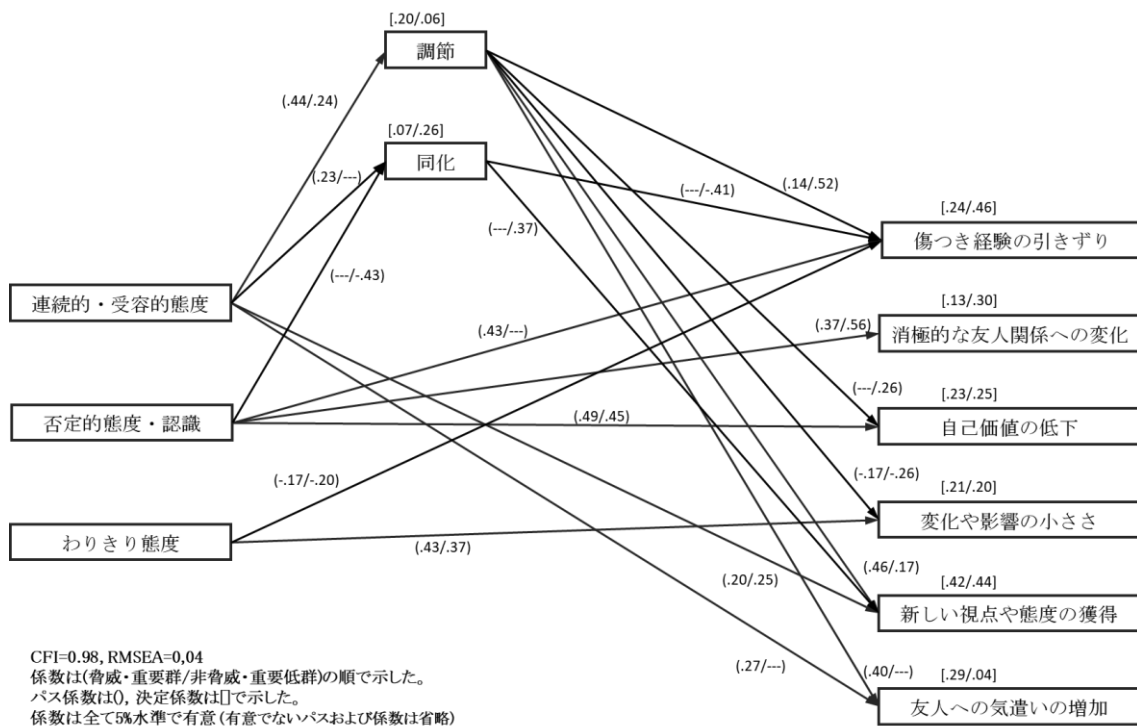


Figure 4-2-2 過去のとらえ方, 意味づけ, 傷つき経験による影響の関係

まず、脅威・重要群では以下のパス係数が有意だった。傷つき経験の引きずりに対して、意味づけの調節、過去のとらえ方の否定的態度・認識から正のパス係数が得られた。また、わりきり態度から負のパス係数が得られた。消極的な友人関係への変化と自己価値の低下に対して、過去のとらえ方の否定的態度・認識から正のパス係数が得られた。変化や影響の小ささに対して、意味づけの調節から負のパス係数が得られた。また、過去のとらえ方のわりきり態度から正のパス係数が得られた。新しい視点や態度の獲得に対して、意味づけの調節と過去のとらえ方の連続的・受容的態度から正のパス係数が得られた。友人への気遣いの増加に対して、意味づけの調節と過去のとらえ方の連続的・受容的態度から正のパス係数が得られた。

次に、非脅威・重要群では以下のパス係数が有意だった。傷つき経験の引きずりに対して、意味づけの調節、同化から正のパス係数が得られた。また、わりきり態度から負のパス係数が得られた。消極的な友人関係への変化に対して、過去のとらえ方の否定的態度・認識から正のパス係数が得られた。自己価値の低下に対して意味づけの調節、過

過去のとらえ方の否定的態度・認識から正のパス係数が得られた。変化や影響の小ささに対して、意味づけの調節から負のパス係数が得られた。また、過去のとらえ方のわりきり態度から正のパス係数が得られた。新しい視点や態度の獲得に対して、意味づけの調節、同化、過去のとらえ方の連続的・受容的態度から正のパス係数が得られた。

考察

本節の目的は友人関係で生じた傷つき経験が青年にとってどのようにとらえられているのかを意味づけと過去のとらえ方の両面から検討することであった。本研究では傷つき経験に対する認知的評価を元に2群に分けて検討した。脅威・重要群と非脅威・重要群の2群に分けることで、傷つき経験による影響の一部に対しては、意味づけや過去のとらえ方の下位尺度の持つ意味が2群間で異なることが示唆された。

まず、より脅威となる経験を回想した青年の場合、過去のとらえ方がネガティブであるほど、友人関係における傷つき経験を現在においても引きずってしまいやすい。一方で比較的脅威ではない経験を回想した青年の場合、否定的態度・認識という過去のとらえ方ではなく、意味づけに取り組むほど傷つき経験を引きずりやすい結果となった。出来事への意味づけによって、否定的な経験を肯定的に捉えることが可能になっていく(Park, 2010)。しかし、意味づけを必要とする出来事は元々ネガティブな経験であり、意味づけをするということはその経験に向きあうことでもある。そのため、元々それほど脅威ではない経験の場合、本来ならそれほど引きずらなくてもよい経験であっても、意味づけによって出来事に直面し、かえってその経験を引きずることになると考えられる。ところが脅威となる経験の場合にはその経験が脅威となる傷つき経験であるために意味づけの有無によらず、高くなりやすい。意味づけの有無ではなく、その青年が過去を否定的にとらえる傾向にあれば、それだけで傷つき経験を引きずりやすくなると考えられる。

第3節 他者への相談の有無と相手の反応による傷つき経験の

影響の違い

目的

第3節では、傷つき経験の影響がどのように異なるかについて、外的な側面として他者への相談の有無と受容の有無を取り上げて検討する。

第4章で主に検討してきた意味づけは必ずしも個人の中だけで完結するわけではない。他者からの支えを感じられないことは悲観的な意味づけに繋がり、ネガティブな出来事によって自身への評価が低くなることが示されている(松下, 2007)。また、丸山・今川(2001)は自身の悩みを自己開示することによって、相手の反応やサポートが得られ、それがストレス低減に繋がることを指摘している。このように、過去のネガティブな経験について振り返り、その経験について考える際には一人で意味づけに取り組むことと、他者に相談することの両者の過程が存在する。もし青年が悩みなどを相談した結果、受容や解決への示唆が得られれば、感情の回復や問題の解決が促進される(高橋, 2013)ことも示されているように、そのため、他者に相談した結果として、共感や受容を得られたかどうかは、大学生が傷つき経験をどのようにとらえるかに大きな影響を及ぼし得るものである。

そこで本節では、友人関係における傷つき経験の影響がどのように異なるかを検討するために、誰かに相談したか否か、そしてその相談によって共感や受容を得られたかどうかの違いを明らかにする。また、その際に個人の内省傾向の違いとの交互作用から、どのような大学生にとって他者への相談が意味を持つのかを明らかにする。

方法

調査協力者

2017年7月に、3つの大学で調査を行った。1つ目の大学は茨城県に所在する大学(大学A)であり、調査協力者は大学生79名(男性16名、女性61名)であった。その他2つの大学(大学B～C)で調査の協力を得た。大学Bの調査協力者は56名(男性18名、女性37名、その他・不明1名)、大学Cの調査協力者は66名(男性23名、女性43名)であっ

た。調査全体の有効回答数は199名であり(男性57名, 女性141名, 不明1名), 平均年齢は19.16歳($SD=1.40$), 学年の割合は1年生101名, 2年生59名, 3年生24名, 4年生17名であった。いずれの調査においても各大学の授業担当者の了解を得た上で調査用紙を配布し, 自宅で回答後翌週に質問用紙の提出を求めた。

質問用紙の配布の際には, 調査の目的についての説明と, 以下の倫理的な配慮を行った。第1に調査への協力は任意であり, 回答をしないことによる不利益がないことを伝えた。第2に, 調査の途中で回答をやめなくなった場合には, 途中で回答をやめても不利益がないことを伝えた。第3に調査によって得られた個人情報に厳重に管理することを伝えた。調査用紙の表紙では上記の倫理的配慮と調査の目的を記した。以上の調査目的および倫理的な配慮に同意できた場合には以下の尺度からなる質問用紙への回答を求めた。

調査内容

本研究では学年, 年齢, 性別の他に以下の尺度への回答を求めた。

傷つき経験の回想について 本研究では以下の尺度に回答するため, 青年にとって印象的だった友人関係における傷つき経験を回想することを求めた。これまでに友人関係で全く傷ついた経験がない場合と, 思い出したくないほど不快な体験である場合には以下の尺度への回答を控えることを教示した。以下の尺度に答える前に傷ついた出来事がいつ生じたのかを質問してから以下の尺度への回答を求めた⁵。

認知的評価尺度(加藤, 2001) この尺度は実際に経験した対人ストレスイベントに対する認知的評価を測定するものであった。下位尺度は「ストレスの原因をうまく解決できる」など4項目からなる「対処効力感」, 「自分にとって苦痛なことだと思う」など3項目からなる「脅威」, 「自分にとって重要なことだと思う」など2項目からなる「重要性」の全9項目から構成される尺度であった。本研究では調査協力者が想定した傷つき経験に対して, その当時どのような認知的評価を行っていたかの回答を求めた。回答は「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の5件法で求めた。得点が高いほど, 傷つき経験に対して下位尺度に示されている評価をしていたことを表した。

友人関係における傷つき経験の影響尺度 この尺度は友人関係における傷つき経験

⁵ 第4章第1節第3次調査方法を参照のこと。

の影響を測定することを目的とした尺度であり、第1節で構成したものであった。「傷つき経験の引きずり」、「消極的な友人関係への変化」、「自己価値の低下」、「変化や影響の小ささ」、「新しい視点や態度の獲得」、「友人への気遣いの増加」の全32項目からなる。「1. 全く当てはまらない」、「2. あまり当てはまらない」、「3. どちらでもない」、「4. やや当てはまる」、「5. とても当てはまる」の5件法で回答を求めた。

知覚された相談相手の反応尺度（高橋, 2013） この尺度は身近な他者に対して対人ストレスを相談した時に相談相手がどのような反応を示したのかを測定する尺度であった。下位尺度は「自分を受けとめてくれた」など17項目からなる「共感・受容」と、「反省すべき点を気づかせてくれた」など11項目からなる「解決への示唆」の全28項目から構成される尺度であった。高橋（2013）に従い、5件法で回答を求めた。この尺度への回答は調査協力者が回想した傷つき経験を、身近な他者に相談した経験のある調査協力者のみに回答を求めた。身近な他者に相談した経験のない調査協力者は上記の傷つき経験の影響尺度までの回答で調査への協力は終了であることを教示した。

分析方法

本研究では得られたデータに対して、SPSS ver.20 と Amos ver.20 を用いて以下の分析を行った。

第1に傷つき経験の回想について、比較的強いストレス体験を回想した青年と、そうではない青年に分類するため、ward法によるクラスタ分析を行った。

第2に知覚された相談相手の反応についても、どのような反応が得られたと知覚しているかをward法によるクラスタ分析によって分類した。

第3に上記の分類によって得られた、傷つき経験の脅威と身近な他者への相談の有無および相談相手の反応をそれぞれ独立変数とし、傷つき経験の影響を従属変数とした2要因の分散分析を行った。交互作用が得られた場合には単純主効果の検定を行い、傷つき経験の脅威別に、身近な他者への相談の有無および相手の反応の効果が見られるかどうかを分析した。多重比較の検定にはTukeyのHSDを用いた。

結果

各変数の記述統計量の確認

本研究で用いた変数の記述統計量, クロンバックの α 係数, 各変数の相関係数を確認した(Table 4-3-1)。本研究のデータでも各尺度のクロンバックの α 係数は許容できる値であり ($\alpha = .78 \sim .94$)、一定の信頼性が確認された。

Table 4-3-1 使用した変数の記述統計量およびクロンバックの α 係数

尺度名	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
認知的評価尺度			
対処効力	2.57	0.86	0.83
脅威	4.06	0.78	0.72
重要性	3.52	1.02	0.70
傷つき経験の影響尺度			
傷つき経験の引きずり	2.93	1.02	0.89
消極的な友人関係への変化	2.46	1.02	0.86
自己価値の低下	2.64	0.89	0.71
変化や影響の小ささ	2.47	0.89	0.81
新しい視点や態度の獲得	3.46	0.73	0.73
友人への気遣いの増加	3.48	0.95	0.83
知覚された相談相手の反応			
共感・受容	4.01	0.80	0.96
解決への示唆	3.29	0.86	0.90

傷つき経験の回想による青年の分類

本研究では傷つき経験に対して青年の印象的な出来事について回想を求めた。そのため、傷つき経験と言っても、本人にとって重大な出来事かそうでないか個人差が生じるものと考えられた。そこで、傷つき経験の影響についての検討をする前に対人ストレスに対する認知的評価尺度を元に、ストレスの評価が比較的強い傷つき経験を回想した青年と、比較的弱い傷つき経験を回想した青年とにクラスタ分析を用いて分類した。

ward 法, 平方ユークリッド距離を用いたクラスタ分析の結果, 2 クラスタが得られた (Figure 4-3-1)。第 1 クラスタと第 2 クラスタを比較した結果, いずれの得点にも有意差が見られた。第 1 クラスタは第 2 クラスタに比べて対処効力の得点が高く ($t(176.51)=10.47, p<.001$)、脅威の得点と重要性の得点は低かった ($t(169.97)=6.30, p<.001$, $t(181.21)=11.22, p<.001$)。このような特徴から第 1 クラスタを非脅威・重要群 ($n=55$)、第

2 クラスタを脅威・重要群($n=131$)とした。

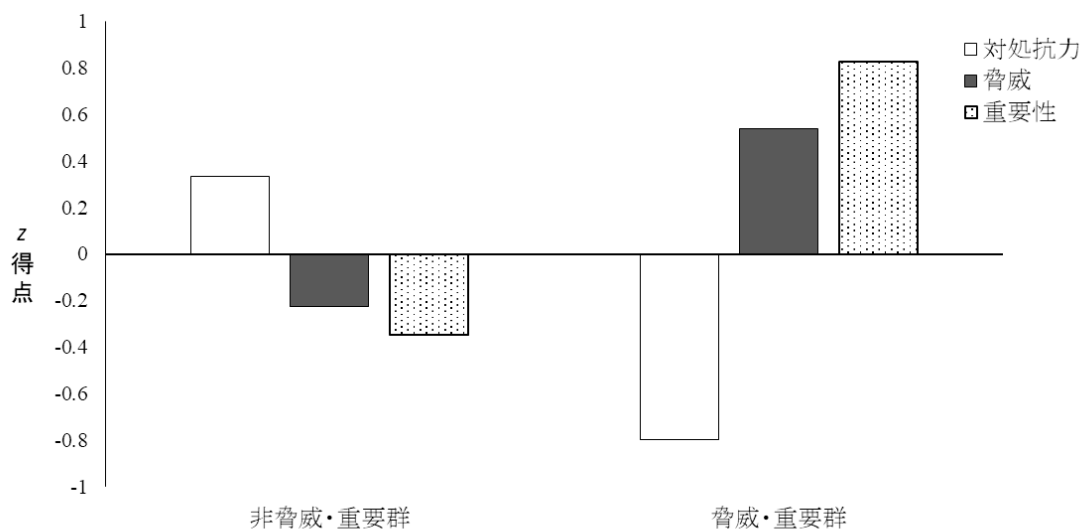


Figure 4-3-1 対人ストレスへの認知的評価による分類

相談の有無および相手の反応による青年の分類

本研究では傷つき経験を親しい他者に相談したか否か、また相談したとしたら相談相手はどのような反応を示したかによって傷つき経験の影響が異なるかどうかを検討することを目的とした。そのため、本節では相談の有無に加えて、相談相手の反応によっても水準を分ける必要があった。そこで、知覚された相談相手の反応に対して ward 法、平方ユークリッド距離を用いたクラスタ分析を行った。その結果、3 クラスタに分類することができた(Figure 4-3-2)。

各クラスタ間で共感・受容の得点に有意差が見られた($F(2,126)=79.68, p<.001$)。多重比較の結果、第1クラスタと第2クラスタが第3クラスタよりも高い得点を示した。次に、解決への示唆の得点に有意差が見られた($F(2,126)=75.95, p<.001$)。多重比較の結果、第2クラスタが第1クラスタと第3クラスタよりも高い得点を示した。以上の結果から、第1クラスタを受容群($n=26$)、第2クラスタを受容・助言群($n=60$)、第3クラスタを反応不十分群($n=41$)とした。以下、これらのクラスタに相談なし群($n=59$)を加えて分析を行った。

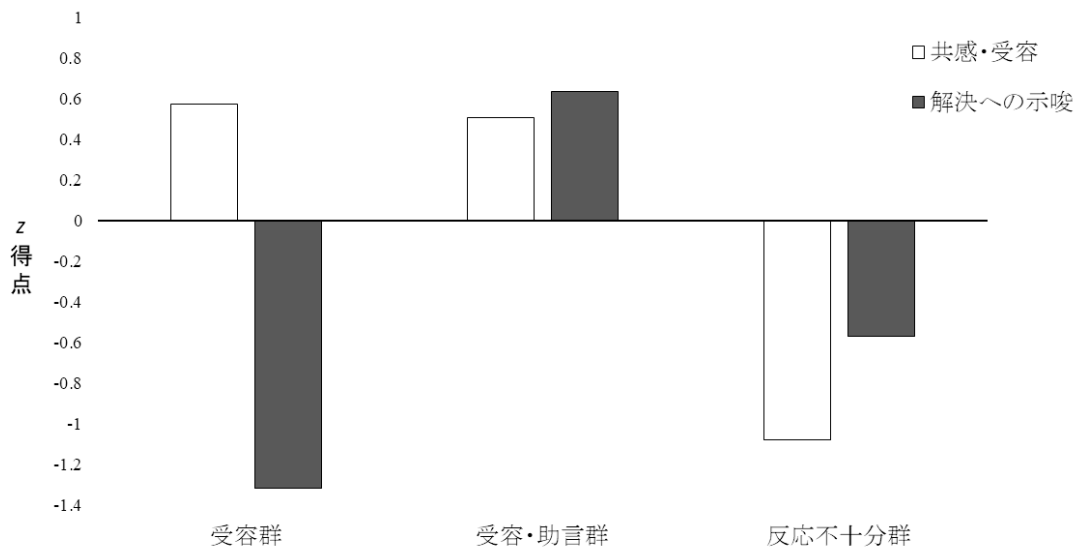


Figure 4-3-2 知覚された相手の反応による分類

傷つき経験の評価と相談の有無および反応による傷つき経験の影響の違い

傷つき経験の認知的評価と相談の有無および相談相手の反応を独立変数とし、傷つき経験の影響を従属変数とした2×3の2要因の分散分析を行った。その結果をTable 4-3-2からTable 4-3-7に示した。

傷つき経験の引きずりに対する効果 傷つき経験の引きずり(Table 4-3-2)では、傷つき経験の評価と相談の有無それぞれの主効果が見られた($F(1, 178) = 12.75, p < .001$, $F(2, 178) = 5.17, p < .01$)。傷つき経験の評価の水準間では、脅威・重要群の方が、非脅威・重要群よりも高い傷つき経験の引きずり得点を示した。相談の有無および相談相手の反応の水準間については多重比較(TukeyのHSD)を行った。その結果、相談なし群は受容群と受容・助言群よりも高い傷つき経験の引きずりの得点を示した($p < .05$)。また、反応不十分群は受容群よりも高い傷つき経験の引きずり得点を示した($p < .05$)。

Table 4-3-2 傷つき経験の認知的評価と相談の有無および相談相手の反応による傷つき経験の引きずりの違い

	相談なし群 (1)		受容群 (2)		受容・助言群 (3)		反応不十分群 (4)		計		F	偏 η^2	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
非脅威・重要群 (1)	2.78	1.07	1.89	0.62	2.51	0.85	2.79	0.79	2.49	0.92			
脅威・重要群 (2)	3.41	1.05	2.73	1.01	2.74	0.60	3.41	0.91	3.07	0.92			
計	3.10	1.09	2.31	0.86	2.62	0.79	3.10	0.85	2.78	0.94			
相談の有無および反応の主効果											5.17 **	0.08	1>2,3, 4>2.
認知的評価の主効果											12.75 ***	0.07	2>1.
交互作用効果											0.73	0.01	

注1) ** $p<.01$, *** $p<.001$ 注2) 多重比較は全て $p<.05$ であった。

消極的な対人関係への変化に対する効果 消極的な対人関係への変化(Table 4-3-3)では、傷つき経験の評価の主効果が見られた($F(1, 178)= 12.75, p<.001$, $F(2, 178)= 5.17, p<.01$)。傷つき経験の評価の水準間では、脅威・重要群の方が、非脅威・重要群よりも高い消極的な対人関係への変化の得点を示した。

Table 4-3-3 傷つき経験の認知的評価と相談の有無および相談相手の反応による消極的な対人関係への変化の違い

	相談なし群 (1)		受容群 (2)		受容・助言群 (3)		反応不十分群 (4)		計		F	偏 η^2	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
非脅威・重要群 (1)	2.54	1.15	2.04	0.91	2.20	0.96	2.57	0.78	2.34	0.99			
脅威・重要群 (2)	2.89	1.04	3.23	1.13	2.65	0.87	2.31	1.24	2.77	1.04			
計	2.72	1.12	2.64	1.13	2.43	0.95	2.44	0.91	2.56	1.02			
相談の有無および反応の主効果											0.93	0.02	
認知的評価の主効果											5.60 *	0.03	2>1.
交互作用効果											1.93	0.03	

注1) * $p<.05$ 注2) 多重比較は全て $p<.05$ であった。

自己価値の低下に対する効果 自己価値の低下(Table 4-3-4)では、傷つき経験の評価と相談の有無それぞれの主効果が見られた($F(1, 178)= 22.86, p<.001$, $F(2, 178)= 3.19, p<.05$)。傷つき経験の評価の水準間では、脅威・重要群の方が、非脅威・重要群よりも高い自己価値の低下の得点を示した。相談の有無および相談相手の反応の水準間については多重比較(TukeyのHSD)を行った。その結果、相談なし群は受容・助言群よりも高い自己価値の低下の得点を示した($p<.05$)。

Table 4-3-4 傷つき経験の認知的評価と相談の有無および相談相手の反応による自己価値の低下の違い

	相談なし群 (1)		受容群 (2)		受容・助言群 (3)		反応不十分群 (4)		計		F	偏 η^2	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
非脅威・重要群 (1)	2.62	0.83	1.80	0.84	2.36	0.76	2.59	0.78	2.34	0.81			
脅威・重要群 (2)	3.25	1.03	3.14	1.03	2.68	0.68	3.18	0.85	3.06	0.90			
計	2.94	0.94	2.47	1.11	2.52	0.75	2.89	0.83	2.70	0.88			
相談の有無および反応の主効果											3.19 *	0.05	3>1.
認知的評価の主効果											22.86 ***	0.11	2>1.
交互作用効果											1.58	0.03	

注1) * $p<.05$, *** $p<.001$ 注2) 多重比較は全て $p<.05$ であった。

変化や影響の小ささに対する効果 変化や影響の小ささ(Table 4-3-5)では、傷つき経験の評価の主効果が見られた($F(1, 178)=16.12, p<.001$)。傷つき経験の評価の水準間では、非脅威・重要群の方が、脅威・重要群よりも高い変化や影響の小ささの得点を示した。

Table 4-3-5 傷つき経験の認知的評価と相談の有無および相談相手の反応による変化や影響の小ささの違い

	相談なし群 (1)		受容群 (2)		受容・助言群 (3)		反応不十分群 (4)		計		F	偏 η^2	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
非脅威・重要群 (1)	2.63	0.80	3.02	1.25	2.52	0.77	2.71	0.78	2.72	0.83			
脅威・重要群 (2)	2.23	1.07	1.97	1.10	1.83	0.73	2.31	0.94	2.08	0.93			
計	2.43	0.91	2.49	1.27	2.17	0.81	2.51	0.83	2.40	0.89			
相談の有無および反応の主効果											1.42	0.02	
認知的評価の主効果											16.12 ***	0.08	1>2.
交互作用効果											0.76	0.01	

注1) ** $p<.001$ 注2) 多重比較は全て $p<.05$ であった。

新しい視点や態度の獲得に対する効果 新しい視点や態度の獲得(Table 4-3-6)では、相談の有無の主効果が見られた($F(2, 178)=5.79, p<.01$)。相談の有無および相談相手の反応の水準間について多重比較(Tukey の HSD)を行った。その結果、受容・助言群は相談なし群よりも高い新しい視点や態度の獲得の得点を示した($p<.05$)。

Table 4-3-6 傷つき経験の認知的評価と相談の有無および相談相手の反応による新しい視点や態度の獲得の違い

	相談なし群 (1)		受容群 (2)		受容・助言群 (3)		反応不十分群 (4)		計		F	偏 η^2	多重比較	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				
非脅威・重要群 (1)	3.11	0.86	3.20	0.91	3.71	0.58	3.52	0.57	3.39	0.74				
脅威・重要群 (2)	3.38	0.73	3.55	0.55	3.84	0.58	3.23	0.72	3.50	0.69				
計	3.25	0.82	3.37	0.80	3.78	0.58	3.38	0.62	3.44	0.73				
相談の有無および反応の主効果											5.79	**	0.09	3>1.
認知的評価の主効果											0.85		0.01	
交互作用効果											1.28		0.02	

注1) ** $p < .001$ 注2) 多重比較は全て $p < .05$ であった。

友人への気遣いの増加に対する効果 友人への気遣いの増加(Table 4-3-7)では、傷つき経験の評価と相談の有無それぞれの主効果が見られた($F(1, 178) = 10.20, p < .01$, $F(2, 178) = 3.03, p < .05$)。傷つき経験の評価の水準間では、脅威・重要群の方が、非脅威・重要群よりも高い友人への気遣いの増加の得点を示した。相談の有無および相談相手の反応の水準間については、多重比較(Tukey の HSD)を行った。その結果、受容・助言群は相談なし群よりも高い友人への気遣いの増加の得点を示した($p < .05$)。

Table 4-3-7 傷つき経験の認知的評価と相談の有無および相談相手の反応による友人への気遣いの増加の違い

	相談なし群 (1)		受容群 (2)		受容・助言群 (3)		反応不十分群 (4)		計		F	偏 η^2	多重比較	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD				
非脅威・重要群 (1)	3.18	0.96	2.87	1.15	3.59	0.89	3.37	0.76	3.25	0.92				
脅威・重要群 (2)	3.47	1.12	4.06	1.18	4.09	0.67	3.55	0.83	3.79	0.96				
計	3.33	1.02	3.46	1.27	3.84	0.86	3.46	0.78	3.52	0.95				
相談の有無および反応の主効果											3.03	*	0.09	3>1.
認知的評価の主効果											10.20	**	0.01	2>1.
交互作用効果											1.18		0.02	

注1) * $p < .05$, ** $p < .001$ 注2) 多重比較は全て $p < .05$ であった。

考察

本調査では友人関係で生じた傷つき経験の影響が、大学生にとってどのようにとらえられているかを、親しい他者への相談という点から検討した。その結果、親しい他者へ

の相談をしなかった大学生に比べて、相談をした相手からの受容を受けた大学生と、受容と解決の示唆や助言を受けた大学生は、傷つき経験を引きずりにくいことが明らかになった。また、同じく親しい他者への相談をしなかった大学生に比べて、相談をした相手からの受容と助言を受けた大学生は、新しい視点や態度の獲得や友人への気遣いの増加を感じやすいことが明らかになった。

これらの結果から、傷つき経験について親しい他者に青年が相談した時、相談相手の反応が伴えば傷つき経験のネガティブな影響は低減し、ポジティブな影響があったと評価しやすくなることが示された。この結果は高橋（2013）の結果に一致するものであった。特に傷つき経験を引きずらないためには、相談相手からの受け入れてもらえると感じられることが重要であることが示された。傷つき経験からの立ち直りには、受け入れてくれるような他者への相談が有効であることは、友人関係での傷つき経験にも同様に指摘できる。

傷つき経験からの影響を肯定的に評価するためには、上記のような受け入れてくれるという反応だけではなく、解決への示唆や助言も必要となる。ネガティブな経験の開示に関しては、それを感情的に自己開示するだけではストレスの低減を見込めず、問題解決を志向した自己開示がサポートの発生を促す(Costanza et al., 1988)と言われる。その自己開示を受けるサポート提供側の反応として、相手を受容し解決への助言などの両者が傷つき経験の影響を肯定的にとらえるために必要となることが示された。

本調査では相談相手の他者は指定しなかった。そのため、調査協力者が誰に相談したかまでは分からない。青年期から成人前期にかけて感情の共有は親しい友人の間で行われるようになる（Rimé, 2009）ように、悩み相談の相手も同世代の友人や恋人である可能性が高いと言える。友人関係という文脈で生じた傷つき経験を、青年が誰に、あるいはどのようにして他者に相談するのは今後さらに検討していく必要がある。

第4節 第4章のまとめ

第4章で得られた知見

第4章では友人関係で傷つくことが大学生自身にとって、どのような影響があったととらえられているのかを検討した。

第4章第1節では、傷つき経験の影響を測定する尺度の構成を試みた。第1節では尺度の構成に関わる分析をまとめた。第1次調査では自由記述調査によって傷つき経験による影響や変化についての尺度項目が構成された。第2次調査で構成された尺度項目に対して得られた回答を元に因子分析を行い、因子モデルを検討した。また、認知的評価との関連では、傷つき経験を脅威あるいは重要であると考えているほど、傷つき経験による影響はネガティブにもポジティブにも大きくなることが示された。これは先行研究から想定された結果と同様であったことから、構成概念妥当性がある程度示されたものと言える。第3次調査においても繰り返し認知的評価との関連を検討し、第2次調査の結果が安定していることを示した。また、傷つきを経験した時期についても検討し、傷つき経験による影響との順位相関係数を分析した。傷つきを経験した時期が過去になるほど、傷つき経験を引きずりにくくなるということが明らかになり、この点についても先行研究から想定された結果と同様であったことから、構成概念妥当性がある程度示されたものと言える。

第4章第2節では、意味づけや過去のとらえ方によって、傷つき経験による影響がどのように異なるのかを検討した。まず調査協力者の回想した傷つき経験によって、比較的脅威・重要な傷つき経験を回想した群（脅威・重要群）と、比較的脅威・重要ではない傷つき経験を回想した群（非脅威・重要群）とに分類した。この分類ごとに大学生の過去のとらえ方と、傷つき経験を意味づけしようとしたかによって、傷つき経験の影響がどのように評価されるかを検討した。その結果、脅威・重要群も非脅威・重要群も共通して以下の3点が明らかになった。第1に、過去を現在に繋がっていると受容的にとらえる傾向が高いほど、新しい視点などを獲得できたと感じやすかった。第2に、過去を否定的にとらえる傾向が高いほど、傷つき経験によって消極的な友人関係をとるようになったり、自身の価値が低下したように感じたりしやすくなった。第3に、過去は過去と割り切る傾向が高いほど、傷つき経験を引きずりにくくなり、また傷つき経験によ

る影響自体を良くも悪くも感じにくくなった。以上の結果から、大学生の過去のとらえ方は傷つき経験が脅威となるようなものかどうかに限らず、傷つき経験による影響の評価に影響しやすいことが明らかになった。また、脅威・重要群と非脅威・重要群で異なる結果として、脅威・重要群ではより積極的に出来事の意味を模索する調節という過程を経ることが新しい視点や態度の獲得や友人への気遣いの増加を促すことが示唆された。一方で、非脅威・重要群では調節を行うことによって傷つき経験を引きずりやすくなるという結果が見られ、新しい視点や態度の獲得を促すのは、むしろ現在の価値観に合わせて出来事の意味を見出す同化という過程であることが示唆された。以上の結果から出来事を脅威と感じるかどうかによって、傷つき経験による影響を肯定的に受け止めるために必要となる意味づけの過程に違いがあり、大学生が傷つき経験を振り返る際には、その大学生が傷つき経験をどのように評価しているかが重要になることが示された。

第4章第3節では傷つき経験による影響が、親密な他者への相談の有無および相談相手の反応によってどのように異なるかを検討した。まず親密な他者への相談の有無と相談相手の反応を分類した。その結果、以下の4群に分けられた。傷つき経験を相談していない群（相談なし群）、相談して受容的な反応は得られたが、解決への示唆や助言は示されなかったと感じている群（受容群）、相談して受容的な反応と解決への示唆や助言の両者が得られたと感じている群（受容・助言群）、相談はしたが受容的な反応も解決への示唆や助言も得られなかったと感じている群（反応不十分群）であった。これらの群と自身にとって脅威・重要な傷つき経験を回想したか否かによって、傷つき経験による影響が異なるかを分析した。その結果、主に以下の3点が明らかになった。第1に、受容群は、相談なし群や反応不十分群と比べて傷つき経験を引きずりにくいこと、受容・助言群についても、相談なし群に比べて傷つき経験を引きずりにくいことが明らかになった。第2に受容・助言群は、相談なし群に比べて自身の価値の低下を感じにくいことが明らかになった。第3に受容・助言群は、相談なし群に比べて新しい視点や態度の獲得と友人への気遣いの増加を感じやすいことが明らかになった。以上の結果から、相談の相手が受容的な態度をとるような相手であれば、相談することは傷つき経験を引きずらないために有効であることが示された。また、さらに解決への示唆や助言を与えてくれる相手であれば、傷つき経験による影響を肯定的にとらえることにも繋がることが示唆された。

第4章の結論

第4章では、主に以下の2点が明らかになった。第1に、過去をどのようにとらえるか、意味づけを積極的に行うかという、傷つき経験に対する個人内の過程が傷つき経験のとりえ方に影響していることである。第2に、親しい他者に傷つき経験を相談するか否か、また相談した相手の反応という、他者の存在を介して傷つき経験のとりえ方が変わることである。これらを明らかにするために第4章第1節では傷つき経験の影響をどのようにとらえているのかを測定する尺度を構成した。

第1の点については、第4章第2節の結果から示された。大学生の過去のとりえ方は傷つき経験が脅威となるようなものかどうかに限らず、傷つき経験による影響の評価に影響しやすいことが明らかになった。過去を受容的にとらえる傾向にある大学生は傷つき経験の影響にも肯定的な影響を見出しやすく、否定的にとらえる傾向にある大学生は傷つき経験の影響を引きずりやすい。また傷つき経験を脅威と感ずるかどうかによって、傷つき経験による影響を肯定的に受け止めるために必要となる意味づけの過程に違いがあり、大学生が傷つき経験を振り返る際には、その大学生が傷つき経験をどのように評価しているかが重要になる。傷つき経験が脅威となるものである場合には、より積極的な意味づけが必要になることが明らかになった。

第2の点については、第4章第3節の結果から示された。相談の相手が受容的な態度をとるような相手であれば、相談することは傷つき経験を引きずらないために有効であることが示された。また、さらに解決への示唆や助言を与えてくれる相手であれば、傷つき経験による影響を肯定的にとらえることにも繋がることを示唆された。

以上の結果から、本研究では友人関係で生じた傷つき経験が大学生の発達において、否定的な影響だけではなく、成長の実感に繋がるなどの肯定的な側面をもつことが示された。従来の研究では友人関係の中で青年がどのような経験を積んでいるかが十分に議論されてこなかった。本研究から日々の友人関係の中で生じる経験が大学生の発達に寄与していることが示唆された。

第5章 討論および結論

第5章では、本研究で得られた知見をまとめて、総合的に討論をする。本研究では第1章の文献研究にて、これまでの友人関係研究を概観した。第2章では面接調査を行い、大学生の回想から実際の友人関係の中で生じてきた出来事について探索的に検討した。第3章と第4章ではそれぞれの質問紙調査によって、友人関係と大学生の適応や発達の関連について検討した。第5章ではこれらの研究によって、大学生の友人関係に関して新たに加えられた研究成果を議論する。

第5章第1節では、まず第2章から第4章までの実証研究で得られた知見を端的に整理する。

第5章第2節では、それらの知見を踏まえて、目的に照らし合わせて本研究の成果を議論する。

第5章第3節では、本研究の結論を提示する。

第1節 本研究で得られた知見

本研究では青年期で重要視されてきた友人関係について、その友人関係の中で生じる具体的なやり取りに注目して、大学生の適応や発達との関連を明らかにすることを目的とした。本研究の2章から4章では実証的研究を通して、大学生の友人関係についての知見を得た。本節ではまずそれらの知見をまとめる。

第2章では半構造化面接調査を通して、大学生が感じているこれまでの友人関係の主観的な変化の過程と、友人関係における傷つきによる影響を検討した。これまでの友人関係研究でも友人関係の発達のな変化については言及されてきたが、その変化の要因や過程については十分に議論されてこなかった。そのため、青年の友人との付き合い方に対して、その付き合い方を志向する背景について十分な知見が蓄積されてこなかった。また、友人関係の中で青年が避けようとしていると言われる、傷つくということについてもほとんど研究されてきていなかった。そこで本研究では青年の友人関係の変化と、友人関係の中で起きている傷つきというネガティブな経験について探索的に検討した。

第2章第2節では、主に青年自身の主観的な友人関係の変化と、その変化のきっかけの認識を分析した。その結果、大学生にとって、友人関係の変化は、友人との接し方の変化だけではなく、その関係で生じる感情の変化や、友人として付き合いしていく対象の変化としても示された。これらの変化を生じさせるきっかけとしては、進学という環境の変化だけではなく、自身の内的な要因、関わる他者の要因と多様であった。青年の発達によって、友人関係は狭く深くなると考えられていたが、自己の成長があったからこそ友人との距離が離れていくプロセスがあることや、一見ネガティブな出来事である友人関係のトラブルを通して自身の友人関係を見直したり、友人への気遣いを意識するようになったりすることなどが示唆された。

第2章第3節では、友人関係で生じた傷ついた出来事に焦点を当て、青年自身にとっての傷つき経験によってもたらされた影響や変化を分析した。その結果、第2節で示された友人との関わりの変化に加えて、傷ついた出来事によって対人関係の見直しや自己意識の変化などが見られた。特に傷つくことによって不快感情が発生することと、対人関係について消極的になる様子が語られた。また、傷ついた出来事を友人に相談し、受容されることで傷つき経験への振り返りが深まる過程が探索的に明らかにされた。

第3章では傷つくことを回避する傾向を中心に、それぞれの大学生の友人との付き合い方ごとに、関係の中で日常的に生じている行動が大学生の適応と関連しているかを質問紙調査によって検討した。大学生の適応に対して、友人との付き合い方が影響していることはこれまでも指摘されてきたが、第3章では友人との付き合い方だけではなく、その友人付き合いの中で生じていることによって大学生の適応が促進されるかどうかを明らかにした。

第3章第1節では、まず先行研究と同様に友人関係の分類を試みた。その結果、友人との付き合い方は、以下の4群に分類された。友人との関わりを避ける傾向が表れた友人関係回避群、友人関係の中で相手に踏み込むことに対する控えめな態度が表れた傷つき回避群、自己開示など友人との関わりに対する積極性が表れた積極的關係群、友人との関係に比重がおかれていて、友人からの評価を気にしてしまう傾向が表れた傷つきリスク群の4群であった。それぞれの友人関係ごとに援助要請やソーシャル・サポートの受容が学校適応感に影響しているかどうかを検討したところ、友人関係回避群の特徴としては、学校に居心地の良さを感じにくいということ、ソーシャル・サポートの受容が増えるほど劣等感を抱きやすくなること、一方で援助要請が必要な時のみに行われることで劣等感を抱きにくくなることが示された。傷つき回避群の特徴としては、ソーシャル・サポートの受容が居心地の良さや被信頼感・受容感といった学校適応感を高めること、援助要請を回避することが劣等感を高めることが示された。積極的關係群も傷つき回避群と同様に、ソーシャル・サポートの量が学校適応感を高めていた。傷つきリスク群ではソーシャル・サポートの受容は学校適応感に影響していなかった。

第3章第2節では、友人関係で傷つくことを避ける傾向と友人に対する援助行動が学校適応感に影響するかどうかを検討した。その結果、友人への援助行動を行うことが学校適応感のいずれの側面にも肯定的に働くことが明らかになった。一方で自分が傷つくことを回避する傾向は居心地の良さの感覚、被信頼感・受容感、劣等感への不適応な影響が示された。ただし、劣等感については傷つくことを回避する傾向と援助行動に交互作用が見られた。傷つきを回避する傾向が高い友人関係をとる青年であっても、友人に対して積極的に援助行動を行うと劣等感が高くないことが明らかになった。

第3章第3節では、友人との付き合い方だけでなく、実際に他者と関わる際のスキルという観点を取り入れて分類を試みた。その結果、友人とソーシャルスキルによる分類

として、以下の5群が得られた。対人関係を円滑にするための他者への気遣いやスキルの不足という性質と、友人を遠ざけようとする性質の2点が表れた配慮・スキル不足距離確保群、傷つくことに関する態度全般が低く、ソーシャルスキルが標準的なスキル標準傷つき無関心群、自他の傷つきを回避しようとする傾向がいずれも高く、かつソーシャルスキルも高い傾向を示したスキル成熟傷つき回避群、傷つきを回避しようとする傾向がいずれも高く、ソーシャルスキルは低いという傾向を示したスキル不足傷つき回避群、自他の傷つきを回避する傾向の低さや、お互いのプライベートにも踏み込める親密な関わりを維持する付き合い方と、ソーシャルスキルが高いという特徴が表れたスキル成熟親密関係群の5群であった。分散分析の結果、これらの5群によって、青年の居場所感に違いが見られた。スキル成熟親密関係群とスキル成熟傷つき回避群が居場所感を抱きやすく、配慮・スキル不足距離確保群と、スキル不足傷つき回避群は居場所感を抱きにくいことが明らかになった。

第4章では、過去の友人関係で傷ついた経験の影響について質問紙調査によって検討した。友人関係で青年が傷つく可能性があり、また傷つくことは長期的な影響を及ぼすことがあることがこれまでの研究でも指摘されてきた。本研究では、友人関係で生じた傷つき経験の影響を測定し、傷つき経験の影響の感じ方の違いを新たに検討した。第4章では、大学生自身の傷つき経験の影響に対する主観的な評価と、傷つき経験の影響を変化させる要因との関連を明らかにすることを目的とした。

第4章第1節では、傷つき経験の影響を測定する尺度の構成を試みた。第4章における3回の調査の内、尺度の構成に関わる変数を取り上げて分析した。第1次調査では自由記述調査によって傷つき経験による影響や変化についての尺度項目が構成された。第2次調査で構成された尺度項目に対して得られた回答を元に下位尺度を構成した。また、認知的評価との関連から構成概念妥当性について検討した。第3次調査では傷つき経験による影響尺度と認知的評価との関連を検討した。また、傷つき経験が生じた時期と傷つき経験による影響尺度の関連を検討した。以上の一連の検討によって傷つき経験による影響尺度の信頼性と妥当性が検討された。

第4章第2節では、意味づけや過去のとらえ方によって、傷つき経験による影響が異なるかを検討した。まず調査協力者の回想した傷つき経験によって、比較的脅威・重要な傷つき経験を回想した群（脅威・重要群）と、比較的脅威・重要ではない傷つき経験

を回想した群（脅威・重要群）とに分類した。この分類ごとに大学生の過去のとらえ方と、傷つき経験を意味づけしようとしたかによって、傷つき経験の影響の違いを検討した。その結果、脅威・重要群も非脅威・重要群も共通して以下の3点が明らかになった。第1に、過去を現在に繋がっていると受容的にとらえる傾向が高いほど、新しい視点や態度の獲得を感じやすかった。第2に、過去を否定的にとらえる傾向が高いほど、傷つき経験によって消極的な友人関係をとるようになったり、自身の価値が低下したように感じたりしやすくなった。第3に、過去は過去と割り切る傾向が高いほど、傷つき経験を引きずりにくくなり、また傷つき経験による影響自体を良くも悪くも感じにくくなった。脅威・重要群と非脅威・重要群で異なる結果として、脅威・重要群ではより積極的に出来事の意味を模索する調節という過程を経ることが新しい視点や態度の獲得や友人への気遣いの増加を促すことが示唆された。一方で、非脅威・重要群では調節を行うことによって傷つき経験を引きずりやすくなるという結果が見られ、新しい視点や態度の獲得を促すのは、むしろ現在の価値観に合わせて出来事の意味を見出す同化という過程であることが示唆された。

第4章第3節では傷つき経験による影響が、親密な他者への相談の有無および相談相手の反応によって異なるかを検討した。まず親密な他者への相談の有無と相談相手の反応を分類した。その結果、以下の4群に分けられた。傷つき経験を相談していない群（相談なし群）、相談して受容的な反応は得られたが、解決への示唆や助言は示されなかったと感じている群（受容群）、相談して受容的な反応と解決への示唆や助言の両者が得られたと感じている群（受容・助言群）、相談はしたが受容的な反応も解決への示唆や助言も得られなかったと感じている群（反応不十分群）であった。これらの群と自身にとって脅威・重要な傷つき経験を回想したか否かによって、傷つき経験による影響が異なるかを分析した。その結果、主に以下の3点が明らかになった。第1に、受容群は、相談なし群や反応不十分群と比べて傷つき経験を引きずりにくいこと、受容・助言群についても、相談なし群に比べて傷つき経験を引きずりにくいことが明らかになった。第2に受容・助言群は、相談なし群に比べて自身の価値の低下を感じにくいことが明らかになった。第3に受容・助言群は、相談なし群に比べて新しい視点や態度の獲得と友人への気遣いの増加を感じやすいことが明らかになった。

第2節 本研究の成果と討論

本研究の目的と検討課題

本研究の目的は、大学生の友人関係の中で生じている具体的なやり取りに注目して、友人関係と大学生の適応や発達との関係を明らかにすることであった。そのために、本研究では主に以下の2点を検討した。第1に、傷つくことを避けるような付き合い方を志向する大学生について、その関係の実態を明らかにすることであった。第2に、友人関係の中で傷つくことについての理解を深め、傷つくということの影響について検討することであった。

第1の検討課題について、まず第2章にて傷つくことを避けるような付き合い方の背景について知見を得るために、友人関係の付き合い方が変化する過程を探索的に検討した。この結果を踏まえて、第3章にて大学生の友人との付き合い方の中で生じるやり取りが、大学生の適応に寄与するかを調査した。

第2の検討課題について、まず第2章にて傷ついた経験そのものを事例から取り上げた。まず青年が何に傷ついているのか、そして傷ついたことによる影響について探索的に検討した。この結果を踏まえて、第4章にて傷つくことの影響が青年の発達に及ぼしている影響を大学生の主観的な評価を元に検討した。

友人関係における具体的な出来事と大学生の適応—第1の課題について—

本研究の第1の課題では、大学生の友人関係の中で生じるやり取りによって、大学生の適応を検討した。その結果、友人関係において、傷つくことを避けようとする青年であっても、友人関係でのやり取りによって適応感が高く保たれていることが明らかになった。

まず、これまでの研究では表面的な付き合い方は、年齢と共に減少すると見られていた(落合・佐藤, 1996)が、傷つくことを避けようとするかどうかは年齢の上昇によってのみ変化するのではなく、傷ついた経験や、友人とのやり取りの結果などによって生じることが示された(第2章第2節)。つまり、同じ傷つくことを避けようとする青年であっても、そのような友人関係に至る背景は異なると言える。そのため、傷つくこと

を避けようとする関係を求めながら、具体的な友人との関わり方も異なり、傷つくことを避けようとする青年の中にも友人との距離が近い青年⁶や（第3章第1節）、ソーシャルスキルの高い青年⁷がいることが示された（第3章第3節）。従来の研究（橋本，2000；中園・野島，2003；岡田，2007，2011）では、傷つくことを避ける友人関係として単一に理解されていたが、本研究ではそのような付き合い方を志向する青年の背景および多様性を明らかにできた。青年の友人関係の実際を理解するために重要な知見が得られたと言える。

また、友人関係で生じる具体的なやり取りに注目したことによって、友人関係と大学生の適応の関連に新たな知見を加えた。傷つきを避けようとする青年であっても、ソーシャル・サポートの受容や援助要請ができていないこと（第3章第1節）、援助行動を友人関係の中で日常的にできていること（第3章第2節）によって、大学生の適応が保たれることが本研究から分かった。従来の研究では傷つきを避ける付き合い方には不適応的な特徴が見られてきた（橋本，2000；岡田，2007）が、大学生の適応に影響するのは付き合い方への志向性だけではなく、その友人関係の中で生じるやり取りが重要であった。本研究は大学生の日常におけるやり取りを取り上げたため、従来の友人との付き合い方の意識のみを取り上げた研究からさらに大学生の友人関係の実際に踏み込んだ検討ができた。日常的に生じる関わりによって大学生の適応感が左右されていることが示された。

これからの友人関係研究に求められていることは、友人関係への意識だけを取り扱うのではなく、その関係の中で大学生がいかに振る舞うのか、またその振る舞いのもたらす影響についての知見を提供することであろう。友人関係場面で生じる行動や、その場面で用いられるスキルが持つ具体的な意味を明らかにしていくことで、大学生が友人関係における行動について振り返り、考える機会となる。大学生の実情と実際の場面を想定した研究を行うことで、初めて友人関係研究の成果が現実の友人関係を生きる大学生に還元されることになる。

⁶ 第3章第1節にて、傷つきリスク群が得られた。

⁷ 第3章第3節にて、スキル成熟傷つき回避群が得られた。

友人関係で傷つくことの影響—第2の課題について—

本研究の第2の課題では、大学生の友人関係の中で生じた傷つくという経験そのものについての探索的な検討と、それを踏まえて傷つくことが青年の発達に及ぼしている影響を検討した。その結果、傷つくという経験は対人関係への不信感などのネガティブな影響を示す一方、その経験から大学生が何らかの学びを得ているというポジティブな影響も示された。

まず、本研究では傷ついた経験に関するエピソードと、その傷つき経験による影響を整理した。その結果、友人関係において、友人に裏切られたと感じたり、無視されたり拒絶されたりすることによって傷つきを感じていることが示された。また、そのような傷つき経験の影響として、友人関係への不信感や、それ以降傷つかないように友人に対して防衛的、消極的になること、自分に自信を持てなくなることなどが示された（第2章第3節）。これらの知見は日常的な傷つき経験について検討した小田部他(2009a)や、Leary, et al. (1998)に従うものであった。本研究では傷つき経験に伴う感情や対人関係の変化は、簡単に切り分けることのできないものであり、それぞれの変化が同時期に生じているということを示した。

第4章では、第2章でも得られた傷つき経験の影響の過程を定量的な研究によって検証するために、傷つき経験の影響に関連する要因を取り上げた。第2章においても、傷つき経験を肯定的にとらえ直すためには、傷つき経験を振り返って何らかの意味を見出そうとしたり、経験を共有し、受容してくれる他者との相互作用があったりしたことが語られた。このような過程は第4章でも示された。傷つき経験は対人関係や自己評価にネガティブな影響を及ぼす側面があるが、そのような側面は意味づけや他者からの受容によって軽減する。また、意味づけや他者からの受容と助言は傷つき経験からの学びをもたらすことを促す。この結果は、ストレスフルな体験に対して、出来事の意味づけがうまくいくとその出来事は肯定的にとらえることができるようになる(Park, 2010)、ネガティブな経験に伴う自己感情は他者からの支えによって肯定的に保たれる(松下, 2007)という出来事に対する意味づけの研究に一致する結果であった。これらの先行研究の知見を援用することで、友人関係で生じた傷つき経験についても、青年の発達を促す働きがあることが本研究から確かめられた。

友人関係は自分とは異なる他者との関わりによって生まれる。そのため、青年自身が

傷つきを避けようとしていても、常に傷つきを避けられるわけではない。友人と付き合いことは、不可抗力的に傷ついてしまう出来事に巻き込まれるリスクも伴う。友人関係で生じる傷つき経験について知見を蓄積するということは、いざ友人関係で傷ついた時に、青年がその傷つき経験を受け止める際に役立つ資料を提供することに繋がる。本研究において他者への相談の有無およびその反応によって傷つき経験による影響の評価が異なったように、傷つき経験に対するサポートなどの効果を明らかにすることができれば、友人関係で傷ついた青年を支える一助となる。

総括

本研究は友人関係の中で生じている具体的な出来事に注目して、大学生の発達や適応と友人関係との関連を明らかにすることを目的とした。従来の研究では、友人との付き合い方に対する意識を取り上げて友人関係について議論することが多かった。しかし、友人関係は一方の青年の意識によってのみ成り立つのではなく、青年と友人の少なくとも二者間のやり取りによって形成される。本研究では具体的なやり取りと意識の両者を扱うことで、青年の友人関係によって生じる適応や発達について検討した。その結果として、友人関係に関する研究知見に以下の成果を新たに加えることができた。

まず、傷つくことを回避しようとする青年の中にもソーシャルスキルの高い青年がおり、必ずしも不適応的な特徴は見られないということが明らかになった。そして、傷つくことを回避しようとする青年であっても、その関係の中でサポートの要請と受容ができることが適応感を向上させ、友人へのサポートができることによって劣等感も抑制されることが示された。これまでの研究では、友人関係において傷つくことを避けようとする青年は不適応的であることが示されてきた (e.g. 岡田, 2007 ; 小塩, 1998)。しかし、このような知見は友人関係の意識のみを扱って検討したことで得られたものであり、その関係の中で生じる行動による影響が考慮されていない。友人関係において傷つくことを避けようとする青年であっても、サポートの授受や友人と関わるためのスキルという実際のやり取り次第では、青年の適応が促される。

特に友人からのサポートに関して、その効果はサポートが生じる付き合い方によって異なることも本研究から示された。傷つきを避けようとする関係の中ではサポートの量

が適応感を促進するが、友人関係自体を避けようとする青年では、サポートが提供されるとかえって劣等感が高くなる。そのような青年では、自分にとって必要な時にだけ友人に援助要請できるということが劣等感を抑えることに繋がる。友人からのサポートは、これまでもその効果が指摘されてきた（福岡，2010；周・深田，1995）。しかし、これらはサポートと青年の適応の関連を直接検討したものであり、そのサポートが生起する関係まで十分に考慮されていない。友人からのサポートの効果は、そのサポートが生じる友人関係によっても異なることが本研究から明らかになった。

青年が傷つきを避けようとする背景には、過去の友人関係に関する出来事が影響していることが本研究から示唆された。過去の様々な出来事によって青年の友人関係は影響を受け、従来の発達観に沿うような、深く親密な関係を志向するようになる（落合・佐藤，1997）こともあれば、より消極的な関係を求めるようになることもある。過去の出来事の中には傷ついた経験のような友人との相互作用によるものや、自身の能力などの発達によるもの、進学などの環境の変化によるものが見られた。本研究の知見から、青年の友人関係の発達は従来考えられてきたように、狭く深い関係へと変化していくだけでなく、自身の経験や環境などに合わせて積極的になったり消極的になったりと多様な過程をとることが示された。中でも過去の傷つき経験の影響は、自己開示や友人との関わりに対して消極的になるという変化をもたらす要因になる可能性を持つ。友人からの裏切りや阻害などによって青年は傷つき、その経験を元に傷つくことを避ける関係を求めるようになる過程が本研究から得られた。青年にとって友人関係で傷つくことを避けようとする意識は、過去の経験を自身の友人関係に反映させ、その時々友人関係に適応しようとする過程としてとらえることができる。

その他にも友人関係で傷ついた経験の影響がみられた。友人関係における傷つき経験は、青年の友人関係を消極的な態度へと変化させるだけではなく、視野の広がりなどの学びをもたらすものとしても受け入れられていることや、現在でもネガティブな経験として引きずられることなどが示された。このような傷つき経験の影響はポジティブかネガティブかという二元論で語られるものではなく、対人関係への意識、自己の意識など様々な側面に影響があることが大学生の語りから得られた。大学生の語りでは傷つき経験の影響は単独なものとは限定することはできず、様々な影響が同時に感じられていることが示唆された。

本来ネガティブな出来事である傷つき経験を、自身にとって肯定的に受け止めるためには、過去に対して肯定的にとらえ、意味づけに積極的に取り組むこと、そして他者への相談をすることが有効であるという知見が本研究から得られた。特に他者に相談したことで、相手から受容や助言を得られることによって、傷つくことを引きずらずに済み、傷つき経験の影響を肯定的にとらえやすくなることが示された。これまで主にトラウマなどの研究では、大きなストレス体験が意味づけによって肯定的にとらえ直されることが指摘されてきた (Park, 2008, 2010) が、トラウマほど病理的な体験ではなく青年にとって日常の一部であろう友人関係における経験であっても、このような過程が生じることが明らかになった。

以上の知見を統合すると、青年が友人関係において傷つきを避けようとするにつれて、新たな視点を提供できる。つまり、従来の友人関係研究では不適応的とされてきた傷つきを避ける付き合い方であるが、本研究からは傷つきを回避することによる発達と適応の可能性が示された。友人関係で傷つくことを避けながらも、十分に適応的な友人関係は成り立つと言える。

まず、傷つきを避けようとする友人関係を志向することは、傷ついた経験を生かした発達であるという可能性が指摘できる。友人関係で傷つくという経験は、傷ついた青年にとって対人関係の見直しや自他が傷つかないような関係の模索のきっかけとなる。傷つき経験は傷つき感情を伴うネガティブな経験であるが、その経験を通して、青年自身にとって、より適した他者との関係を学んでいくという一面がある。経験から学んだ結果として、友人関係で傷つくことを避けるという付き合い方へと至る発達の過程が考えられる。伝統的な青年観では、友人関係の発達は年齢とともに関係が深く親密になっていき (落合・佐藤, 1997), お互いに言いたいことを言いあえる関係を期待するようになる (和田, 1993) ものととらえてきた。しかし、このような発達観だけでは、現在の青年が傷つくことを避けようとしながら友人と付き合いおうとすることを説明できない。青年が友人関係における傷つきを避ける付き合い方をすることは、傷つかないための対処方略であることも指摘されている (岡田, 2011)。傷つくことを避ける友人関係を求めるようになることは、傷つき経験をはじめとする過去の様々な出来事から発達してきた友人関係の在り方であるという一面がある。

ただし、友人関係で傷つくことを回避しようとする青年が、誰しも適応的な関係を維

持できているわけではない。傷つくことを回避する青年にとっては、その関係の中で生じるやり取りが特に重要になる。友人との付き合いで傷つきたくないと思う青年は、日常的な関わりの中で友人にサポートを要請できること、またその結果としてサポートを得られることで、適応感を感じられる。またサポートを得られるだけでなく、相手にサポートを提供できることが劣等感を抑制する。サポートの提供と受容のバランスがとれることは精神的健康を保つための一つの要因である（周・深田，1996）。傷つくことを避けたい青年の場合には、友人との関係の中でお互いがサポートを提供し合えるような交流をしていくことで、友人関係が心理的な安定をもたらすものとして機能する。これまで傷つくことを避ける理由にはソーシャルスキルの低さ（白井，2006）も指摘されてきたが、自分と友人を傷つけずに付き合いしていく青年の中には、ソーシャルスキルの高い青年もいる。日常的に友人とサポートの交換をし、関係を良好に維持しお互いが傷つかないように気を配るために、青年のソーシャルスキルが活用されると考えられる。そのため、傷つくことを避ける青年であってもソーシャルスキルの高い青年は、居場所として実感できるような友人関係を築けている。

以上のように、従来の研究で不適応的な特徴の見られていた傷つくことを避けるような青年であるが、必ずしも不適応的と言えるわけではないことが示された。以下に示した Figure5-2-1 は、本研究で得られた傷つくことを避ける青年の発達と適応の視点をまとめたものである。

まず、友人関係で傷つくことを避けようとする付き合い方を求める意識は、過去の傷つき経験などによって形成される⁸。過去の傷つき経験によって青年が発達する中で、自身の対人関係を見直し、修正しようとすることで友人関係の意識に変化が生じる。傷つき経験による対人関係の変化は他者に対する不信感や、消極的な関わり方への変化など様々である。その変化の一つとして、自身の内面の開示を伴うような付き合い方よりも、それらを避け、一定の距離をとる付き合い方を求めるようになる過程が本研究第2章から見られた。このような変化を青年自身が肯定的にとらえ、対人関係の見直しなどの変化として受け入れるためには、傷つき経験について意味づけをしたり、他者に相談したりする過程を経ることが第4章から見られた。この過程で他者への相談ができな

⁸本研究では主に傷つき経験を扱ったが、ソーシャルスキルの低さ（白井，2006）や、もともと低い自尊感情（岡田，2007）などによっても傷つくことを避けようとする意識は形成されることが考えられる。

ったり、あるいは意味づけがうまくいかなかったりした場合、傷つき経験を引きずり、対人関係への不信感などの影響があることも示唆された。

次に、様々な友人との付き合い方への意識がある中で、傷つきを避ける付き合い方を志向する青年の場合、友人関係の中で生じるやり取りが重要になる。本研究ではサポートの授受とソーシャルスキルによる日常的な振る舞いを第3章で扱った。傷つきを避ける意識の強い青年であっても、十分なサポートを友人に提供することができ、友人からのサポートの受容が行われれば、あるいはソーシャルスキルを用いて友人と関わることができれば、友人関係は心理的な安定などの機能（松井，1990）として働き、青年の適応に寄与する。ところが、従来の研究でも指摘されてきたように、傷つくことを避けようとする友人関係は不適応的な関係にもなる。それはサポートが提供できなかったり、あるいは友人からのサポートを得られなかったり、ソーシャルスキルが低かったりすることによって生じることが示された。

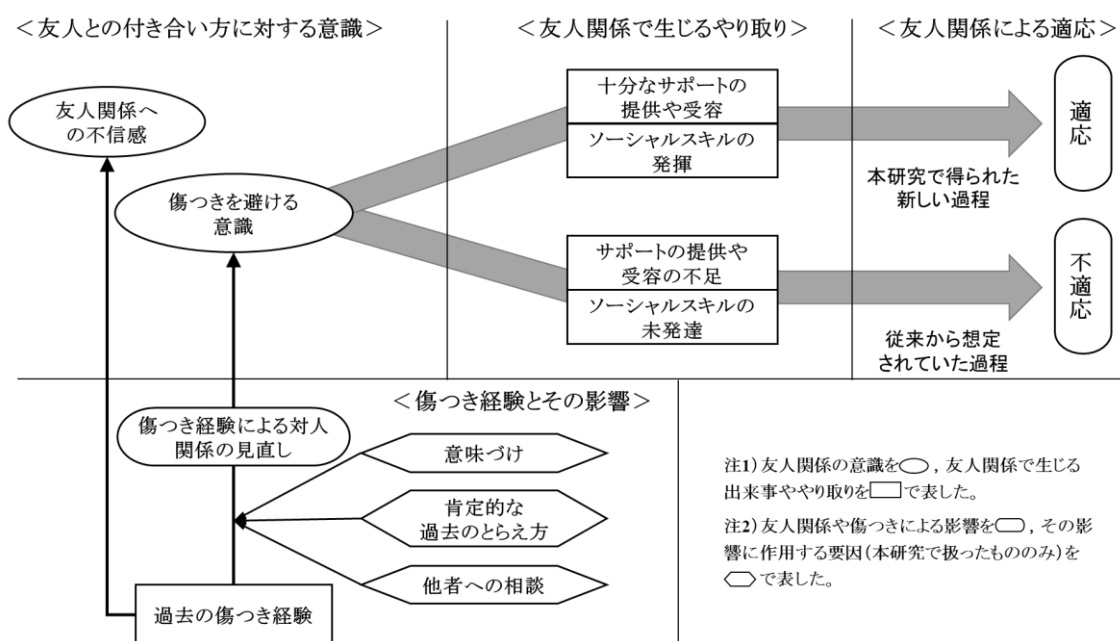


Figure 5-2-1 本研究から得られた傷つくことを避ける意識と適応の関連

このように友人関係で生じた傷つき経験から、自身の友人関係の問い直しや振る舞いの修正などが生じ、それに伴い友人との関わり方も変化していく過程が本研究から示唆された。友人関係の発達に従来示されていたような親密な関係へと変わっていただけで

はなく、自他の傷つきを避ける浅い付き合いへと変わっていく過程もある。友人関係の機能（松井，1990）を得られるような関係は、深い関わりを求めることによつてのみ形成されるわけではない。傷つくことを避けようとする意識を持っていても、実際の場面ではお互いにサポートを提供し合えるやり取りが、好ましい友人関係を作ることに寄与する。この成果から、たとえば過去の傷つき経験から、傷つくことを避けようとする青年に対して、傷つくことを避けない友人関係を強要するのではなく、傷つくことを避けながら良好な関係を保つために、ソーシャルスキルの向上や、援助行動・援助要請行動を行うための訓練を行うといった支援が考えられる。

本研究は友人関係を通じた発達と適応を検討するにあたり、全5章を用いて議論してきた。第1章では従来の友人関係に関する研究についての知見を整理し、傷つくことを避けようとする意識と、傷つき経験について検討することが課題であることを示した。第2章からの実証研究では、友人関係を通じた発達と適応について、傷つくことに関する意識と具体的なやり取りや出来事を同時に扱うことによつて検討した。第2章では個別の事例から、傷つくことを避ける意識の成り立ちと傷つき経験の影響について検討した。この結果から、傷つきを避ける付き合い方は傷つき経験などの過去の出来事を受けて、そのような意識へと発達していく過程が示唆された。従来のように傷つきを避けることを単純に不適応な付き合い方と断じることはできず、傷つきを避けようとする付き合い方を志向していても、適応的と言える過程が推測された。第3章と第4章ではこの結果を踏まえて、友人関係で傷つくことを避ける付き合い方による適応と、傷つき経験の影響の過程を数量的な調査によつて実証することを試みた。その結果、傷つきを回避しようとする青年が適応的な関係を築くために必要な友人間のやり取りと、傷つき経験を肯定的に受け止めるために必要な要因が明らかになった。第2章から第3・4章という構成をとることによつて、個別の事例から得られた「友人関係において傷つくことを避ける付き合い方を求めることは不適応的・未成熟とは必ずしも言えない」という推論を検証することができた。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、以下の4点があげられる。

第1の限界として、現実のやり取りとしての友人関係を扱うための枠組みの問題があげられる。本研究では大学生の友人関係の中で生じている相互作用として、サポートの授受や傷つき経験を取り上げた。しかし、友人関係の中で生じる出来事にはその他にも多様な出来事が考えられる。たとえば、第2章でも語られた友人との喧嘩や行き違いなども友人関係で生じる出来事の一つであろう。あるいは友人とは常に協力、協同するとは限らず競争する関係となることもある。このような多様なやり取りが友人関係には含まれている。また、本研究では主に自身が傷ついた経験を取り上げて分析したが、意図的・無意図的であれ友人を傷つけてしまうという事もある。本研究で取り上げた枠組みだけでは取り上げきれない多様なやり取りが友人関係には含まれている。大学生の友人関係を実践的に検討していく上では、友人関係の中で生じている相互作用の解明や、実際の相互作用を取り上げる枠組みを充実させる点が課題としてあげられる。

第2の限界として、本研究で扱った友人関係の狭さがあげられる。友人関係は青年と友人の二者関係から、3人、4人、それ以上の人数と構成人数に限りはない。特に友人の数が増えれば、その関係の中で生じる相互作用がより複雑になり、彼らの立ち位置も流動的になることが予想される。本研究ではこのような友人関係の広がりをとらえる術を持たなかった。第2章では数名が複数の友人関係の中で生じた傷つき経験を語ったが、そのようなグループで生じる傷つき経験という視点は第4章の調査には生かされなかった。3人以上の人間が集まった時に生じる友人関係の出来事について、今後の知見の蓄積が必要である。

上記の課題に通じる点であるが、第3の限界としては友人関係の測定方法の問題があげられる。友人関係は双方向のコミュニケーションによって成立しており、そのコミュニケーションの中でサポートや傷つきが生じている。友人関係はこのように動的な過程であるが、本研究ではいずれも自身を振り返って評価する静的な方法によって測定している。友人間で実際に行われているコミュニケーションの多様性については、これまで十分に検討されておらず、青年の日常的な生活の中から友人間のコミュニケーションについての具体的な知見の蓄積が必要であろう。そのためには、青年の友人間コミュニケーションの観察や、面接調査などによって、彼らのコミュニケーションの在り方を調査

していく必要がある。その上で、友人関係の動的な過程をとらえるために、コミュニケーションの在り方の変遷や、友人関係への介入を通じた相互作用の変容過程を取り上げたりすることで、青年と友人のお互いの関係の中で生じるコミュニケーションを検討していく必要がある。

第4の限界として、発達や適応を検討する際に、一時点上の調査に留まっているという問題があげられる。発達や適応はある一時点の状態を検討するだけでは不十分であり、経時的な変容過程を捉える必要がある。友人関係の変化や、傷つき経験の影響の変化は急激に起こるとは限らないため、繰り返し調査を行い、長期的な縦断調査を行うことが必要になる。大学生の発達や適応に対する、友人関係の役割を明らかにしていくためには、調査方法の工夫も必要とされる。

第3節 結論

本研究の目的は、大学生の友人関係の中で生じている具体的なやり取りに注目して、友人関係と大学生の適応や発達との関係を明らかにすることであった。そのために、本研究では主に以下の2点を検討した。第1に、傷つくことを避けるような付き合い方を志向する大学生について、その関係の実態を明らかにし、傷つくことを避けることによって適応的な関係が維持されることを実証することであった。第2に、友人関係の中で傷つくことについての理解を深め、傷つくということの影響について検討することであった。

第1の課題について、友人関係で傷つくことを避けようとする意識が形成される背景には、従来考えられていたようなソーシャルスキルの未熟さや自己愛だけではなく、傷ついたという経験や、密接な付き合いを必要としなくなったという自己の発達などが影響していることが明らかになった。そのため、傷つくことを避ける青年であっても、不適応的ではない青年の存在が推測された。この推測に対して、傷つくことを避けようとする友人関係と、サポートの授受やソーシャルスキルの程度を取り上げることによって検証した。その結果、友人関係で傷つくことを避けようとする青年であっても、友人関係の中でサポートの授受が日常的に行われ、高いソーシャルスキルが維持できていれば、十分に適応的な関係であると言えることが示された。

第2の課題について、従来は避ける対象としてしか扱われていなかった友人関係で傷つくことと、その影響が事例から検討することができた。その結果、青年は友人との関わりの中で、仲間外れや裏切りなどの経験によって傷つき、その影響によって不信感や対人関係に消極的になることが示された。一方で、傷ついた経験によって自身の対人関係の見直しや、視野の広がりなどが生じる可能性も見られた。この可能性に対して、傷ついた経験による影響を測定する尺度を構成し、傷ついた影響を肯定的に受け止めるための要因について検証した。その結果、友人関係で傷ついたとしても、過去のとらえ方が肯定的であると傷つき経験に対して意味づけが行われ、結果として傷つき経験を肯定的にとらえやすくなることが示された。また、親しい他者に相談することによっても、傷つき経験を引きずらずに肯定的に受け入れやすくなることが示された。

以上の結果から、友人関係で傷つくことを避けることによる、適応的な友人関係とし

ての機能が維持されることについて議論された。傷つくことを避けることは、従来の研究では不適応的とされていたが、それは傷つくことを避ける青年はソーシャルスキルが低かったり、そのためにサポートの授受がうまくいかなかったりするためである。本研究から、傷つくことを避ける青年であっても、ソーシャルスキルが高く、サポートの授受が日常的に行われていれば、それは適応的な友人関係となる。傷つきを避けようとする背景には、過去の傷つき経験による発達という側面もあるため、現在傷つくことを避けようとしているかどうかだけではなく、その青年の関係の実際に踏み込んで検討していく必要がある。本研究は傷つき経験と傷つくことを回避する傾向を同時に扱うことで、青年の友人関係の新たな適応の形を明らかにした。

引用文献

- 安部主晃・川人潤子・大塚泰正 (2014). 再確認傾向が対人ストレスイベント及び精神的健康に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 23, 29-37.
- 阿部祐子・山口映里・五十嵐哲也 (2015). 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関連——友人関係目標による差異に注目して—— 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 5, 11-18.
- 相川 充 (1996). 社会的スキルという概念 相川 充・津村俊充(編)社会的スキルと対人関係——自己表現を援助する——(pp.3-21) 誠信書房
- 相川 充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要第1部門教育科学, 56, 87-93.
- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 (1993). 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究——孤独感と社会的スキルとの関係—— 社会心理学研究, 8, 44-55.
- 赤坂瑠以・高木秀明 (2005). 携帯電話のメールによるコミュニケーションと高校生の友人関係における発達の特徴との関連 パーソナリティ研究, 13, 269-271.
- 安藤玲子・坂元 章・鈴木佳苗・小林久美子・樫淵めぐみ・木村文香 (2004). インターネット使用が人生満足感と社会的効力感に及ぼす影響——情報系専門学校男子学生に対するパネル調査—— パーソナリティ研究, 13, 21-33.
- 浅野良輔・吉田俊和 (2014). 日本語版知覚された目標サポート尺度の作成——異性・同性友人関係における構成概念妥当性の検討—— 教育心理学研究, 62, 240-252.
- Bagwell, C. L., Bender, S. E., Andreassi, C. L., Kinoshita, T. L., Montarello, S. A., & Mukker, J. G. (2005). Friendship quality and perceived relationship changes predict psychosocial adjustment in early adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, 22, 235-254.
- Belk, R. W. (1988). Possessions and the extended self. *Journal of consumer research*, 15, 139-168.
- Berndt, T. J., & Keefe, K. (1995). Friend's influence on adolescent's adjustment to school. *Child Development*, 66, 1312-1329.
- Bigelow, B. J. (1977). Children's friendship expectations: A cognitive-developmental study. *Child development*, 48, 246-253.

- Bolger, N., DeLongis, A., Kessler, R. C., & Schilling, E.A. (1989). Effects of daily stress on negative mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, *57*, 808-818.
- Bonhote, K., Romano-Egan, J., & Cornwell, C. (1999). Altruism and creative expression in a long-term older adult psychotherapy group. *Issues in mental health nursing*, *20*, 603-617.
- Brewin, C. R., Dalgleish, T., & Joseph, S. (1996). A dual representation theory of posttraumatic stress disorder. *Psychological Review*, *103*, 670-686.
- Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal competence and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep: Friendship in childhood and adolescence* (pp. 158-185). New York: Cambridge University Press.
- Blos, P. (1962). *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. New York: Free Press.
- Cambron, M. J., Acitelli, L. K., & Steinberg, L. (2009). When friends make you blue: The role of friendship contingent self-esteem in predicting self-esteem and depressive symptoms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *36*, 384-397.
- Cann, A., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Triplett, K. N., Vishnevsky, T., & Lindstrom, C. M. (2011). Assessing posttraumatic cognitive processes: The event related rumination inventory. *Anxiety, Stress, & Coping*, *24*, 137-156.
- Chen, Z., Williams, K. D., Fitness, J., & Newton, N. C. (2008). When hurt will not heal: Exploring the capacity to relive social and physical pain. *Psychological science*, *19*, 789-795.
- Coke, J. S., Batson, C. D., & McDavis, K. (1978). Empathic mediation of helping: A two-stage model. *Journal of personality and social psychology*, *36*, 752-766.
- Collins, N. L., & Miller, L. C. (1994). Self-disclosure and liking: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, *116*, 457-475.
- Costanza, R. S., Derlega, V. J., & Winstead, B. A. (1988). Positive and negative forms of social support: Effects of conversational topics on coping with stress among same-sex friends. *Journal of Experimental Social Psychology*, *24*, 182-193.
- Davis, C. G., & Macdonald, S. L. (2004). Threat appraisals, distress and the development of positive life changes after September 11th in a Canadian sample. *Cognitive Behaviour Therapy*, *33*, 68-78.

- Davis, C. G., & Morgan, M. S. (2008). Finding meaning, perceiving growth, and acceptance of tinnitus. *Rehabilitation Psychology, 53*, 128-138.
- Davis, M.H., Morris, M. M., & Kraus, L.A. (1998). Relationship-specific and global perceptions of social support: Associations with well-being and attachment. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 468-481.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspectives on Help-seeking. In B.M.Depaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher(Eds.) *New Directions in Heiping. Vol.2: help-seeking* (pp.3-12). New York: Academic Press.
- 榎本博明 (1987). 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- Franz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality, 53*, 224-256.
- 藤井恭子 (2001a).大学生の友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学紀要, 6, 69-78.
- 藤井恭子 (2001b). 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 福森崇貴・小川俊樹 (2006). 青年期における不快情動の回避が友人関係に及ぼす影響——自己開示に伴う傷つきの予測を媒介要因として—— パーソナリティ研究, 15, 13-19.
- 福岡欣治 (2000). 日常ストレス状況における友人との支持的な相互作用が気分状態に及ぼす効果 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 14, 1-7.
- 福岡欣治 (2010). 日常ストレス状況体験における親しい友人からのソーシャル・サポート受容と気分状態の関連性 川崎医療福祉学会誌, 19, 319-328.
- Furman, W., & Bierman, K. L. (1984). Children's conceptions of friendship: A multimethod study of developmental changes. *Developmental Psychology, 20*, 925.
- Furman, W., & Buhmester, D. Age and sex differences in perception of networks of personal

- relationships. *Child Development*, 63, 103-115.
- 二塚亜美・尾田政臣(2004). 顔面表情の表出と認知に関する実験的研究——性別と非言語的表出性の効果について—— 電子情報通信学会技術研究報告. *PRMU*, 93-98.
- Hammen, C. L. (1991). Generation of stress in the course of unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 555-561.
- 原田克己・滝脇裕哉 (2014). 居場所概念の再構成と居場所尺度の作成 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 6, 119-134.
- 長谷川真穂・下田芳幸 (2012). 中学生における友人間のソーシャルサポートの互惠性と共感性およびストレス反応との関連について 人間発達科学部紀要(富山大学), 6, 211-220.
- 橋本 剛 (1995). ストレッサーとしての対人葛藤——ストレス低減方略への展望—— 実験社会心理学研究, 35, 185-193.
- 橋本 剛 (1997a). 対人関係が精神的健康に及ぼす影響——対人ストレス生起過程因果モデルの観点から—— 実験社会心理学研究, 37, 50-64.
- 橋本 剛 (1997b). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 橋本 剛 (1997c). 現代青年の対人関係についての探索的研究——女子学生の面接データから—— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 44, 207-219.
- 橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- Havighurst, R. J. (1943). *Human development and education*. Longmans, Green. (荘野雅子 訳 (1958). 発達課題と教育 牧書店)
- Hays, R. B., & Oxley, D. (1986). Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 305-313.
- Hollingsworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton
- 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 堀毛一也 (1990). 社会的スキルの習得 斎藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック——人間形成と社会と文化—— (pp.79-100) 川島書店

- 堀 匡・島津明人 (2005). 大学新入生のソーシャルスキルが、入学後の友人サポート、抑うつ、孤独感に及ぼす影響 *ストレス科学*, 19, 245-253.
- 堀田 亮・杉江 征 (2013). 重大なライフイベントの意味づけに関する尺度の作成 *健康心理学研究*, 26, 108-118.
- Hunter, F. T., & Youniss, J. (1982). Changes in function of three relations during adolescence. *Developmental Psychology*, 18, 806-811.
- 五十嵐祐・吉田俊和 (2003). 大学生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響 *心理学研究*, 74, 379-385.
- 飯田沙依亜・甲村和三・舟橋 厚・長谷川桜子・竹澤大史・幡垣加恵 (2011). 大学生の居場所に関する研究——居場所のなさに着目して—— *愛知工業大学研究報告*, 46, 49-55.
- 池田幸恭・葉山大地・高坂康雅・佐藤有耕 (2013). 大学内の友人関係における親密さと共有様式との関係 *青年心理学研究*, 24, 111-124.
- 石川茜恵 (2013). 青年期における過去のとらえ方の構造——過去のとらえ方尺度の作成と妥当性の検討—— *青年心理学研究*, 24, 165-181.
- 石川茜恵 (2014). 青年期における過去のとらえ方タイプから見た目標意識の特徴——時間的展望における過去・現在・未来の関連—— *25*, 142-150.
- 石本雄真 (2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 3, 93-100.
- 石本雄真 (2010a). 青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響 *発達心理学研究*, 21, 278-286.
- 石本雄真 (2010b). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感、自己有用感との関連から *カウンセリング研究*, 43, 72-78.
- 城 佳子 (2012). 大学生の自己開示・ソーシャル・サポートが被受容感に及ぼす影響の検討——被開示スキルとの関連を通して—— 『人間科学研究』 (文教大学人間科学部), 34, 63-72.
- Jones, W. H., Hobbs, S. A., & Hockenbury, D. (1982). Loneliness and social skill deficits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 682-689.
- Joseph, S., & Linley, P. A. (2005). Positive adjustment to threatening events: An organismic

- valuing theory of growth through adversity. *Review of general psychology*, 9, 262-280.
- Joseph, S., & Williams, R. (2005). Understanding posttraumatic stress: Theory, reflections, context and future. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, 33, 423-441.
- Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 周 玉慧・深田博己 (1995) 青年の心身の健康に及ぼすソーシャル・サポートのネガティブな効果 広島大学教育学部紀要第一部 (心理学), 44, 45-52.
- 上條菜美子・湯川進太郎 (2014). ストレスフルな体験の反すうと意味づけ——主観的評価と個人特性の影響—— 心理学研究, 85, 445-454.
- 上條菜美子・湯川進太郎 (2016). ストレスフルな体験の意味づけにおける侵入的熟考と意図的熟考の役割 心理学研究, 86, 513-523.
- 金子俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 片山美由紀 (1996). 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, 67, 351-358.
- 加藤 厚 (1989). 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究, 60, 184-187.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情緒的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 加藤 司 (2000). 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234.
- 加藤 司 (2001a). 対人ストレス過程における帰属とコーピング 性格心理学研究, 9, 148-149.
- 加藤 司 (2001b). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 加藤 司 (2002). 対人ストレス過程における社会的相互作用の役割 実験社会心理学研究, 41, 147-154.
- 加藤 司 (2006). 対人ストレス過程における友人関係目標 教育心理学研究, 54, 312-321.
- 加藤 司 (2007a). 大学生における友人関係の親密性と対人ストレス過程との関連性の検証 社会心理学研究, 23, 152-161.

- 加藤 司 (2007b). 対人ストレス状況における認知的評価、コーピング、情動の関連性について 健康心理学研究, 20, 18-29.
- 菊地章夫 (1983). 向社会的行動の発達 教育心理学年報, 23, 118-127.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル——, 川島書店
- 菊島勝也 (2003). ソーシャル・サポートのネガティブな効果に関する研究 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 6, 239-245.
- 小林哲郎・池田謙一 (2007). 若年層の社会化過程における携帯メール利用の効果——パーソナル・ネットワークの同質性・異質性と寛容性に注目して—— 社会心理学研究, 23, 82-94.
- Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukophadhyay, T., & Scherlis, W. (1998). Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being?. *American psychologist*, 53, 1017-1031.
- 栗原 彬 (1989). やさしさの存在証明——制度と若者のインターフェイス—— 新曜社
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 (2004). 大学生の親友関係における関係性高揚と指針的健康との関係——相互協調的・相互独立的価値観を踏まえた検討—— 教育心理学研究, 52, 24-32.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2016). 大学新生における LINE ネットワークと友人満足感および精神的健康との関連 実験社会心理学研究, 56, 1-13.
- 黒川雅幸・吉武久美・中山 真・三島浩路・大西彩子・吉田俊和 (2015). 大学新生の友人関係における FTF および SNS コミュニケーション 対人社会心理学研究(大阪大学), 15, 55-62.
- Last, C. G., Barlow, D. H., & O'Brien, G.T. (1984). Precipitants of agoraphobia: Role of stressful life events. *Psychological Reports*, 54, 567-570.
- Laursen, B., & Collins, A. (1994). Interpersonal conflict during adolescence. *Psychological Bulletin*, 115, 197-209.
- Laursen, B., Finkelstein, B. D., & Betts, N. T. (2001). A developmental meta-analysis of peer conflict resolution. *Developmental Review*, 21, 423-449.
- Lavine, L. O., & Lombardo, J. P. (1984). Self-disclosure: Intimate and nonintimate disclosures to

- parents and best friends as a function of Bem sex-role category. *Sex Roles*, *11*, 735-744.
- Leary, M. R., Springer, C., Negel, L., Ansell, E., & Evans, K. (1998). The causes, phenomenology, and consequences of hurt feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1225-1237.
- Lu, L., & Argyle, M. (1992). Receiving and giving support: Effects on relationships and well-being. *Counselling Psychology Quarterly*, *5*, 123-133.
- Maccoby, E. E. (1990). Gender and relationships: A developmental account. *American Psychologist*, *45*, 513-520.
- 牧野幸志 (2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係——同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差, 学年差の検討—— 経営情報研究 (摂南大学), *20*, 17-32..
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, *98*, 224-253.
- 丸山利弥・今川民雄 (2001). 対人関係の悩みについての自己開示がストレス低減に及ぼす影響 対人社会心理学研究 (大阪大学), *1*, 107-118.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック——人間形成と社会と文化—— (pp.283-296) 川島書店
- 松井 豊 (1996). 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斎藤誠一 (編) 青年期の人間関係 (pp.19-54) 培風館.
- 松尾由美・大西麻衣・安藤玲子・坂元章 (2006). 携帯電話使用が友人数と選択的友人関係志向に及ぼす効果の検討 パーソナリティ研究, *14*, 227-229.
- 松下智子 (2005). ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感に関する研究 心理学研究, *76*, 480-485
- 松下智子 (2007). ネガティブな経験の意味づけ方と自己感情の関連——ナラティブ・アプローチの視点から—— 心理臨床学研究, *25*, 206-216.
- 松浦 均 (2006). 援助行動発動時における社会的スキル, 共感経験, 援助行動経験の影響について 応用心理学研究, *31*, 76-88.
- McKenna, K. Y. A., & Bargh, J. A. (2000). Plan 9 from cyberspace: The implications of the internet for personality and social psychology. *Personality and Social Psychology Review*,

4, 57-75.

満野史子・三浦香苗 (2010). 大学生の思いやり行動躊躇と対人関係特性の関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 12, 75-85.

水野将樹 (2004). 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか——グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成—— 教育心理学研究, 52, 170-185.

中村佳子・浦 光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について——対人関係の継続性の視点から—— 社会心理学研究, 15, 151-163.

皆川邦直 (1980). 青春期・青年期の精神分析的発達論——ピーターブロスの研究をめぐって—— 小此木啓吾(編) 青年の精神病理 2 (pp.43-166) 弘文堂

宮本聡介 (2012). 友人ネットワークサイズと社会的自尊心の関連——日米大学生の比較—— 明治学院大学心理学紀要, 22, 61-72.

永井暁行 (2013). 青年期における友人関係愛他行動尺度作成の試み 日本青年心理学会第19回大会発表論文集, 19, 62-63.

永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成——縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—— 教育心理学研究, 61, 44-55.

永井 智 (2017). 援助要請スタイルと愛着および適切な援助要請行動の関連の検討 立正大学心理学研究所紀要, 15, 25-31.

長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.

中園尚武・野島一彦 (2003). 現代大学生における友人関係への態度に関する研究——友人関係に対する「無関心」に注目して—— 九州大学心理学研究, 4, 325-334.

小畑豊美・伊藤義美 (2001). 青年期の心の居場所の研究——自由記述に表れた心の居場所の分類—— 情報文化研究 (名古屋大学), 14, 59-73.

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.

緒方泰子・和泉由貴子・北池 正 (2006). 高校生の孤独感と携帯メールの利用および友人とのネットワークとの関連 日本公衆衛生雑誌, 7, 480-492.

岡田 努 (1987). 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.

- 岡田 努 (1993a). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田 努 (1993b). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 岡田 努 (2010). 友人関係の変質 菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二 (編著) 社会化の心理学/ハンドブック——人間形成への多様な接近—— (pp.167-182) 川島書店
- 岡田 努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究, 20, 11-20.
- 岡田 努 (2012). 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成——傷つけ合うことを回避する傾向を中心として—— 金沢大学人間科学系研究紀要, 4, 19-34.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹波洋子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスラーの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2016). 心理尺度構成における再検査信頼性係数の評価——「心理学研究」に掲載された文献のメタ分析から—— 心理学評論 59, 68-83.
- 小田部貴子・加藤和生 (2007). 反復性のつらい体験によって形成される「心の傷スキーマ」の実証的研究 パーソナリティ研究, 16, 25-35.
- 小田部貴子・加藤和生・丸野俊一 (2009a). 「傷つき体験」の内実とその心理的影響の解明 青年心理学研究, 21, 17-29.
- 小田部貴子・加藤和生・丸野俊一 (2009b). 「心の傷」に関する諸研究をどのように位置づけるか——「日常型心の傷」を取り入れた新たな枠組みの提案—— 九州大学心理学研究, 10, 61-80.

- 尾崎仁美・上野淳子 (2001). 過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響——成功・失敗経験の多様な意味—— 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 27, 63-87.
- Park, C. L. (2008). Testing the meaning making model of coping with loss. *Journal of Social and Clinical Psychology, 27*, 970-994.
- Park, C. L. (2010). Making sense of the meaning literature: An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events. *Psychological Bulletin, 136*, 257-301.
- Park, C. L., & Folkman, S. (1997). Meaning in the context of stress and coping. *Review of general psychology, 1*, 115-144.
- Paul, E.L., & Brier, S. (2001). Friendsickness in the transition to college: Precollege predictors and college adjustment correlates. *Journal of Counseling and Development, 79*, 77-89.
- Rimé, B. (2009). Emotion elicits the social sharing of emotion: Theory and empirical review. *Emotion review, 1*, 60-85.
- Ryan, A. M., Patrick, H., & Shim S-O. (2005). Differential profiles of students identified by their teacher as having avoidant, appropriate, or dependent help-seeking tendencies in the classroom. *Journal of Educational Psychology, 97*, 275-285.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006). グラウンデッド・セオリー・アプローチ——理論を生み出すまで—— 新曜社
- 坂本 安・高橋靖恵 (2009). 友人関係における心理的距離のズレと疎外感の関連 青年心理学研究, 21, 69-81.
- 桜井茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, 34, 342-346.
- Seiffge-Krenke, I., & Shulman, S. (1993). Stress, coping and relationships in adolescence. In J. Sandy, & R. T. Hector (Eds.), *Adolescence and its social worlds* (pp169-196). Hove, England: Lawrence Erlbaum Associates.
- 千石 保 (1985). 現代若者論——ポスト・モラトリアムへの模索—— 弘文堂
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.

- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果
社会心理学研究, 7, 45-53.
- 下田俊介 (2009). 親密な友人関係における自己評価維持と関係性維持——拡張自己評
価維持モデルからの検証—— 社会心理学研究, 25, 70-76.
- 白井利明 (2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴——変容確
認法の開発に関する研究(Ⅲ)—— 大阪教育大学紀要(第Ⅳ部門), 54, 151-171.
- Stürmer, S., Snyder, M., Kropp, A., & Siem, B. (2006). Empathy-Motivated Helping:
The Moderating Role of Group Membership. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32,
943-956.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成——関係性の観点からのと
らえ直し—— 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 水津孝紀・児玉真樹子 (2016). ソーシャルスキルが友人および教師との関係, 学業を媒
介して学級適応感に及ぼす影響——高校生を対象として—— 学習開発学研究 (広
島大学), 9, 37-44.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W. W. Norton. (中井
久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑓幹八郎 訳 (1990). 精神医学は対人関係論である み
すず書房)
- 鈴木佳苗・坂元 章・小林久美子・安藤玲子・檀淵めぐみ・木村文香 (2003). インター
ネット使用がソーシャルスキルに及ぼす影響——パネル調査による評価研究——
日本教育工学雑誌, 27 (Suppl.), 117-120.
- 鈴木素子・寺寄正治・金光義弘 (1998). 青年期における友人関係期待と, 現実の友人関
係に関する研究 川崎医療福祉学会誌, 8, 55-64.
- 鈴木有美 (2002). 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康—
—共感性およびストレス対処との関連—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
紀要 (心理発達科学), 49, 145-155.
- Swenson, L. M., Nordstrom, A., & Hiester, M. (2008). The role of peer relationships in adjustment
to college. *Journal of College Student Development*, 49, 551-567.
- 高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 社会学部紀要(関西大学),
29, 1-21.

- 高橋幸子 (2013). 対人ストレスを身近な他者に相談する過程の検討 カウンセリング研究, 46, 1-10.
- 高倉 実・新屋信雄・平良一彦 (1995). 大学生の Quality of Life と精神的健康について——生活満足度尺度の作成—— 学校保健研究, 37, 414-422.
- 宅 香菜子 (2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討——ストレスに対する意味の付与に着目して—— 心理臨床学研究, 23, 161-172.
- 谷村圭介・渡辺弥生 (2008). 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係 教育心理学研究, 56, 364-375.
- 時岡良太・佐藤 映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井有香・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・岩上晶子・神代末人・桑原知子 (2017). 高校生の LINE でのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響 パーソナリティ研究, 26, 76-88.
- 泊 真児・吉田富二雄 (1999). プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係 社会心理学研究, 15, 77-89.
- 泊 真児・吉田富二雄 (2001). 性格特性の Big Five と日常活動におけるプライベート空間の 7 機能 社会心理学研究, 16, 147-158.
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 (pp.89-116) 誠信書房
- 都筑 学・早川宏子・宮崎伸一・村井 剛・早川みどり・金子泰之・永井暁行・梁 晋衡 (2013). 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (3) 中央大学保健体育研究所紀要, 31, 1-34.
- 都筑 学・宮崎伸一・村井 剛・早川みどり・永井暁行・梁 晋衡 (2015). 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (5) 中央大学保健体育研究所紀要, 33, 1-18.
- 都築誉史・木村泰之 (2000). 大学生におけるメディア・コミュニケーションの心理的特性に関する分析——対面, 携帯電話, 携帯メール, 電子メール条件の比較—— 応用社会学研究(立教大学), 42, 15-24.
- 辻 大介 (2006). つながりの不安と携帯メール 関西大学「社会学部紀要」, 37, 43-52.
- 對馬淑乃・松田英子 (2012). 特性シャイネス及び感情表出の制御が友人関係満足感及び

- 友人行動量に及ぼす影響 ストレス科学研究, 27, 55-63.
- 植村里絵 (1999). 向社会的行動の生起過程に関する探索的研究 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 173-185.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 海野裕子 (2007). 大学生は「ひとりの時間」をどう捉えるか——自由記述の分析を中心とした検討—— 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 16, 99-109.
- 海野裕子・三浦香苗 (2010). 大学生における「ひとりの時間」と孤独感・対人恐怖心性との関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 12, 51-61.
- Vangelisti, A. L., & Young, S. L. (2000). When words hurt: The effects of perceived intentionality on interpersonal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 17, 393-424.
- 和田 実 (1992). 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.
- 和田 実 (1993). 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異. 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 和田 実 (1998). 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康の関係——性差の検討—— 実験社会心理学研究, 38, 193-201.
- 脇本竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 47, 160-168.
- 渡部雪子・永井 智・桑原千明 (2014). 大学生における援助要請の方法と適応との関連の検討 立正大学心理学研究年報, 5, 47-53.
- 山田みき・岡本祐子 (2008). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ——対人関係の特徴の分析—— 発達心理学研究, 19, 108-120.

謝辞

本論文は筆者が中央大学文学研究科心理学専攻博士後期課程に在籍中に実施した研究の成果をまとめたものである。同専攻教授，都筑学先生には，指導教官として終始に渡り手厚いご指導をいただいた。著者の拙い意見や考えに都筑先生が根気強く寄り添ってくださったことで，執筆までに6年の歳月をかけた本論文は日の目を見る事ができた。ここに深く感謝を申し上げる。

同専攻教授，山科満先生，並びに，同専攻教授，富田拓郎先生には副査としてご助言およびご指導を戴いた。山科先生には本研究の構想の段階から相談にのっていただき，大変有益な助言を頂戴した。富田先生には2度の間発表の場をいただき，本研究の根本を補強するための助言を頂戴した。ここに深謝の意を表する。

以上の先生方をはじめとして，本研究は多くの諸先生方の助力をいただいた。調査を行う機会を提供してくださった石川茜恵先生，坂井敬子先生，須藤智先生，中山友則先生の協力なしには，これだけ多くの調査データを得る事はできなかった。また，本研究の調査に参加していただいた大学生の協力が得られなければ，本研究は成り立たない。深く感謝すると共に，本研究が大学生の日常生活を豊かにするものになることを望む。

同専攻，都筑研究室の各位には研究の遂行にあたり，日頃より有益なご討論ご助言，そして励ましを戴き，何度も助けられた。また，佐藤夏月先生には学位論文の執筆に際して，多くの助言と助力をいただいた。各位に対して，ここに謝意を表する。

最後に，長い博士後期課程を支えてくれた家族と，常に励ましてくれた恋人に感謝したい。

付録 本研究で用いた尺度および項目の一覧

付録 1 学校への適応感尺度(大久保, 2005)

学校への適応感尺度(大久保, 2005)	
因子名	項目名
居心地の良さの感覚	周囲に溶け込んでいる 周囲となじんでいる 周りの人と楽しい時間を共有している 自由で話せる雰囲気である 自分と周りがかみ合っている ありのままの自分を出している 周りに共感できる リラックスできる 幸せである 安心する 周りと助け合っている
課題・目的の存在	将来役に立つことが学べる これからの自分のためになることができる やるべき目的がある 好きなことができる 成長できると感じる 充実している 熱中できるものがある
被信頼・受容感	周りから頼られていると感じる 周りから期待されている 周りから必要とされていると感じる 周りから関心をもたれている 存在を気にかけている 良い評価がされていると感じる
劣等感のなさ	* 周りに迷惑をかけていると感じる * 自分だけだめだと感じる * 役に立っていないと感じる * 嫌われていると感じる * 周りから指示や命令をされているように感じる * 自分が場違いだと感じる

注) 逆転項目には*をつけた。

付録 2 援助要請スタイル尺度(永井, 2013)

援助要請スタイル尺度(永井, 2013)	
因子名	項目名
援助要請過剰型	よく考えれば大したことないと思えるようなことでも, わりと相談する 悩みを抱えたら, それがあまり深刻なものでなくても, 相談する 比較的ささいな悩みでも, 相談する 困ったことがあったら, 割とすぐに相談する
援助要請回避型	悩みが深刻で, 一人で解決できなくても, 相談はしない 悩みが自分では解決できないようなものでも, 相談しない 悩みは最後まで, 自分一人がかかえる 悩みがどのようなものでも, 最後まで自分一人でがんばる
援助要請自立型	相談より先に自分で試行錯誤し, いきづまったら相談する 先に自分で, いろいろやってみてから相談する 少しづらくても, 自分で悩みに向き合い, それでも無理だったら相談する 悩みが自分一人の力ではどうしようもなかった時は, 相談する

付録 3 友人関係尺度(岡田, 2007)

友人関係尺度(岡田, 2007)	
因子名	項目名
自己閉鎖	<ul style="list-style-type: none"> * 自分の心をうち明けて話す * 悩みごとを相談する 本当の気持ちは話さない お互いのプライバシーに立入らない * 落ち込んだとき話を聞いてもらう 友だちにグチを言わないようにする 浅い付き合いにとどめる 自分が落ち込んだ姿を友だちに見せないようにする * 必要に応じて友だちを頼りにする まじめな話題になると冗談でごまかす 相手に甘えすぎない 相手の言うことに口をはさまない 相手の世界に口出ししない
傷つけられることの回避	<ul style="list-style-type: none"> 友だちからどう見られているか気にする 友だちから「つまらない人」と思われないように気をつける 友だちからバカにされないように気をつける 仲間の前で恥をかかないように気をつける 友だちと同じ持ち物を持つ 友だちから傷つけられないようにふるまう 友だちをがっかりさせないよう気をつける 友だちと意見が対立しないよう気をつける
傷つけることの回避	<ul style="list-style-type: none"> 友だちを傷つけないようにする 相手に自分の意見を押しつけないようにする 友だちに心配かけないように気をつける 友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける 相手の気持ちに気をつかう お互いの約束をやぶらない 相手にやさしくするよう心がける
快活的関係	<ul style="list-style-type: none"> 冗談を言って相手を笑わせる ウケるようなことをする 楽しい雰囲気になるようにふるまう

注) 逆転項目には*をつけた。

付録 4 ストレス体験と親しい友人からのソーシャル・サポートの 受容尺度

ストレス体験と親しい友人からのソーシャル・サポート受容尺度(福岡, 2010)

項目名

- 私は、どうしようか迷っているときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは友だちなりの考えを言ってくれた
- 私は、(気分的に)落ち込んでいるときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは私を元気づけてくれた
- 私は、いらいらしたり腹立たしくしているときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは私の愚痴を聞いてくれた
- 私は、困っているときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは私の相談にのってくれた
- 私は、頭を悩ませているときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは冗談を言ったりして、私の気をまぎれさせてくれた
- 私は、不安になっているときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは私を励ましてくれた
- 私は、何か決めなくてはいけないときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは私にアドバイスしてくれた
- 私は、友だちと気晴らしに何かしたいときに(1. 全くなかった 2. 少しあった 3. 大いにあった)
そのとき、友だちは私の気晴らしにつきあってくれた
-

付録 5 友人への援助行動尺度

友人への援助行動尺度
項目名
体調不良の友人に付き添う。
友人の苦手な作業を代わりにやる。
困っている友人の相談に乗る。
友人を気遣ってメールや電話をする。
友人が悩んでいる時に悩み事に触れない。
友人の間違いを指摘しない。
つらい思いをしている友人に声をかけずに見守る。
授業を休んだ友人にノート・プリントなどを貸す。
友人にプリントをコピーさせてあげる
友人がつらい思いをしている時になぐさめる。
筆記用具を忘れた友人に自分の筆記用具を貸す。
困っている友人をそっとしておく。
探し物をしている友人を手伝う。
気落ちしている友人の傍にいる。
友人が落ち込んでいる時に一人にしておく。
友人が悩んでいる時にその悩みを聞く。
疲れている友人をそっとしておく。
落ち込んでいる友人を励ます。

付録 6 傷つけ合い回避尺度(岡田, 2012)

傷つけ合い回避尺度(岡田, 2012)	
因子名	項目名
傷つけられ回避	友だちからバカにされないように気をつける 友だちの前で恥をかかないように気をつける 友だちから傷つけられないようにふるまう 友だちから「つまらない人」と思われないように気をつける 友だちからどう見られているか気にする 友だちから無神経な人間だと思われないように気をつける 会話の間(ま)があかないように気をつける メールにはすぐ返信をするようにする 共通の話題をさがすようにする
距離確保	自分の内面的なことは話さないようにする 自分のプライベートなことには踏み込まれないようにする 自分の内面に踏み込まれないように気をつける 友だちと適度な距離を置くようにする 友だちの内面に踏み込まないようにする あたりさわりのない会話ですませる 真剣な話を真面目に話さないようにする
礼儀	自分が悪いと思ったらすぐにあやまる 友だちの話をきちんと聞くようにする 友だちの気持ちを察するようにする 約束をやぶらない 友だちの気持ちに気をつかう 友だちにやさしくするよう心がける 友だちの話をさえぎらないようにする 場の空気を読んで会話する 友だちに心配をかけないように気をつける
傷つけ回避	気に入らないことを言われても怒らないようにする 友だちの気分を害するようなことを言わないようにする 友だちのいやな面を指摘するときは遠回しな言い方をする 友だちを傷つけないようにする 友だちの欠点には触れないようにする 友だちと意見が対立しないよう気をつける いきすぎた冗談を言わないようにする 友だちの言うことを否定しないようにする

付録 7 居場所尺度(原田・滝脇, 2014)

居場所尺度(原田・滝脇, 2014)	
因子名	項目名
所属的居場所	<p>いつでも一緒にいられる仲間がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>いつでも輪の中に入っていける, 居心地のよい関係がある</p> <p>いつでも協力してくれる仲間がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>なじんでいるといつも思える, 居心地のよい関係がある</p> <p>そこにいればいいといつも思える, 居心地のよい関係がある</p>
受容的居場所	<p>自分の良いところも悪いところもすべていつも認めてくれている人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>ありのままの自分をいつも受け入れてくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>自分をいつも大切にしてくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>自分の気持ちをいつも理解しようとしてくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>自分の考えや悩みをいつも分かってくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p>
承認的居場所	<p>自分の能力をいつも必要としてくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>自分のすることについていつも期待してくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>自分のしたことについていつも良い評価をしてくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>自分をいつも頼ってくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p> <p>自分が活躍することをいつも喜んでくれる人がいる, 居心地のよい関係がある</p>
内省的居場所	<p>将来のことを一人で考えることができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p> <p>自分自身を一人で見つめることができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p> <p>過去の出来事を一人で振り返ることができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p> <p>自分自身のことについて一人であれこれ考えることができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p> <p>その日のことを一人で振り返ることができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p>
解放的居場所	<p>人から離れて一人でストレスを解消することができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p> <p>誰にも邪魔をされずに, 一人でのびのびと好きなことができる, 居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p> <p>嫌なことを忘れ, 気持ちを切り替えることができる, 一人でいられて居心地のよい時間もしくは場がいつでもある</p>

**付録 8 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田,
2005)**

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005)

因子名	項目名
関係開始	<p>相手とすぐに、うちとけられる 誰とでもすぐ仲良くなれる 知らない人とでも、すぐに会話を始められる 人と話すのが得意である 他人が話しているところに、気軽に参加できる 誰にでも気軽にあいさつできる * 知合いになりたいと思っても、話のきっかけを見いだすのがむずかしい 初対面の人に、自己紹介が上手にできる</p>
解読	<p>表情やしぐさで相手の思っていることがわかる 顔つきから相手の感情を読みとれる 話をしているとき、相手の表情のわずかな変化も感じとれる 自分の言葉が相手にどのように受け取られたか察しがつく 嘘をつかれても、たいてい見破ることができる 相手の目を見て、自分が何か不適切なことをやってしまったことに気がつく 初対面でも、少し話をすれば相手がどんな人かだいたいわかる 自分に関心をもっている人は、すぐに見分けられる</p>
主張性	<p>自分が不愉快な思いをさせられたときには、はっきりと苦情を言う 友だちが自分の気持ちを傷つけたら、そのことをはっきりと伝える どんなに親しい人に頼まれても、やりたくないことははっきりと断る 人の話の内容が間違いだと思ったときには、自分の考えを述べるようにしている どちらかといえば、自分の意見を気軽に言うほうだ たとえ人から非難されたとしても、うまく片付けることができる 相手と意見が異なることをさりげなく示すことができる</p>
感情統制	<p>気持ちをおさえようとしても、それが顔に現われてしまう * 困ったときは顔にでやすい 感情をあまり面(おもて)にあらわさないでいられる * 自分の感情をコントロールするのが苦手である</p>
関係維持	<p>相手の立場を考えて行動する その場にあった行動がとれる 相手の話をまじめな態度で聞くことができる まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できる</p>
記号化	<p>表情が豊かである 身振り手振りをまじえて話すのが得意である 相手に良い感じを持ったら、それをすなおに表現できる 感情を素直にあらわせる</p>

注) 逆転項目には*をつけた。

付録 9 友人関係における傷つき経験の影響尺度

友人関係における傷つき経験の影響尺度

項目名
この経験から本当に信頼できる友達が重要だと感じるようになったと思う
この経験によって、視野が広がったと思う
この経験を今でも引きずっている
この経験があっても、自分の友達との付き合い方は変わらなかったように思う
この経験によって、自分のことをダメな人間だと考えるようになったと思う
この経験によって、友達に相談したいことを相談できなくなったと思う
この経験から人の目を気にしてしまうようになったと思う
この経験を思い出すと、泣きたくなったり涙がこぼれたりする
この経験による影響は小さかったと思う
この経験から相手の気持ちになって考えるようになったと思う
この経験から自分のことを大事にするようになったと思う
この経験によって、人を信じるのが怖くなったと思う
この経験以降、上辺だけの友達付き合いが増えたと思う
この経験がきっかけで、自分に自信を持てなくなったと思う
この経験以後、特に変わったものはない
今でも切なさや悲しさを感じる
自分の見た目や振る舞いなど、自分のことを振り返るきっかけになったと思う
この経験からお互いに素を出せるような友達と付き合いようになったと思う
この経験によって、自分は他人よりも劣っていると感じるようになったと思う
ふとしたときにこの経験を思い出して不愉快な気持ちになる
この経験から友達をからかったりいじったりする時には相手のことを考えるようになったと思う
この経験があっても、自分の価値は下がるわけではないと考えるようになったと思う
この経験によって、友達なんかいらないと考えるようになったと思う
この経験は自分にとっていい経験になったと思う
この経験は嫌な思い出として残っている
この経験によって前よりも友達への接し方や言葉に気をつけるようになったと思う
この経験以降、友達とはっきり言える人は少なくなったと思う
この経験から自分の言いたいことを素直に言えなくなったと思う
この経験から自分のことについて考え込むようになったと思う
この経験を忘れることはないと思う
この経験に負けたくないと思うようになったと思う
この経験から友達に自分のことをあまり話さなくなったと思う
この経験から友達とちょうどよい距離をとれるようになったと思う
人は良くも悪くも変わるものだと、この経験から学べたと思う
この経験を思い出すと、モヤモヤした気持ちになる
この経験によって、自分の中身が空っぽだと感じるようになったと思う
この経験によって、何かが変わったとは思わない
この経験によって、前よりも相手を傷つける言葉は使わないようになったと思う
この経験によって、人間不信になったと思う
この経験から自分は自分、他人は他人と割り切るようになったと思う
今でもこの経験を思い出して無力感を感じる
この経験から友達とあまり深く関わりたくないと思うようになったと思う
自分と同じような経験をしている友達と前より仲良くなれたと思う
この経験から自分のことを大事にできなくなったと思う
自分にとって、この経験は何かの変化をもたらすものではなかったと思う

付録 10 対人ストレスイベントに対する認知的評価尺度(加藤, 2001)

対人ストレスイベントに対する認知的評価尺度(加藤, 2001)	
因子名	項目名
対処効力感因子	ストレスの原因をうまく解決できる そのストレスをうまく解消できる 自分の望み通りの結果が得られるように、そのストレスに対してうまく対応できる その状況を変えることができる
脅威因子	自分にとって苦痛なことだと思う 自分にとって、わずらわしいことだと思う 自分にとって負担になることだと思う
重要性因子	自分にとって重要なことだと思う 自分に、重要な影響を与えるものだと思う

付録 11 過去のとらえ方尺度(石川, 2013)

過去のとらえ方尺度(石川, 2013) —連続的なとらえ	
因子名	項目名
連続的なとらえ	過去のマイナスな出来事は、自分の糧になった 過去のマイナスな出来事があるの、今の自分だと思う 過去のマイナスな出来事は、教訓としてこれからは活かそうと思う 過去を教訓にしている 過去の出来事は、これからはつながると思う 過去は、自分を成長させてくれた 過去の良い出来事は、良い経験だと思う 過去のマイナスな出来事は、学べることが多い 過去の悪い出来事でも、今では良く思えることがある 過去の出来事から学んでいる

過去のとらえ方尺度(石川, 2013) — 過去への態度

因子名	項目名
否定的態度	過去に対して, 後悔をしていることが多い 過去のことはあまり思い出したくない これまでの自分に後悔している 過去を引きずっている マイナスな出来事は, 思い出したくない
受容的態度	過去に向きあうようにしている 過去の過ちを忘れないようにしている 過去の悪い出来事を, 受け止めている 過去を忘れないようにしている 過去の出来事に感謝している 過去の出来事全てに, 意味があると思っている 過去をふり返ることは大切なことであると思う
わりきり態度	マイナスな出来事は, 忘れてしまうことが多い マイナスな出来事は, 忘れるようにしている 過去のことはあまり覚えていない 「過去は過去」とわりきっている

過去のとらえ方尺度(石川, 2013) — 過去への認識

因子名	項目名
否定的認識	自分の過去は暗い思い出が多い 過去は否定的なイメージである 「過去」という言葉を聞くと, 明るい過去より暗い過去が先に浮かぶ 自分の過去はマイナスな出来事ばかりだった マイナスな出来事ばかり覚えている 過去の自分が嫌いである 自分の過去は明るい思い出が多い 嫌だった出来事が忘れられない 過去に後悔はしていない 思い出したくない過去がある

付録 12 意味づけにおける同化・調節尺度(堀田・杉江, 2013)

意味づけにおける同化・調節尺度(堀田・杉江, 2013)	
因子名	項目名
調節	<p>私は、その経験が持つ意味を見つけようと思っている</p> <p>私はその経験を理解しようと努力しようと思う</p> <p>私はその経験の持つ意味を何とかして理解しようとしている</p> <p>私は、その経験を有意義にする何かを探している</p> <p>自身の物事の見方や考え方を見直す必要があると感じている</p> <p>自分の視野を広げることが、その経験の意味を理解するには必要である</p> <p>これまでの考え方を改める必要があると感じている</p>
同化	<p>その経験が持つ意味を理解するのに時間はかからないだろう</p> <p>私は、すぐにその経験が持つ意味に気づくだろう</p> <p>その経験が持つ意味についてすぐに原因(理由)を見つけられるだろう</p> <p>私は、その経験が持つ意味を見出している</p> <p>その経験を理解するのに、私の持つ物事の見方、考え方を利用することができるだろう</p> <p>その経験は、私がこれまで持っていた物事の見方、考え方を通して理解することができるだろう</p> <p>その経験が意味することは私が持つ物事の見方、考え方に合致している</p>

付録 13 知覚された相談相手の反応尺度(高橋, 2013)

知覚された相談相手の反応尺度(高橋, 2013)

因子名	項目名
共感・受容	自分を受けとめてくれた
	真剣に聞いてくれた
	気持ちを理解してくれた
	あいづちをうって聞いてくれた
	味方でいてくれた
	じっくり聞いてくれた
	最後までずっと聞いてくれた
	話を聞いてくれた
	痛みを分かち合ってくれた
	一緒に悩んだり考えたりしてくれた
	そばにいてくれた
	よくうなずいて聞いてくれた
	共感してくれた
	慰めてくれた
	すべてをわかってくれた
	励ましてくれた
	さえぎらずに黙って聞いてくれた
解決への示唆	反省すべき点を気づかせてくれた
	問題点を教えてくれた
	解決のヒントをくれた
	自分の悪いところを指摘してくれた
	ものごとの本質を突いてくれた
	解決策を教えてくれた
	良いアドバイスをくれた
	話を整理してくれた
	叱ってくれた
	自分をさとしてくれた
失った何かを思い出させてくれた	